

橋姫	二
椎本	二六
総角	五〇
早蕨	一〇五
宿木	一一八
東屋	一七五
浮舟	二一四
蜻蛉	二五八
手習	二九三
夢浮橋	三三五

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuyaya/index.html>)

「新日本古典文学体系」版にて改行・読点修正

(<http://sksrsg.blog82.fc2.com>)

橋

姫

そのころ、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり。母方などもやむごとなくものしたまひて、筋異なるべきおぼえなどおはしけるを、時移りて、世の中にはしたなめられたまひける紛れに、なかなかいと名残なく、御後見などももの恨めしき心々にて、かたがたにつけて世を背き去りつつ、公私に抛り所なく、さし放たれたまへるやうなり。北の方も、昔の大臣の御むすめなりける、あはれに心細く、親たちの思しおきてたりしさまなど思ひ出でたまふに、たとしへなきこと多かれど、古き御契りの二つなきばかりを、憂き世の慰めにて、かたみにまたなく頼み交はしたまへり。

年ごろ経るに、御子ものしたまはで心もとなかりければ、さうざうしくつれづれなる慰めに、いかでをかしからむ稚児もがなと、宮ぞ時々思しのたまひけるに、めづらしく、女君のいとうつくしげなる生まれたまへり。これを限りなくあはれと思ひかしづききこえたまふに、さし続きけしきばみたまひて、このたびは男にてもなど思したるに、同じさまにて、平らかにしたまひながら、いといたくわづらひて亡せたまひぬ。宮、あさましう思し惑ふ。

あり経るにつけても、いとはしたなく堪へがたきこと多かる世なれど、見捨てがたくあはれなる人の御ありさま心ぎまに、かけとどめらるるほだしにてこそ過ぐし来つれ、一人とまりて、いとどすさまじくもあるべきかな、いはけなき人びとをも、一人はぐくみ立てむほど、限りある身にて、いとをこがましう人わろかるべきこと、と思し立ちて、本意も遂げまほしうしたまひけれど、見譲る方なくて残しとどめむを、いみじう思したゆたひつつ、年月も経れば、おのおのおよすけまさりたまふさまかたちの、うつくしうあらまほしきを、明け暮れの御慰めにて、おのづから見過ぐしたまふ。

後に生まれたまひし君をば、さぶらふ人びとも、「いでや、折ふし心憂く」などうちつぶやきつつ、心に入れても扱ひきこえざりけれど、限りのさまにて、

何ごとも思し分かざりしほどながら、これをいと心苦しと思ひて、「ただこの君を形見に見たまひて、あはれと思せ」とばかり、ただ一言なむ宮に聞こえ置きたまひければ、前の世の契りもつらき折ふしなれど、さるべきにこそはありけめと、今はと見えしまでいとあはれと思ひて、うしろめたげにのたまひしを、と思し出でつつ、この君をしもいとかなしうしたてまつりたまふ。かたちなむまことにいとつくしう、ゆゆしきまでものしたまひける。姫君は、心ばせ静かによしある方にて、見る目もてなしも、気高く心にくきさまぞしたまへる、いたはしくやむごとなき筋はまさりて、いづれをもさまざまに思ひかしづききこえたまへど、かなはぬこと多く、年月に添へて、宮の内も寂しくのみなりまさる。さぶらひし人も、たつきなき心地するにえ忍びあへず、次々に従ひてまかで散りつつ、若君の御乳母も、さる騒ぎに、はかばかしき人をしも選りあへたまはざりければ、ほどにつけたる心浅さにて、幼きほどを見捨てたてまつりにければ、ただ宮ぞはぐくみたまふ。

さすがに広くおもしろき宮の、池、山などのけしきばかり昔に変はらで、いといたう荒れまさるを、つれづれと眺めたまふ。家司なども、むねむねしき人もなきままに、草青やかに繁り、軒のしのぶぞ所え顔に青みわたれる。折々につけたる花紅葉の色をも香をも、同じ心に見はやしたまひしにこそ、慰むことも多かりけれ、いとどしく寂しく、寄りつかむ方なきままに、持仏の御飾りばかりをわざとせさせたまひて、明け暮れ行ひたまふ。

かかるほだしどもにかかづらふだに、思ひの外に口惜しう、わが心ながらもかなはざりける契りとおぼゆるを、まいて何にか世の人めいて今さらにとのみ、年月に添へて世の中を思し離れつつ、心ばかりは聖になり果てたまひて、故君の亡せたまひにしこなたは、例の人のさまなる心ばへなど、たはぶれにても思し出でたまはざりけり。「などかさしも。別るるほどの悲しびは、また世にた

ぐひなきやうにのみこそはおぼゆべかめれど、あり経ればさのみやは。なほ世人にならずらふ御心づかひをしたまひて、いとかく見苦しうたつきなき宮の内も、おのづからもてなさるるわざもや」と、人はもどききこえて、何くれとつきづきしく聞こえごつことも、類にふれて多かれど、聞こしめし入れざりけり。

御念誦のひまひまには、この君たちをもてあそび、やうやうおよすけたまへば、琴習はし、碁打ち、偏つきなど、はかなき御遊びわざにつけても、心ばへどもを見たてまつりたまふに、姫君は、らうらうじく深く重りかに見えたまふ。若君は、おほどかにらうたげなるさまして、ものづつみしたるけはひにいとつくしう、さまざまにおはす。

春のうららかなる日影に、池の水鳥どもの、羽うち交はしつつ、おのがじしさへづる声などを、常ははかなきことに見たまひしかども、つがひ離れぬをうらやましく眺めたまひて、君たちに御琴ども教へきこえたまふ。いとをかしげに小さき御ほどに、とりどり掻き鳴らしたまふ物の音ども、あはれにをかしく聞こゆれば、涙を浮けたまひて、

「うち捨ててつがひ去りにし水鳥の仮のこの世にたちおくれけむ

心尽くしなりや」と、目おし拭ひたまふ。かたちいときよげにおはします宮なり。年ごろの御行ひにやせ細りたまひにたれど、さてしもあてになまめきて、君たちをかしづきたまふ御心ばへに、直衣の萎えはめるを着たまひて、しどけなき御さまいと恥づかしげなり。姫君、御硯をやをらひき寄せて、手習のやうに書き混ぜたまふを、「これに書きたまへ。硯には書きつけざなり」とて、紙たてまつりたまへば、恥ぢらひて書きたまふ。

いかでかく巢立ちけるぞと思ふにも憂き水鳥の契りをぞ知る

よからねど、その折はいとあはれなりけり。手は、生ひ先見えて、まだよくも続けたまはぬほどなり。「若君も書きたまへ」とあれば、今すこし幼げに、久

しく書き出でたまへり。

泣く泣くも羽うち着する君なくはわれぞ巢守になりは果てまし

御衣どもなど萎えばみて、御前にまた人もなく、いと寂しくつれづれげなるに、さまざまいとらうたげにてもものしたまふを、あはれに心苦しう、いかが思さざらむ。経を片手に持たまひて、かつ読みつつ唱歌をしたまふ。姫君に琵琶、若君に箏の御琴、まだ幼けれど、常に合はせつつ習ひたまへば、聞きにくくもあらで、いとをかしく聞こゆ。

父帝にも女御にも、とく後れきこえたまひて、はかばかしき御後見の取り立てたるおはせざりければ、才など深くもえ習ひたまはず、まいて世の中に住みつく御心おきてはいかでかは知りたまはむ。高き人と聞こゆる中にも、あさましうあてにおほどかなる、女のやうにおはすれば、古き世の御宝物、祖父大臣の御処分、何やかやと尽きすまじかりけれど、行方もなくはかなく失せ果てて、御調度などばかりなむ、わざとうるはしくて多かりける。参り訪らひきこえ、心寄せたてまつる人もなし。つれづれなるままに、雅楽寮の物の師どもなどやうの、すぐれたるを召し寄せつつ、はかなき遊びに心を入れて生ひ出でたまへれば、その方はいとをかしうすぐれたまへり。

源氏のおとどの御弟におはせしを、冷泉院の春宮におはしましたし時、朱雀院の太后の、横様に思し構へて、この宮を世の中に立ち継ぎたまふべく、わが御時、もてかしづきたてまつりける騒ぎに、あいなく、あなたさまの御仲らひにはさし放たれたまひにければ、いよいよかの御つぎつぎになり果てぬる世にて、え交じらひたまはず。またこの年ごろ、かかる聖になり果てて、今は限りとよろづを思し捨てたり。

かかるほどに、住みたまふ宮焼けにけり。いとどしき世に、あさましうあへなくて、移ろひ住みたまふべき所の、よろしきもなかりければ、宇治といふ所

に、よしある山里持たまへりけるに渡りたまふ。思ひ捨てたまへる世なれども、今はと住み離れなむをあはれに思さる。網代のけはひ近く、耳かしかましき川のわたりにて、静かなる思ひにかなはぬ方もあれど、いかがはせむ。花紅葉水の流れにも、心をやるたよりによせて、いとどしく眺めたまふより他のことなし。かく絶え籠もりぬる野山の末にも、昔の人ものしたまはましかば、と思ひきこえたまはぬ折なかりけり。

見し人も宿も煙になりにしを何とてわが身消え残りけむ

生けるかひなくぞ思し焦がるるや。

いとど、山重なれる御住みかに尋ね参る人なし。あやしき下衆など、田舎びたる山賤どものみ、まれに馴れ参り仕うまつる。峰の朝霧晴るる折なくて明かし暮らしたまふに、この宇治山に、聖だちたる阿闍梨住みけり。才いとかしこくて、世のおぼえも軽からねど、をさをさ公事にも出で仕へず籠もりゐるたるに、この宮のかく近きほどに住みたまひて、寂しき御さまに、尊きわざをせさせたまひつつ、法文を読みならひたまへば、尊がりきこえて常に参る。年ごろ学び知りたまへることどもの、深き心を解き聞かせたてまつり、いよいよ、この世のいとかりそめにあぢきなきことを申し知らすれば、「心ばかりは蓮の上に思ひのぼり、濁りなき池にも住みぬべきを、いとかく幼き人びとを見捨てむうしろめたさばかりになむ、えひたみちにかたちをも変へぬ」など、隔てなく物語したまふ。

この阿闍梨は、冷泉院にも親しくさぶらひて、御経など教へきこゆる人なりけり。京に出でたるついでに参りて、例の、さるべき文など御覧じて、問はせたまふこともあるついでに、「八の宮のいとかしこく、内教の御才悟り深くものしたまひけるかな。さるべきにて生まれたまへる人にやものしたまふらむ。心深く思ひ澄ましたまへるほど、まことの聖のおきてになむ見えたまふ」と聞

こゆ。「いまだかたちは変へたまはずや。俗聖とか、この若き人びとの付けたなる、あはれなることなり」などのたまはず。宰相中将も、御前にさぶらひたまひて、われこそ世の中をばいとすさまじう思ひ知りながら、行ひなど人に目とどめらるばかりは勤めず、口惜しくて過ぐし来れ、と人知れず思ひつつ、俗ながら聖になりたまふ心のおきてやいかに、と耳とどめて聞きたまふ。「出家の心ざしはもとよりものしたまへるを、はかなきことに思ひとどこほり、今となりては、心苦しき女子どもの御上を、え思ひ捨てぬ、となむ嘆きはべりたうぶ」と奏す。さすがに物の音めづる阿闍梨にて、「げにはた、この姫君たちの琴弾き合はせて遊びたまへる、川波にきほひて聞こえはべるは、いとおもしろく、極楽思ひやられはべるや」と、古体にめづれば、帝ほほ笑みたまひて、「さる聖のあたりに生ひ出でて、この世の方ざまはただとどしからむと推し量らるるを、をかしのことや。うしろめたく思ひ捨てがたく、もてわづらひたまふらむを、もししばしも後れむほどは、譲りやはしたまはぬ」などぞのたまはする。この院の帝は、十の御子にぞおはしましける。朱雀院の、故六条院に預けきこえたまひし入道の宮の御例を思ほし出でて、かの君たちをがな、つれづれなる遊びがたきに、などうち思しけり。

中将君、なかなか、親王の思ひ澄ましたまへらむ御心ばへを、対面して見たてまつらばや、と思ふ心ぞ深くなりぬる。さて阿闍梨の帰り入るにも、「かならず参りて、もの習ひきこゆべく、まづうちうちにもけしき賜はりたまへ」など語らひたまふ。

帝の御言つてにて、「あはれなる御住まひを人伝てに聞くこと」など聞こえたまうて、

世を厭ふ心は山にかよへども八重立つ雲を君や隔つる

阿闍梨、この御使を先に立てて、かの宮に参りぬ。なのめなる際の、さるべき

人の使だにまれなる山蔭に、いとめづらしく待ちよろこびたまうて、所につけたる肴などして、さる方にもてはやしたまふ。御返し、

あと絶えて心澄むとはなけれども世を宇治山に宿をこそ借れ

聖の方をば卑下して聞こえなしたまへれば、なほ世に恨み残りけるといとはしく御覽ず。

阿闍梨、中将の道心深げにもものしたまふなど語りきこえて、「法文などの心得まほしき心ざしなむ、いはけなかりし齡より深く思ひながら、えさらず世にあり経るほど、公私に暇なく明け暮らし、わざと閉ぢ籠もりて習ひ読み、おほかたはかばかしくもあらぬ身にしも、世の中を背き顔ならむも憚るべきにあらねど、おのづからうちたゆみて、紛らはしくてなむ過ぐし来るを、いとありがたいき御ありさまを承り伝へしより、かく心にかけてなむ頼みきこえさする、など、ねむごろに申したまひし」など語りきこゆ。宮、「世の中をかりそめのことと思ひ取り、厭はしき心のつきそむることも、わが身に愁へある時、なべての世も恨めしう思ひ知る初めありてなむ、道心も起こるわざなめるを、年若く世の中思ふにかなひ、何ごとも飽かぬことはあらじとおぼゆる身のほどに、さはた、後の世をさへたどり知りたまふらむがありがたさ。ここにはさべきにや、ただ厭ひ離れよと、ことさらに仏などの勧めおもむけたまふやうなるありさまにて、おのづからこそ、静かなる思ひかなひゆけど、残り少なき心地するに、はかばかしくもあらで過ぎぬべかめるを、来し方行く末、さらに得たるところなく思ひ知らるるを、かへりては心恥づかしげなる法の友にこそはものしたまふなれ」などのたまひて、かたみに御消息通ひ、みづからも参うでたまふ。

げに聞きしよりもあはれに、住まひたまへるさまよりはじめて、いと仮なる草の庵に、思ひなしことそぎたり。同じき山里といへど、さる方にて心とまりぬべくのだやかなるもあるを、いと荒ましき水の音、波の響きに、もの忘れう

ちし、夜など心解けて夢をだに見るべきほどもなげに、すぐく吹き払ひたり。聖だちたる御ために、かかるしもこそ心とまらぬもよほしならめ、女君たち、何心地して過ぐしたまふらむ、世の常の女しくなよびたる方は遠くや、と推し量らるる御ありさまなり。

仏の御隔てに、障子ばかりを隔ててぞおはすべかめる。好き心あらむ人は、けしきばみ寄りて、人の御心ばへをも見まほしう、さすがにいかかとゆかしうもある御けはひなり。されど、さる方を思ひ離るる願ひに、山深く尋ねきこえたる本意なく、好き好きしきなほざりごとをうち出で、あざればまむもことに違ひてや、など思ひ返して、宮の御ありさまのいとあはれなるを、ねむごろにとぶらひきこえたまひ、たびたび参りたまひつつ、思ひしやうに、優婆塞ながら行ふ山の深き心、法文など、わざとさかしげにはあらで、いとよくのたまひ知らず。

聖だつ人、才ある法師などは世に多かれど、あまりこはごはしう、氣遠げなる宿徳の僧都、僧正の際は、世に暇なくきすくにて、ものの心を問ひあらはさむも、ことごとしくおぼえたまふ。また、その人ならぬ仏の御弟子の、忌むことを保つばかりの尊さはあれど、けはひ卑しく言葉たみて、こちなげにももの馴れたる、いとものしくて、昼は公事に暇なくなどしつつ、しめやかなる宵のほど、氣近き御枕上などに召し入れ語らひたまふにも、いとさすがにもものむつかしうなどのみあるを、いとあてに心苦しきさまして、のたまひ出づる言の葉も、同じ仏の御教へをも、耳近きたとひにひきませ、いとこよなく深き御悟りにはあらねど、よき人はものの心を得たまふ方の、いとことにもものしたまひければ、やうやう見馴れたてまつりたまふたびごとに、常に見たてまつらまほしうて、暇なくなどしてほど経る時は、恋しくおぼえたまふ。

この君のかく尊がりきこえたまへれば、冷泉院よりも常に御消息などありて、

年ごろ音にもをさをさ聞こえたまはず、寂しげなりし御住みか、やうやう人目見る時々あり。折ふしに訪らひきこえたまふこといかめしう、この君も、まづさるべきことにつけつつ、をかしきやうにもまめやかなるさまにも、心寄せ仕うまつりたまふこと、三年ばかりになりぬ。

秋の末つ方、四季にあててしたまふ御念仏を、この川面は網代の波も、このころはいとど耳かしかましく静かならぬをとて、かの阿闍梨の住む寺の堂に移ろひたまひて、七日のほど行ひたまふ。姫君たちは、いと心細くつれづれまさりて眺めたまひけるころ、中将の君、久しく参らぬかなと思ひ出できこえたまひけるままに、有明の月のまだ夜深くさし出づるほどに出で立ちて、いと忍びて、御供に人などもなくて、やつれておはしけり。川のこなたなれば、舟などもわづらはで、御馬にてなりけり。入りもてゆくままに霧りふたがりて、道も見えぬしげきの中を分けたまふに、いと荒ましき風のきほひに、ほろほろと落ち乱るる木の葉の露の散りかかるも、いと冷やかに、人やりならずいたく濡れたまひぬ。かかるありきなどもをさをさならひたまはぬ心地に、心細くをかしく思されけり。

山おろしに耐へぬ木の葉の露よりもあやなくもろきわが涙かな

山賤のおどろくもうるさしとて、隨身の音もせさせたまはず、柴の籬を分けつつ、そこはかとなき水の流れどもを踏みしだく駒の足音も、なほ、忍びてと用意したまへるに、隠れなき御匂ひぞ風に従ひて、主知らぬ香とおどろく寝覚めの家々ありける。

近くなるほどに、その琴とも聞き分かれぬ物の音ども、いとすぐげに聞こゆ。常にかく遊びたまふと聞くを、ついでなくて、宮の御琴の音の名高きもえ聞かぬぞかし、よき折なるべし、と思ひつつ入りたまへば、琵琶の声の響きなりけり。黄鐘調に調べて、世の常の掻き合はせなれど、所からにや、耳馴れぬ心地

して、搔き返す撥の音も、ものきよげにおもしろし。箏の琴、あはれになまめいたる声して、たえだえ聞こゆ。

しばし聞かまほしきに、忍びたまへど、御けはひしるく聞きつけて、宿直人めく男、なまかたくなしき、出で来たり。「しかしかなむ籠もりおはします。御消息をこそ聞こえさせめ」と申す。「何か。しか限りある御行ひのほどを、紛らはしきこえさせむにあいなし。かく濡れ濡れ参りて、いたづらに帰らむ愁へを、姫君の御方に聞こえて、あはれとのたまはせばなむ慰むべき」とのたまへば、醜き顔うち笑みて、「申させはべらむ」とて立つを、「しばしや」と召し寄せて、「年ごろ人づてにのみ聞きて、ゆかしく思ふ御琴の音どもを、うれしき折かな、しばし、すこしたち隠れて聞くべきものの隈ありや。つきなくさし過ぎて参り寄らむほど、皆琴やめたまひては、いと本意なからむ」とのたまふ。御けはひ、顔かたちの、さるなほなほしき心地にも、いとめでたくかたじけなくおぼゆれば、「人間かぬ時は、明け暮れかくなむ遊ばせど、下人にても、都の方より参り立ちまじる人はべる時は、音もせさせたまはず。おほかた、かくて女たちおはしますことをば隠させたまひ、なべての人に知らせたてまつらじと、思しのたまはするなり」と申せば、うち笑ひて、「あぢきなき御もの隠しなり。しか忍びたまふなれど、皆人、ありがたき世の例に聞き出づべかめるを」とのたまひて、「なほしるべせよ。われは好き好きしき心などなき人ぞ。かくておはしますらむ御ありさまの、あやしく、げになべてにおぼえたまはぬなり」とこまやかにのたまへば、「あなかしこ。心なきやうに後の聞こえやはべらむ」とて、あなたの御前は竹の透垣しこめて、皆隔てことなるを、教へ寄せたてまつれり。御供の人は、西の廊に呼び据ゑて、この宿直人あひしらふ。

あなたに通ふべかめる透垣の戸を、すこし押し開けて見たまへば、月をかしきほどに霧りわたれるを眺めて、簾を短く巻き上げて、人びとゐたり。簀子に、

いと寒げに、身細く萎えばめる童一人、同じさまなる大人などゐたり。内なる人一人、柱に少しる隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつつゐるに、雲隠れたりつる月の、にはかにいと明くさし出でたれば、「扇ならで、これしても月は招きつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみじくうたげに匂ひやかなるべし。添ひ臥したる人は、琴の上に傾きかかりて、「入る日を返す撥こそありけれ、さま異にも思ひ及びたまふ御心かな」とて、うち笑ひたるけはひ、今少し重りかによしづきたり。「及ばずとも、これも月に離るるものかは」など、はかなきことを、うち解けのたまひ交はしたるけはひども、さらによそに思ひやりしには似ず、いとあはれになつかしうをかし。昔物語なごに語り伝へて、若き女房などの読むをも聞くに、かならずかやうのことを言ひたる、さしもあらざりけむと、憎く推し量らるるを、げにあはれなるもの限ありぬべき世なりけり、と心移りぬべし。霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。また、月さし出でなむと思すほどに、奥の方より、「人おはす」と告げきこゆる人やあらむ、簾下ろして皆入りぬ。おどろき顔にはあらず、なごやかにもてなして、やをら隠れぬるけはひども、衣の音もせず、いとなよやかに心苦しくて、いみじうあてにみやびかなるを、あはれと思ひたまふ。

やをら出でて、京に、御車率て参るべく、人走らせつ。ありつる侍に、「折悪しく参りはべりにけれど、なかなかうれしく、思ふことすこし慰めてなむ。かくさぶらふよし聞こえよ。いたう濡れにたるかことも聞こえさせむかし」とのたまへば、参りて聞こゆ。

かく見えやしぬらむとは思しも寄らで、うちとけたりつることどもを、聞きやしたまひつらむと、いといみじく恥づかし。あやしく、香うばしく匂ふ風の吹きつるを、思ひかけぬほどなれば、驚かざりける心おそさよと、心も惑ひて恥ぢおはさうず。御消息など伝ふる人も、いとうひうひしき人なめるを、折か

らにこそよろづのこととも思いて、まだ霧の紛れなれば、ありつる御簾の前に歩み出でてついゐたまふ。山里びたる若人どもは、さしいらへむ言の葉もおぼえで、御茵さし出づるさまもたどとしげなり。「この御簾の前にははしたなくはべりけり。うちつけに浅き心ばかりにては、かくも尋ね参るまじき山のかげ路に思うたまふるを、さま異にこそ。かく露けき旅を重ねては、さりとも御覧じ知るらむとなむ、頼もしうはべる」と、いとまめやかにのたまふ。

若き人びとの、なだらかにもの聞こゆべきもなく、消え返りかかやかしげなるもかたはらいたければ、女ばらの奥深きを起こし出づるほど、久しくなりて、わざとめいたるも苦しうて、「何ごとも思ひ知らぬありさまにて、知り顔にもいかがは聞こゆべく」と、いとよしあり、あてなる声して、ひき入りながらほのかにのたまふ。「かつ知りながら、憂きを知らず顔なるも、世のさがと思うたまへ知るを、一所しも、あまりおぼめかせたまふらむこそ口惜しかるべけれど、ありがたう、よろづを思ひ澄ましたる御住まひなどに、たぐひきこえさせたまふ御心のうちは、何ごとも涼しく推し量られれば、なほかく忍びあまりはべる深さ浅さのほども、分かせたまはむこそかひははべらめ。世の常の好き好きしき筋には思しめし放つべくや。さやうの方は、わざと勧むる人はべりとも、なびくべうもあらぬ心強さになむ。おのづから聞こしめし合はするやうもはべりなむ。つれづれとのみ過ぐしはべる世の物語も、聞こえさせ所に頼みきこえさせ、また、かく世離れて眺めさせたまふらむ御心の紛らはしには、さしも驚かせたまふばかり聞こえ馴れはべらば、いかに思ふさまにはべらむ」など多くのたまへば、つつましくいらへにくくて、起こしつる老い人の出で来たるにぞ譲りたまふ。

たとしへなくさし過ぐして、「あなかたじけなや。かたはらいたき御座のさまにもはべるかな。御簾の内にこそ。若き人びとは、物のほど知らぬやうには

べるこそ」など、したたかに言ふ声のさだすぎたるも、かたはらいたく君たちは思す。「いともあやしく、世の中に住まひたまふ人の数にもあらぬ御ありさまにて、さもありぬべき人びとだに、訪らひ数まへきこえたまふも、見え聞こえずのみなりまさりはべるめるに、ありがたき御心ざしのほどは、数にもはべらぬ心にも、あさましきまで思ひたまへはべるを、若き御心地にも思し知りながら、聞こえさせたまひにくきにやはべらむ」と、いとつつみなくもの馴れたるも、なま憎きものから、けはひいたう人めきて、よしある声なれば、「いとたづきも知らぬ心地しつるに、うれしき御けはひにこそ。何ごとも、げに思ひ知りたまひける頼み、こよなかりけり」とて、寄り居たまへるを、几帳の側より見れば、曙、やうやう物の色分かるるに、げにやつしたまへると見ゆる狩衣姿の、いと濡れしめりたるほど、うたてこの世の外の匂ひにやと、あやしきままで薫り満ちたり。

この老い人はうち泣きぬ。「さし過ぎたる罪もやと思うたまへ忍ぶれど、あはれなる昔の御物語の、いかならむついでにうち出で聞こえさせ、片端をもほのめかし知ろしめさせむと、年ごろ念誦のついでにもうち交ぜ思うたまへわたるしるしにや、うれしき折にはべるを、まだきにおぼほれはべる涙にくれて、えこそ聞こえさせずはべりけれ」と、うちわななくけしき、まことにいみじくもの悲しと思へり。おほかた、さだ過ぎたる人は涙もろなるものとは見聞きたまへど、いとかうしも思へるもあやしうなりたまひて、「ここにかく参ることはたび重なりぬるを、かくあはれ知りたまへる人もなくてこそ、露けき道のほどに独りのみそほちつれ。うれしきついでなめるを、言な残いたまひそかし」とのたまへば、「かかるといふついでしもはべらじかし。またはべりとも、夜の間のほど知らぬ命の、頼むべきにもはべらぬを、さらばただ、かかる古者世にはべりけりとばかり、知ろしめされはべらなむ。三条の宮にはべりし小侍従、はか

なくなりはべりにけるとほの聞きはべりし。そのかみ睦まじう思うたまへし同じほどの人多く亡せはべりにける世の末に、はるかなる世界より伝はりまうで来て、この五年六年のほどなむ、これにかくさぶらひはべる。知らしめさじかし、このころ藤大納言と申すなる御このかみの、右衛門の督にて隠れたまひにしは。物のついでなどにや、かの御上とて聞こしめし伝ふることもはべらむ。過ぎたまひて、いくばくも隔たらぬ心地のみしはべる。その折の悲しさも、まだ袖の乾く折はべらず思うたまへらるるを、かくおとなしくならせたまひにける御齡のほども夢のやうになむ。かの権大納言の御乳母にはべりしは、弁が母になむはべりし。朝夕に仕うまつり馴れはべりしに、人数にもはべらぬ身なれど、人に知らせず、御心よりはた余りけることを、折々うちかすめのたまひしを、今は限りになりたまひにし御病の末つ方に、召し寄せて、いささかのたまひ置くことなむはべりしを、聞こしめすべきゆるなむ一事はべれど、かばかり聞こえ出ではべるに、残りをおぼつかなく思しわたることの筋を聞こゆれば、いと果てはべるべき。若き人びともかたはらいたく、さし過ぎたりと、つきじろひはべるもことわりになむ」とて、さすがにうち出でずなりぬ。

あやしく、夢語り、巫女やうのもの、問はず語りすらむやうに、めづらかに思さるれど、あはれにおぼつかなく思しわたることの筋を聞こゆれば、いと奥ゆかしけれど、げに人目もしげし、さしぐみに古物語にかかづらひて、夜を明かし果てむも、こちごちしかるべければ、「そこはかと思ひ分くことはなきものから、いにしへのことと聞きはべるも、ものあはれになむ。さらば、かならずこの残り聞かせたまへ。霧晴れゆかば、はしたなかるべきやつれを、面なく御覧じとがめられぬべきさまなれば、思うたまふる心のほどよりは、口惜しうなむ」とて立ちたまふに、かのおはします寺の鐘の声、かすかに聞こえて、霧いと深くたちわたれり。峰の八重雲思ひやる隔て多くあはれなるに、なほこ

の姫君たちの御心のうちども心苦しう、何ごとを思し残すらむ、かくいと奥ま
りたまへるもことわりぞかし、などおぼゆ。

「あさぼらけ家路も見えず尋ね来し槇の尾山は霧こめてけり

心細くもはべるかな」と、立ち返りやすらひたまへるさまを、都の人の目馴れ
たるだに、なほいとことに思ひきこえたるを、まいていかがはめづらしう見き
こえざらむ。御返り聞こえ伝へにくげに思ひたれば、例のいとおつましげにて、
雲のゐる峰のかけ路を秋霧のいとど隔つるころにもあるかな

すこしうち嘆いたまへるけしき、浅からずあはれなり。何ばかりをかしきふし
は見えぬあたりなれど、げに心苦しきこと多かるにも、明うなりゆけば、さす
がにひた面なる心地して、「なかなかなるほどに承りさしつること多かる残り
は、今すこし面馴れてこそは、恨みきこえさすべかめれ。さるは、かく世の人
めいてもてなしたまふべくは、思はずにももの思し分かざりけりと、恨めしうな
む」とて、宿直人がしつらひたる西面におはして眺めたまふ。

「網代は人騒がしげなり。されど、氷魚も寄らぬにやあらむ、すさまじげな
るけしきなり」と、御供の人びと見知りて言ふ。あやしき舟どもに柴刈り積み、
おのおの何となき世の営みどもに行き交ふさまどもの、はかなき水の上に浮か
びたる、誰れも思へば同じことなる世の常なきなり。われは浮かばず、玉の台
に静けき身と思ふべき世かは、と思ひ続けらる。硯召して、あなたに聞こえた
まふ。

橋姫の心を汲みて高瀬さす棹のしづくに袖ぞ濡れぬる

眺めたまふらむかし。

とて、宿直人に持たせたまへり。いと寒げに、いららぎたる顔して持て参る。
御返り、紙の香など、おぼろけならむは恥づかしげなるを、疾きをこそかかる
折には、とて、

さしかへる宇治の河長朝夕のしづくや袖を朽たし果つらむ
身さへ浮きて。

と、いとをかしげに書きたまへり。まほにめやすくものしたまひけりと、心とまりぬれど、「御車率て参りぬ」と、人びと騒がしきこゆれば、宿直人ばかりを召し寄せて、「帰りわたらせたまはむほどに、かならず参るべし」などのたまふ。濡れたる御衣どもは、皆この人に脱ぎかけたまひて、取りに遣はしつる御直衣にたてまつりかへつ。

老い人の物語、心にかかりて思し出でらる。思ひしよりはこよなくまさりて、をかしかりつる御けはひども面影に添ひて、なほ思ひ離れがたき世なりけり、と心弱く思ひ知らる。御文たてまつりたまふ。懸想だちてもあらず、白き色紙の厚肥えたるに、筆ひきつくろひ選りて、墨つき見所ありて書きたまふ。

うちつけなるさまにやとあいなくとどめはべりて、残り多かるも苦しきわざになむ。片端聞こえおきつるやうに、今よりは御簾の前も心やすく思し許すべくなむ。御山籠もり果てはべらむ日数も承りおきて、いぶせかりし霧の迷ひもはるけはべらむ。

などぞ、いとすくよかに書きたまへる。左近の将監なる人、御使にて、「かの老い人訪ねて、文も取らせよ」とのたまふ。宿直人が寒げにてさまよひしなど、あはれに思しやりて、大きな椀破籠やうのものあまたせさせたまふ。

またの日、かの御寺にもたてまつりたまふ。山籠もりの僧ども、このころの嵐にはいと心細く苦しからむを、さておはしますほどの布施賜ふべからむと思しやりて、絹、綿など多かりけり。御行ひ果てて出でたまふ朝なりければ、行ひ人どもに、綿衣、袈裟、衣など、すべて一くだりのほどづつ、ある限りの大徳たちに賜ふ。

宿直人が、御脱ぎ捨ての艶にいみじき狩の御衣ども、えならぬ白き綾の御衣

の、なよなよといひ知らず匂へるを移し着て、身をはた、え変へぬものなれば、似つかはしからぬ袖の香を、人ごとにとがめられめでらるるなむ、なかなか所狭かりける。心にまかせて身をやすくも振る舞はれず、いとむくつけきまで人のおどろく匂ひを、失ひてばやと思へど、所狭き人の御移り香にて、えもすぎ捨てぬぞ、あまりなるや。

君は、姫君の御返りこと、いとめやすく子めかしきををかしく見たまふ。宮にも、かく御消息ありきなど、人びと聞こえさせ御覽ぜさすれば、「何かは、懸想だちてもてないたまはむも、なかなかうたてあらむ。例の若人に似ぬ御心ばへなめるを、亡からむ後もなど、一言うちほのめかしてしかば、さやうにて心ぞとめたらむ」などのたまうけり。御みづからも、さまさまの御とぶらひの、山の岩屋にあまりしことなどのたまへるに、参うでむと思して、三の宮の、かやうに奥まりたらむあたりの、見まさりせむこそをかしかるべけれど、あらましごとにだにのたまふものを、聞こえはげまして、御心騒がしたてまつらむ、と思して、のどやかなる夕暮に参りたまへり。

例のさまさまなる御物語聞こえ交はしたまふついでに、宇治の宮の御こと語り出でて、見し暁のありさまなど、詳しく聞こえたまふに、宮いと切にをかしと思いたり。さればよと、御けしきを見て、いとど御心動きぬべく言ひ続けたまふ。「さて、そのありけむ返りことは、などか見せたまはざりし。まろならましかば」と恨みたまふ。「さかし。いとさまさま御覽ずべかめる端をだに見せさせたまはぬ。かのわたりは、かくいとも埋れたる身に、ひき籠めてやむべきけはひにもはべらねば、かならず御覽ぜさせばやと思ひたまふれど、いかでか尋ね寄らせたまふべき。かやすきほどこそ、好かまほしくは、いとよく好きぬべき世にはべりけれ。うち隠ろへつつ多かめるかな。さるかたに見所ありぬべき女の、もの思はしき、うち忍びたる住みかども、山里めいたる隈などに、

おのづからはべべかめり。この聞こえさするわたりは、いと世づかぬ聖ぎまにて、こちごちしうぞあらむと、年ごろ思ひあなづりはべりて、耳をだにこそとどめはべらざりけれ。ほのかなりし月影の見劣りせずは、まほならむはや。けはひありさま、はた、さばかりならむをぞ、あらまほしきほどとはおぼえはべるべき」など聞こえたまふ。

果て果ては、まめだちていとねたく、おぼろけの人に心移るまじき人の、かく深く思へるを、おろかならじと、ゆかしう思ふこと限りなくなりましたまひぬ。

「なほ、またまたよくけしき見たまへ」と、人を勧めたまひて、限りある御身のほどのよだけさを、厭はしきまで心もとなしと思したれば、をかしくて、「いでや、よしなくぞはべる。しばし世の中に心とどめじと、思うたまふるやうある身にて、なほざりごとまつまじうはべるを、心ながらかなはぬ心つきそめなば、おほきに思ひに違ふべきことなむはべるべき」と聞こえたまへば、「いで、あなこととし。例のおどろおどろしき聖言葉、見果ててしがな」とて笑ひたまふ。心のうちには、かの古人のほめかしし筋などの、いとどうちおどろかれてものあはれなるに、をかしと見ることも、めやすしと聞くあたりも、何ばかり心にもとまらざりけり。

十月になりて、五六日のほどに、宇治へ参うでたまふ。「網代をこそ、このころは御覽せめ」と聞こゆる人びとあれど、「何か、その蜉蝣に争ふ心にて、網代にも寄らむ」と、そぎ捨てたまひて、例のいと忍びやかにて出で立ちたまふ。軽らかに網代車にて、かたりの直衣指貫縫はせて、ことさらび着たまへり。宮、待ち喜びたまひて、所につけたる御あるじなど、をかしうしなしたまふ。暮れぬれば大殿油近くて、さきざき見さしたまへる文どもの深きなど、阿闍梨も請じおろして、義など言はせたまふ。うちもまどろまず、川風のいと荒らましきに、木の葉の散りかふ音、水の響きなど、あはれも過ぎて、もの恐ろしく

心細き所のさまなり。

明け方近くなりぬらむと思ふほどに、ありししのめ思ひ出でられて、琴の音のあはれなることのついで作り出でて、「さきのたびの霧に惑はされはべりし曙に、いとめづらしき物の音、一声承りし残りなむ、なかなかにいといぶかしう、飽かず思うたまへらるる」など聞こえたまふ。「色をも香をも思ひ捨ててし後、昔聞きしことも皆忘れてなむ」とのたまへど、人召して琴取り寄せて、「いとつきなかりにたりや。しるべする物の音につけてなむ、思ひ出でらるべかりける」とて、琵琶召して、客人にそそのかしたまふ。取りて調べたまふ。「さらに、ほのかに聞きはべりし、同じものとも思うたまへられざりけり。御琴の響きからにやとこそ思うたまへしか」とて、心解けても搔きたてたまはず。「いで、あなさがなや。しか御耳とまるばかりの手などは、何処よりかここまでは伝はり来む。あるまじき御ことなり」とて、琴搔きならしたまへる、いとあはれに心すごし。かたへは、峰の松風のもてはやすなるべし。いとたどたどしげにおぼめきたまひて、心ばへあり。手一つばかりにてやめたまひつ。

「このわたりに、おぼえなくて、折々ほのめく箏の琴の音こそ、心得たるにや、と聞く折はべれど、心とどめてなどもあらで久しうなりにけりや。心にまかせて、おのおの搔きならすべかめるは、川波ばかりや打ち合はすらむ、論なう、物の用にすばかりの拍子なども、とまらじとなむおぼえはべる」とて、「搔き鳴らしたまへ」と、あなたに聞こえたまへど、思ひ寄らざりし独り言を聞きたまひけむだにあるものを、いとかたはならむとひき入りつつ、皆聞きたまはず。たびたびそそのかしたまへど、とかく聞こえすさびてやみたまひぬめれば、いと口惜しうおぼゆ。

そのついでにも、かくあやしう、世づかぬ思ひやりにて過ぐすありさまどもの、思ひのほかなることなど、恥づかしう思いたり。「人にだにいかで知らせ

じと、はぐくみ過ぐせど、今日明日とも知らぬ身の残り少なさに、さすがに、行く末遠き人は、落ちあふれてさすらへむこと、これのみこそ、げに世を離れむ際のほだしなりけれ」とうち語らひたまへば、心苦しう見たてまつりたまふ。「わざとの御後見だち、はかばかしき筋にははべらずとも、うとうとしからず思しめされむとなむ思うたまふる。しばしもながらへはべらむ命のほどは、一言も、かくうち出で聞こえさせてむさまを、違へはべるまじくなむ」など申したまへば、いとうれしきことと思しのたまふ。

さて、暁方の、宮の御行ひしたまふほどに、かの老人召し出でて会ひたまへり。姫君の御後見にてさぶらはせたまふ、弁の君とぞいひける。年も六十にすこし足らぬほどなれど、みやびかにゆゑあるけはひして、ものなど聞こゆ。故権大納言の君の、世とともにものを思ひつつ、病づき、はかなくなりたまひにしありさまを聞こえ出でて、泣くこと限りなし。げによその人の上と聞かむだに、あはれなるべき古事どもを、まして年ごろおぼつかなくゆかしう、いかなりけむことの初めにかと、仏にも、このことをさだかに知らせたまへと、念じつる験にや、かく夢のやうにあはれなる昔語りを、おぼえぬついでに聞きつけつらむ、と思すに、涙とどめがたかりけり。

「さて、かくその世の心知りたる人も残りたまへりけるを。めづらかにも恥づかしうもおぼゆることの筋に、なほ、かく言ひ伝ふるたぐひやまたもあらむ。年ごろ、かけても聞き及ばざりける」とのたまへば、「小侍従と弁と放ちて、また知る人はべらじ。一言にても、また異人にうちまねびはべらず。かくものはかなく、数ならぬ身のほどにはべれど、夜昼かの御影につきたてまつりてはべりしかば、おのづからもののけしきをも見たてまつりそめしに、御心よりあまりて思しける時々、ただ二人の中になむ、たまさかの御消息の通ひもはべりし。かたはらいたければ、詳しく聞こえさせず。今はのとぢめになりたま

ひて、いささかのたまひ置くことのはべりしを、かかる身には置き所なく、いぶせく思うたまへわたりつつ、いかにしてかは聞こしめし伝ふべきと、はかばかしからぬ念誦のついでにも思うたまへつるを、私は世におはしましけりとなむ思うたまへ知りぬる。御覽ぜさすべき物もはべり。今は何かは、焼きも捨てはべりなむ、かく朝夕の消えを知らぬ身の、うち捨てはべりなば、落ち散るやうもこそと、いとうしろめたく思うたまふれど、この宮わたりにも、時々ほめかせたまふを、待ち出でたてまつりてしは、すこし頼もしく、かかる折もやと念じはべりつる力出でまうで来てなむ。さらに、これは、この世のことにもはべらじ」と、泣く泣くこまかに、生まれたまひけるほどのことも、よくおぼえつつ聞こゆ。

「空しうなりたまひし騒ぎに、母にはべりし人は、やがて病づきて、ほども経ず隠れはべりにしかば、いとど思うたまへしづみ、藤衣たち重ね、悲しきことを思うたまへしほどに、年ごろよからぬ人の心をつけたりけるが、人をはかりごちて、西の海の果てまで取りもてまかりにしかば、京のことさへ跡絶えて、その人もかしこにて亡せはべりにし後、十年あまりにてなむ、あらぬ世の心地してまかり上りたりしを、この宮は、父方につけて、童より参り通ふゆゑはべりしかば、今はかう世に交じらふべきさまにもはべらぬを、冷泉院の女御殿の御方などこそは、昔聞き馴れたてまつりしわたりにて、参り寄るべくはべりしかど、はしたなくおぼえはべりて、えさし出ではべらで、深山隠れの朽木になりにてはべるなり。小侍従はいつか亡せはべりにけむ。そのかみの若盛りと見はべりし人は、数少なくなりはべりにける末の世に、多くの人に後るる命を悲しく思ひたまへてこそ、さすがにめぐらひはべれ」など聞こゆるほどに、例の明け果てぬ。

「よし、さらば、この昔物語は尽きすべくなむあらぬ。また人間かぬ心やす

き所にて聞こえむ。侍従といひし人は、ほのかにおぼゆるは、五つ六つばかりなりしほどにや、にはかに胸を病みて亡せにきとなむ聞く。かかる対面なくは、罪重き身にて過ぎぬべかりけること」などのたまふ。ささやかにおし巻き合はせたる反故どもの、黴臭きを袋に縫ひ入れたる取り出でてたてまつる。「御前にて失はせたまへ。われなほ生くべくもあらずなりたり、とのたまはせて、この御文を取り集めて賜はせたりしかば、小侍従に、またあひ見はべらむついでに、さだかに伝へ参らせむと思うたまへしを、やがて別ればべりにしも、私事には、飽かず悲しうなむ思うたまふる」と聞こゆ。つれなくて、これは隠いたまひつ。かやうの古人は、問はず語りにや、あやしきことの例に言ひ出づらむ、と苦しく思せど、かへすがへすも散らさぬよしを誓ひつる、さもやと、また思ひ乱れたまふ。

御粥、強飯など参りたまふ。昨日は暇日なりしを、今日は内の御物忌も明きぬらむ、院の女一の宮、悩みたまふ御とぶらひに、かならず参るべければ、かたがた暇なくはべるを、またこのころ過ぐして、山の紅葉散らぬさきに参るべきよし、聞こえたまふ。「かく、しばしば立ち寄せたまふ光に、山の蔭も、すこしもの明らむる心地してなむ」など、よろこび聞こえたまふ。

帰りたまひて、まづこの袋を見たまへば、唐の浮線綾を縫ひて、「上」といふ文字を上書きたり。細き組して口の方を結ひたるに、かの御名の封つきたり。開くるも恐ろしうおぼえたまふ。色々の紙にて、たまさかに通ひける御文の返りこと、五つ六つぞある。さては、かの御手にて、病は重く限りになりたるに、またほのかにも聞こえむこと難くなりぬるを、ゆかしう思ふことは添ひにたり、御かたちも変りておはしますらむが、さまざま悲しきことを、陸奥紙五六枚に、つぶつぶとあやしき鳥の跡のやうに書きて、

目の前にこの世を背く君よりもよそに別るる魂ぞ悲しき

また、端に、

めづらしく聞きはべる二葉のほども、うしろめたう思うたまふる方はなけれど、

命あらばそれとも見まし人知れぬ岩根にとめし松の生ひ末

書きさしたるやうに、いと乱りがはしうて、「小侍従の君に」と、上には書きついたり。紙魚といふ虫の棲み処になりて、古めきたる黴臭さながら、跡は消えず、ただ今書きたらむにも違はぬ言の葉どもの、こまごまとさだかなるを見たまふに、げに落ち散りたらましよと、うしろめたういとほしきことどもなり。かかること、世にまたあらむや、と心一つにいとどもの思はしき添ひて、内へ参らむと思しつるも出で立たれず、宮の御前に参りたまへれば、いと何心もなく、若やかなるさましたまひて、経読みたまふを、恥ぢらひてもて隠したまへり。何かは、知りにけりとも知られたてまつらむ、など心に籠めて、よろづに思ひるたまへり。

椎

本

如月の二十日のほどに、兵部卿宮、初瀬に詣でたまふ。古き御願なりけれど、思しも立たで年ごろになりけるを、宇治のわたりの御中宿りのゆかしさに、多くは催されたまへるなるべし。うらめしと言ふ人もありける里の名の、なべて睦まじう思さるるゆゑもはかなしや。上達部いとあまた仕うまつりたまふ。殿上人などはさらにもいはず、世に残る人少なう仕うまつれり。

六条の院より伝はりて、右大殿知りたまふ所は、川より遠方にいと広くおもしろくてあるに、御まうけさせたまへり。大臣も、帰さの御迎へに参りたまふべく思したるを、にはかなる御物忌みの重く慎みたまふべく申したなれば、え参らぬ由のかしこまり申したまへり。宮、なますさまじと思したるに、宰相中将、今日の御迎へに参りあひたまへるに、なかなか心やすく、かのわたりのけしきも伝へ寄らむと御心ゆきぬ。大臣をば、うちとけて見えにくく、こととしきものに思ひきこえたまへり。御子の君たち、右大弁、侍従の宰相、権中将、頭の少将、蔵人の兵衛の佐など、さぶらひたまふ。帝、后も心ことに思ひきこえたまへる宮なれば、おほかたの御おぼえもいと限りなく、まいて六条院の御方さまは、次々の人も、皆私の君に心寄せ仕うまつりたまふ。

所につけて、御しつらひなどをかしうしなして、碁、双六、彈棊の盤どもなど取り出でて、心々にすさび暮らしたまふ。宮は、ならひたまはぬ御ありきに、悩ましく思されて、ここにやすらはむの御心も深ければ、うち休みたまひて、夕つ方ぞ、御琴など召して遊びたまふ。

例の、かう世離れたる所は、水の音もてはやして、物の音澄みまさる心地して、かの聖の宮にもたださし渡るほどなれば、追風に吹き来る響きを聞きたまふに、昔のこと思し出でられて、「笛をいとをかしうも吹きとほしたなるかな。誰ならむ。昔の六条院の御笛の音聞きしは、いとをかしげに愛敬づきたる音にこそ吹きたまひしか。これは澄みのぼりて、ことことしき気の添ひたるは、

致仕大臣の御族の笛の音にこそ似たなれ」など独りごちおはす。「あはれに久しうなりにけりや。かやうの遊びなどもせで、あるにもあらで過ぐし来にける年月の、さすがに多く数へらるるこそかひなけれ」などのたまふついでにも、姫君たちの御ありさまあたらしく、かかる山懐にひき籠めてはやまらずもがな、と思し続けらる。宰相の君の、同じうは近きゆかりにて見まほしげなるを、さしも思ひ寄るまじかめり、まいて今やうの心浅からむ人をば、いかでかは、なご思し乱れ、つれづれと眺めたまふ所は、春の夜もいと明かしがたきを、心やりたまへる旅寝の宿りは、酔の紛れにいと疾う明けぬる心地して、飽かず帰らむことを宮は思す。

はるばると霞みわたれる空に、散る桜あれば今開けそむるなど、いろいろ見わたさるるに、川沿ひ柳の起きふしなびく水影など、おろかならずをかしきを、見ならひたまはぬ人は、いとめづらしく見捨てがたしと思さる。宰相は、かかるたよりを過ぐさず、かの宮にまうでばやと思せど、あまたの人目をよきて、一人漕ぎ出でたまはむ舟わたりのほども軽らかにや、と思ひやすらひたまふほどに、かれより御文あり。

山風に霞吹きとく声はあれど隔てて見ゆるをちの白波

草にいとをかしう書きたまへり。宮、思すあたりのと見たまへば、いとをかしう思いて、「この御返りはわれせむ」とて、

をちこちの汀に波は隔つともなほ吹きかよへ宇治の川風

中将は参うでたまふ。遊びに心入れたる君たち誘ひて、さしやりたまふほど、酣酔樂遊びて、水にのぞきたる廊に造りおろしたる階の心ばへなど、さる方にいとをかしうゆゑある宮なれば、人びと心して舟よりおりたまふ。ここはまた、さま異に、山里びたる網代屏風などの、ことさらにことそぎて、見所ある御しつらひを、さる心してかき払ひ、いといたうしなしたまへり。いにしへの、音

などいと二なき弾きものどもを、わざとまうけたるやうにはあらで、次々弾き出でたまひて、吉越調の心に、桜人遊びたまふ。あるじの宮、御琴をかかるついでにと、人びと思ひたまへれど、箏の琴をぞ、心にも入れず折々掻き合はせたまふ。耳馴れぬけにやあらむ、いともの深くおもしろしと、若き人びと思ひしみたり。所につけたるあるじいとをかしうしたまひて、よそに思ひやりしほどよりは、なま孫王めくいやしからぬ人あまた、王四位の古めきたるなど、かく人目見るべき折と、かねていとほしがりきこえけるにや、さるべき限り参りあひて、瓶子取る人もきたなげならず、さる方に古めきて、よしよしうもてなしたまへり。客人たちは、御むすめたちの住まひたまふらむ御ありさま思ひやりつつ、心つく人もあるべし。

かの宮は、まいて、かやすきほどならぬ御身をさへ所狭く思さるるを、かかる折にだにと忍びかねたまひて、おもしろき花の枝を折らせたまひて、御供にさぶらふ上童のをかしきしてたてまつりたまふ。

山桜匂ふあたりに尋ね来て同じかざしを折りてけるかな

野を睦ましみ。

とやありけむ。御返りは、いかでかはなど、聞こえにくく思しわづらふ。「かかる折のこと、わざとがましくもてなし、ほどの経るも、なかなか憎きことになむしはべりし」など、古人ども聞こゆれば、中君にぞ書かせたてまつりたまふ。

かざし折る花のたよりに山賤の垣根を過ぎぬ春の旅人

野をわきてしも。

と、いとをかしげにらうらうじく書きたまへり。

げに川風も心わかぬさまに吹き通ふ物の音どもおもしろく遊びたまふ。御迎へに、藤大納言仰せ言にて参りたまへり。人びとあまた参り集ひ、もの騒がし

くてきほひ帰りたまふ。若き人びと、飽かず返り見のみせられける。宮は、またさるべきついでしてと思す。花盛りにて、四方の霞も眺めやるほどの見所あるに、唐のも大和のも歌ども多かれど、うるさくて尋ねも聞かぬなり。

もの騒がしくて、思ふままにもえ言ひやらすなりにしを、飽かず宮は思して、しるべなくても御文は常にありけり。宮も、「なほ聞こえたまへ。わざと懸想だちてももてなさじ。なかなか心ときめきにもなりぬべし。いと好きたまへる親王なれば、かかる人なむと聞きたまふが、なほもあらぬすさびなめり」と、そそのかしたまふ時々、中の君ぞ聞こえたまふ。姫君は、かやうのこと戯れにももて離れたまへる御心深さなり。

いつとなく心細き御ありさまに、春のつれづれはいとど暮らしがたく眺めたまふ。ねびまさりたまふ御さまかたちどもいよいよまさり、あらまほしくをかしきも、なかなか心苦しく、かたほにもおはせましかば、あたらしう惜しき方の思ひは薄くやあらまし、など明け暮れ思し乱る。姉君二十五、中君二十三にぞなりたまひける。

宮は重く慎みたまふべき年なりけり。もの心細く思して、御行ひ常よりもたゆみなくしたまふ。世に心とどめたまはねば、出で立ちいそぎをのみ思せば、涼しき道にも赴きたまひぬべきを、ただこの御ことどもに、いといとほしく、限りなき御心強さなれど、かならず今はと見捨てたまはむ御心は乱れなむと、見たてまつる人も推し量りきこゆるを、思すさまにはあらずとも、なのめに、さても人聞き口惜しかるまじう、見ゆるされぬべき際の人の、真心に後見きこえむなど思ひ寄りきこゆるあらば、知らず顔にてゆるしてむ、一所一所、世に住みつきたまふよすがあらば、それを見譲る方に慰めおくべきを、さまで深き心に尋ねきこゆる人もなし。まれまれはかなきたよりに、好きごと聞こえなどする人は、まだ若々しき人の心のすさびに、物詣での中宿り、行き来のほどの

なほざりごとにけしきばみかけて、さすがに、かく眺めたまふありさまなど推し量り、あなづらはしげにもてなすは、めざましうて、なげのいらへをだにせさせたまはず。三の宮ぞ、なほ見ではやまじと思す御心深かりける。さるべきにやおはしけむ。

宰相の中將、その秋、中納言になりたまひぬ。いとど匂ひまさりたまふ、世のいとなみに添へても、思すこと多かり。いかなることといぶせく思ひわたりし年ごろよりも、心苦しうて過ぎたまひにけむいにしへさまの思ひやらるるに、罪軽くなりたまふばかり、行ひもせまほしくなむ。かの老人をばあはれなるものに思ひおきて、いちじるきさまならず、とかく紛らはしつつ、心寄せ訪らひたまふ。

宇治に参うでで久しうなりにけるを、思ひ出でて参りたまへり。七月ばかりになりにけり。都にはまだ入りたたぬ秋のけしきを、音羽の山近く、風の音もいと冷やかに、槇の山辺もわづかに色づきて、なほ、尋ね来たるに、をかしうめづらしうおぼゆるを、宮はまいて、例よりも待ち喜びきこえたまひて、このたびは心細げなる物語いと多く申したまふ。「亡からむ後、この君たちを、さるべきものたよりもとぶらひ、思ひ捨てぬものに数まへたまへ」など、おもむけつつ聞こえたまへば、「一言にても承りおきてしかば、さらに思うたまへおこたるまじくなむ。世の中に心をとどめじと、はぶきはべる身にて、何ごとも頼もしげなき生ひ先の少なさになむはべれど、さる方にてもめぐらひはべらむ限りは、変らぬ心ざしを御覧じ知らせむとなむ思うたまふる」など聞こえたまへば、うれしと思いたり。

夜深き月の明らかにさし出でて、山の端近き心地するに、念誦いとあはれにしたまひて、昔物語したまふ。「このころの世はいかがなりにたらむ。くぢゆうなどに、かやうなる秋の月に、御前の御遊びの折にさぶらひあひたる中に、

もの上手とおぼしき限り、とりどりにうち合はせたる拍子など、こととしきよりも、よしありとおぼえある女御、更衣の御局々の、おのがじしは挑ましく思ひ、うはべの情けを交はすべかめるに、夜深きほどの人の氣しめりぬるに、心やましく搔い調べほのかにほころび出でたる物の音など、聞き所あるが多かりしかな。何ごとにも、女はもてあそびのつまにしつべく、ものはかなきものから、人の心を動かすくさはひになむあるべき。されば罪の深きにやあらむ。子の道の闇を思ひやるにも、男はいとしも親の心を乱さずやあらむ。女は限りありて、いふかひなき方に思ひ捨つべきにも、なほいと心苦しかるべき」など、おほかたのことにつけてのたまへる、いかがさ思さざらむ、心苦しく思ひやるる御心のうちなり。

「すべてまことに、しか思うたまへ捨てたるけにやはべらむ、みづからのことにては、いかにもいかにも深う思ひ知る方のはべらぬを、げにはかなきことなれど、声にめづる心こそ背きがたきことにはべりけれ。さかしう聖だつ迦葉も、さればや、立ちて舞ひはべりけむ」など聞こえて、飽かず一声聞きし御琴の音を、切にゆかしがりたまへば、うとうとしからぬ初めにもとや思すらむ、御みづからあなたに入りたまひて、切にそそのかしきこえたまふ。箏の琴をぞ、いとほのかに搔きならしてやみたまひぬる。いとど人のけはひも絶えて、あはれなる空のけしき、所のさまに、わぎとなき御遊びの心に入りてをかしうおぼゆれど、うちとけてもいかでかは弾き合はせたまはむ。

「おのづから、かばかりならしそめつる残りは、世籠もれるどちに譲りきこえてむ」とて、宮は仏の御前に入りたまひぬ。

「われなくて草の庵は荒れぬともこのひとことはかれじとぞ思ふ

かかる対面もこのたびや限りならむと、もの心細きに忍びかねて、かたくなしきひが言多くもなりぬるかな」とて、うち泣きたまふ。客人、

「いかならむ世にかかれせむ長き世の契りむすべる草の庵は

相撲など、公事ども紛れはべるころ過ぎてさぶらはむ」など聞こえたまふ。

こなたにて、かの問はず語りの古人召し出でて、残り多かる物語などせさせたまふ。入り方の月、隈なくさし入りて、透影なまめかしきに、君たちも奥まりておはす。世の常の懸想びてはあらず、心深う物語のどやかに聞こえつつものしたまへば、さるべき御いらへなど聞こえたまふ。三宮、いとゆかしう思いたるものと、心のうちには思ひ出でつつ、わが心ながら、なほ人には異なりかし、さばかり御心もて許いたまふことの、さしもいそがれぬよ、もて離れて、はたあるまじきこととは、さすがにおぼえず、かやうにてもものをも聞こえ交はし、折ふしの花紅葉につけて、あはれをも情けをも通はすに、憎からずものしたまふあたりなれば、宿世異にて、他ざまにもなりたまはむは、さすがに口惜しかるべう領じたる心地しけり。

まだ夜深きほどに帰りたまひぬ。心細く残りなげに思いたりし御けしきを、思ひ出できこえたまひつつ、騒がしきほど過ぐして参うでむと思す。兵部卿の宮も、この秋のほどに紅葉見におはしまさむと、さるべきついでを思しめぐらす。御文は絶えずたてまつりたまふ。女は、まめやかに思すらむとも思ひたまはねば、わづらはしくもあらで、はかなきさまにもてなしつつ、折々に聞こえ交はしたまふ。

秋深くなりゆくままに、宮は、いみじうもの心細くおぼえたまひければ、例の、静かなる所にて、念仏をも紛れなうせむと思して、君たちにもさるべきこと聞こえたまふ。「世のこととして、つひの別れを逃れぬわざなめれど、思ひ慰まむ方ありてこそ、悲しきをも覚ますものなめれ。また見譲る人もなく、心細げなる御ありさまどもを、うち捨ててむがいみじきこと。されども、さばかりのことに妨げられて、長き夜の闇にさへ惑はむが益なさを、かつ見たてまつ

るほどだに思ひ捨つる世を、去りなむうしろのこと知るべきことにはあらねど、わが身一つにあらず、過ぎたまひにし御面伏せに、軽々しき心どもつかひたまふな。おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな。ただ、かう人に違ひたる契り異なる身と思しなして、ここに世を尽くしてむと思ひとりたまへ。ひたぶるに思ひなせば、ことにもあらず過ぎぬる年月なりけり。まして女は、さる方に絶え籠もりて、いちしるくいとほしげなるよそのもどきを負はざらむなむよかるべき」などのたまふ。ともかくも身のならむやうまでは、思しも流されず、ただ、いかにしてか、後れたてまつりては、世に片時もながらふべき、と思すに、かく心細きさまの御あらましごとくに、言ふ方なき御心惑ひどもになむ。心のうちにこそ思ひ捨てたまひつらめど、明け暮れ御かたはらにならはいたまうて、にはかに別れたまはむは、つらき心ならねど、げに恨めしかるべき御ありさまになむありける。

明日入りたまはむとの日は、例ならずこなたかなたたずみ歩きたまひて見たまふ。いとものはかなく、かりそめの宿りにて過ぐいたまひける御住まひのありさまを、亡からむのち、いかにしてかは若き人の絶え籠もりては過ぐいたまはむ、と涙ぐみつつ念誦したまふさま、いとよげなり。おとなびたる人びと召し出でて、「うしろやすく仕うまつれ。何ごとも、もとよりかやすく世に聞こえあるまじき際の人は、末の衰へも常のことにて、紛れぬべかめり。かかる際になりぬれば、人は何と思はざらめど、口惜しうてさすらへむ、契りかたじけなく、いとほしきことなむ多かるべき。もの寂しく心細き世を経るは例のことなり。生まれたる家のほど、おきてのままにもてなしたらむなむ、聞き耳にも、わが心地にも過ちなくはおぼゆべき。にぎははしく人数めかむと思ふとも、その心にもかなふまじき世とならば、ゆめゆめ軽々しくよからぬ方にもてなしきこゆな」などのたまふ。

まだ暁に出でたまふとても、こなたに渡りたまひて、「無からむほど、心細くな思しわびそ。心ばかりはやりて遊びなどはしたまへ。何ごとも思ふにえかなふまじき世を。思し入られそ」など、返り見がちにて出でたまひぬ。二所、いとど心細くもの思ひ続けられて、起き臥しうち語らひつつ、「一人一人なからましかば、いかで明かし暮らさまし。今、行く末も定めなき世にて、もし別るるやうもあらば」など、泣きみ笑ひみ、戯れごともまめごとも、同じ心に慰め交して過ぐしたまふ。

かの行ひたまふ三昧、今日果てぬらむと、いつしかと待ちきこえたまふ夕暮に、人参りて、「今朝より悩ましくてなむ、え参らぬ。風邪かとて、とかくつくろふものするほどになむ。さるは、例よりも対面心もとなきを」と聞こえたまへり。胸つぶれて、いかなるにかと思し嘆き、御衣ども、綿厚くて急ぎせさせたまひて、たてまつれなどしたまふ。二三日怠りたまはず。いかにいかにと人たてまつりたまへど、「ことにおどろおどろしくはあらず。そこはかとなく苦しうなむ。すこしもよろしくならば、今念じて」など、言葉にて聞こえたまふ。阿闍梨つとさぶらひて仕うまつりける。「はかなき御悩みと見ゆれど、限りのたびにもおはしますらむ。君たちの御こと、何か思し嘆くべき。人は皆御宿世といふもの異々なれば、御心にかかるべきにもおはしませぬ」と、いよ思し離るべきことを聞こえ知らせつつ、「今さらにな出でたまひそ」と、諫め申すなりけり。

八月二十日のほどなりけり。おほかたの空のけしきもいとどしきころ、君たちは、朝夕霧の晴るる間もなく、思し嘆きつつ眺めたまふ。有明の月のいとはなやかにさし出でて、水の面もさやかに澄みたるを、そなたの薨上げさせて、見出だしたまへるに、鐘の声かすかに響きて、明けぬなりと聞こゆるほどに、人びと来て、「この夜中ばかりになむ亡せたまひぬる」と泣く泣く申す。心に

かけて、いかにとは絶えず思ひきこえたまへれど、うち聞きたまふには、あさましくものおぼえぬ心地して、いとどかかることには、涙もいづちか去にけむ、ただうつぶし臥したまへり。いみじき目も、見る目の前にて、おぼつかなからぬこそ常のことなれ、おぼつかなき添ひて、思し嘆くことことわりなり。しばしにても、後れたてまつりて、世にあるべきものと、思しならばぬ御心地どもにて、いかでかは後れじと泣き沈みたまへど、限りある道なりければ、何のかひなし。

阿闍梨、年ごろ契りおきたまひけるままに、後の御こともよろづに仕うまつる。「亡き人になりたまへらむ御さまかたちをだに、今一度見たてまつらむ」と思しのたまへど、「今さらに、なでふさることかはべるべき。日ごろも、また会ひたまふまじきことを聞こえ知らせつれば、今はまして、かたみに御心とどめたまふまじき御心遣ひを、ならひたまふべきなり」とのみ聞こゆ。おはしましける御ありさまを聞きたまふにも、阿闍梨のあまりさかしき聖心を、憎くつらしとなむ思しける。入道の御本意は、昔より深くおはせしかど、かう見譲る人なき御ことどもの見捨てがたきを、生ける限りは明け暮れえ避らず見たてまつるを、よに心細き世の慰めにも、思し離れがたくて過ぐいたまへるを、限りある道には、先だちたまふも慕ひたまふ御心も、かなはぬわざなりけり。

中納言殿には、聞きたまひて、いとあへなく口惜しく、今一たび心のどかにて聞こゆべかりけること、多う残りたる心地して、おほかた世のありさま思ひ続けられて、いみじう泣いたまふ。「またあひ見ること難くや」などのたまひしを、なほ常の御心にも、朝夕の隔て知らぬ世のはかなさを、人よりけに思ひたまへりしかば、耳馴れて、昨日今日と思はざりけるを、かへすがへす飽かず悲しく思さる。阿闍梨のもとにも、君たちの御弔らひも、こまやかに聞こえたまふ。かかる御弔らひなど、また訪れきこゆる人だになき御ありさまなるは、

ものおぼえぬ御心地どもにも、年ごろの御心ばへのあはれなめりしなどを、思ひ知りたまふ。世の常のほどの別れだに、さしあたりては、またたぐひなきやうにのみ皆人の思ひ惑ふものなめるを、慰むかたなげなる御身どもにて、いかやうなる心地どもしたまふらむ、と思しやりつつ、後の御わざなど、あるべきことども推し量りて、阿闍梨にも訪らひたまふ。ここにも、老人どもにとよせて、御誦経などのことも思ひやりたまふ。

明けぬ夜の心地ながら、九月にもなりぬ。野山のけしき、まして袖の時雨をもよほしがちに、ともすればあらそひ落つる木の葉の音も、水の響きも、涙の滝も、一つもののやうに暮れ惑ひて、かうてはいかでか、限りあらむ御命もしばしめぐらいたまはむと、さぶらふ人びとは心細く、いみじく慰めきこえつつ、ここにも念仏の僧さぶらひて、おはしましし方は、仏を形見に見たてまつりつつ、時々参り仕うまつりし人びとの、御忌に籠もりたる限りは、あはれに行ひて過ぐす。

兵部卿の宮よりも、たびたび弔らひきこえたまふ。さやうの御返りなど、聞こえむ心地もしたまはず。おぼつかなければ、中納言にはかうもあらざるを、我をばなほ思ひ放ちたまへるなめりと、恨めしく思す。紅葉の盛りに、文など作らせたまはむとて、出で立ちたまひしを、かくこのわたりの御逍遙、便なきころなれば、思しとまりて口惜しくなむ。

御忌も果てぬ。限りあれば、涙も隙もやと思しやりて、いと多く書き続けたまへり。時雨がちなる夕つ方、

牡鹿鳴く秋の山里いかならむ小萩が露のかかる夕暮

ただ今の空のけしき、思し知らぬ顔ならむも、あまり心づきなくこそあるべけれ。枯れゆく野辺も、分きて眺めらるるころになむ。

などあり。「げに、いとあまり思ひ知らぬやうにて、たびたびになりぬるを、

なほ聞こえたまへ」など、中の宮を、例の、そそのかして書かせたてまつりたまふ。今日までながらへて、硯など近くひき寄せて見るべきものとやは思ひし、心憂くも過ぎにける日数かな、と思すに、またかきくもり、もの見えぬ心地したまへば、押しやりて、「なほえこそ書きはべるまじけれ。やうやうかう起きるられなどしはべるが、げに限りありけるにこそとおぼゆるも、疎ましう心憂くて」と、らうたげなるさまに泣きしをれておはするも、いと心苦し。

夕暮のほどより来ける御使、宵すこし過ぎてぞ来たる。「いかでか帰り参らむ。今宵は旅寝して」と言はせたまへど、「立ち帰りこそ参りなめ」と急げば、いとほしうて、我さかしう思ひしづめたまふにはあらねど、見わづらひたまひて、

涙のみ霧りふたがれる山里は籬に鹿ぞ諸声に鳴く

黒き紙に、夜の墨つきもたどしければ、ひきつくろふところもなく、筆にまかせて、おし包みて出だしたまひつ。

御使は、木幡の山のほども、雨もよにいと恐ろしげなれど、さやうのもの懼ぢすまじきをや選り出でたまひけむ、むつかしげなる笹の隈を、駒ひきとどむるほどもなくうち早めて、片時に参り着きぬ。御前にても、いたく濡れて参りたれば、禄賜ふ。さきざき御覽せしにはあらぬ手の、今すこしおとなびまさりて、よしづきたる書きざまなどを、いづれかいづれならむと、うちも置かず御覽じつつ、とみにも大殿籠もらねば、「待つとて起きおはしまし、また御覽ずるほどの久しきは、いかばかり御心にしむことならむ」と、御前なる人びとささめき聞こえて、憎みきこゆ。ねぶたければなめり。

まだ朝霧深き朝に、いそぎ起きてたてまつりたまふ。

朝霧に友まどはせる鹿の音をおほかたにやはあはれとも聞く

諸声は劣るまじくこそ。

とあれど、あまり情けだたむもうるさし、一所の御蔭に隠るへたるを頼み所にてこそ、何ごとも心やすくて過ごしつれ、心よりほかにながらへて、思はずなることの紛れ、つゆにてもあらば、うしろめたげにのみ思しおくめりしなき御魂にさへ、疵やつけたてまつらむと、なべていとつつましく恐ろしうて、聞こえたまはず。この宮などを、軽らかにおしなべてのさまにも思ひきこえたまはず、なげの走り書いたまへる御筆づかひ言の葉も、をかしきさまになまめきたまへる御けはひを、あまちは見知りたまはねど、見たまひながら、そのゆゑゆゑしく情けある方に言をませきこえむも、つきなき身のありさまどもなれば、何か、ただかかる山伏だちて過ぐしてむ、と思す。

中納言殿の御返りばかりは、かれよりもまめやかなるさまに聞こえたまへば、これよりもいとけうとげにはあらず聞こえ通ひたまふ。御忌果てても、みづから参うでたまへり。東の廂の下りたる方にやつれておはするに、近う立ち寄りたまひて、古人召し出でたり。闇に惑ひたまへる御あたりに、いとまばゆく匂ひ満ちて入りおはしたれば、かたはらいたうて、御いらへなどをだにえしたまはねば、「かやうにはもてないたまはで、昔の御心むけに従ひきこえたまはむさまならむこそ、聞こえ承るかひあるべけれ。なよびけしきばみたる振る舞ひをならひはべらねば、人伝てに聞こえはべるは、言の葉も続きはべらず」とあれば、「あさましう、今までながらへはべるやうなれど、思ひさまさむ方なき夢にたどられはべりてなむ、心よりほかに空の光見はべらむもつつましくて、端近うもえみじろきはべらぬ」と聞こえたまへれば、「ことといへば、限りなき御心の深さになむ。月日の影は、御心もて晴れ晴れしくもて出でさせたまはばこそ、罪もはべらめ、行く方もなく、いぶせうおぼえはべり。また思さるらむはしばしをも、あきらめきこえまほしくなむ」と申したまへば、「げにこそ、いとたぐひなげなめる御ありさまを、慰めきこえたまふ御心ばへの浅からぬほ

ど」など聞こえ知らず。

御心地にも、さこそいへ、やうやう心しづまりて、よろづ思ひ知られたまへば、昔ざまにても、かうまではるけき野辺を分け入りたまへる心ざしなども、思ひ知りたまふべし、すこしるぎり寄りたまへり。思すらむさま、またのたまひ契りしことなど、いとこまやかになつかしう言ひて、うたて雄々しきけはひなどは見えたまはぬ人なれば、け疎くすずろはしくなどはあらねど、知らぬ人にかく声を聞かせたてまつり、すずろに頼み顔なることなどもありつる日ごろを思ひ続くるも、さすがに苦しうて、つつましかれど、ほのかに一言などいらへきこえたまふさまの、げによろづ思ひほれたまへるけはひなれば、いとあはれと聞きたてまつりたまふ。黒き几帳の透影のいと心苦しげなるに、ましておはすらむさま、ほの見し明けぐれなど思ひ出でられて、

色変はる浅茅を見ても墨染にやつるる袖を思ひこそやれ

と独り言のやうにのたまへば、

「色変はる袖をば露の宿りにてわが身ぞさらに置き所なき

はつるる糸は」と、末は言ひ消ちて、いといみじく忍びがたきけはひにて入りたまひぬなり。

ひきとどめなどすべきほどにもあらねば、飽かずあはれにおぼゆ。若い人ぞ、こよなき御代はりに出で来て、昔今をかき集め、悲しき御物語ども聞こゆ。ありがたくあさましきことどもをも見たる人なりければ、かうあやしく衰へたる人とも思し捨てられず、いとなつかしう語らひたまふ。「いはけなかりしほどに、故院に後れたてまつりて、いみじう悲しきものは世なりけりと思ひ知りしかば、人となりゆく齡に添へて、官位、世の中の匂ひも、何ともおぼえずなむ。ただかう静やかなる御住まひなどの、心になひたまへりしを、かくはかなく見なしたてまつりなしつるに、いよいよいみじく、かりそめの世の思ひ知

らるる心もよほされにたれど、心苦しうてとまりたまへる御ことどもの、ほだしなど聞こえむはかけかけしきやうなれど、ながらへても、かの御言あやまたず、聞こえ承らまほしきになむ。さるは、おぼえなき御古物語聞きしより、いとど世の中に跡とめむともおぼえずなりにたりや」。うち泣きつつのたまへば、この人はましていみじく泣きて、えも聞こえやらず。御けはひなどのただそれかとおぼえたまふに、年ごろうち忘れてたりつるいにしへの御ことをさへとり重ねて、聞こえやらむ方もなくおぼほれるたり。

この人は、かの大納言の御乳母子にて、父は、この姫君たちの母北の方の母方の叔父、左中弁にて亡せにけるが子なりけり。年ごろ遠き国にあくがれ、母君も亡せたまひてのち、かの殿には疎くなり、この宮には、尋ね取りてあらせたまふなりけり。人もいとやむごとなからず、宮仕へ馴れにたれど、心地なからぬものに宮も思して、姫君たちの御後見だつ人になしたまへるなりけり。昔の御ことは、年ごろかく朝夕に見たてまつり馴れ、心隔つる隈なく思ひきこゆる君たちにも、一言うち出で聞こゆるついでなく、忍びこめたりけれど、中納言の君は、古人の間はず語り、皆例のことなれば、おしなべてあはあはしうなどは言ひ広げずとも、いと恥づかしげなめる御心どもには聞きおきたまへらむかし、と推し量らるるが、ねたくもいとほしくもおぼゆるにぞ、またもて離れてはやまじと思ひ寄らるるつまにもなりぬべき。

今は旅寝もすずろなる心地して帰りたまふにも、「これや限りの」などのたまひしを、などか、さしもやはとうち頼みて、また見たてまつらずなりにけむ、秋やばはれる、あまたの日数も隔てぬほどに、おはしにけむ方も知らず、あへなきわぎなりや。ことに例の人めいたる御しつらひなく、いとことそぎたまふめりしかど、いとものきよげにかき払ひ、あたりをかしくもてないたまへりし御住まひも、大徳たち出で入り、こなたかなたひき隔てつつ、御念誦の具ど

もなどぞ変らぬさまなれど、仏は皆かの寺に移したてまつりてむとす、と聞こゆるを聞きたまふにも、かかるさまの人影などさへ絶え果てむほど、とまりて思ひたまはむ心地どもをくみきこえたまふも、いと胸いたう思し続けらる。

「いたく暮れはべりぬ」と申せば、眺めさして立ちたまふに、雁鳴きて渡る。

秋霧の晴れぬ雲居にいとどしくこの世をかりと言ひ知らすらむ

兵部卿宮に対面したまふ時は、まづこの君たちの御ことを扱ひぐさにしたまふ。今はさりともし心やすきをと思して、宮はねむごろに聞こえたまひけり。はかなき御返りも聞こえにくく、つつましき方に、女方は思いたり。世にいといたう好きたまへる御名のひろごりて、好ましく艶に思さるべかめるも、かういと埋づもれたる葎の下よりさし出でたらむ手つきも、いかにうひうひしく古めきたらむ、など思ひ屈したまへり。

さても、あさましうて明け暮らさるるは月日なりけり。かく頼みがたかりける御世を、昨日今日とは思はで、ただおほかた定めなきはかなさばかりを、明け暮れのことに見しかど、我も人も後れ先だつほどもやは経む、などうち思ひけるよ、来し方を思ひ続けるも、何の頼もしげなる世にもあらざりけれど、ただいつとなくのどやかに眺め過ぐし、もの恐ろしくつつましきこともなくて経つるものを、風の音も荒らかに、例見ぬ人影もうち連れ声づくれば、まづ胸つぶれて、もの恐ろしくわびしうおぼゆることさへ添ひにたるが、いみじう堪へがたきことと、二所うち語らひつつ、干す世もなくて過ぐしたまふに、年も暮れにけり。

雪霰降りしくころは、いづくもかくこそはある風の音なれど、今はじめて思ひ入りたらむ山住みの心地したまふ。女ばらなど、「あはれ、年は替はりなむとす。心細く悲しきことを。改まるべき春待ち出でてしがな」と、心を消たず言ふもあり。難きことかなと聞きたまふ。向かひの山にも、時々の御念仏に籠

もりたまひしゆゑこそ、人も参り通ひしか、阿闍梨も、いかがと、おほかたにまれに訪れきこゆれど、今は何しにかはほのめき参らむ、いとど人目の絶え果つるも、さるべきことと思ひながら、いと悲しくなむ。何とも見ざりし山賤も、おはしまさでのち、たまさかにさしのぞき参るは、めづらしく思ほえたまふ。このころのこととて、薪、木の実拾ひて参る山人どもあり。

阿闍梨の室より、炭などやうのものたてまつるとて、

年ごろにならひはべりにける宮仕への、今とて絶えはつらむが心細きになむ。

と聞こえたり。かならず冬籠もる山風ふせぎつべき綿衣など遣はししを思し出でてやりたまふ。法師ばら、童べなどの上り行くも見えみ見えずみ、いと雪深きを、泣く泣く立ち出でて見送りとたまふ。「御髪など下ろいたまうてける、さる方にておはしまさましかば、かやうに通ひ参る人も、おのづからしげからまし。いかにあはれに心細くとも、あひ見たてまつること絶えてやまましやは」など語らひたまふ。

君なくて岩のかけ道絶えしより松の雪をもなにとかは見る

中の宮、

奥山の松葉に積もる雪とだに消えにし人を思はましかば

うらやましくぞまたも降り添ふや。

中納言の君、新しき年はふとしもえ訪らひきこえざらむ、と思しておはしたり。雪もいと所狭きに、よろしき人だに見えずなりにたるを、なのめならぬけはひして、軽らかにものしたまへる心ばへの、浅うはあらず思ひ知られたまへば、例よりは見入れて、御座などひきつくろはせたまふ。墨染ならぬ御火桶、奥なる取り出でて、塵かき払ひなどするにつけても、宮の待ち喜びたまひし御けしきなどを、人びとも聞こえ出づ。対面したまふことをば、つつましくのみ

思いたれど、思ひ隈なきやうに人の思ひたまへれば、いかがはせむとて聞こえたまふ。うちとくとはなけれど、さきざきよりはすこし言の葉続けて、ものなごのたまへるさま、いとめやすく心恥づかしげなり。かやうにてのみはえ過ぐし果つまじ、と思ひなりたまふも、いとうちつけなる心かな、なほ移りぬべき世なりけり、と思ひゐたまへり。

「宮のいとあやしく恨みたまふことのはべるかな。あはれなりし御一言をうけたまはりおきしまなど、ことのついでにもや漏らし聞こえたりけむ、またいと隈なき御心のさがにて、推し量りたまふにやはべらむ、ここになむ、ともかくも聞こえさせなすべきと頼むを、つれなき御けしきなるは、もてそこなひきこゆるぞと、たびたび怨じたまへば、心よりほかなることと思うたまふれど、里のしるべ、いとこよなうもえあらがひきこえぬを、何かは、いとさしもてなしきこえたまはむ。好いたまへるやうに人は聞こえなすべかめれど、心の底あやしく深うおはする宮なり。なほざりごとなどのたまふわたりの、心軽うてなびきやすなるなどを、めづらしからぬものに思ひおとしたまふにや、となむ聞くこともはべる。何ごとにもあるに従ひて、心を立つる方もなく、おどけたる人こそ、ただ世のもてなしに従ひて、とあるもかかるものに見なし、すこし心に違ふふしあるにも、いかがはせむ、さるべきぞ、なども思ひなすべかめれば、なかなか心長き例になるやうもあり。崩れそめては、龍田の川の濁る名をも汚し、いふかひなく名残なきやうなることなども、皆うちまじるめれ。心の深うしみたまふべかめる御心ざまにかなひ、ことに背くこと多くなどものしたまはざらむをば、さらに軽々しく、初め終り違ふやうなることなど、見せたまふまじきけしきになむ。人の見たてまつり知らぬことを、いとよう見きこえたるを、もし似つかはしく、さもやと思し寄らば、そのもてなしなどは、心の限り尽くして仕うまつりなむかし。御中道のほど、乱り脚こそ痛からめ」と、

いとまめやかにて言ひ続けたまへば、わが御みづからのこととは思しもかけず、人の親めきていらへむかし、と思しめぐらしたまへど、なほ言ふべき言の葉もなき心地して、「いかにとかは、かけかけしげにのたまひ続けるに、なかなか聞こえむこともおぼえはべらで」と、うち笑ひたまへるも、おいらかなるものから、けはひをかしう聞こゆ。

「かならず御みづから聞こしめし負ふべきこととも思うたまへず。それは、雪を踏み分けて参り来たる心ざしばかりを、御覧じ分かむ御このかみ心にて、過ぐさせたまひてよかし。かの御心寄せは、また異にぞはべべかめる。ほのかにのたまふさまもはべめりしを、いさや、それも人の分ききこえがたきことなり。御返りなどは、いづ方にかは聞こえたまふ」と問ひ申したまふに、ようぞ戯れにも聞こえざりける、何となけれど、かうのたまふにも、いかに恥づかしう胸つぶれまし、と思ふに、え答へやりたまはず。

雪深き山のかけはし君ならでまたふみかよふ跡を見ぬかな

と書いて、さし出でたまへれば、「御ものあらがひこそ、なかなか心おかれはべりぬべけれ」とて、

「つららとぞ駒ふみしだく山川をしるべしがてらまづや渡らむ

さらばしも、影さへ見ゆるしるしも、浅うははべらじ」と聞こえたまへば、思はずに、ものしうなりて、ことにいらへたまはず。けざやかにいともの遠くすくみたるさまには見えたまはねど、今やうの若人たちのやうに、艶げにももてなさで、いとめやすくのどかなる心ばへならむとぞ、推し量られたまふ人の御けはひなる。かうこそはあらまほしけれと、思ふに違はぬ心地したまふ。ことに触れてけしきばみ寄るも、知らず顔なるさまにのみもてなしたまへば、心恥づかしうて、昔物語などをぞものまめやかに聞こえたまふ。

「暮れ果てなば、雪いとど空も閉ぢぬべうはべり」と、御供の人びと声づく

れば、帰りたまひなむとて、「心苦しう見めぐらさるる御住まひのさまなりや。ただ山里のやうにいと静かなる所の、人も行き交じらぬはべるを、さも思しかげば、いかにうれしくはべらむ」などのたまふも、いとめでたかるべきことかなと、片耳に聞きてうち笑む女ばらのあるを、中の宮は、いと見苦しう、いかにさやうにはあるべきぞ、と見聞きもたまへり。

御くだものよしあるさまにて参り、御供の人びとも、肴などめやすきほどにて、土器さし出でさせたまひけり。また、御移り香もて騒がれし宿直人ぞ、鬘鬢とかいふつらつき、心づきなくてある、はかなの御頼もし人やと見たまひて、召し出でたり。「いかにぞ。おはしまさでのち心細からむな」など問ひたまふ。うちひそみつつ、心弱げに泣く。「世の中に頼むよるべもはべらぬ身にて、一所の御蔭に隠れて、三十余年を過ぐしはべりにければ、今はまして、野山にまじりはべらむも、いかなる木のもとをかは頼むべくはべらむ」と申して、いとど人悪ろげなり。

おはしましし方開けさせたまへれば、塵いたう積もりて、仏のみぞ花の飾り衰へず、行ひたまひけりと見ゆる御床など、取りやりてかき払ひたり。本意をも遂げばと契りきこえしこと思ひ出でて、

立ち寄らむ蔭と頼みし椎が本空しき床になりけるかな

とて、柱に寄りゐたまへるをも、若き人びとは、覗きてめでたてまつる。

日暮れぬれば、近き所々に、御荘など仕うまつる人びとに、御秣取りにやりける、君も知りたまはぬに、田舎びたる人びとは、おどろおどろしくひき連れ参りたるを、あやしうはしたなきわざかなと御覧ずれど、老い人に紛らはしたまひつ。おほかたかやうに仕うまつるべく仰せおきて出でたまひぬ。

年替はりぬれば、空のけしきうららかなるに、汀の氷解けたるを、ありがたくもと眺めたまふ。聖の坊より、「雪消えに摘みてはべるなり」とて、沢の芹、

蕨などたてまつりたり。いもひの御台に参れる、「所につけては、かかる草木のけしきに從ひて、行き交ふ月日のしるしも見ゆるこそをかしけれ」など、人びとの言ふを、何のをかしきならむと聞きたまふ。

君が折る峰の蕨と見ましかば知られやせまし春のしるしも

雪深き汀の小芹誰がために摘みかはやさむ親なしにして

など、はかなきことどもをうち語らひつつ、明け暮らしたまふ。

中納言殿よりも、宮よりも、折過ぐさず訪らひきこえたまふ。うるさく何となきこと多かるやうなれば、例の、書き漏らしたるなめり。

花盛りのころ、宮、かざしを思し出でて、その折見聞きたまひし君たちなども、「いとゆゑありし親王の御住まひを、またも見ずなりにしこと」など、おほかたのあはれを口々聞こゆるに、いとゆかしう思されけり。

つてに見し宿の桜をこの春は霞隔てず折りてかざさむ

と、心をやりてのたまへりけり。あるまじきことかな、と見たまひながら、いとつれづれなるほどに、見所ある御文の、うはべばかりをもて消たじとて、

いづことか尋ねて折らむ墨染に霞みこめたる宿の桜を

なほかくさし放ち、つれなき御けしきのみ見ゆれば、まことに心憂しと思しわたる。

御心にあまりたまひては、ただ中納言を、とぎまかうぎまに責め恨みきこえたまへば、をかしと思ひながら、いとうけはりたる後見顔にうちいらへきこえて、あだめいたる御心ぎまをも見あらはす時々は、「いかでか、かからむには」など申したまへば、宮も御心づかひしたまふべし、「心にかなふあたりを、まだ見つけぬほどぞや」とのたまふ。

大殿の六の君を思し入れぬこと、なま恨めしげに大臣も思したりけり。されど、「ゆかしげなき仲らひなるうちにも、大臣のことことしくわづらはしくて、

何ごとの紛れをも見とがめられむがむつかしき」と、下にはのたまひて、すまひたまふ。

その年、三条の宮焼けて、入道の宮も六条の院に移ろひたまひ、何くれとも
の騒がしきに紛れて、宇治のわたりを久しう訪れきこえたまはず。まめやかな
る人の御心は、またいと異なりければ、いとのだかに、おのがものとはうち頼
みながら、女の心ゆるびたまはざらむ限りは、あざればみ、情けなきさまに見
えじと思ひつつ、昔の御心忘れぬ方を深く見知りたまへと思す。

その年、常よりも暑さを人わぶるに、川づら涼しからむはやと思ひ出でて、
にはかに参うでたまへり。朝涼みのほどに出でたまひければ、あやにくにさし
来る日影もまばゆくて、宮のおはせし西の廂に宿直人召し出でておはす。そな
たの母屋の仏の御前に、君たちものしたまひけるを、気近からじとて、わが御
方に渡りたまふ御けはひ、忍びたれど、おのづからうちみじろきたまふほど近
う聞こえければ、なほあらじに、こなたに通ふ障子の端の方に、かけがねした
る所に、穴のすこし開きたるを見おきたまへりければ、外に立てたる屏風をひ
きやりて見たまふ。ここともとに几帳を添へ立てたる、あな口惜しと思ひて、ひ
き帰る折しも、風の簾をいたう吹き上ぐべかめれば、「あらはにもこそあれ、
その几帳おし出でてこそ」と言ふ人あなり。をこがましきものの、うれしうて
見たまへば、高きも短きも、几帳を二間の簾におし寄せて、この障子に向かひ
て、開きたる障子より、あなたに通らむとなりけり。

まづ一人立ち出でて、几帳よりさし覗きて、この御供の人びとのとかう行き
ちがひ、涼みあへるを見たまふなりけり。濃き鈍色の単衣に萱草の袴もてはや
したる、なかなかさま変はりて、はなやかなりと見ゆるは、着なしたまへる人
からなめり。帯はかなげにしなして、数珠ひき隠して持たまへり。いとそびや
かに様体をかしげなる人の、髪、桂にすこし足らぬほどならむと見えて、末ま

で塵のまよひなく、つやつやとこちたううつくしげなり。かたはらめなど、あならうたげと見えて、匂ひやかにやはらかにおほどきたるけはひ、女一の宮もかうざまにぞおはすべきと、ほの見たてまつりしも思ひ比べられて、うち嘆かる。

またるざり出でて、「かの障子はあらはにもこそあれ」と見おこせたまへる用意、うちとけたらぬさまして、よしあらむとおぼゆ。頭つき、髪ざしのほど、今すこしあてになまめかしきさまなり。「あなたに屏風も添へて立ててはべりつ。急ぎてしも覗きたまはじ」と、若き人びと何心なく言ふあり。「いみじうもあるべきわざかな」とて、うしろめたげにみざり入りたまふほど、気高う心にくきはひ添ひて見ゆ。黒き袷一襲、同じやうなる色合ひを着たまへれど、これはなつかしうなまめきて、あはれげに心苦しうおぼゆ。髪さはらかなるほどに落ちたるなるべし、末すこし細りて、色なりとかいふめる、翡翠だちていとをかしげに、糸をよりかけたるやうなり。紫の紙に書きたる経を片手に持ちたまへる手つき、かれよりも細さまさりて、痩せ痩せなるべし。立ちたりつる君も、障子口にゐて、何ごとにかあらむ、こなたを見おこせて笑ひたる、いと愛敬づきたり。

総

角

あまた年耳馴れたまひにし川風も、この秋はいとはしたなくもの悲しくて、御果ての事いそがせたまふ。おほかたのあるべかしきことどもは、中納言殿、阿闍梨などぞ仕うまつりたまひける。ここには法服の事、経の飾り、こまかなる御扱ひを、人の聞こゆるに従ひて営みたまふも、いとものはかなくあはれに、かかるよその御後見なからましかばと見えたり。みづからも参うでたまひて、今はと脱ぎ捨てたまふほどの御訪らひ、浅からず聞こえたまふ。阿闍梨もここに参れり。名香の糸ひき乱りて、「かくても経ぬる」など、うち語らひたまふほどなりけり。結び上げたたるたりの、簾のつまより几帳のほころびに透きて見えければ、そのことと心得て、「わが涙をば玉にぬかなむ」とうち誦じたまへる、伊勢の御もかくこそありけめとをかしく聞こゆるも、内の人は、聞き知り顔にさしいらへたまはむもつつましくて、ものとはなしにとか、貫之がこの世ながらの別れをだに、心細き筋にひきかけむもなど、げに古言ぞ人の心をおぶるたよりなりけるを思ひ出でたまふ。

御願文作り、経、仏供養せらるべき心ばへなど書き出でたまへる硯のついでに、客人、

あげまきに長き契りを結びこめ同じ所に繕りも会はなむ

と書いて、見せたてまつりたまへれば、例の、とうるさけれど、

ぬきもあへずもろき涙の玉の緒に長き契りをいかが結ばむ

とあれば、「あはずは何を」と、恨めしげに眺めたまふ。

みづからの御上は、かくそこはかともなくもて消ちて恥づかしげなるに、すがすがともえのたまひよらで、宮の御ことをぞまめやかに聞こえたまふ。「さしも御心に入るまじきことを、かやうの方にすこしすすみたまへる御本性に、聞こえそめたまひけむ負けじ魂にやと、とぎまかうぎまにいとよくなむ御けしき見たてまつる。まことにうしろめたくはあるまじげなるを、などかくあながち

にしももて離れたまふらむ。世のありさまなど思し分くまじくは見たてまつらぬを、うたて、遠々しくのみもてなさせたまへば、かばかりうらなく頼みきこゆる心に違ひて恨めしくなむ。ともかくも思し分くらむさまなどを、さはやかに承りにしがな」と、いとまめだちて聞こえたまへば、「違へじの心にてこそは、かうまであやしき世の例なるありさまにて、隔てなくもてなしはべれ。それを思し分かざりけるこそは、浅きことも混ざりたる心地すれ。げにかかる住まひなどに、心あらむ人は、思ひ残す事あるまじきを、何事にも後れそめにけるうちに、このたまふめる筋は、いにしへも、さらにかけて、とあらばかからばなど、行く末のあらまじごとに取りまぜて、のたまひ置くこともなかりしかば、なほかかるさまにて、世づきたる方を思ひ絶ゆべく思しおきてける、となむ思ひ合はせはべれば、ともかくも聞こえむ方なくて、さるは、すこし世籠もりたるほどにて、深山隠れには心苦しく見えたまふ人の御上を、いとかく朽木にはなし果てずもがなと、人知れず扱はしくおぼえはべれど、いかなるべき世にかあらむ」と、うち嘆きてももの思ひ乱れたまひけるほどのけはひいとあはれげなり。

けぎやかにおとなびてもいかでかは賢しがりたまはむと、ことわりにて、例の、古人召し出でてぞ語らひたまふ。「年ごろは、ただ後の世さまの心ばへにて進み参りそめしを、もの心細げに思しなるめりし御末のころほひ、この御事どもを心にまかせてもてなしきこゆべくなむのたまひ契りてしを、思しおきてたてまつりたまひし御ありさまどもには違ひて、御心ばへどもの、いといとあやにくにももの強げなるは、いかに、思しおきつる方の異なるにやと、疑はしきことさへなむ。おのづから聞き伝へたまふやうもあらむ。いとあやしき本性にて、世の中に心をしむる方なかりつるを、さるべきにてや、かうまでも聞こえ馴れにけむ。世人もやうやう言ひなすやうあべかめるに、同じくは昔の御こと

も違へきこえず、我も人も、世の常に心とけて聞こえはべらばやと思ひよるは、つきなかるべきことにても、さやうなる例なくやはある」などのたまひ続けて、「宮の御ことをも、かく聞こゆるに、うしろめたくはあらじとうちとけたまふさまならぬは、うちうちにさりとも思ほし向けたることのさまあらむ。なほ、いかにいかに」とうち眺めつつのたまへば、例の、悪ろびたる女ばらなどは、かかることには憎きさかしらも言ひませで、事よがりなどもすめるを、いとさはあらず、心のうちには、あらまほしかるべき御ことどもをと思へど、「もとより、かく人に違ひたまへる御癖どもにはべればにや、いかにもいかにも、世の常に何やかやなど、思ひよりたまへる御けしきになむはべらぬ。かくてさぶらふこれかれも、年ごろだに何の頼もしげある木の本の隠ろへもはべらざりき。身を捨てがたく思ふ限りはほどほどにつけてまかで散り、昔の古き筋なる人も、多く見たてまつり捨てたるあたりに、まして今は、しばしも立ちとまりがたげにわびはべりて、おはしましし世にこそ、限りありて、かたほならむ御ありさまはいとほしくもなど、古体なる御うるはしきに、思しもとどこほりつれ、今はかう、また頼みなき御身どもにて、いかにもいかにも世になびきたまへらむを、あながちにそしりきこえむ人は、かへりてものの心をも知らず、言ふかひなきことにてこそはあらめ、いかなる人か、いとかくて世をば過ぐし果てたまふべき、松の葉をすきて勤むる山伏だに、生ける身の捨てがたさによりてこそ、仏の御教へをも、道々別れては行ひなすなれ、などやうの、よからぬことを聞こえ知らせ、若き御心ども乱れたまひぬべきこと多くはべるめれど、たわむべくもものしたまはず、中の宮をなむ、いかで人めかしくも扱ひなしたてまつらむ、と思ひきこえたまふべかめる。かく山深く訪ねきこえさせたまふめる御心ざしの、年経て見たてまつり馴れたまへるけはひも、疎からず思ひきこえさせたまひ、今はとぎまかうぎまに、こまかなる筋聞こえ通ひたまふめるに、かの

御方をさやうにおもむけて聞こえたまはばとなむ思すべかめる。宮の御文などはべるめるは、さらにまめまめしき御ことならじとはべるめる」と聞こゆれば、「あはれなる御一言を聞きおき、露の世にかかづらはむ限りは聞こえ通はむの心あれば、いづ方にも見えたてまつらむ、同じことなるべきを、さまではた、思しよるなる、いとうれしきことなれど、心の引く方なむ、かばかり思ひ捨つる世に、なほとまりぬべきものなりければ、改めてさはえ思ひなほすまじくなむ。世の常になよびかなる筋にもあらずや。ただかやうにも隔てて、こと残いたるさまならず、さし向ひて、とにかくに定めなき世の物語を隔てなく聞かえて、つつみたまふ御心の隈残らずもてなしたまはむなむ、はらからなどのさやうに睦ましきほどなるもなくて、いとさうごうしくなむ、世の中の思ふことの、あはれにも、をかしくも、愁はしくも、時につけたるありさまを、心に籠めてのみ過ぐる身なれば、さすがにたつきなくおぼゆるに、疎かるまじく頼みきこゆる。後の宮、はた、なれなれしく、さやうにそこはかとなき思ひのままなるくだくだしさを、聞こえふるべきにもあらず。三条の宮は、親と思ひきこゆべきにもあらぬ御若々しきなれど、限りあれば、たやすく馴れきこえさせずかし。その他の女は、すべていと疎くつつましく恐ろしくおぼえて、心からよるべなく心細きなり。なほざりのすさびにても、懸想だちたることはいとまばゆく、ありつかず、はしたなきこちごちしさにて、まいて心にしめたる方のことは、うち出づることは難くて、怨めしくもいぶせくも思ひきこゆるけしきをだに見えたてまつらぬこそ、我ながら限りなくかたくなしきわぎなれ。宮の御ことをも、さりとも悪しざまには聞こえじと、まかせてやは見たまはぬ」など言ひひるたまへり。老い人はた、かばかり心細きに、あらまほしげなる御ありさまを、いと切に、さもあらせたてまつらばやと思へど、いづ方も恥づかしげなる御ありさまもなれば、思ひのままにはえ聞こえず。

今宵は泊りたまひて、物語などのどやかに聞こえまほしくて、やすらひ暮らしたまひつ。あざやかならず、もの怨みがちなる御けしき、やうやうわりなくなりゆけば、わづらはしくて、うちとけて聞こえたまはむこともいよいよ苦しけれど、おほかたにてはありがたくあはれなる人の御心なれば、こよなくももてなしがたくて、対面したまふ。仏のおはする中の戸を開けて、御灯明の火けざやかにかけさせて、簾に屏風を添へてぞおはする。外にも大殿油参らすれど、「悩ましうて無礼なるを。あらはに」など諫めて、かたはら臥したまへり。御くだものなど、わぎとはなくしなして参らせたまへり。御供の人びとも、ゆゑゆゑしき肴などして出ださせたまへり。廊めいたる方に集まりて、この御前は人げ遠くもてなして、しめじめと物語聞こえたまふ。うちとくべくもあらぬものから、なつかしげに愛敬づきてものたまへるさまの、なのめならず心に入りて、思ひ焦らるるもはかなし。

かくほどもなきものの隔てばかりを障り所にて、おぼつかなく思ひつつ過ぐす心おそきの、あまりをこがましくもあるかな、と思ひ続けらるれど、つれなくて、おほかたの世のことども、あはれにもをかしくも、さまさま聞き多く語らひきこえたまふ。内には、人びと近くなどのたまひおきつれど、さしも、もて離れたまはざらなむと思ふべかめれば、いとしも護りきこえず、さし退きつつ、みな寄り臥して、仏の御灯火もかかぐる人もなし。ものむつかしくて、忍びて人召せどおどろかず。「心地のかき乱り、悩ましくはべるを、ためらひて、暁方にもまた聞こえむ」とて、入りたまひなむとするけしきなり。「山路分けはべりつる人は、ましていと苦しけれど、かく聞こえ承るに慰めてこそはべれ。うち捨てて入らせたまひなば、いと心細からむ」とて、屏風をやら押し開けて入りたまひぬ。いとむくつけて、なからばかり入りたまへるに引きとどめられて、いみじくねたく心憂ければ、「隔てなきとはかかるをや

言ふらむ。めづらかなるわざかな」とあはめたまへるさまのいよいよをかしければ、「隔てぬ心をさらに思し分かねば、聞こえ知らせむとぞかし。めづらかなりとも、いかなる方に思しよるにかはあらむ。仏の御前にて誓言も立てはべらむ。うたて、な懼ぢたまひそ。御心破らじと思ひそめてはべれば、人はかくしも推し量り思ふまじかめれど、世に違へる痴者にて過ぐしはべるぞや」とて、心にくきほどなる火影に御髪のかぼれかかりたるをかきやりつつ見たまへば、人の御けはひ、思ふやうに香りをかしげなり。

かく心細くあさましき御住みかに、好いたらむ人は障り所あるまじげなるを、我ならで尋ね来る人もあらましかば、さてや止みなまし、いかに口惜しきわざならまし、と来し方の心のやすらひさへあやふくおぼえたまへど、言ふかひなく憂しと思ひて泣きたまふ御けしきの、いといとほしければ、かくはあらで、おのづから心ゆるびしたまふ折もありなむと思ひわたる。わりなきやうなるも心苦しくて、さまよくこしらへきこえたまふ。「かかる御心のほどを思ひよらで、あやしきまで聞こえ馴れにたるを、ゆゆしき袖の色など見あらはしたまふ心浅さに、みづからの言ふかひなさも思ひ知らるるに、さまざま慰む方なく」と恨みて、何心もなくやつれたまへる墨染の火影を、いとはしたなくわびしと思ひ惑ひたまへり。「いとかくしも思さるるやうこそはと、恥づかしきに聞こえむ方なし。袖の色をひきかけさせたまふはしもことわりなれど、こころ御覧じなれぬる心ざしのしるしには、さばかりの忌おくべく、今始めたることめきてやは思さるべき。なかなかなる御わきまへ心になむ」とて、かの物の音聞きし有明の月影よりはじめて、折々の思ふ心の忍びがたくなりゆくさまを、いと多く聞こえたまふに、恥づかしくもありけるかなと疎ましく、かかる心ばへながらつれなくまめだちたまひけるかな、と聞きたまふこと多かり。

御かたはらなる短き几帳を、仏の御方にさし隔てて、かりそめに添ひ臥した

まへり。名香のいと香ばしく匂ひて、櫛のいとはなやかに薫れるけはひも、人よりはけに仏をも思ひきこえたまへる御心にてわづらはしく、墨染の今さらに、折ふし心焦られしたるやうにあはあはしく、思ひそめしに違ふべければ、かかる忌なからむほどに、この御心にも、さりともすこしたわみたまひなむなど、せめてのどかに思ひなしたまふ。秋の夜のけはひは、かからぬ所だに、おのづからあはれ多かるを、まして峰の嵐も籬の虫も、心細げにのみ聞きわたさる。常なき世の御物語に時々さしいらへたまへるさま、いと見所多くめやすし。いぎたなかりつる人びとは、かうなりけりと、けしきとりてみな入りぬ。宮ののたまひしさまなど思し出づるに、げにながらへば心の外にかくあるまじきことも見るべきわざにこそは、ともののみ悲しくて、水の音に流れ添ふ心地したまふ。

はかなく明け方になりにけり。御供の人びと起きて声づくり、馬どものいばゆる音も、旅の宿りのあるやうなど人の語るを思しやられて、をかしく思さる。光見えつる方の障子を押し開けたまひて、空のあはれなるをもろともに見たまふ。女もすこしるざり出でたまへるに、ほどもなき軒の近きなれば、しのぶの露もやうやう光見えもてゆく。かたみにいと艶なるさまかたちどもを、「何とはなくて、ただかやうに月をも花をも同じ心にもてあそび、はかなき世のありさまを聞こえ合はせてなむ過ぐさまほしき」と、いとなつかしきさまして語らひきこえたまへば、やうやう恐ろしきも慰みて、「かういとはしたなからで、もの隔ててなど聞こえば、まことに心の隔てはさらにあるまじくなむ」といらへたまふ。

明くなりゆき、むら鳥の立ちさまよふ羽風近く聞こゆ。夜深き朝の鐘の音かすかに響く。今は、いと見苦しきをと、いとわりなく恥づかしげに思したり。「ことあり顔に朝露もえ分けはべるまじ。また、人はいかが推し量りきこゆべ

き。例のやうになだらかにもてなさせたまひて、ただ世に違ひたることにて、今より後も、ただかやうにしなさせたまひてよ。よにうしろめたき心はあらじと思せ。かばかりあながちなる心のほども、あはれと思し知らぬこそかひなけれ」とて、出でたまはむのけしきもなし。あさましく、かたはならむとて、「今より後は、さればこそ、もてなしたまはむままにあらむ。今朝はまた、聞こゆるに従ひたまへかし」とて、いとすべなしと思したれば、「あな苦しや。暁の別れや、まだ知らぬことにて、げに惑ひぬべきを」と嘆きがちなり。鶏もいづ方にかあらむ、ほのかにおとなふに、京思ひ出でらる。

山里のあはれ知らるる声々にとりあつめたる朝ぼらけかな
女君、

鳥の音も聞こえぬ山と思ひしを世の憂きことは訪ね来にけり
障子口まで送りたてまつりたまひて、よべ入りし戸口より出でて、臥したまへれどまどろまれず。名残恋しくて、いとかく思はましかば、月ごろも今まで心のどかならましや、など、帰らむことももの憂くおぼえたまふ。

姫宮は、人の思ふらむことのつつましきに、とみにもうち臥されたまはで、頼もしき人なくて世を過ぐす身の心憂きを、ある人どもも、よからぬこと何やかやと次々に従ひつつ言ひ出づめるに、心よりほかのことありぬべき世なめり、と思しめぐらすには、この人の御けはひありさまの疎ましくはあるまじく、故宮も、さやうなる御心ばへあらばと、折々のたまひ思すめりしかど、みづからはなほかくて過ぐしてむ、我よりはさまかたちも盛りにあたらしげなる中の宮を、人なみなみに見なしたらむこそうれしからめ、人の上になしては、心のいたらむ限り思ひ後見てむ、みづからの上のもてなしは、また誰れかは見扱はむ、この人の御さまの、なのめにうち紛れたるほどならば、かく見馴れぬる年ごろのしるしに、うちゆるぶ心もありぬべきを、恥づかしげに見えにくきけしきも、

なかなかいみじくつつましきに、わが世はかくて過ぐし果ててむ、と思ひ續けて、音泣きがちに明かしたまへるに、名残いと悩ましければ、中の宮の臥したまへる奥の方に添ひ臥したまふ。

例ならず人のささめきしけしきもあやしと、この宮は思しつゝ寝たまへるに、かくておはしたればうれしくて、御衣ひき着せたてまつりたまふに、御移り香の紛るべくもあらずくゆりかかる心地すれば、宿直人がもて扱ひけむ思ひあはせられて、まことなるべしといとほしくて、寝ぬるやうにてもものたまはず。客人は、弁のおもと呼び出でたまひて、こまかに語らひおき、御消息すくすくしく聞こえおきて出でたまひぬ。総角を戯れにとりなししも、心もて尋ばかりの隔ても対面しつるとや、この君も思すらむ、といみじく恥づかしければ、心地悪しとて悩み暮らしたまひつ。人びと、「日は残りなくなりはべりぬ。はかばかしく、はかなきことをだに、また仕うまつる人もなきに、折悪しき御悩みかな」と聞こゆ。中の宮、組などし果てたまひて、「心葉など、えこそ思ひよりはべらね」と、せめて聞こえたまへば、暗くなりぬる紛れに起きたまひて、もろともに結びなどしたまふ。中納言殿より御文あれど、「今朝よりいと悩ましくなむ」とて、人伝てにぞ聞こえたまふ。「さも見苦しく、若々しくおはすと、人びとつぶやききこゆ。

御服など果てて、脱ぎ捨てたまへるにつけても、かた時も後れたてまつらむものと思はざりしを、はかなく過ぎにける月日のほどを思すに、いみじく思ひのほかなる身の憂さと、泣き沈みたまへる御さまども、いと心苦しげなり。月ごろ黒く馴らはしたる御姿、薄鈍にて、いとなまめかしくて、中の宮はげにと盛りにて、うつくしげなる匂ひまさりたまへり。御髪などすましつくろはせて見たてまつりたまふに、世の物思ひ忘るる心地して、めでたければ、人知れず、近劣りしては思はずやあらむと頼もしくうれしくて、今はまた見譲る人も

なくて、親心にかしづきたてて見きこえたまふ。

かの方は、つつみきこえたまひし藤の衣も改めたまへらむ長月も静心なくて、またおはしたり。「例のやうに聞こえむ」と、また御消息あるに、心あやまりして、わづらはしくおぼゆれば、とかく聞こえすまひて対面したまはず。

思ひの外に心憂き御心かな。人もいかに思ひはべらむ。

と御文にて聞こえたまへり。

今はとて脱ぎはべりしほどの心惑ひに、なかなか沈みはべりてなむ、え聞こえぬ。

とあり。

怨みわびて、例の人召して、よろづにのたまふ。世に知らぬ心細さの慰めには、この君をのみ頼みきこえたる人びとなれば、思ひにかなひたまひて、世の常の住みかに移ろひなどしたまはむを、いとめでたかるべきことに言ひ合はせて、「ただ入れたてまつらむ」と、皆語らひ合はせけり。

姫宮、そのけしきをば深く見知りたまはねど、かく取り分きて人めかしなつけたまふめるに、うちとけて、うしろめたき心もやあらむ、昔物語にも、心もてやは、とあることもかかるともあめる、うちとくまじき人の心にこそあめれ、と思ひよりたまひて、せめて怨み深くは、この君をおし出でむ、劣りぎまならむにてだに、さても見そめては、あさはかにはもてなすまじき心なめるを、ましてほのかにも見そめては慰みなむ、言に出では、いかでかは、ふとさることを待ち取る人のあらむ、本意になむあらぬと、うけひくけしきのなかなるは、かたへは人の思はむことを、あいなう浅き方にやなど、つつみたまふならむ、と思し構ふるを、けしきだに知らせたまはずは罪もや得む、と、身をつみていとほしければ、よろづにうち語らひて、「昔の御おもむけも、世の中をかよく心細くて過ぐし果つとも、なかなか人笑へにかろがろしき心つかふな、など

のたまひおきしを、おはせし世の御ほだしにて、行ひの御心を乱りし罪だに
 みじかりけむを、今はとてさばかりのたまひし一言をだに違へじ、と思ひはべ
 れば、心細くなどもことに思はぬを、この人びとの、あやしく心ごはきものに
 憎むめるこそ、いとわりなけれ。げにきのみ、やうのものと過ぐしたまはむも、
 明け暮るる月日に添へても、御ことをのみこそ、あたらしく心苦しくかなしき
 ものに思ひきこゆるを、君だに世の常にもてなしたまひて、かかる身のありさ
 まもおもだたく、慰むばかり見たてまつりなさばや」と聞こえたまはば、い
 かに思すにかと心憂くて、一所をのみやは、さて世に果てたまへとは聞こえた
 まひけむ、はかばかしくもあらぬ身のうしろめたさは、数添ひたるやうにこそ
 思されためりしか、心細き御慰めには、かく朝夕に見たてまつるより、いかな
 るかたにか、となま恨めしく思ひたまひつれば、げにといとほしくて、「なほ、
 これかれ、うたてひがひがしきものに言ひ思ふべかめるにつけて、思ひ乱れは
 べるぞや」と言ひさしたまひつ。

暮れゆくに、客人は帰りたまはず。姫宮いとむつかしと思す。弁参りて、御
 消息ども聞こえ伝へて、怨みたまふをことわりなるよしをつぶつぶと聞こゆれ
 ば、いらへもしたまはず。うち嘆きて、いかにもてなすべき身にかは、一所お
 はせましかば、ともかくもさるべき人に扱はれたてまつりて、宿世といふなる
 方につけて、身を心ともせぬ世なれば、皆例のことにてこそは、人笑へなる咎
 をも隠すなれ、ある限りの人は年積もり、さかしげにおのがじしは思ひつつ、
 心をやりて似つかはしげなることを聞こえ知らすれど、こははかばかしきこと
 かは、人めかしからぬ心どもにて、ただ一方に言ふにこそは、と見たまへば、
 引き動かしつばかり聞こえあへるもいと心憂く疎ましくて、動ぜられたまはず。
 同じ心に何ごとも語らひきこえたまふ中の宮は、かかる筋には今すこし心も得
 ずおほどかにて、何とも聞き入れたまはねば、あやしくもありける身かなと、

ただ奥ぎまに向きおはすれば、「例の色の御衣ども、たてまつり替へよ」など、そそのかしきこえつつ、皆さる心すべかめるけしきを、あさましく、げに何の障り所かはあらむ、ほどもなくて、かかる御住まひのかひなき、山なしの花ぞ逃れむ方なかりける。

客人は、かく顯証にこれかれにも口入れさせず、忍びやかに、いつありけむことともなくもてなしてこそ、と思ひそめたまひけることなれば、「御心許したまはずは、いつもいつもかくて過ぐさむ」と思しのたまふを、この老い人の、おのがじし語らひて、顯証にささめき、さは言へど深からぬけに、老いひがめるにや、いとほしくぞ見ゆる。

姫宮思しわづらひて、弁が参れるにのたまふ。「年ごろも、人に似ぬ御心寄せとのみのたまひわたりしを聞きおき、今となりては、よろづに残りなく頼みきこえて、あやしきまでうちとけにたるを、思ひしに違ふさまなる御心ばへの混じりて、恨みたまふめるこそわりなけれ。世に人めきてあらまほしき身ならば、かかる御ことをも何かはもて離れても思はまし。されど、昔より思ひ離れそめたる心にて、いと苦しきを、この君の盛り過ぎたまはむも口惜し。げにかかる住まひも、ただこの御ゆかりに所狭くのみおぼゆるを、まことに昔を思ひきこえたまふ心ざしならば、同じことに思ひなしたまへかし。身を分けたる心のうちは皆ゆづりて、見たてまつらむ心地なむすべき。なほかうやうによろしげに聞こえなされよ」と恥ぢらひたるものから、あるべきさまをのたまひ続ければ、いとあはれと見たてまつる。「さのみこそは、さきざきも御けしきを見たまふれば、いとよく聞こえさすれど、さはえ思ひ改むまじ、兵部卿宮の御恨み深さまさるめれば、またそなたさまに、いとよく後見きこえむ、となむ聞こえたまふ。それも思ふやうなる御ことどもなり。二所ながらおはしまして、ことさらにいみじき御心尽くしてかしづききこえさせたまはむに、えしもかく世

にありがたき御ことども、さし集ひたまはざらまし。かしこけれど、かくいとたつきなげなる御ありさまを見たてまつるに、いかになり果てさせたまはむと、うしろめたく悲しくのみ見たてまつるを、後の御心は知りがたけれど、うつくしくめでたき御宿世どもにこそおはしましけれとなむ、かつがつ思ひきこゆる。故宮の御遺言違へじと思し召すかたはことわりなれど、それは、さるべき人のおはせず、品ほどならぬことやおはしまさむと思して、戒めきこえさせたまふめりしにこそ。この殿の、さやうなる心ばへものしたまはましかば、一所をうしろやすく見おきたてまつりて、いかにうれしからましと、折々のたまはせしものを。ほどほどにつけて、思ふ人に後れたまひぬる人は、高きも下れるも、心の外に、あるまじきさまにさすらふたぐひだにこそ多くはべるめれ。それ皆例のことなめれば、もどき言ふ人もはべらず。まして、かくばかりことさらにも作り出でまほしげなる人の御ありさまに、心ざし深くありがたげに聞こえたまふを、あながちにもて離れさせたまうて、思しおきつるやうに行ひの本意を遂げたまふとも、さりとして雲霞をやは」など、すべてこと多く申し続ければ、いと憎く心づきなしと思して、ひれ臥したまへり。

中の宮も、あいなくいとほしき御けしきかなと見たてまつりたまひて、もろともに例のやうに大殿籠もりぬ。うしろめたく、いかにもてなさむとおぼえたまへど、ことさらめきてさし籠もり、隠ろへたまふべきものの隈だになき御住まひなれば、なよやかにをかしき御衣、上にひき着せたてまつりたまひて、ただけはひ暑きほどなれば、すこしまろび退きて臥したまへり。

弁は、のたまひつるさまを客人に聞こゆ。いかなれば、いとかくしも世を思ひ離れたまふらむ、聖だちたまへりしあたりにて、常なきものに思ひ知りたまへるにや、と思すに、いとどわが心通ひておぼゆれば、さかしだち憎くもおぼえず。「さらば、物越などにも、今はあるまじきことに思しなるにこそはあな

れ。今宵ばかり、大殿籠もるらむあたりにも、忍びてたばかれ」とのたまへば、心して人疾く静めなど、心知れるどちは思ひ構ふ。

宵すこし過ぐるほどに、風の音荒らかにうち吹くに、はかなきさまなる蔀などはひしひしと紛るる音に、人の忍びたまへる振る舞ひはえ聞きつけたまはじと思ひて、やをら導き入る。同じ所に大殿籠もれるをうしろめたしと思へど、常のことなれば、ほかほかにもいかが聞こえむ、御けはひをもたどたどしからず見たてまつり知りたまへらむと思ひけるに、うちもまどろみたまはねば、ふと聞きつけたまてやをら起き出でたまひぬ。いと疾くはひ隠れたまひぬ。何心もなく寝入りたまへるを、いといとほしく、いかにするわぎぞと胸つぶれて、もろともに隠れなばやと思へど、さもえ立ち返らで、わななくわななく見たまへば、火のほのかなるに、桂姿にて、いと馴れ顔に几帳の帷を引き上げて入りぬるを、いみじくいとほしく、いかにおぼえたまはむと思ひながら、あやしき壁の面に屏風を立てたるうしろのむつかしげなるにゐたまひぬ。あらましごとにてだにつらしと思ひたまへりつるを、まいて、いかにめづらかに思し疎まむと、いと心苦しきにも、すべてはかばかしき後見なくて、落ちとまる身どもの悲しきを思ひ続けたまふに、今はとて山に登りたまひし夕べの御さまなど、ただ今の心地して、いみじく恋しく悲しくおぼえたまふ。

中納言は、独り臥したまへるを、心しけるにやとうれしくて、心ときめきたまふに、やうやうあらざりけりと見る。今すこしうつくしくらうたげなるけしきはまさりてやとおぼゆ。あさましげにあきれ惑ひたまへるを、げに心も知らざりけると見ゆれば、いといとほしくもあり、またおし返して、隠れたまへらむつらさの、まめやかに心憂くねたければ、これをもよそのものとはえ思ひ放つまじけれど、なほ本意の違はむ口惜しくて、うちつけに浅かりけりともおぼえたてまつらじ、この一ふしはなほ過ぐして、つひに宿世逃れずは、こなた

ざまにならむも、何かは異人のやうにやは、と思ひ覺まして、例の、をかしくなつかしきさまに語らひて、明かしたまひつ。

若い人どもは、しそしつと思ひて、「中の宮、いづこにかおはしますらむ。あやしきわざかな」とたどりあへり。「さりとも、あるやうあらむ」など言ふ。「おほかた、例の見たてまつるに皺のぶる心地して、めでたくあはれに見まほしき御かたちありさまを、などていともて離れては聞こえたまふらむ。何か、これは世の人の言ふめる恐ろしき神ぞ憑きたてまつりたらむ」と、齒はうちすきて愛敬なげに言ひなす女あり。また、「あな、まがまがし。なぞのものが憑かせたまはむ。ただ、人に遠くて生ひ出でさせたまふめれば、かかることにも、つきづきしげにもてなしきこえたまふ人もなくおはしますに、はしたなく思さるるにこそ。今、おのづから見たてまつり馴れたまひなば、思ひきこえたまひてむ」など語らひて、「とくうちとけて、思ふやうにておはしますなむ」と言ふ言ふ寝入りて、いびきなどかたはらいたくするもあり。

逢ふ人からにもあらぬ秋の夜なれど、ほどもなく明けぬる心地して、いづれと分くべくもあらずなまめかしき御けはひを、人やりならず飽かぬ心地して、「あひ思せよ。いと心憂くつらき人の御さま、見習ひたまふなよ」など、後瀬を契りて出でたまふ。我ながら、あやしく夢のやうにおぼゆれど、なほつれなき人の御けしき、今一たび見果てむの心に思ひのどめつつ、例の、出でて臥したまへり。

弁参りて、「いとあやしく、中の宮はいづくにかおはしますらむ」と言ふを、いと恥づかしく思ひかけぬ御心地に、いかなりけむことにかと思ひ臥したまへり。昨日のたまひしことを思し出でて、姫宮をつらしと思ひきこえたまふ。明けにける光につきてぞ、壁の中のきりぎりす這ひ出でたまへる。思すらむことのいとほしければ、かたみにも言はれたまはず。ゆかしげなく、心憂

くもあるかな、今より後も心ゆるびすべくもあらぬ世にこそ、と思ひ乱れたまへり。

弁はあなたに参りて、あさましかりける御心づよさを聞きあらはして、いとあまり深く人憎かりけることと、いとほしく思ひほれるたり。「来し方のつらさはなほ残りある心地して、よろづに思ひ慰めつるを、今宵なむまことに恥づかしく、身も投げつべき心地する。捨てがたく落としおきたてまつりたまへりけむ心苦しさを思ひきこゆる方こそ、またひたぶるに身をもえ思ひ捨つまじけれ。かけかけしき筋は、いづ方にも思ひきこえじ。憂きもつらきも、かたがたに忘られたまふまじくなむ。宮などの恥づかしげなく聞こえたまふめるを、同じくは心高くと思ふ方ぞ異にものしたまふらむと心得果てつれば、いとことわりに恥づかしくて、また、参りて人びとに見えたてまつらむこともねたくなむ。よし、かくをこがましき身の上、また人にだに漏らしたまふな」と怨じおきて、例よりも急ぎ出でたまひぬ。「誰が御ためもいとほしく」とささめきあへり。

姫君も、いかにしつることぞ、もしおろかなる心ものしたまはばと、胸つぶれて心苦しければ、すべてうちあはぬ人びとのさかしら、憎しと思す。さまざま思ひたまふに、御文あり。例よりはうれしとおぼえたまふも、かつはあやし。秋のけしきも知らず顔に、青き枝の、片枝いと濃くもみぢたるを、

おなじ枝を分きて染めける山姫にいづれか深き色と問はばやさばかり怨みつるけしきも、言少なにこそそぎて、おし包みたまへるを、そこはかたなくもてなしてやみなむとなめりと見たまふも、心騒ぎて見る。かしこましく、「御返り」と言へば、「聞こえたまへ」と譲らむもうたておぼえて、さすがに書きにくく思ひ乱れたまふ。

山姫の染むる心はわかねども移ろふ方や深きなるらむ

ことなしびに書きたまへるが、をかしく見えければ、なほえ怨じ果つまじくお

ぼゆ。

身を分けてなど譲りたまふけしきはたびたび見えしかど、うけひかぬにわびて構へたまへるなめり、そのかひなく、かくつれなからむいとほしく、情けなきものに思ひおかれて、いよいよはじめの思ひかなひがたくやあらむ、とかく言ひ伝へなどすめる老い人の思はむところも軽々しく、とにかくに心を染めけむだに悔しく、かばかりの世の中を思ひ捨てむの心に、みづからもかなはざりけりと、人わろく思ひ知らるるを、ましておしなべたる好き者のまねに、同じあたり返すがへす漕ぎめぐらむ、いと人笑へなる棚無し小舟めきたるべし、など、夜もすがら思ひ明かしたまひて、まだ有明の空もをかしきほどに、兵部卿宮の御方に参りたまふ。

三条宮焼けにし後は、六条院にぞ移ろひたまへれば、近くては常に参りたまふ。宮も、思すやうなる御心地したまひけり。紛るることなくあらまほしき御住まひに、御前の前裁他には似ず、同じ花の姿も、木草のなびきぎまもことに見なされて、遣水に澄める月の影さへ絵にかきたるやうなるに、思ひつるもしるく起きおはしましけり。風につきて吹き来る匂ひのいとしるくうち薫るに、ふとそれとうち驚かれて、御直衣たてまつり、乱れぬさまに引きつくろひて出でたまふ。階を昇りも果てず、ついでたまへれば、「なほ、上に」などものたまはで、高欄によりみたまひて、世の中の御物語聞こえ交はしたまふ。かのわたりのことをも、ものついでには思し出でて、よろづに恨みたまふもわりなしや。みづからの心にだにかなひがたきと思ふ思ふ、さもおはせなむと思ひなるやうのあれば、例よりはまめやかに、あるべきさまなど申したまふ。

明けぐれのほど、あやにくに霧りわたりて、空のけはひ冷やかなるに、月は霧に隔てられて、木の下も暗くなまめきたり。山里のあはれなるありさま思ひ出でたまふにや、「このころのほどは、かならず。後らかしたまふな」と語ら

ひたまふを、なほわづらはしがれば、

女郎花咲ける大野をふせぎつつ心せばくやしめを結ふらむ
と戯れたまふ。

「霧深き朝の原の女郎花心を寄せて見る人ぞ見る

なべてやは」など、ねたましきこゆれば、「あなかしかまし」と、果て果ては
腹立ちたまひぬ。

年ごろかくのたまへど、人の御ありさまをうしろめたく思ひしに、かたちな
ども見おとしたまふまじく推し量らるる、心ばせの近劣りするやうもや、など
ぞあやふく思ひわたりしを、何ごとも口惜しくはものしたまふまじかめりと思
へば、かのいとほしく、うちうちに思ひたばかりたまふありさまも違ふやうな
らむも情けなきやうなるを、さりとて、さはたえ思ひ改むまじくおぼゆれば、
譲りきこえて、いづ方の恨みをも負はじなど、下に思ひ構ふる心をも知りたま
はで、心せばくとりなしたまふもをかしけれど、「例の軽らかなる御心ざまに、
もの思はせむこそ心苦しかるべけれ」など、親方になりて聞こえたまふ。「よ
し、見たまへ。かばかり心にとまることなむまだなかりつる」など、いとまめ
やかにのたまへば、「かの心どもには、さもやとうちなびきぬべきけしきは見
えずなむはべる。仕うまつりにくき宮仕へにこそはべるや」とて、おはします
べきやうなどこまかに聞こえ知らせたまふ。

二十八日の彼岸の果てにて、吉き日なりければ、人知れず心づかひして、い
みじく忍びて率てたてまつる。後の宮など聞こし召し出でては、かかる御あり
きいみじく制しきこえたまへばいとわづらはしきを、切に思したることなれば、
さりげなくともて扱ふもわりなくなむ。舟渡りなども所せければ、ことごとし
き御宿りなども借りたまはず。そのわたりいと近き御庄の人の家に、いと忍び
て宮をば下ろしたてまつりたまひて、おはしぬ。見とがめたてまつるべき人も

なけれど、宿直人はわづかに出でてありくにも、けしき知らせじとなるべし。例の、中納言殿おはします、とて経営しあへり。君たち、なまわづらはしく聞きたまへど、移ろふ方異に匂はしおきてしかば、と姫宮思す。中の宮は、思ふ方異なめりしかば、さりともと思ひながら、心憂かりしのちは、ありしやうに姉宮をも思ひきこえたまはず、心おかれてものしたまふ。何やかやと御消息のみ聞こえ通ひて、いかなるべきことにかと人びとも心苦しがる。

宮をば、御馬にて、暗き紛れにおはしまさせたまひて、弁召し出でて、「こもとにただ一言聞こえさすべきことなむはべるを、思し放つさま見たてまつりてしに、いと恥づかしけれど、ひたや籠もりにてはえやむまじきを、今しばし更かしてを、ありしさまには導きたまひてむや」など、うらもなく語らひたまへば、いづ方にも同じことにこそは、など思ひて参りぬ。

さなむと聞こゆれば、さればよ、思ひ移りにけり、とうれしくて心落ちゐて、かの入りたまふべき道にはあらぬ廂の障子をいとよくさして、対面したまへり。「一言聞こえさすべきが、また人聞くばかりののしらむはあやなきを、いささか開けさせたまへ。いといぶせし」と聞こえさせたまへど、「いとよく聞こえぬべし」とて開けたまはず。今はと移ろひなむを、ただならじとて言ふべきにや、何かは、例ならぬ対面にもあらず、人憎くいらへで、夜も更かさじ、など思ひて、かばかりも出でたまへるに、障子の中より御袖を捉へて、引き寄せていみじく怨むれば、いとうたてもあるわざかな、何に聞き入れつらむ、と悔しくむつかしけれど、こしらへて出だしてむと思して、こと人と思ひわきたまふまじきさまにかすめつつ語らひたまへる心ばへなど、いとあはれなり。

宮は、教へきこえつるままに、一夜の戸口に寄りて、扇を鳴らしたまへば、弁も参りて導ききこゆ。さきさきも馴れにける道のしるべ、をかしと思しつづ入りたまひぬるをも姫宮は知りたまはで、こしらへ入れてむと思したり。をか

しくもいとほしくもおぼえて、うちうちにも知らざりける、恨みおかれむも、罪さりどころなき心地すべければ、「宮の慕ひたまひつれば、え聞こえいなびで、ここにおはしつる、音もせでこそ紛れたまひぬれ。このさかしだつめる人や、語らはれたてまつりぬらむ。中空に人笑へにもなりはべりぬべきかな」とのたまふに、今すこし思ひよらぬことの、目もあやに心づきなくなりて、「かく、よろづにめづらかなりける御心のほども知らで、言ふかひなき心幼さも見えたてまつりにけるおこたりに、思しあなづるにこそは」と、言はむ方なく思ひたまへり。

「今は言ふかひなし。ことわりは、返すがへす聞こえさせてもあまりあらば、抓みもひねらせたまへ。やむごとなき方に思しよるめるを、宿世などいふめるもの、さらに心にはぬものにはべるめれば、かの御心ぎしは異にはべりけるを、いとほしく思ひたまふるに、かなはぬ身こそ置き所なく心憂くはべりけれ。なほ、いかがはせむに思し弱りね。この御障子の固めばかりいと強きも、まことにもの清く推し量りきこゆる人もはべらじ。しるべと誘ひたまへる人の御心にも、まさにかく胸ふたがりて明かすらむとは思しなむや」とて、障子をも引き破りつべきけしきなれば、言はむ方なく心づきなけれど、こしらへむと思ひしづめて、「こののたまふ筋、宿世といふらむ方は、目にも見えぬことにて、いかにもいかにも思ひたどられず、知らぬ涙のみ霧りふたがる心地してなむ。こはいかにもてなしたまふぞと、夢のやうにあさましきに、後の世の例に言ひ出づる人もあらば、昔物語などにをこめきて作り出でたるものたとひにこそはなりぬべかめれ。かく思し構ふる心のほどをも、いかなりけるとかは推し量りたまはむ。なほ、いとかくおどろおどろしく心憂く、な取り集め惑はしたまひそ。心より外にながらへば、すこし思ひのどまりて聞こえむ。心地もさらにかきくらすやうにて、いと悩ましきを、ここにうち休まむ、許したまへ」

といみじくわびたまへば、さすがにことわりをいとよくのたまふが心恥づかし
 くらうたくおぼえて、「あが君、御心に従ふことのたぐひなければこそ、かく
 までかたくなしくなりはべれ。言ひ知らず憎く疎ましきものに思しなすめれば、
 聞こえむ方なし。いとど世に跡とむべくなむおぼえぬ」とて、「さらば、隔て
 ながらも聞こえさせむ。ひたぶるになうち捨てさせたまひそ」とて、許したて
 まつりたまへれば、這ひ入りて、さすがに入りも果てたまはぬを、いとあはれ
 と思ひて、「かばかりの御けはひを慰めにて明かしはべらむ。ゆめゆめ」と聞
 こえて、うちもまどろまず、いとどしき水の音に目も覚めて、夜半のあらしに、
 山鳥の心地して、明かしかねたまふ。

例の、明け行くけはひに、鐘の声など聞こゆ。いぎたなくて出でたまふべき
 けしきもなきよ、と心やましく、声づくりたまふも、げにあやしきわざなり。

「しるべせし我やかへりて惑ふべき心もゆかぬ明けぐれの道

かかる例、世にありけむや」とのたまへば、

かたがたにくらす心を思ひやれ人やりならぬ道に惑はば

とほのかにのたまふを、いと飽かぬ心地すれば、「いかに。こよなく隔たりて
 はべるめれば、いとわりなうこそ」など、よろづに怨みつつ、ほのぼのと明け
 ゆくほどに、よべの方より出でたまふなり。いとやはらかに振る舞ひなしたま
 へる匂ひなど、艶なる御心げさうには、言ひ知らずしめたまへり。ねび人ども
 は、いとあやししく心得がたく思ひ惑はれけれど、さりとも悪しざまなる御心あ
 らむやは、と慰めたり。

暗きほどにと、急ぎ帰りたまふ。道のほども、帰るさはいとはるけく思され
 て、心安くもえ行き通はざらむことのかねていと苦しきを、夜をや隔てむ、と
 思ひ悩みたまふなめり。まだ人騒がしからぬ朝のほどにおはし着きぬ。廊に御
 車寄せて降りたまふ。異やうなる女車のさまして隠ろへ入りたまふに、皆笑ひ

たまひて、「おろかならぬ宮仕への御心ざしとなむ思ひたまふる」と申したまふ。しるべのをこがましきも、いと妬くて愁へもきこえたまはず。

宮は、いつしかと御文たてまつりたまふ。山里には、誰も誰もうつつの心地したまはず思ひ乱れたまへり。さまざまに思し構へけるを、色にも出だしたまはざりけるよと、疎ましくつらく姉宮をば思ひきこえたまひて、目も見合はせたてまつりたまはず。知らざりしさまをも、さはさとはえあきらめたまはで、ことわりに心苦しく思ひきこえたまふ。人びとも、いかにはべりしことになかなど、御けしき見たてまつれど、思しほれたるやうにて、頼もし人のおはすれば、あやしきわざかなと思ひあへり。御文もひき解きて見せたてまつりたまへど、さらに起き上がりたまはねば、「いと久しくなりぬ」と御使わびけり。

世の常に思ひやすらむ露深き道の笹原分けて来つるも

書き馴れたまへる墨つきなどのことさらに艶なるも、おほかたにつけて見たまひしはをかしくおぼえしを、うしろめたくもの思はしくて、我さかし人にて聞こえむもいとつつましければ、まめやかにあるべきやうをいみじくせめて書かせたてまつりたまふ。紫苑色の細長一襲に、三重襲の袴具して賜ふ。御使苦しげに思ひたれば、包ませて供なる人になむ贈らせたまふ。ことことしき御使にもあらず、例たてまつれたまふ上童なり。ことさらに人にけしき漏らさじと思しければ、よべのさかしがりし老い人のしわざなりけりと、ものしくなむ聞こしめしける。

その夜も、かのしるべ誘ひたまへど、「冷泉院にかならずさぶらふべきことはべれば」とて、とまりたまひぬ。例の、ことに触れてすさまじげに世をもてなすと、憎く思す。

いかがはせむ、本意ならざりしこととて、おろかにやは、と思ひ弱りたまひて、御しつらひなどうちあはぬ住みかなれど、さる方にをかしくしなして待ち

きこえたまひけり。はるかなる御中道を急ぎおはしましたりけるも、うれしきわぎなるぞ、かつはあやしき。

正身は、我にもあらぬさまにてつくろはれたてまつりたまふままに、濃き御衣のいたく濡るれば、さかし人もうち泣きたまひつつ、「世の中に久しくもおぼえはべらねば、明け暮れのながめにも、ただ御ことをのみなむ心苦しき思ひきこゆるに、この人びとも、よかるべきさまのことと聞きにくきまで言ひ知らずめれば、年経たる心どもには、さりとも世のことわりをもちりたらむ、はかばかしくもあらぬ心一つを立てて、かくてのみやは見たてまつらむと、思ひなるやうもありしかど、ただ今、かく思ひもあへず、恥づかしきことどもに乱れ思ふべくは、さらに思ひかけはべらざりに、これやげに、人の言ふめる逃れがたき御契りなりけむ。いとこそ苦しけれ。すこし思し慰みなむに、知らざりしさまをも聞こえむ。憎しとな思し入りそ。罪もぞ得たまふ」と御髪をなでつくろひつつ聞こえたまへば、いらへもしたまはねど、さすがに、かく思したまふが、げにうしろめたくあしかれとも思しおきてじを、人笑へに見苦しきこと添ひて、見扱はれたてまつらむがいみじさを、よろづに思ひゐたまへり。

さる心もなく、あきれたまへりしけはひだに、なべてならずをかしかりしを、まいてすこし世の常になよびたまへるは、御心ざしもまさるに、たはやすく通ひたまはざらむ山道のはるけさも胸痛きまで思して、心深げに語らひ頼めたまへど、あはれともいかにとも思ひ分きたまはず。言ひ知らずかしづくものの姫君も、すこし世の常の人げ近く、親、せうとなどいひつつ、人のたたずまひをも見馴れたまへるは、ものの恥づかしさも恐ろしさもなのめにやあらむ、家にあがめきこゆる人こそなけれ、かく山深き御あたりなれば、人に遠くもの深くてならひたまへる心地に、思ひかけぬありさまのつつましく恥づかしく、何ごとも世の人に似ずあやしく田舎びたらむかし、はかなき御いらへにても言ひ出

でむ方なく、つつみたまへり。さるは、この君しもぞ、らうらうじくかどある方の匂ひはまさりたまへる。

「三日にあたる夜、餅なむ参る」と人びとの聞こゆれば、ことさらにさるべき祝ひのことにこそはと思して、御前にてせさせたまふもたどたどしく、かつは大人になりておきてたまふも、人の見るらむこと憚られて、面うち赤めておはするさま、いとをかしげなり。このかみ心にや、のどかに気高きものから、人のためあはれに情け情けしくぞおはしける。

中納言殿より、

よべ参らむと思たまへしかど、宮仕への労もしるしなげなる世に、思たまへ恨みてなむ。今宵は雑役もやと思うたまふれど、宿直所のはしたなげにはべりし乱り心地いとど安からで、やすらはれはべり。

と陸奥紙におひつぎ書きたまひて、まうけのものどもこまやかに、縫ひなどもせざりける、いろいろおし巻きなどしつつ、御衣櫃あまた懸籠入れて、老い人のもとに、「人びとの料に」とて賜へり。宮の御方にさぶらひけるに従ひて、いと多くもえ取り集めたまはざりけるにやあらむ、ただなる絹、綾など下には入れ隠しつつ、御料とおぼしき二くだりいときよらにしたるを、単衣の御衣の袖に、こたいのことなれど、

小夜衣着て馴れきとは言はずともかことばかりはかけずしもあらじと、おどしきこえたまへり。

こなたかなたゆかしげなき御ことを、恥づかしくいとど見たまひて、御返りにもいかがは聞こえむと思しわづらふほど、御使、かたへは逃げ隠れにけり。あやしき下人をひかへてぞ御返り賜ふ。

隔てなき心ばかりは通ふとも馴れし袖とはかけじとぞ思ふ

心あわたたしく思ひ乱れたまへる名残に、いとどなほなほしきを、思しけるま

まと待ち見たまふ人は、ただあはれにぞ思ひなされたまふ。

宮はその夜内に参りたまひて、えまかでたまふまじげなるを、人知れず御心も空にて思し嘆きたるに、中宮、「なほかく独りおはしまして、世の中に好いたまへる御名のやうやう聞こゆる、なほいと悪しきことなり。何事ももの好ましく立てたる御心なつかひたまひそ。上もうしろめたげに思しのたまふ」と、里住みがちにおはしますを諫めきこえたまへば、いと苦しと思して、御宿直所に出でたまひて、御文書きてたてまつれたまへる名残も、いたくうち眺めておはしますに、中納言の君参りたまへり。

そなたの心寄せと思せば、例よりもうれしくて、いかがすべき、いとかく暗くなりぬめるを、心も乱れてなむ、と嘆かしげに思したり。よく御けしきを見たてまつらむと思して、「日ごろ経て、かく参りたまへるを、今宵さぶらはせたまはで急ぎまかでたまひなむ、いとどよろしからぬことにや思しきこえさせたまはむ。台盤所の方にて承りつれば、人知れずわづらはしき宮仕へのしるしに、あいなき勘当にやはべらむと、顔の色違ひはべりつる」と申したまへば、「いと聞きにくくぞ思しのたまふや。多くは人のとりなすことなるべし。世に咎めあるばかりの心は、何事にかはつかふらむ。所狭き身のほどこそ、なかなかなるわぎなりけれ」とて、まことに厭はしくさへ思したり。いとほしく見たてまつりたまひて、「同じ御騒がれにこそはおはすなれ。今宵の罪には代はりきこえて、身をもいたづらになしはべりなむかし。木幡の山に馬はいかがはべるべき。いとどもの聞こえや、障り所なからむ」と聞こえたまへば、ただ暮れに暮れて更けにける夜なれば、思しわびて、御馬にて出でたまひぬ。「御供にはなかなか仕うまつらじ。御後見を」とて、この君は内にさぶらひたまふ。

中宮の御方に参りたまひつれば、「宮は出でたまひぬなり。あさましくいとほしき御さまかな。いかに人見たてまつるらむ。上聞こし召しては、諫めきこ

えぬが言ふかひなき、と思しのたまふこそわりなけれ」とのたまふ。あまた宮たちのかくおとなび整ひたまへど、大宮は、いよいよ若くをかしきけはひなむまさりたまひける。

女一の宮も、かくぞおはしますべかめる、いかならむ折に、かばかりにてももの近く御声をだに聞きたてまつらむと、あはれとおぼゆ。好いたる人の、おぼゆまじき心つかふらむも、かうやうなる御仲らひの、さすがに氣遠からず入り立ちて心になはぬ折のことならむかし、わが心のやうに、ひがひがしき心のたぐひやは、また世にあんべかめる、それになほ、動きそめぬるあたりは、えこそ思ひ絶えね、など思ひるたまへる。さぶらふ限りの女房のかたち心ざま、いづれとなくわろびたるなく、めやすくとりどりにをかしきなかに、あてにすぐれて目にとまるあれど、さらにさらに乱れそめじの心にて、いときすくにもてなしたまへり。ことさらに見えしらがふ人もあり。おほかた恥づかしげにもてしづめたまへるあたりなれば、上べこそ心ばかりもてしづめたれ、心々なる世の中なりければ、色めかしげにすすみたる下の心漏りて見ゆるもあるを、さまさまにをかしくもあはれにもあるかなと、立ちてもゐても、ただ常なきありさまを思ひありきたまふ。

かしこには、中納言殿のこととしげに言ひなしたまへりつるを、夜更くるまでおはしまさで、御文のあるを、さればよと胸つぶれておはするに、夜中近くなりて、荒ましき風のきほひに、いともなまめかしくきよらにて、匂ひおはしたるも、いかがおろかにおぼえたまはむ。正身も、いささかうちなびきて思ひ知りたまふことあるべし。いみじくをかしげに盛りと見えて、引きつくろひたまへるさまは、ましてたぐひあらじはやおぼゆ。さばかりよき人を多く見たまふ御目にだに、けしうはあらずと、かたちよりはじめて多く近まさりしたりと思さるれば、山里の若い人どもは、まして口つき憎げにうち笑みつつ、

「かくあたらしき御ありさまを、なのめなる際の人の見たてまつりたまはましかば、いかに口惜しからまし。思ふやうなる御宿世」と聞こえつつ、姫宮の御心を、あやしくひがひがしくもてなしたまふを、もどき口ひそみきこゆ。

盛り過ぎたるさまどもに、あぎやかなる花の色々、似つかはしからぬをさし縫ひつつ、ありつかずとりつくろひたる姿どもの、罪許されたるもなきを見わたされたまひて、姫宮、我もやうやう盛り過ぎぬる身ぞかし、鏡を見れば痩せ痩せになりもてゆく、おのがじしは、この人どもも、我あしとやは思へる、うしろでは知らず顔に、額髪をひきかけつつ、色どりたる顔づくりをよくしてうち振る舞ふめり、わが身にては、まだいとあれがほどにはあらず、目も鼻も直しとおぼゆるは、心のなしにやあらむ、とうしろめたくて、見出だして臥したまへり。恥づかしげならむ人に見えむことは、いよいよかたはらいたく、今年二年あらば衰へまさりなむ、はかなげなる身のありさまを、と御手つきの細やかにかく弱くあはれなるをさし出でて、世の中を思ひ続けたまふ。

宮は、ありがたかりつる御暇のほどを思しめぐらすに、なほ心やすかるまじきことにこそはと、胸ふたがりておぼえたまひけり。大宮の聞こえたまひしさまなど語りきこえたまひて、「思ひながらとだえあらむを、いかなるにかと思すな。夢にてもおろかならむに、かくまでも参り来まじきを、心のほどやいかかと疑ひて、思ひ乱れたまはむが心苦しさに、身を捨ててなむ。常にかくはえ惑ひありかじ。さるべきさまにて、近く渡したてまつらむ」といと深く聞こえたまへど、絶え間あるべく思さるらむは、音に聞きし御心のほどしるべきにや、と心おかれて、わが御ありさまから、さまざまもの嘆かしくてなむありける。明け行くほどの空に、妻戸押し開けたまひて、もろともに誘ひ出でて見たまへば、霧りわたれるさま、所からのあはれ多く添ひて、例の、柴積む舟のかすかに行き交ふ跡の白波、目馴れずもある住まひのさまかなと、色なる御心にはを

かしく思しなざる。山の端の光やうやう見ゆるに、女君の御かたちのまほにうつくしげにて、限りなくいつき据ゑたらむ姫宮もかばかりこそはおはすべかれ、思ひなしの、わが方ざまのいといつくしきぞかし、こまやかなる匂ひなど、うちとけて見まほしく、なかなかなる心地す。水の音なひなつかしからず、宇治橋のいとも古りて見えわたさるるなど、霧晴れゆけば、いとど荒ましき岸のわたりを、「かかる所にいかで年を経たまふらむ」など、うち涙ぐみたまへるを、いと恥づかしと聞きたまふ。男の御さまの、限りなくなまめかしくきよらにて、この世のみならず契り頼めきこえたまへば、思ひ寄らざりしこととは思ひながら、なかなかかの目馴れたりし中納言の恥づかしさよりは、とおぼえたまふ。かれは思ふ方異にて、いといたく澄みたるけしきの、見えにくく恥づかしげなりにしに、よそに思ひきこえしは、ましてこよなくはるかに、一くだり書き出でたまふ御返り事だにつつましくおぼえしを、久しく途絶えたまはむは心細からむと思ひならるるも、我ながらうたて、と思ひ知りたまふ。

人びといたく声づくり催しきこゆれば、京におはしまさむほど、はしたなからぬほどにと、いと心あわたたしげにて、心より外ならむ夜がれを返す返すのたまふ。

中絶えむものならなくに橋姫の片敷く袖や夜半に濡らさむ出でがてに、立ち返りつつやすらひたまふ。

絶えせじのわが頼みにや宇治橋の遙けきなかを待ちわたるべき言には出でねど、もの嘆かしき御けはひは限りなく思されけり。若き人の御心にしみぬべく、たぐひすくなげなる朝けの御姿を見送りて、名残とまれる御移り香なども、人知れずものあはれなるは、されたる御心かな。今朝ぞものあやめ見ゆるほどにて、人びと覗きて見たてまつる。「中納言殿は、なつかしく恥づかしげなるさまぞ添ひたまへりける。思ひなしの今ひと際にや、この御さ

まはいとことに」などめできこゆ。

道すがら、心苦しかりつる御けしきを思し出でつつ、立ちも返りなまほしく、さまあしきまで思せど、世の聞こえを忍びて帰らせたまふほどに、えたはやすくも紛れさせたまはず。御文は明くる日ごとに、あまた返りづつたてまつらせたまふ。おろかにはあらぬにやと思ひながら、おぼつかなき日数の積もるを、いと心尽くしに見じと思ひしものを、身にまさりて心苦しくもあるかな、と姫宮は思し嘆かるれど、いとどこの君の思ひ沈みたまはむにより、つれなくもてなして、みづからだに、なほかかること思ひ加へじと、いよいよ深く思す。

中納言の君も、待ち遠にぞ思すらむかしと思ひやりて、我があやまちにいとほしくて、宮を聞こえおどろかしつつ、絶えず御けしきを見たまふに、いといたく思ほし入れたるさまなれば、さりとともとうしろやすかりけり。

九月十日のほどなれば、野山のけしきも思ひやらるるに、時雨めきてかきくらし、空のむら雲恐ろしげなる夕暮、宮いとど静心なく眺めたまひて、いかにせむと御心一つを出で立ちかねたまふ。折推し量りて参りたまへり。「ふるの山里いかならむ」と、おどろかしきこえたまふ。いとうれしと思して、もろとも誘ひたまへば、例の一つ御車にておはす。

分け入りたまふままにぞ、まいて眺めたまふらむ心のうち、いとど推し量られたまふ。道のほども、ただこのことの心苦しきを語らひきこえたまふ。たそかれ時のいみじく心細げなるに、雨は冷やかにうちそそきて、秋果つるけしきのすごきに、うちしめり濡れたまへる匂ひどもは、世のものに似ず艶にて、うち連れたまへるを、山賤どもはいかが心惑ひもせざらむ。

女ばら、日ごろうちつぶやきつる名残なく笑みさかえつつ、御座ひきつくるひなどす。京に、さるべき所々に行き散りたる娘ども、姪だつ人二三人尋ね寄せて参らせたり。年ごろあなづりきこえける心浅き人びと、めづらかなる客人

と思ひ驚きたり。姫宮も、折うれしく思ひきこえたまふに、さかしら人の添ひたまへるぞ、恥づかしくもありぬべく、なまわづらはしく思へど、心ばへののどかにももの深くものしたまふを、げに人はかくはおはせざりけりと見あはせたまふに、ありがたしと思ひ知らる。

宮を、所につけてはいとことにかしづき入れたてまつりて、この君は、あるじ方に心やすくもてなしたまふものから、まだ客人居のかりそめなる方に出だし放ちたまへれば、いとからしと思ひたまへり。怨みたまふもさすがにいとほしくて、物越に對面したまふ。「戯れにくくもあるかな。かくてのみや」と、いみじく怨みきこえたまふ。やうやうことわり知りたまひにたれど、人の御上にてもものをいみじく思ひ沈みたまひて、いとどかかる方を憂きものに思ひ果てて、なほひたぶるに、いかでかくうちとけじ、あはれと思ふ人の御心も、かならずつらしと思ひぬべきわざにこそあめれ、我も人も見おとさず、心違はやみにしがな、と思ふ心づかひ深くしたまへり。宮の御ありさまなども問ひきこえたまへば、かすめつつ、さればよとおぼしくのたまへば、いとほしくて、思したる御さま、けしきを見ありくやうなど語りきこえたまふ。

例よりは心うつくしく語らひて、「なほかくもの思ひ加ふるほど、心地も静まりて聞こえむ」とのたまふ。人憎く、氣遠くはもて離れぬものから、障子の固めもいと強し。しひて破らむをば、つらくいみじからむと思したれば、思さるるやうこそはあらめ、軽々しく異さまになびきたまふこと、はた世にあらじ、と心のどかなる人は、さいへど、いとよく思ひ静めたまふ。「ただいとおぼつかなく、もの隔てたるなむ、胸あかぬ心地するを、ありしやうにて聞こえむ」とせめたまへど、「常よりもわが面影に恥づるころなれば、疎ましと見たまひてむもさすがに苦しきは、いかなるにか」と、ほのかにうち笑ひたまへるけはひなど、あやしくなつかしくおぼゆ。「かかる御心にためめられたてまつりて、

つひにいかになるべき身にか」と嘆きがちに、例の、遠山鳥にて明けぬ。宮は、まだ旅寝なるらむとも思きで、「中納言の、あるじ方に心のどかなるけしきこそうらやましかれ」とのたまへば、女君、あやしと聞きたまふ。

わりなくしておはしまして、ほどなく歸りたまふが飽かず苦しきに、宮ものをいみじく思したり。御心のうちを知りたまはねば、女方には、またいかならむ、人笑へにやと思ひ嘆きたまへば、げに心尽くしに苦しげなるわざかな、と見ゆ。京にも、隠ろへて渡りたまふべき所もさすがになし。六条院には、左の大殿片つ方には住みたまひて、さばかりいかでと思したる六の君の御ことを思しよらぬに、なま恨めしと思ひきこえたまふべかめり。好き好きしき御さまと許しなくそしりきこえたまひて、内わたりにも愁へきこえたまふべかめれば、いよいよおぼえなくて出だし据ゑたまはむも、憚ることいと多かり。なべてに思す人の際は、宮仕への筋にて、なかなか心やすげなり。さやうの並々には思されず、もし世の中移りて、帝後の思しおきつるままにもおはしまさば、人より高きさまにこそなさめなど、ただ今は、いとほなやかに心にかかりたまへるままに、もてなさむ方なく苦しかりけり。

中納言は、三条の宮造り果てて、さるべきさまにて渡したてまつらむと思す。げにただ人は心やすかりけり。かくいと心苦しき御けしきながら、やすからず忍びたまふからに、かたみに思ひ悩みたまへるめるも心苦しくて、忍びてかく通ひたまふよしを、中宮などにも漏らし聞こし召させて、しばしの御騒がれはいとほしくとも、女方の御ためは咎もあらじ、いとかく夜をだに明かしたまはぬ苦しげさよ、いみじくもてなしてあらせたてまつらばや、など思ひて、あながちにも隠ろへず。

衣がへなど、はかばかしく誰れかは扱ふらむ、など思して、御帳の帷、壁代など、三条の宮造り果てて渡りたまはむ心まうけにしおかせたまへるを、「ま

づさるべき用なむ」など、いと忍びて聞こえたまひて、たてまつれたまふ。さまざまなる女房の装束、御乳母などにもものたまひつつ、わざともせさせたまひけり。

十月一日ころ、網代もをかしきほどならむと、そそのかしきこえたまひて、紅葉御覧ずべく申したまふ。親しき宮人ども、殿上人の睦ましく思す限り、いと忍びてと思せど、所狭き御勢なれば、おのづからこと広ごりて、左の大殿の宰相中将参りたまふ。さてはこの中納言殿ばかりぞ、上達部は仕うまつりたまふ。ただ人は多かり。

かしこには、「論なく中宿りしたまはむを、さるべきさまに思せ。さきの春も、花見に尋ね参り来しこれかれ、かかるたよりにことよせて、時雨の紛れに見たてまつり表すやうもぞはべる」など、こまやかに聞こえたまへり。御簾掛け替へ、ここかしこかき払ひ、岩隠れに積もれる紅葉の朽葉すこしはるけ、遣水の水草払はせなどぞしたまふ。よしあるくだもの、肴など、さるべき人などもたてまつれたまへり。かつはゆかしげなけれど、いかがはせむ、これもさるべきにこそは、と思ひ許して、心まうけたまへり。

舟にて上り下り、おもしろく遊びたまふも聞こゆ。ほのぼのありさま見ゆるを、そなたに立ち出でて、若き人びと見たてまつる。正身の御ありさまはそれと見わかねども、紅葉を葺きたる舟の飾りの錦と見ゆるに、声々吹き出づる物の音ども、風につけておどろおどろしきまでおぼゆ。世人のなびきかしづきたてまつるさま、かく忍びたまへる道にも、いとことにいつくしきを見たまふにも、げに七夕ばかりにても、かかる彦星の光をこそ待ち出でめ、とおぼえたり。

文作らせたまふべき心まうけに、博士などもさぶらひけり。たそかれ時に、御舟さし寄せて遊びつつ文作りたまふ。紅葉を薄く濃くかざして、海仙楽といふものを吹きて、おのおの心ゆきたるけしきなるに、宮は、近江の海の心地し

て、遠方人の恨みいかにとのみ御心そらなり。時につけたる題出だして、うそぶき誦じあへり。

人の迷ひすこししづめておはせむと中納言も思して、さるべきやうに聞こえたまふほどに、内より、中宮の仰せ言にて、宰相の御兄の衛門督、ことことしき隨身ひき連れて、うるはしきさまして参りたまへり。かうやうの御ありきは、忍びたまふとすれど、おのづからこと広がりて、後の例にもなるわざなるを、重々しき人数あまたもなく、にはかにおはしましにけるを聞こしめしおどろきて、殿上人あまた具して参りたるに、はしたなくなりぬ。宮も中納言も、苦しと思して、物の興もなくなりぬ。御心のうちをば知らず、酔ひ乱れ遊び明かしつ。

今日は、かくてと思すに、また宮の大夫、さらぬ殿上人などあまたたてまつりたまへり。心あわたたしく口惜しくて、帰りたまはむそらなし。かしこには御文をぞたてまつれたまふ。をかしやかなることもなく、いとまめだちて、思しけることどもをこまごまと書き続けたまへれど、人目しげく騒がしからむにとて、御返りなし。数ならぬありさまにては、めでたき御あたりに交じらはむ、かひなきわざかな、といとど思し知りたまふ。よそにて隔たる月日は、おぼつかなさもことわりに、さりともなど慰めたまふを、近きほどにののしりおはして、つれなく過ぎたまひなむ、つらくも口惜しくも思ひ乱れたまふ。

宮は、ましていぶせくわりなしと思すこと限りなし。網代の氷魚も心寄せたてまつりて、いろいろの木ノ葉にかきまぜもてあそぶを、下人などはいとをかしきことに思へれば、人に従ひつつ、心ゆく御ありきに、みづからの御心地は、胸のみつとふたがりて、空をのみ眺めたまふに、この古宮の梢は、いとことにおもしろく、常磐木にはひ混じれる鶯の色なども、もの深げに見えて、遠目さへすごげなるを、中納言の君も、なかなか頼めきこえけるを、憂はしきわざか

なとおぼゆ。

こぞの春、御供なりし君たちは、花の色を思ひ出でて、後れてここに眺めたまふらむ心細さを言ふ。かく忍び忍びに通ひたまふとほの聞きたるもあるべし。心知らぬも混じりて、おほかたに、とやかくやと、人の御上は、かかる山隠れなれど、おのづから聞こゆるものなれば、「いとをかしげにこそものしたまふなれ」「箏の琴上手にて、故宮の明け暮れ遊びならはしたまひければ」など、口々言ふ。宰相の中將、

いづぞやも花の盛りに一目見し木のもとさへや秋は寂しき
あるじ方と思ひて言へば、中納言、

桜こそ思ひ知らすれ咲き匂ふ花も紅葉も常ならぬ世を

衛門督、

いづこより秋は行きけむ山里の紅葉の蔭は過ぎ憂きものを

宮大夫、

見し人もなき山里の岩垣に心長くも這へる葛かな

中に老いしらひて、うち泣きたまふ。親王の若くおはしける世のことなど思ひ出づるなめり。宮、

秋はてて寂しきまさる木のもとを吹きな過ぎしそ峰の松風

とて、いといたく涙ぐみたまへるを、ほのかに知る人は、げに深く思すなりけり、今日のたよりを過ぐしたまふ心苦しき、と見たてまつる人あれど、ことごとしく引き続き、えおはしまし寄らず。作りける文のおもしろき所々うち誦じ、大和歌もことにつけて多かれど、かうやうの酔ひの紛れに、ましてはかばかりかしきことあらむやは。片端書きとどめてだに見苦しくなむ。

かしこには、過ぎたまひぬるけはひを、遠くなるまで聞こゆる前駆の声々、ただならずおぼえたまふ。心まうけしつる人びとも、いと口惜しと思へり。姫

宮はまして、なほ音に聞く月草の色なる御心なりけり、ほのかに人の言ふを聞けば、男といふものは、そらごとをこそいとよくすなれ、思はぬ人を思ふ顔にとりなす言の葉多かるものと、この人数ならぬ女ばらの、昔物語に言ふを、さるなほなほしきなかにこそは、けしからぬ心あるもまじるらめ、何ごと筋ことなる際になりぬれば、人の聞き思ふことつつましく、所狭かるべきものと思ひしは、さしもあるまじきわざなりけり、あだめきたまへるやうに、故宮も聞き伝へたまひて、かやうに気近きほどまでは思し寄らざりしものを、あやしきまで心深げにのたまひわたり、思ひの外に見たてまつるにつけてさへ、身の憂さを思ひ添ふるが、あぢきなくもあるかな、かく見劣りする御心を、かつはかの中納言もいかに思ひたまふらむ、ここにもことに恥づかしげなる人はうち混じらねど、おのおの思ふらむが、人笑へにをこがましきこと、と思ひ乱れたまふに、心地も違ひて、いと悩ましくおぼえたまふ。

正身は、たまさかに対面したまふ時、限りなく深きことを頼め契りたまひつれば、さりともこよなうは思し変らじと、おぼつかなきもわりなき障りこそはものしたまふらめと、心のうちに思ひ慰めたまふかたあり。ほど経にけるが思ひいれられたまはぬにしもあらぬに、なかなかにてうち過ぎたまひぬるを、つらくも口惜しくも思ほゆるに、いとどものあはれなり。忍びがたき御けしきなるを、人なみなみにもてなして、例の人めきたる住まひならば、かうやうにもてなしたまふまじきを、など姉宮はいとどしくあはれと見たてまつりたまふ。

我も世にながらへば、かうやうなること見つべきにこそはあめれ、中納言の、とぎまかうぎまに言ひありきたまふも、人の心を見むとなりけり、心一つにもて離れて思ふとも、こしらへやる限りこそあれ、ある人のこりずまに、かかる筋のことをのみ、いかでと思ひためれば、心より外に、つひにもてなされぬべかめり、これこそは、返す返す、さる心して世を過ぐせとのたまひおきしは、

かかることもやあらむの諫めなりけり、さもこそは憂き身どもにて、さるべき人にも後れたてまつらめ、やうのものと、人笑へなることを添ふるありさまにて、亡き御影をさへ悩ましたてまつらむがいみじさなるを、我だに、さるもの思ひに沈まず、罪などいと深からぬさきに、いかで亡くなりなむ、と思し沈むに、心地もまことに苦しければ、物もつゆばかり参らず、ただ亡からむ後のあらましごとを、明け暮れ思ひ続けたまふにも、心細くて、この君を見たてまつりたまふもいと心苦しく、我にさへ後れたまひて、いかにいみじく慰む方なからむ、あたらしくをかしきさまを明け暮れの見物にて、いかで人びとしくも見なしたてまつらむ、と思ひ扱ふをこそ、人知れぬ行く先の頼みにも思ひつれ、限りなき人にもものしたまふとも、かばかり人笑へなる目を見てむ人の、世の中に立ちまじり、例の人ざまにて経たまはむは、たぐひすくなく心憂からむ、なご思し続くるに、いふかひもなく、この世にはいささか思ひ慰む方なくて過ぎぬべき身どもなりけり、と心細く思す。

宮は、立ち返り、例のやうに忍びてと出で立ちたまひけるを、内に、「かかる御忍びごとにより、山里の御ありきもゆくりかに思し立つなりけり。軽々しき御ありさまと、世人も下にそしり申すなり」と、衛門督の漏らし申したまひければ、中宮も聞こし召し嘆き、上もいとど許さぬ御けしきにて、「おほかた、心にまかせたまへる御里住みのあしきなり」と、厳しきことども出で来て、内につとさぶらはせたてまつりたまふ。左の大殿の六の君をうけひかず思したることなれど、おしたちて参らせたまふべく、皆定めらる。

中納言殿聞きたまひて、あいなくものを思ひありきたまふ。わがあまり異やうなるぞや、さるべき契りやありけむ、親王のうしろめたしと思したりしさまもあはれに忘れがたく、この君たちの御ありさまはひも、ことなることなくて世に衰へたまはむことの惜しくもおぼゆるあまりに、人びとしくもてなさば

やと、あやしきまでもて扱はるるに、宮もあやにくにとりもちて責めたまひしかば、わが思ふ方は異なるに、譲らるるありさまもあいなくて、かくもてなしを、思へば悔しくもありけるかな、いづれもわがものにて見たてまつらむに、咎むべき人もなしかし、と取り返すものならねど、をこがましく心一つに思ひ乱れたまふ。

宮はまして、御心にかからぬ折なく、恋しくうしろめたしと思す。「御心につきて思す人あらば、ここに参らせて、例ぎまにのどやかにもてなしたまへ。筋ことに思ひきこえたまへるに、軽びたるやうに人の聞こゆべかめるも、いとなむ口惜しき」と、大宮は明け暮れ聞こえたまふ。

時雨いたくしてのどやかなる日、女一の宮の御方に参りたまひつれば、御前に人多くもさぶらはず、しめやかに御絵など御覧するほどなり。御几帳ばかり隔てて、御物語聞こえたまふ。限りもなくあてに気高きものから、なよびかにをかしき御けはひを、年ごろ二つなきものに思ひきこえたまひて、またこの御ありさまになずらふ人世にありなむや、冷泉院の姫宮ばかりこそ、御おぼえのほど、うちうちの御けはひも心にくく聞こゆれど、うち出でむ方もなく思しわたるに、かの山里人は、らうたげにあてなる方の劣りきこゆまじきぞかし、など、まづ思ひ出づるにいと恋しくて、慰めに、御絵どものあまた散りたるを見たまへば、をかしげなる女絵どもの、恋する男の住まひなどかきませ、山里のをかしき家居など、心々に世のありさまかきたるを、よそへらるること多くて、御目とまりたまへば、すこし聞こえたまひて、かしこへたてまつらむと思す。在五が物語をかきて、妹に琴教へたる所の、「人の結ばむ」と言ひたるを見て、いかが思すらむ、すこし近く参り寄りたまひて、「いにしへの人も、さるべきほどは、隔てなくこそならばしてはべりけれ。いと疎々しくのみもてなさせたまふこそ」と、忍びて聞こえたまへば、いかなる絵にかと思すに、おし

巻き寄せて、御前にさし入れたまへるを、うつぶして御覧ずる御髪のうちなびきてこぼれ出でたるかたそばばかり、ほのかに見たてまつりたまへる、飽かずめでたく、すこしももの隔てたる人と思ひきこえましかばと思すに、忍びがたくて、

若草のね見むものとは思はねどむすぼほれたる心地こそすれ

御前なる人びとは、この宮をばことに恥ぢきこえて、もののうしろに隠れたり。ことしもこそあれ、うたてあやしと思せば、ものものたまはず。ことわりにて、「うらなくものを」と言ひたる姫君も、されて憎く思さる。

紫の上の、取り分きてこの二所をばならはしきこえたまひしかば、あまたの御中に、隔てなく思ひ交はしきこえたまへり。世になくかしづききこえたまひて、さぶらふ人びとも、かたほにすこし飽かぬところあるは、はしたなげなり。やむごとなき人の御むすめなどもいと多かり。御心の移ろひやすきは、めづらしき人びとにはかなく語らひつきなどしたまひつつ、かのわたりを思し忘るる折なきものから、訪れたまはで日ごろ経ぬ。

待ちきこえたまふ所は、絶え間遠き心地して、なほかくなめり、と心細く眺めたまふに、中納言おはしたり。悩ましげにしたまふと聞きて、御とぶらひなりけり。いと心地惑ふばかりの御悩みにもあらねど、ことつけて対面したまはず。「おどろきながら、はるけきほどを参り来つるを。なほかの悩みたまふらむ御あたり近く」と、切におぼつかながりきこえたまへば、うちとけて住まひたまへる方の御簾の前に入れたてまつる。いとかたはらいたきわざと苦しがりたまへど、けにくくはあらで、御頭もたげ、御いらへなど聞こえたまふ。

宮の、御心もゆかでおはし過ぎにしありさまなど語りきこえたまひて、「のどかに思せ。心焦られして、な恨みきこえたまひそ」など教へきこえたまへば、「ここには、ともかくも聞こえたまはざめり。亡き人の御諫めは、かかること

にこそと見はべるばかりなむ、いとほしかりける」とて、泣きたまふけしきなり。いと心苦しく、我さへ恥づかしき心地して、「世の中はとてまかくても、一つさまにて過ぐすこと難くなむはべるを、いかなることをも御覧じ知らぬ御心どもには、ひとへに恨めしなど思すこともあらむを、しひて思しのどめよ。うしろめたくはよにあらじとなむ思ひはべる」など、人の御上をさへ扱ふも、かつはあやしくおぼゆ。

夜々はまして、いと苦しげにしたまひければ、疎き人の御けはひの近きも、中の宮の苦しげに思したれば、「なほ、例の、あなたに」と人びと聞こゆれど、「まして、かくわづらひたまふほどのおぼつかなきを、思ひのままに参り来て、出だし放ちたまへれば、いとわりなくなむ。かかる折の御扱ひも、誰れかははかばかしく仕うまつる」など、弁のおもとに語らひたまひて、御修法ども始むべきことのたまふ。いと見苦しく、ことさらにも厭はしき身を、と聞きたまへど、思ひ隈なくのたまはむもうたてあれば、さすがに、ながらへよと思ひたまへる心ばへも、あはれなり。

またのあしたに、「すこしもよろしく思さるや。昨日ばかりにてだに聞こえさせむ」とあれば、「日ごろ経ればにや、今日はいと苦しくなむ。さらば、あなたに」と言ひ出だしたまへり。いとあはれに、いかにものしたまふべきにかあらむ、ありしよりはなつかしき御けしきなるも、胸つぶれておぼゆれば、近く寄りて、よろづのことを聞こえたまひて、「苦しくてえ聞こえず。すこしためらはむほどに」とて、いとかすかにあはれなるけはひを、限りなく心苦しうて、嘆きみたまへり。さすがに、つれづれとかくておはしがたければ、いとうしろめたけれど、帰りたまふ。「かかる御住まひは、なほ苦しかりけり。所さりたまふにことよせて、さるべき所に移ろはしたてまつらむ」など聞こえおきて、阿闍梨にも御祈り心に入るべくのためひ知らせ出でたまひぬ。

この君の御供なる人の、いつしかと、ここなる若き人を語らひ寄りたるなりけり。おのがじしの物語に、「かの宮の、御忍びありき制せられたまひて、内にのみ籠もりおはします。左の大殿の君をあはせたてまつりたまへるなる、女方は年ごろの御本意なれば、思しとどこほることなくて、年のうちにありぬべかなり。宮はしぶしぶに思して、内わたりにも、ただ好きがましきことに御心を入れて、帝後の御戒めに静まりたまふべくもあらざめり。わが殿こそ、なほあやしく人に似たまはず、あまりまめにおはしまして、人にはもて悩まれたまへ。ここにかく渡りたまふのみなむ、目もあやに、おぼろけならぬことと人申す」など語りけるを、「さこそ言ひつれ」など、人びとの中にて語るを聞きたまふに、いとど胸ふたがりて、今は限りにこそあなれ、やむごとなき方に定まりたまはぬなほざりの御すさびに、かくまで思しけむを、さすがに中納言などの思はむところを思して、言の葉の限り深きなりけり、と思ひなしたまふに、ともかくも人の御つらさは思ひ知らず、いとど身の置き所のなき心地して、しをれ臥したまへり。

弱き御心地は、いとど世に立ちとまるべくもおぼえず。恥づかしげなる人びとにはあらねど、思ふらむところの苦しければ、聞かぬやうにて寝たまへるを、中の君、もの思ふ時のわざと聞きし、うたた寝の御さまのいとらうたげにて、かひなを枕にて寝たまへるに、御髪のとまりたるほどなど、ありがたくうつくしげなるを見やりつつ、親の諫めし言の葉も、かへすがへす思ひ出でられたまひて悲しければ、罪深かなる底にはよも沈みたまはじ、いづこにもいづこにもおはすらむ方に迎へたまひてよ、かくいみじくもの思ふ身どもをうち捨てたまひて、夢にだに見えたまはぬよ、と思ひ続けたまふ。

夕暮の空のけしきいとすごくしぐれて、木の下吹き払ふ風の音などに、たとへむ方なく、来し方行く先思ひ続けられて、添ひ臥したまへるさま、あてに限

りなく見えたまふ。白き御衣に、髪は削ることもしたまはほど経ぬれど、まよふ筋なくうちやられて、日ごろにすこし青みたまへるしも、なまめかしさまさりて、眺め出だしたまへるまみ額つきのほども、見知らむ人に見せまほし。

昼寝の君、風のいと荒きに驚かされて起き上がりたまへり。山吹、薄色などはなやかなる色あひに、御顔はことさらに染め匂はしたらむやうに、いとをかしくはなばなとして、いささかも思ふべきさまもしたまへらず。「故宮の夢に見えたまひつる、いとも思したるけしきにて、このわたりにこそほのめきたまひつれ」と語りたまへば、いとどしく悲しき添ひて、「亡せたまひて後、いかで夢にも見たてまつらむと思ふを、さらにこそ見たてまつらね」とて、二所ながらいみじく泣きたまふ。このころ明け暮れ思ひ出でたてまつれば、ほのめきもやおはすらむ、いかで、おはすらむ所に尋ね参らむ、罪深げなる身どもにて、と後の世をさへ思ひやりたまふ。人の国にありけむ香の煙ぞ、いと得まほしく思さるる。

いと暗くなるほどに、宮より御使あり。折はすこしもの思ひ慰みぬべし。御方はとみにも見たまはず。「なほ心うつくしくおいらかなるさまに聞こえたまへ。かくてはかなくもなりはべりなば、これより名残なき方に、もてなしきこゆる人もや出で来む、とうしろめたきを、まれにもこの人の思ひ出できこえたまはむに、さやうなるあるまじき心つかふ人はえあらじと思へば、つらきながらなむ頼まれはべる」と聞こえたまへば、「後らさむと思しけるこそ、いみじくはべれ」と、いよいよ顔を引き入れたまふ。「限りあれば、片時もとまらじと思ひしかど、ながらふるわざなりけりと思ひはべるぞや。明日知らぬ世のさすがに嘆かしきも、誰がため惜しき命にかは」とて、大殿油参らせて見たまふ。例の、こまやかに書きたまひて、

眺むるは同じ雲居をいかなればおぼつかなきを添ふる時雨ぞ

「かく袖ひつる」などいふこともやありけむ、耳馴れにたるを、なほあらじことと見るにつけても、恨めしさまさりたまふ。さばかり世にありがたき御ありさまかたちを、いとど、いかで人にめでられむと、好ましく艶にもてなしたまへれば、若き人の心寄せたてまつりたまはむ、ことわりなり。ほど経るにつけても恋しく、さばかり所狭きまで契りおきたまひしを、さりともいとかくはやまじ、と思ひ直す心ぞ常に添ひける。御返り、「今宵参りなむ」と聞こゆれば、これかれそそのかしきこゆれば、ただ一言なむ、

霰降る深山の里は朝夕に眺むる空もかきくらしつつ

かく言ふは、神無月のつごもりなりけり。月も隔たりぬるよ、と宮は静心なく思されて、今宵今宵と思しつつ、障り多みなるほどに、五節などよく出で来たる年にて、内わたり今めかしく紛れがちにて、わざともなければど過ぐいたまふほどに、あさましく待ち遠なり。はかなく人を見たまふにつけても、さるは御心に離るる折なし。左の大殿のわたりのこと、大宮も、「なほさるのどやかなる御後見をまうけたまひて、そのほかに尋ねまほしく思さるる人あらば参らせて、重々しくもてなしたまへ」と聞こえたまへど、「しばし。さ思うたまふるやうなむ」。聞こえいなびたまひて、まことにつらき目はいかで見せむ、など思す御心を知りたまはねば、月日に添へてものをのみ思す。

中納言も、見しほどよりは軽びたる御心かな、さりともと思ひきこえけるもいとほしく、心からおぼえつつ、をさをさ参りたまはず。山里にはいかにいかにと訪らひきこえたまふ。この月となりては、すこしよろしくおはすと聞きたまひけるに、公私もの騒がしきころにて、五六日人もたてまつれたまはぬに、いかならむとうちおどろかれたまひて、わりなきことのしげさをうち捨てて参でたまふ。

修法はおこたり果てたまふまで、とのたまひおきけるを、よろしくなりにけ

りとして、阿闍梨をも帰したまひければ、いと人ずくなにて、例の若い人出で来て、御ありさま聞こゆ。「そこはかと痛きところもなく、おどろおどろしからぬ御悩みに、ものをなむさらに聞こしめさぬ。もとより人に似たまはず、あえかにおはしますうちに、この宮の御こと出で来にしおち、いとどもの思したるさまにて、はかなき御くだものをだに御覧じ入れざりし積もりにや、あさましく弱くなりたまひて、さらに頼むべくも見えたまはず。よに心憂くはべりける身の命の長さにて、かかることを見たてまつれば、まづいかで先立ちきこえむと思ひたまへ入りはべり」と言ひもやらす泣くさま、ことわりなり。「心憂く。などか、かくとも告げたまはざりける。院にも内にも、あさましく事しげころにて、日ごろもえ聞こえざりつるおぼつかなさ」とて、ありし方に入りたまふ。御枕上近くてももの聞こえたまへど、御声もなきやうにて、えいらへたまはず。「かく重くなりたまふまで、誰も誰も告げたまはざりけるが、つらくも。思ふにかひなきこと」と恨みて、例の阿闍梨、おほかた世に験ありと聞こゆる人の限り、あまた請じたまふ。御修法、読経、明くる日より始めさせたまはむとて、殿人あまた参り集ひ、上下の人立ち騒ぎたれば、心細さの名残なく頼もしげなり。

暮れぬれば、例の、あなたにと聞こえて、御湯漬けなど参らむとすれど、「近くてだに見たてまつらむ」とて、南の廂は僧の座なれば、東面の今すこし気近き方に、屏風など立てさせて入りゐたまふ。中の宮、苦しと思したれど、この御仲をなほもてはなれたまはぬなりけりと皆思ひて、疎くもえもてなし隔てず。初夜よりはじめて、法華経を不断に読ませたまふ。声尊き限り十二人して、いと尊し。

火はこなたの南の間にともして、内は暗きに、几帳をひき上げて、すこしすべり入りて見たてまつりたまへば、老人ども二三人ぞさぶらふ。中の宮は、ふ

と隠れたまひぬれば、いと人少なに、心細くて臥したまへるを、「なか御声をだに聞かせたまはぬ」とて、御手を捉へておどろかしきこえたまへば、「心地には思ひながら、もの言ふがいと苦しくてなむ。日ごろおとづれたまはざりつれば、おぼつかなくて過ぎはべりぬべきにや、と口惜しくこそはべりつれ」と、息の下にのたまふ。「かく待たれたてまつるほどまで、参り来ざりけること」とて、さくりもよよと泣きたまふ。御ぐしなど、すこし熱くぞおはしける。「何の罪なる御心地にか、人の嘆き負ふこそかくあむなれ」と、御耳にさし当ててものを多く聞こえたまへば、うるさうも恥づかしうもおぼえて、顔をふたぎたまへるを、むなしく見なして、いかなる心地せむと、胸もひしげておぼゆ。「日ごろ見たてまつりたまひつらむ御心地もやすからず思されつらむ。今宵だに心やすくうち休ませたまへ。宿直人さぶらふべし」と聞こえたまへば、うしろめたけれど、さるやうこそはと思して、すこししぞきたまへり。

直面にはあらねど、はひ寄りつつ見たてまつりたまへば、いと苦しく恥づかしけれど、かかるべき契りこそはありけめと思して、こよなうのどかにうしろやすき御心を、かの片つ方の人に見比べたてまつりたまへば、あはれとも思ひ知られたり。むなしくなりなむ後の思ひ出にも、心ごはく、思ひ隈なからじとつつみたまひて、はしたなくもえおし放ちたまはず。夜もすがら人をそそのかして、御湯など参らせたてまつりたまへど、つゆばかり参るけしきもなし。いみじのわざや、いかにしてかはかけとどむべきと、言はむかたなく思ひるたまへり。

不断経の、暁方のみ替はりたる声のいと尊きに、阿闍梨も夜居にさぶらひて眠りたる、うちおどろきて陀羅尼読む。老いかれにたれど、いと功づきて頼もしく聞こゆ。「いかがが今宵はおはしましつらむ」など聞こゆるついでに、故宮の御ことなど申し出でて、鼻しばしばうちかみて、「いかなる所におはします

らむ。さりとも涼しき方にぞと思ひやりたてまつるを、先つころの夢になむ見えおはしましし。俗の御かたちにて、世の中を深う厭ひ離れしかば、心とまることなかりしを、いささかうち思ひしことに乱れてなむ、ただしばし願ひの所を隔たれるを思ふなむいと悔しき、すすむるわざせよと、いとさだかに仰せられしを、たちまちに仕うまつるべきことのおぼえはべらねば、堪へたるにしたがひて、行ひしはべる法師ばら五六人して、なにがしの念仏なむ仕うまつらせはべる。さては思ひたまへ得たることはべりて、常不輕をなむつかせはべる」など申すに、君もいみじう泣きたまふ。かの世にさへ妨げきこゆらむ罪のほどを、苦しき御心地にも、いとど消え入りぬばかりおぼえたまふ。いかで、かはまだ定まりたまはざらむさきに参でて、同じ所にも、と聞き臥したまへり。

阿闍梨は言少なにて立ちぬ。この常不輕、そのわたりの里々、京までありきけるを、暁の嵐にわびて、阿闍梨のさぶらふあたりを尋ねて、中門のもとにゐて、いと尊くつく。回向の末つ方の心ばへいとあはれなり。客人もこなたにすすみたる御心にて、あはれ忍ばれたまはず。中の宮、切におぼつかなくて、奥の方なる几帳のうしろに寄りたまへるけはひを聞きたまひて、あざやかにゐなほりたまひて、「不輕の声はいかが聞かせたまひつらむ。重々しき道には行はぬことなれど、尊くこそはべりけれ」とて、

霜さゆる汀の千鳥うちわびて鳴く音悲しき朝ぼらけかな

言葉のやうに聞こえたまふ。つれなき人の御けはひにも通ひて、思ひよそへらるれど、いらへにくくて、弁してぞ聞こえたまふ。

暁の霜うち払ひ鳴く千鳥もの思ふ人の心をや知る

似つかはしからぬ御代りなれど、ゆゑなからず聞こえなす。かやうのはかなしごとくも、つつまじげなるものから、なつかしうかひあるさまにとりなしたまふものを、今はとて別れなば、いかなる心地せむ、と惑ひたまふ。

宮の夢に見えたまひけむさま思しあはするに、かう心苦しき御ありさまどもを、天翔りてもいかに見たまふらむと推し量られて、おはしましし御寺にも御誦経せさせたまふ。所々の祈りの使出だしたてさせたまひ、公にも私にも、御暇のよし申したまひて、祭、祓、よろづにいたらぬことなくしたまへど、ものの罪めきたる御病にもあらざりければ、何の験も見えず。

みづからも、平らかにあらむとも仏をも念じたまはばこそあらめ、なほかかるついでにいかで亡せなむ、この君のかく添ひて、残りなくなりぬるを、今もて離れむかたなし、さりとて、かうおろかならず見ゆめる心ばへの、見劣りして我も人も見えむが、心やすからず憂かるべきこと、もし命しひてとまらば、病にことつけて、形をも変へてむ、さてのみこそ長き心もかたみに見果つべきわざなれ、と思ひしみたまひて、とあるにてもかかるにても、いかでこの思ふこととしてむと思すを、さまでさかしきことはえうち出でたまはで、中の宮に、「心地のいよいよ頼もしげなくおぼゆるを、忌むことなむ、いとしるしありて命延ぶることと聞きしを、さやうに阿闍梨にのたまへ」と聞こえたまへば、皆泣き騒ぎて、「いとあるまじき御ことなり、かくばかり思し惑ふめる中納言殿も、いかがあへなきやうに思ひきこえたまはむ」と、似げなきことに思ひて、頼もし人にも申しつがねば、口惜しう思す。

かく籠もりゐたまひつれば、聞きつぎつつ、御訪らひにふりはへものしたまふ人もあり。おろかに思されぬことと見たまへば、殿人、親しき家司などは、おのおのよろづの御祈りをせさせ、嘆ききこゆ。

豊の明は今日ぞかしと、京思ひやりたまふ。風いたう吹きて、雪の降るさまあわたたしう荒れまどふ。都にはいとかうしもあらじかしと、人やりならず心細うて、疎くてやみぬべきにやと思ふ契りはつらけれど、恨むべうもあらず、なつかしうらうたげなる御もてなしを、ただしばしにても例になして、思ひつ

ることどもも語らはばや、と思ひ続けて眺めたまふ。光もなくて暮れ果てぬ。

かき曇り日かげも見えぬ奥山に心をくらすころにもあるかな

ただ、かくておはするを頼みに皆思ひきこえたり。例の、近き方にゐたまへるに、御几帳などを風のあらはに吹きなせば、中の宮奥に入りたまふ。見苦しげなる人びとも、かかやき隠れぬるほどに、いと近う寄りて、「いかが思さるる。心地に思ひ残すことなく、念じきこゆるかひなく、御声をだに聞かずなりにたれば、いとこそわびしけれ。後らかしたまはば、いみじうつらからむ」と、泣く泣く聞こえたまふ。ものおぼえずなりにたるさまなれど、顔はいとよく隠したまへり。「よろしき隙あらば、聞こえまほしきこともはべれど、ただ消え入るやうにのみなりゆくは、口惜しきわざにこそ」と、いとあはれと思ひたまへるけしきなるに、いよいよせきとどめがたくて、ゆゆしう、かく心細げに思ふとは見えじ、とつつみたまへど、声も惜しまれず。いかなる契りにて、限りなく思ひきこえながら、つらきこと多くて別れたてまつるべきにか、少し憂きさまをだに見せたまはばなむ、思ひ冷ますふしにもせむ、とまもれど、いよいよあはれげにあたらしく、をかしき御ありさまのみ見ゆ。かひななどいといと細うなりて、影のやうに弱げなるものから、色あひも変らず、白うつくしげになよなよとして、白き御衣どものなよびかなるに、衾を押しやりて、中に身もなき雛を臥せたらむ心地して、御髪はいとこちたうもあらぬほどにうちやられたる、枕より落ちたる際の、つやつやとめでたうをかしげなるも、いかになりたまひなむとするぞと、あるべきものにもあらざめりと見るが、惜しきことたぐひなし。ここら久しく悩みて、ひきもつくろはぬけはひの、心とけず恥づかしげに、限りなうもてなしさまよふ人にも多うまさりて、こまかに見るままに、魂も静まらむ方なし。「つひにうち捨てたまひなば、世にしばしとまるべきにもあらず。命もし限りありてとまるべうとも、深き山にさすらへなむとす。

ただ、いと心苦しうてとまりたまはむ御ことをなむ思ひきこゆる」と、いらへさせたてまつらむとて、かの御ことをかけたまへば、顔隠したまへる御袖を少しひき直して、「かくはかなかりけるものを、思ひ隈なきやうに思されたりつるもかひなければ、このとまりたまはむ人を、同じこと思ひきこえたまへとほのめかしきこえしに、違へたまはざらましかば、うしろやすからましと、これのみなむ恨めしきふしにてとまりぬべうおぼえはべる」とのたまへば、「かくいみじうもの思ふべき身にやありけむ、いかにもいかにも異ざまにこの世を思ひかかづらふ方のはべらざりつれば、御おもむけに従ひきこえずなりにし。今なむ、悔しく心苦しうもおぼゆる。されども、うしろめたくな思ひきこえたまひそ」などこしらへて、いと苦しげにしたまへば、修法の阿闍梨ども召し入れさせ、さまざまに験ある限りして、加持参らせさせたまふ。我も仏を念ぜさせたまふこと限りなし。

世の中をことさらに厭ひ離れねと勧めたまふ仏などの、いとかくいみじきものは思はせたまふにやあらむ、見るままに、もの隠れゆくやうにて、消え果てたまひぬるは、いみじきわざかな。引きとどむべき方なく、足摺りもしつべく、人のかたくなしと見むこともおぼえず。限りと見たてまつりたまひて、中の宮の、後れじと思ひ惑ひたまふさまもことわりなり。あるにもあらず見えたまふを、例の、さかしき女ばら、今はいとゆゆしきことと引き避けたてまつる。

中納言の君は、さりとも、いとかかることあらじ、夢かと思して、御殿油を近うかかげて見たてまつりたまふに、隠したまふ顔も、ただ寝たまへるやうにて、変はりたまへるところもなく、うつくしげにてうち臥したまへるを、かくながら、虫の殻のやうにても見るわざならましかば、と思ひ惑はる。今はの事どもするに、御髪をかきやるに、さとうち匂ひたる、ただありしながらの匂ひになつかしう香ばしきも、ありがたう、何ごとにてこの人をすこしもなのめな

りしと思ひさまさむ、まことに世の中を思ひ捨て果つるしるべならば、恐ろしげに憂きことの、悲しさも冷めぬべきふしをだに見つけさせたまへ、と仏を念じたまへど、いとど思ひのどめむ方なくのみあれば、言ふかひなくて、ひたぶるに煙にだになし果ててむと思ほして、とかく例の作法どもするぞ、あさましかりける。空を歩むやうにただよひつつ、限りのありさまさへはかなげにて、煙も多くむすぼほれたまはずなりぬるもあへなしと、あきれて帰りたまひぬ。

御忌に籠もれる人数多くて、心細さはすこし紛れぬべけれど、中の宮は、人の見思はむことも恥づかしき身の心憂さを思ひ沈みたまひて、また亡き人に見えたまふ。宮よりも御弔らひいとしげくたてまつれたまふ。思はずにつくづくと思ひきこえたまへりしけしきも、思し直らでやみぬるを思すに、いと憂き人の御ゆかりなり。

中納言、かく世のいと心憂くおぼゆるついでに、本意遂げむと思さるれど、三条の宮の思されむことに憚り、この君の御ことの心苦しさに思ひ乱れて、かののたまひしやうにて、形見にも見るべかりけるものを、下の心は、身を分けたまへりとも、移ろふべくもおぼえ給へざりしを、かうもの思はせたてまつるよりは、ただうち語らひて、尽きせぬ慰めにも見たてまつり通はましものを、など思す。かりそめに京にも出でたまはず、かき絶え、慰む方なくて籠もりおはするを、世人もおろかならず思ひたまへることと見聞きて、内よりはじめたてまつりて、御弔ひ多かり。

はかなくて日ごろは過ぎゆく。七日七日の事ども、いと尊くせさせたまひつつ、おろかならず孝じたまへど、限りあれば、御衣の色の変らぬを、かの御方の心寄せわきたりし人びとの、いと黒く着替へたるをほの見たまふも、

くれなるに落つる涙もかひなきは形見の色を染めぬなりけり

聴し色の氷解けぬかと思ゆるを、いとど濡らし添へつつ眺めたまふさま、いと

なまめかしくきよげなり。人びと覗きつつ見たてまつりて、「言ふかひなき御ことをばさるものにて、この殿のかくならひたてまつりて、今はとよそに思ひきこえむこそ、あたらしく口惜しけれ。思ひの外なる御宿世にもおはしけるかな。かく深き御心のほどを、かたがたに背かせたまへるよ」と泣きあへり。

この御方には、「昔の御形見に、今は何ごととも聞こえ、承らむとなむ思ひたまふる。疎々しく思し隔つな」と聞こえたまへど、よろづのこと憂き身なりけりと、もののみつつましくて、まだ対面してものなど聞こえたまはず。この君は、けぎやかなるかたに、いますこし子めき、気高くおはするものから、なつかしく匂ひある心ざまぞ劣りたまへりけると、事に触れておぼゆ。

雪のかきくらし降る日、ひねもすにながめ暮らして、世の人のすさまじきことと言ふなる師走の月夜の曇りなくさし出でたるを、簾巻き上げて見たまへば、向かひの寺の鐘の声、枕をそばだてて、今日も暮れぬとかすかなる響を聞きて、おくれじと空ゆく月を慕ふかなつひに住むべきこの世ならねば

風のいと烈しければ、蔀下ろさせたまふに、四方の山の鏡と見ゆる汀の氷、月影にいとおもしろし。京の家の限りなくと磨くも、えかうはあらぬはやとおぼゆ。わづかに生き出でてもしたまはましかば、もろともに聞こえましと思ひつづくるぞ、胸よりあまる心地する。

恋ひわびて死ぬる薬のゆかしきに雪の山にや跡を消なまし
半ばなる偈教へむ鬼もがな、ことつけて身も投げむ、と思すぞ、心ぎたなき聖心なりける。

人びと近く呼び出でたまひて、物語などせさせたまふけはひなどの、いとあらまほしく、のどやかに心深きを見たてまつる人びと、若きは心にしめてめでたしと思ひたてまつる、老いたるはただ口惜しくいみじきことを、いとど思ふ。「御心地の重くならせたまひしことも、ただこの宮の御ことを、思はずに見た

てまつりたまひて、人笑へにいみじと思すめりしを、さすがにかの御方には、かく思ふと知られたてまつらじと、ただ御心一つに世を恨みたまふめりしほどに、はかなき御くだものをも聞こしめし触れず、ただ弱りになむ弱らせたまふめりし。上べには、何ばかりことごとしくもの深げにももてなさせたまはで、下の御心の限りなく、何事も思すめりしに、故宮の御戒めにさへ違ひぬること、あいなう人の御上を思し悩みそめしなり」と聞こえて、折々のたまひしことなど語り出でつつ、誰も誰も泣き惑ふこと尽きせず。

わが心から、あぢきなきことを思はせてまつりけむことと、取り返さまほしく、なべての世もつらきに、念誦をいとどあはれにしたまひて、まどろむほどなく明かしたまふに、まだ夜深きほどの雪のけはひいと寒げなるに、人びと声あまたして、馬の音聞こゆ。何人かはかかるさ夜中に雪を分くべきと、大徳たちも驚き思へるに、宮、狩の御衣にいたうやつれて、濡れ濡れ入りたまへるなりけり。うちたたきたたまふさま、さななりと聞きたまひて、中納言は、隠ろへたる方に入りたまひて、忍びておはす。御忌は日数残りたりけれど、心もとなく思しわびて、夜一夜、雪に惑はされてぞおはしましたしける。

日ごろのつらさも紛れぬべきほどなれど、対面したまふべき心地もせず、思し嘆きたるさまの恥づかしかりしを、やがて見直されたまはずなりにしも、今より後の御心改まらむはかひなかるべく思ひしみてものしたまへば、誰も誰もいみじうことわりを聞こえ知らせつつ、物越しにてぞ、日ごろのおこたり尽きせずのたまふを、つくづくと聞きるたまへる。これもいとあるかなきかにて、後れたまふまじきにやと聞こゆる御けはひの心苦しさを、うしろめたういみじと宮も思したり。

今日は、御身を捨てて泊りたまひぬ。「物越しならで」といたくわびたまへど、「今すこしものおぼゆるほどまではべらば」とのみ聞こえたまひて、つれ

なきを、中納言もけしき聞きたまひて、さるべき人召し出でて、「御ありさまに違ひて、心浅きやうなる御もてなしの、昔も今も心憂かりける、月ごろの罪は、さも思ひきこえたまひぬべきことなれど、憎からぬさまにこそ勘へたまつりたまはめ。かやうなることまだ見知らぬ御心にて、苦しう思すらむ」など、忍びて賢しがりたまへば、いよいよこの君の御心も恥づかしくて、え聞こえたまはず。「あさましく心憂くおはしけり。聞こえしさまをもむげに忘れたまひけること」とおろかならず嘆き暮らしたまへり。

夜のけしき、いとど険しき風の音に、人やりならず嘆き臥したまへるもさすがにて、例のもの隔てて聞こえたまふ。千々の社をひきかけて、行く先長きことを契りきこえたまふも、いかでかく口馴れたまひけむと心憂けれど、よそにてつれなきほどの疎ましきよりはあはれに、人の心もたをやぎぬべき御さまを、一方にもえ疎み果つまじかりけり。ただつくづくと聞きて、

来し方を思ひ出づるもはかなきを行く末かけてなに頼むらむと、ほのかにのたまふ。なかなかいぶせう心もとなし。

「行く末を短きものと思ひなば目の前にだに背かざらなむ

何事もいとかう見るほどなき世を、罪深くな思しないそ」と、よろづにこしらへたまへど、「心地も悩ましくなむ」とて入りたまひにけり。人の見るらむもいと人わろくて、嘆き明かしたまふ。恨みむもことわりなるほどなれど、あまりに人憎くもと、つらき涙の落つれば、ましていかに思ひつらむと、さまざまあはれに思し知らる。

中納言の、あるじ方に住み馴れて、人びとやすらかに呼び使ひ、人もあまたしても参らせなどしたまふを、あはれにもをかしようも御覧ず。いといたう痩せ青みて、ほればれしきまでものを思ひたれば、心苦しと見たまひて、まめやかに訪らひたまふ。ありしさまなど、かひなきことなれど、この宮にこそは聞

こえめと思へど、うち出でむにつけても、いと心弱く、かたくなしく見えたてまつらむに憚りて、言少ななり。音をのみ泣きて、日数経にければ、顔変はりのしたるも見苦しくはあらで、いよいよものきよげになまめいたるを、女ならばかならず心移りなむと、おのがけしからぬ御心ならひに思しよるも、なまうしろめたかりければ、いかで人のそしりも恨みをもはぶきて、京に移ろはしてむと思す。

かくつれなきものから、内わたりにも聞こし召して、いとあしかるべきに思しわびて、今日は帰らせたまひぬ。おろかならず言の葉を尽くしたまへど、つれなきは苦しきものと、一節を思し知らせまほしくて、心とけずなりぬ。

年暮れ方には、かからぬ所だに、空のけしき例には似ぬを、荒れぬ日なく降り積む雪に、うち眺めつつ明かし暮らしたまふ心地、尽きせず夢のやうなり。宮よりも、御誦経など、こちたきまで訪らひきこえたまふ。かくてのみやは、新しき年さへ嘆き過ぎさむ、ここかしこにも、おぼつかなくて閉ぢ籠もりたまへることを聞こえたまへば、今はとて帰りたまはむ心地も、たとへむ方なし。かくおはしならひて、人しげかりつる名残なくならむを思ひわぶる人びと、いみじかりし折のさしあたりて悲しかりし騒ぎよりも、うち静まりていみじくおぼゆ。「時々、折ふしをかしやかなるほどに聞こえ交はしたまひし年ごろよりも、かくのどやかにて過ぐしたまへる日ごろの御ありさまはひのなつかしく情け深う、はかなきことにもまめなる方にも、思ひやり多かる御心ばへを、今は限りに見たてまつりさしつること」とおぼほれあへり。

かの宮よりは、「なほかう参り来ることともいと難きを、思ひわびて、近う渡いたてまつるべきことをなむ、たばかり出でたる」と聞こえたまへり。後の宮聞こし召しつけて、中納言もかくおろかならず思ひほれてゐたなるは、げに、おしなべて思ひがたうこそは誰も思さるらめ、と心苦しがりたまひて、二条の

院の西の対に渡いたまで、時々も通ひたまふべく、忍びて聞こえたまひけるは、女一の宮の御方にことよせて思しなるにやと思しながら、おぼつかかなかるまじきはうれしくて、のたまふなりけり。さななりと中納言も聞きたまひて、三条宮も造り果てて、渡いたてまつらむことを思ひしものを、かの御代りにならずらへて見るべかりけるを、など、ひき返し心細し。宮の思し寄るめりし筋は、いと似げなきことに思ひ離れて、おほかたの御後見は、我ならではまた誰かは、と思すとや。

早

蕨

藪し分かねば、春の光を見たまふにつけても、いかでかくながらへにける月日ならむと、夢のやうにのみおぼえたまふ。行き交ふ時々にしたがひ、花鳥の色をも音をも同じ心に起き臥し見つつ、はかなきことをも本末をとりて言ひ交はし、心細き世の憂さもつらさも、うち語らひ合はせきこえしにこそ、慰む方もありしか、をかしきこと、あはれなるふしをも、聞き知る人もなきままに、よろづかきくらし、心一つをくだきて、宮のおはしまさずなりにし悲しさよりも、ややうちまさりて恋しくわびしきに、いかにせむと、明け暮るるも知らず惑はれたまへど、世にとまるべきほどは限りあるわざなりければ、死なれぬもあさまし。

阿闍梨のもとより、

年改まりては、何ごとかおはしますらむ。御祈りはたゆみなく仕うまつりはべり。今は一所の御ことをなむ、安からず念じきこえさする。

など聞こえて、蕨、つくづくし、をかしき籠に入れて、「これは童べの供養じてはべる初穂なり」とてたてまつれり。手はいと悪しうて、歌は、わざとがましくひき放ちてぞ書きたる。

君にとてあまたの春を摘みしかば常を忘れぬ初蕨なり

御前に詠み申さしめたまへ。

とあり。大事と思ひまはして詠み出だしつらむと思せば、歌の心ばへもいとあはれにて、なほざりに、さしも思さぬなめりと見ゆる言の葉を、めでたく好ましげに書き尽くしたまへる人の御文よりは、こよなく目とまりて、涙もこぼるれば、返り事書かせたまふ。

この春は誰れにか見せむ亡き人のかたみに摘める峰の早蕨
使に祿取らせさせたまふ。

早 蕨

いと盛りに匂ひ多くおはする人の、さまさまの御もの思ひに、すこしうち面

瘦せたまへる、いとあてになまめかしきけしきまさりて、昔人にもおぼえたまへり。並びたまへりし折は、とりどりにて、さらに似たまへりとも見えざりしを、うち忘れては、ふとそれかとおぼゆるまでかよひたまへるを、「中納言殿の、骸をだにとどめて見たてまつるものならましかばと、朝夕に恋ひきこえたまふめるに、同じくは、見えたてまつりたまふ御宿世ならざりけむよ」と、見たてまつる人びとは口惜しがる。かの御あたりの人の通ひ来るたよりに、御ありさまは絶えず聞き交はしたまひけり。尽きせず思ひほれたまひて、新しき年ともいはず、いや目になむなりたまへると聞きたまひても、げにうちつけの心浅さにはものしたまはざりけりと、いとど今ぞあはれも深く思ひ知らるる。宮は、おはしますことのいと所狭くありがたければ、京に渡しきこえむと思し立ちにたり。

内宴など、もの騒がしきころ過ぐして、中納言の君、心にあまることをも、また誰れにかは語らはむと思しわびて、兵部卿宮の御方に参りたまへり。しめやかなる夕暮なれば、宮うち眺めたまひて、端近くぞおはしましたしける。箏の御琴かき鳴らしつつ、例の御心寄せなる梅の香をめでおはする、下枝を押し折りて参りたまへる、匂ひのいと艶にめでたきを、折をかしう思して、

折る人の心にかよふ花なれや色には出でず下に匂へる

とのたまへば、

「見る人にかこと寄せける花の枝を心してこそ折るべかりけれ

わづらはしく」と、戯れ交はしたまへる、いとよき御あはひなり。こまやかなる御物語どもになりては、かの山里の御ことをぞ、まづはいかにと、宮は聞こえたまふ。中納言も、過ぎにし方の飽かず悲しきこと、そのかみより今日まで思ひの絶えぬよし、折々につけて、あはれにもをかしくも、泣きみ笑ひみとかいふらむやうに聞こえ出でたまふに、ましてさばかり色めかしく涙もろなる御

癖は、人の御上にてきへ袖もしぼるばかりになりて、かひがひしくぞあひしらひきこえたまふめる。

空のけしきもまた、げにぞあはれ知り顔に霞みわたれる、夜になりて烈しう吹き出づる風のけしき、まだ冬めきていと寒げに、大殿油も消えつつ、闇はあやなきたどたどしきなれど、かたみに聞きさしたまふべくもあらず、尽きせぬ御物語をえはるけやりたまはで、夜もいたう更けぬ。世にためしありがたかりける仲の睦びを、「いで、さりとも、いとさのみはあらざりけむ」と、残りありげに問ひなしたまふぞ、わりなき御心ならひなめるかし。さりながらも、ものに心えたまひて、嘆かしき心のうちもあきらむばかり、かつは慰め、またあはれをもさまし、さまさまに語らひたまふ御さまのをかしきにすかされたてまつりて、げに心にあまるまで思ひ結ぼほるることども、すこしづつ語りきこえたまふぞ、こよなく胸のひまあく心地したまふ。宮も、かの人近く渡しきこえてむとするほどのことども、語らひきこえたまふを、「いとうれしきことにもはべるかな。あいなくみづからの過ちとなむ思うたまへらるる。飽かぬ昔の名残を、また尋ぬべき方はべらねば、おほかたには、何ごとにつけても、心寄せきこゆべき人となむ思うたまふるを、もし便なくや思し召さるべき」とて、かの、異人とな思ひわきそと譲りたまひし心おきてをも、すこしは語りきこえたまへど、岩瀬の森の呼子鳥めいたりし夜のこととは残したりけり。心のうちには、かく慰めがたき形見にも、げにさてこそ、かやうにも扱ひきこゆべかりけれと、悔しきことやうやうまさりゆけど、今はかひなきものゆゑ、常にかうのみ思はば、あるまじき心もこそ出で来れ、誰がためにもあぢきなくをこがましからむと思ひ離る。さてもおはしまさむにつけても、まことに思ひ後見きこえむ方は、また誰れかはと思せば、御渡りのことどもも心まうけさせたまふ。

かしこにも、よき若人童など求めて、人びとは心ゆき顔にいそぎ思ひたれど、

今はとてこの伏見を荒らし果てむもいみじく心細ければ、嘆かれたまふこと尽きせぬを、さりとてもまた、せめて心ごはく、絶え籠もりてもたけかるまじく、浅からぬ仲の契りも絶え果てぬべき御住まひを「いかに思しえたるぞ」とのみ、怨みきこえたまふも、すこしはことわりなれば、いかがすべからむと思ひ乱れたまへり。

如月のついたちごろとあれば、ほど近くなるままに、花の木どものけしきばむも残りゆかしく、峰の霞の立つを見捨てむことも、おのが常世にてだにあらぬ旅寝にて、いかにはしたなく人笑はれなることもこそなど、よろづにつつましく、心一つに思ひ明かし暮らしたまふ。御服も限りあることなれば脱ぎ捨てたまふに、襦も浅き心地ぞする。親一所は、見たてまつらざりしかば、恋しきことは思ほえず、その御代はりにも、この度の衣を深く染めむと心には思しのたまへど、さすがにさるべきゆるぎなきわざなれば、飽かず悲しきこと限りなし。

中納言殿より、御車、御前の人びと、博士などたてまつれたまへり。

はかなしや霞の衣裁ちしまに花のひもとく折も来にけり

げに色々いときよらにてたてまつれたまへり。御渡りのほどの被け物どもなど、ことごとしからぬものから、品々に、こまやかに思しやりつついと多かり。「折につけては、忘れぬさまなる御心寄せのありがたく、はらからなども、えいとかうまではおはせぬわざぞ」など、人びとは聞こえ知らず。あぎやかならぬ古人どもの心には、かかる方を心にしめて聞こゆ。若き人は、時々も見たてまつりならひて、今はと異さまになりたまはむを、さうぎうしく、「いかに恋しくおぼえさせたまはむ」と聞こえあへり。

みづからは、渡りたまはむこと明日とての、まだつとめておはしたり。例の客人居の方におはするにつけても、今はやうやうもの馴れて、我こそ人より先

にかうやうにも思ひそめしかなど、ありしさま、のたまひし心ばへを思ひ出でつつ、さすがにかけ離れ、ことの外にははしたなめたまはざりしを、わが心もてあやしうも隔たりにしかかと、胸いたく思ひ続けられたまふ。垣間見せし障子の穴も思ひ出でらるれば、寄りて見たまへど、この中をば下ろし籠めたれば、いとかひなし。

内にも人びと思ひ出できこえつつうちひそみあへり。中の宮は、ましてよほさるる御涙の川に、明日の渡りもおぼえたまはず、ほれぼれしげにてながめ臥したまへるに、「月ごろの積もりもそこはかとなけれど、いぶせく思うたまへらるるを、片端もあきらめきこえさせて、慰めはべらばや。例のはしたくなさし放たせたまひそ。いとどあらぬ世の心地しはべり」と聞こえたまへれば、「はしたなしと思はれたてまつらむとしも思はねど、いさや、心地も例のやうにもおぼえず、かき乱りつつ、いとどはかばかからぬひがこともやとつつましうて」など、苦しげにおぼいたれど、「いとほし」などこれかれ聞こえて、中の障子の口にて対面したまへり。

いと心恥づかしげになまめきて、またこのたびはねびまさりたまひにけりと、目も驚くまで匂ひ多く、人にも似ぬ用意など、あなめでたの人やとのみ見えたまへるを、姫宮は、面影さらぬ人の御ことをさへ思ひ出できこえたまふに、いとあはれと見たてまつりたまふ。「尽きせぬ御物語なども、今日は言忌すべくや」など言ひさしつつ、「渡らせたまふべき所近く、このころ過ぐして移ろひはべるべければ、夜中暁とつきづきしき人の言ひはべるめる、何事の折にも、疎からず思しのたまはせば、世にはべらむ限りは聞こえさせ承りて過ぐさまほしくなむはべるを、いかがは思し召すらむ。人の心さまぎまにはべる世なれば、あいなくやなど、一方にもえこそ思ひはべらね」と聞こえたまへば、「宿をばかれじと思ふ心深くはべるを、近くなどのたまはするにつけても、よろづに乱

れはべりて、聞こえさせやるべき方もなく」など、所々言ひ消ちて、いみじくものあはれと思ひたまへるけはひなど、いとようおぼえたまへるを、心からよそのものに見なしつると、いと悔しく思ひるたまへれど、かひなければ、その夜のことかけても言はず、忘れにけるにやと見ゆるまで、けぎやかにもてなしたまへり。

御前近き紅梅の色も香もなつかしきに、鶯だに見過ぐしがたげにうち鳴きて渡るめれば、まして「春や昔の」と心を惑はしたまふどちの御物語に、折あはれなりかし。風のさと吹き入るるに、花の香も客人の御匂ひも、橘ならねど昔思ひ出でらるるつまなり。つれづれの紛らはしにも、世の憂き慰めにも、心とどめてもてあそびたまひしものをなど、心にあまりたまへば、

見る人もあらしにまよふ山里に昔おぼゆる花の香ぞする
言ふともなくほのかにて、たえだえ聞こえたるを、なつかしげにうち誦じなして、

袖ふれし梅は変はらぬ匂ひにて根ごめ移ろふ宿やことなる

堪へぬ涙をさまよくのごひ隠して、言多くもあらず。「またもなほかやうにてなむ、何ごとも聞こえさせよかるべき」など聞こえおきて立ちたまひぬ。

御渡りにあるべきことども、人びとにのたまひおく。この宿守に、かの鬢がちの宿直人などはさぶらふべければ、このわたりの近き御荘どもなどに、そのことどもものたまひ預けなど、こまやかなることどもをさへ定めおきたまふ。

弁ぞ、「かやうの御供にも、思ひかけず長き命いとつらくおぼえはべるを、人もゆゆしく見思ふべければ、今は世にあるものとも人に知られはべらじ」とて、かたちも変へてけるを、しひて召し出でて、いとあはれと見たまふ。例の昔物語などせさせたまひて、「ここには、なほ時々は参り来べきを、いとたつきなく心細かるべきに、かくてもものしたまはむは、いとあはれにうれしかるべ

きことになむ」など、えも言ひやらず泣きたまふ。「厭ふにはえて延びはべる命のつらく、またいかにせよとてうち捨てさせたまひけむと恨めしく、なべての世を思ひたまへ沈むに、罪もいかに深くはべらむ」と、思ひけることどもを愁へかけきこゆるも、かたくなしげなれど、いとよく言ひ慰めたまふ。いたくねびにたれど、昔きよげなりける名残を削ぎ捨てたれば、額のほど様変はれるにすこし若くなりて、さる方に雅びかなり。思ひわびては、などかかる様にもなしたてまつらざりけむ、それに延ぶるやうもやあらまし、さてもいかに心深く語らひきこえてあらましなど、一方ならずおぼえたまふに、この人さへうらやましければ、隠ろへたる几帳をすこし引きやりて、こまかにぞ語らひたまふ。げにむげに思ひほけたるさまながら、ものうち言ひたるけしき、用意口惜しからず、ゆゑありける人の名残と見えたり。

さきに立つ涙の川に身を投げば人におくれぬ命ならましとうちひそみ聞こゆ。「それもいと罪深かなることこそ。かの岸に到ること、などか。さしもあるまじきことにてさへ深き底に沈み過ぐさむもあいなし。すべて、なべてむなしく思ひとるべき世になむ」などのたまふ。

「身を投げむ涙の川に沈みても恋しき瀬々に忘れしもせじいかならむ世にすこしも思ひ慰むることありなむ」と、果てもなき心地したまふ。帰らむ方もなく眺められて、日も暮れにけれど、すすろに旅寝せむも、人のとがむることやとあいなければ、帰りたまひぬ。

思ほしのたまへるさまを語りて、弁は、いとど慰めがたくくれ惑ひたり。皆人は心ゆきたるけしきにて、もの縫ひいとなみつつ、老いゆがめるかたちも知らずつくろひさまよふに、いよいよやつして、

人はみないそぎたつめる袖の浦に一人藻塩を垂るる海人かな

と愁へきこゆれば、

「塩垂るる海人の衣に異なれや浮きたる波に濡るるわが袖

世に住みつかむことも、いとありがたかるべきわざとおぼゆれば、さまに従ひてここをば荒れ果てじとなむ思ふを、さらば対面もありぬべけれど、しばしのほども心細くて立ちとまりたまふを見おくに、いとど心もゆかずなむ。かかるかたちなる人も、かならずひたぶるにしも絶え籠もらぬわざなめるを、なほ世の常に思ひなして、時々も見えたまへ」など、いとなつかしく語らひたまふ。

昔の人のもてつかひたまひしさるべき御調度どもなどは、皆この人にとどめおきたまひて、「かく人より深く思ひ沈みたまへるを見れば、前の世も、取り分きたる契りもやものしたまひけむと思ふさへ、睦ましくあはれになむ」とのたまふに、いよいよ童べの恋ひて泣くやうに、心をさめむ方なくおぼほれるたり。皆かき払ひ、よろづとりしたためて、御車ども寄せて、御前の人びと、四位五位いと多かり。御みづからも、いみじうおはしまさまほしけれど、ことごとしくなりて、なかなかあしかるべければ、ただ忍びたるさまにもてなして、心もとなく思さる。中納言殿よりも御前の人数多くたてまつれたまへり。おほかたのことをこそ、宮よりは思しおきつめれ、こまやかなるうちうちの御扱ひは、ただこの殿より、思ひ寄らぬことなく訪らひきこえたまふ。

日暮れぬべしと、内にも外にももよほしきこゆるに、心あわたたしく、いづちならむと思ふにも、いとはかなく悲しとのみ思ほえたまふに、御車に乗る大輔の君といふ人の言ふ、

ありふればうれしき瀬にも逢ひけるを身を宇治川に投げてましかば
うち笑みたるを、弁の尼の心ばへにこよなうもあるかなと、心づきなうも見たまふ。いま一人、

過ぎにしが恋しきことも忘れねど今日はたまづもゆく心かな

いづれも年経たる人びとにて、皆かの御方をば心寄せまほしくきこえためりし

を、今はかく思ひ改めて言忌するも、心憂の世やおぼえたまへば、ものも言はれたまはず。

道のほどの遙けく、はげしき山道のありさまを見たまふにぞ、つらきにのみ思ひなされし人の御仲の通ひを、ことわりの絶え間なりけりと、すこし思し知られける。七日の月のさやかにさし出でたる影、をかしく霞みたるを見たまひつつ、いと遠きに、ならはず苦しければ、うち眺められて、

眺むれば山より出でて行く月も世に住みわびて山にこそ入れ

様変はりて、つひにいかならむとのみあやふく、行く末うしろめたきに、年ごろ何ごとをか思ひけむとぞ、取り返さまほしきや。

宵うち過ぎてぞおはし着きたる。見も知らぬさまに、目もかかやくやうなる殿造りの、三つば四つばなる中に引き入れて、宮、いつしかと待ちおはしましければ、御車のもとにみづから寄せたまひて、下ろしたてまつりたまふ。御しつらひなど、あるべき限りして、女房の局々まで、御心とどめさせたまひけるほどしるく見えて、いとあらまほしげなり。いかばかりのことにかと見えたまへる御ありさまの、にはかにかく定まりたまへば、おぼろけならず思さるることなめりと、世人も心にくく思ひおどろきけり。

中納言は、三条の宮に、この二十余日のほどに渡りたまはむとて、このころは日々におはしつ々見たまふに、この院近きほどなれば、けはひも聞かむとて、夜更くるまでおはしけるに、たてまつれたまへる御前の人びと帰り参りて、ありさまなど語りきこゆ。いみじう御心に入りてもてなしたまふなるを聞きたまふにも、かつはうれしきものから、さすがにわが心ながらをこがましく胸うちつぶれて、ものもがなやと、返す返す独りごたれて、

しなてるや鳩の湖に漕ぐ舟のまほならねどもあひ見しものを

とぞ言ひくたさまほしき。

右の大殿は、六の君を宮にたてまつりたまはむこと、この月にと申し定めた
りけるに、かく思ひの外の人を、このほどより先にと申し顔にかしづき据ゑた
まひて、離れおはすれば、いとものしげに思したりと聞きたまふもいとほしけ
れば、御文は時々たてまつりたまふ。御裳着のこと、世に響きていそぎたまへ
るを、延べたまはむも人笑へなるべければ、二十日あまりに着せたてまつりた
まふ。

同じゆかりにめづらしげなくとも、この中納言をよそ人に譲らむが口惜しき
に、さもやなしてまし、年ごろ人知れぬものに思ひけむ人をも亡くなしても
心細くながめつたまふなるを、など思し寄りて、さるべき人してけしきとらせ
たまひけれど、世のはかなさを目に近く見しに、いと心憂く、身もゆゆしうお
ぼゆれば、いかにもいかにもさやうのありさまはもの憂くなむ、とすさまじげ
なるよし聞きたまひて、いかでか、この君さへ、おほなおほな言出づることを、
もの憂くはもてなすべきぞ、と恨みたまひけれど、親しき御仲らひながらも、
人ぎまのいと心恥づかしげにものしたまへば、えしひてしも聞こえ動かしたま
はざりけり。

花盛りのほど、二条の院の桜を見やりたまふに、主なき宿のまづ思ひやられ
たまへば、「心やすくや」など独りごちあまりて、宮の御もとに参りたまへり。
ここがちにおはしましつきて、いとよう住み馴れたまひにたれば、めやすのわ
ざやと見たてまつるものから、例のいかにぞやおぼゆる心の添ひたるぞあやし
きや。されど、実の御心ばへは、いとあはれにうしろやすくぞ思ひきこえたま
ひける。

何くれと御物語聞こえ交はしたまひて、夕つ方、宮は内へ参りたまはむとて、
御車の装束して、人びと多く参り集まりなどすれば、立ち出でたまひて、対の
御方へ参りたまへり。山里のけはひひきかへて、御簾のうち心にくく住みなし

て、をかしげなる童の透影ほの見ゆるして、御消息聞こえたまへれば、御茵さし出でて、昔の心知れる人なるべし、出で来て、御返り聞こゆ。「朝夕の隔てもあるまじう思うたまへらるるほどながら、そのこととなくて聞こえさせむもなかなかなれなれしきとがめやとつみはべるほどに、世の中変はりにたる心地のみぞしはべるや。御前の梢も霞隔てて見えはべるに、あはれなること多くもはべるかな」と聞こえて、うち眺めてものしたまふけしき、心苦しげなるを、げにおはせましかばおぼつかかなからず行き返り、かたみに花の色、鳥の声をも折につけつつ、すこし心ゆきて過ぐしつべかりける世をなど、思し出づるにつけては、ひたぶるに絶え籠もりたまへりし住まひの心細さよりも、飽かず悲しう、口惜しきことぞいとどまさりける。

人びとも、「世の常に、ことごとしくなもてなしきこえさせたまひそ。限りなき御心のほどをば、今しもこそ、見たてまつり知らせたまふさまをも、見えたとてまつらせたまふべけれ」など聞こゆれど、人伝てならず、ふとさし出で聞こえむことのなほつつましきを、やすらひたまふほどに、宮、出でたまはむとて、御まかり申しに渡りたまへり。いとよらにひきつくろひ化粧じたまひて、見るかひある御さまなり。中納言はこなたになりけりと見たまひて、「なかむげにさし放ちては出だし据ゑたまへる。御あたりには、あまりあやしと思ふまでうしろやすかりし心寄せを、わがためはをこがましきこともやおぼゆれど、さすがにむげに隔て多からむは、罪もこそ得れ。近やかにて、昔物語もち語らひたまへかし」など聞こえたまふものから、「さはありとも、あまり心ゆるびせむも、またいかにぞや。疑はしき下の心にぞあるや」とうち返しのたまへば、一方ならずわづらはしけれど、わが御心にもあはれ深く思ひ知られし人の御心を、今しもおろかなるべきならねば、かの人も思ひのたまふめるやうに、いにしへの御代はりとなずらへきこえて、かう思ひ知りけりと、見えた

てまつるふしもあらばやとは思せど、さすがに、とかくやと、かたがたにやす
からず聞こえなしたまへば、苦しう思されけり。

宿

木

そのころ、藤壺と聞こゆるは、故左大臣殿の女御になむおはしける。まだ春宮と聞こえさせし時、人より先に参りたまひにしかば、睦ましくあはれなる方の御思ひは、ことにものしたまふめれど、そのしるしと見ゆるふしもなくて年経たまふに、中宮には、宮たちさへあまた、ここら大人びたまふめるに、さやうのこともすくなくて、ただ女宮一所をぞ持ちたてまつりたまへりける。わがいと口惜しく人におされたてまつりぬる宿世、嘆かしくおぼゆる代はりに、この宮をだにいかで行く末の心も慰むばかりにて見たてまつらむと、かしづききこえたまふことおろかならず。御かたちもいとをかしくおはすれば、帝もらうたきものに思ひきこえさせたまへり。女一の宮を、世にたぐひなきものにかしづききこえさせたまふに、おほかたの世のおぼえこそ及ぶべうもあらね、うちうちの御ありさまはをさをさ劣らず、父大臣の御勢ひいかめしかりし名残いたく衰へねば、ことに心もとなきことなどなくて、さぶらふ人びとのなり姿よりはじめ、たゆみなく、時々につけつつ調へ好み、今めかしくゆゑゆゑしきさまにもてなしたまへり。

十四になりたまふ年、御裳着せたてまつりたまはむとて、春よりうち始めて、異事なく思し急ぎて、何事もなべてならぬさまにと思しまうく。いにしへより伝はりたりける宝物ども、この折にこそはと探し出でつつ、いみじく営みたまふに、女御、夏ごろ、もののけにわづらひたまひて、いとほかなく亡せたまひぬ。言ふかひなく口惜しきことを内にも思し嘆く。心ばへ情け情けしく、なつかしきところおはしつる御方なれば、殿上人どもも、「こよなくさうぎうしかるべきわがかな」と惜しみきこゆ。おほかたさるまじき際の女官などまで、しのびきこえぬはなし。

宮は、まして若き御心地に心細く悲しく思し入りたるを、聞こし召して、心苦しくあはれに思し召さるれば、御四十九日過ぐるままに忍びて参らせたてま

つらせたまへり。日々に渡らせたまひつつ、見たてまつらせたまふ。黒き御衣にやつれておはするさま、いとどらうたげにあてなるけしきまさりたまへり。心ざまもいとよく大人びたまひて、母女御よりも今すこしづしやかに重りかなるところはまさりたまへるを、うしろやすくは見たてまつらせたまへど、まことには、御母方とても、後見と頼ませたまふべき叔父などやうのはかばかしき人もなし。わづかに大蔵卿、修理大夫などいふは、女御にも異腹なりける。ことに世のおぼえ重りかにもあらず、やむごとなからぬ人びとを頼もし人にておはせむに、女は心苦しきこと多かりぬべきこそいとほしけれなど、御心一つなるやうに思し扱ふもやすからざりけり。

御前の菊移ろひ果てて盛りなるころ、空のけしきのあはれにうちしぐるるにも、まづこの御方に渡らせたまひて、昔のことなど聞こえさせたまふに、御いらへなどもおほどかなるものから、いはけなからずうち聞こえさせたまふを、うつくしく思ひきこえさせたまふ。かやうなる御さまを見知りぬべからむ人もてはやしきこえむも、なかはあらむ、朱雀院の姫宮を、六条の院に譲りきこえたまひし折の定めどもなど、思し召し出づるに、しばしは、いでや飽かずもあるかな、さらでもおはしなましと聞こゆることどもありしかど、源中納言の人よりことなるありさまにて、かくよろづを後見たてまつるにこそ、そのかみの御おぼえ衰へず、やむごとなきさまにてはながらへたまふめれ、さらずは、御心より外なる事どもも出で来て、おのづから人に軽められたまふこともやあらまし、など思し続けて、ともかくも御覧ずる世にや思ひ定めましと思し寄るには、やがてそのついでのままに、この中納言より他に、よろしかるべき人、またなかりけり。宮たちの御かたはらにさし並べたらむに、何事もめざましくはあらずを、もとより思ふ人持たりて、聞きにくきことうちまじくはたあめるを、つひにはさやうのことなくてしもえあらず、さらぬ先に、さもやほの

めかしてましなど、折々思し召しけり。

御碁など打たせたまふ。暮れゆくままに、時雨をかしきほどに、花の色も夕映えしたるを御覧じて、人召して、「ただ今、殿上には誰れ誰れか」と問はせたまふに、「中務の親王、上野の親王、中納言源の朝臣さぶらふ」と奏す。「中納言朝臣こなたへ」と仰せ言ありて参りたまへり。げにかく取り分きて召し出づるもかひありて、遠くより薫れる匂ひよりはじめ、人に異なるさましたまへり。「今日の時雨、常よりことにのどかなるを、遊びなどすさまじき方にて、いとつれづれなるを、いたづらに日を送る戯れにて、これなむよかるべき」とて、碁盤召し出でて、御碁の敵に召し寄す。いつもかやうに気近くならしまつはしたまふにならひにたれば、さにこそはと思ふに、「よき賭物はありぬべけれど、軽々しくはえ渡すまじきを、何をかは」などのたまはする御けしき、いかが見ゆらむ、いとど心づかひしてさぶらひたまふ。さて打たせたまふに、三番に数一つ負けさせたまひぬ。「ねたきわざかな」とて、「まづ今日は、この花一枝許す」とのたまはすれば、御いらへ聞こえさせで、下りておもしろき枝を折りて参りたまへり。

世の常の垣根に匂ふ花ならば心のままに折りて見ましを
と奏したまへる、用意あさからず見ゆ。

霜にあへず枯れにし園の菊なれど残りの色はあせずもあるかな
とのたまはす。

かやうに折々ほのめかさせたまふ御けしきを、人伝てならず承りながら、例の心の癖なれば、急がしくしもおぼえず。いでや、本意にもあらず、さまざまにいとほしき人びとの御ことどもをも、よく聞き過ぐしつつ年経ぬるを、今さらに聖のもの、世に帰り出でむ心地すべきことと思ふも、かつはあやしや、ことさらに心を尽くす人だにこそあなれとは思ひながら、后腹におはせばしも

とおぼゆる心の内ぞ、あまりおほけなかりける。

かかることを、右の大殿ほの聞きたまひて、六の君はさりともこの君にこそは、しぶしぶなりともまめやかに恨み寄らば、つひにはえいなび果てじと思しつるを、思ひの外のこと出で来ぬべかなりとねたく思されければ、兵部卿の宮はた、わざとにはあらねど、折々につけつつをかしきさまに聞こえたまふことなど絶えざりければ、さはれ、なほざりの好きにはありとも、さるべきにて御心とまるやうもなかなからむ、水漏るまじく思ひ定めむとても、なほなほしき際に下らむ、はたいと人わろく、飽かぬ心地すべし、など思しなりにたり。

「女子うしろめたげなる世の末にて、帝だに婿求めたまふ世に、ましてただ人の盛り過ぎむもあいなし」など、そしらはしげにのたまひて、中宮をもまめやかに恨み申したまふことたび重なれば、聞こし召しわづらひて、「いとほしく、かくおほなおほな思ひ心ざして年経たまひぬるを、あやにくに逃れきこえたまはむも情けなきやうならむ。親王たちは、御後見からこそともかくもあれ、上の、御代も末になり行くとのみ思しのたまふめるを、ただ人こそ、ひと事に定まりぬれば、また心を分けむことも難げなめれ。それだに、かの大臣のまめだちながら、こなたかなた羨みなくもてなして、ものしたまはずやはある。まして、これは思ひおきてきこゆることも叶はば、あまたもさぶらはむになどかあらむ」など、例ならず言続けて、あるべかしく聞こえさせたまふを、わが御心にも、もとよりもて離れてはた思さぬことなれば、あながちにはなどてかはあるまじきさまにも聞こえさせたまはむ。ただいとことうるはしげなるあたりにとり籠められて、心やすくならひたまへるありさまの所狭からむことを、なま苦しく思すにも憂きなれど、げにこの大臣にあまり怨ぜられ果てむもあいなからむなど、やうやう思し弱りにたるべし。あだなる御心なれば、かの按察使の大納言の紅梅の御方をもなほ思し絶えず、花紅葉につけてものたまひわ

たりつつ、いづれをもゆかしくは思しけり。されど、その年は変はりぬ。

女二の宮も御服果てぬれば、いとど何事にか憚りたまはむ。さも聞こえ出でばと思し召したる御けしきなど、告げきこゆる人びともあるを、あまり知らず顔ならむもひがひがしうなめげなりと思し起こして、ほのめかしまゐらせたまふ折々もあるに、はしたなきやうはなどてかはあらむ。そのほどに思し定めたなりと伝てにも聞く、みづから御けしきをも見れど、心の内には、なほ飽かず過ぎたまひにし人の悲しさのみ忘るべき世なくおぼゆれば、うたて、かく契り深くものしたまひける人の、などてかはさすがに疎くては過ぎにけむ、と心得がたく思ひ出でらる。口惜しき品なりとも、かの御ありさまにすこしもおぼえたらむ人は、心もとまりなむかし、昔ありけむ香の煙につけてだに、今一たび見たてまつるものにもがなとのみおぼえて、やむごとなき方ざまに、いつしかなど急ぐ心もなし。

右の大殿には急ぎたちて、八月ばかりにと聞こえたまひけり。二条院の対の御方には、聞きたまふに、さればよ、いかでかは、数ならぬありさまなめれば、かならず人笑へに憂きこと出で来むものぞとは、思ふ思ふ過ぎしつる世ぞかし、あだなる御心と聞きわたりしを、頼もしげなく思ひながら、目に近くてはことにつらげなること見えず、あはれに深き契りをのみしたまへるを、にはかに變はりたまはむほどいかかはやすき心地はすべからむ、ただ人の仲らひなどのやうに、いとしも名残なくなどはあらずとも、いかにやすげなきこと多からむ、なほいと憂き身なめれば、つひには山住みに帰るべきなめりと思すにも、やがて跡絶えなましよりは、山賤の待ち思はむも人笑へなりかし。返す返すも、宮ののたまひおきしことに違ひて、草のもとを離れにける心軽さを、恥づかしくもつらくも思ひ知りたまふ。故姫君の、いとしどけなげにもはかなきさまにのみ、何事も思しのたまひしかど、心の底のづしやかなるところはこよなくも

おはしけるかな、中納言の君の、今に忘るべき世なく嘆きわたりたまふめれど、もし世におはせましかば、またかやうに思すことはありもやせまし、それをいと深いいかできはあらじと思ひ入りたまひて、とぎまかうさまにもて離れむことを思して、かたちをも変へてむとしたまひしぞかし、かならずさるさまにてぞおはせまし、今思ふに、いかに重りかなる御心おきてならまし、亡き御影どもも、我をばいかにこよなきあはつけさと見たまふらむと、恥づかしく悲しく思せど、何かは、かひなきものから、かかるけしきをも見えたてまつらむと忍び返して、聞きも入れぬさまにて過ぐしたまふ。

宮は、常よりもあはれになつかしく起き臥し語らひ契りつつ、この世ならず長きことをのみぞ頼めきこえたまふ。さるは、この五月ばかりより、例ならぬさまに悩ましくしたまふこともありけり。こちたく苦しがりなどはしたまはねど、常よりももの参ることいとどなく、臥してのみおはするを、まださやうなる人のありさまよくも見知りたまはねば、ただ暑きころなればかくおはするなめりとぞ思したる。さすがにあやしと思しとがむることもありて、「もし、いかなるぞ。さる人こそ、かやうには悩むなれ」などのたまふ折もあれど、いと恥づかしくしたまひて、さりげなくのみもてなしたまへるを、さし過ぎ聞こえ出づる人もなければ、たしかにもえ知りたまはず。

八月になりぬれば、その日など、他よりぞ伝へ聞きたまふ。宮は、隔てむとにはあらねど、言ひ出でむほど心苦しくいとほしく思されて、さものたまはぬを、女君は、それさへ心憂くおぼえたまふ。忍びたることにもあらず、世の中なべて知りたることを、そのほどなどだにのたまはぬことと、いかが恨めしからざらむ。かく渡りたまひにし後は、ことなることなければ、内に参りたまひても、夜泊ることはことにしたまはず、ここかしの御夜離れなどもなかりつるを、にはかにいかに思ひたまはむと心苦しき紛らはしに、このころは時々御

宿直とて参りなどしたまひつつ、かねてよりならばしきこえたまふをも、ただつらき方にのみぞ思ひおかれたまふべき。

中納言殿も、いといとほしきわざかなと聞きたまふ。花心におはする宮なれば、あはれとは思すとも、今めかしき方にならず御心移ろひなむかし、女方もいとしたたかなるわたりにて、ゆるびなく聞こえまつはしたまはば、月ごろもさもならひたまはで、待つ夜多く過ぎしたまはむこそあはれなるべけれなど、思ひ寄るにつけても、あいなしや、わが心よ、何しに譲りきこえけむ、昔の人に心をしめてし後、おほかたの世をも思ひ離れて澄み果てたりし方の心も濁りそめにしかば、ただかの御ことをのみとぎまかうぎまには思ひながら、さすがに人の心許されであらむことは、初めより思ひし本意なかるべしと憚りつつ、ただいかにしてすこしもあはれと思はれて、うちとけたまへらむけしきをも見むと、行く先のあらましごとのみ思ひ続けしに、人は同じ心にもあらずもてなして、さすがに一方にもえさし放つまじく思ひたまへる慰めに、同じ身ぞと言ひなして、本意ならぬ方におもむけたまひしが、ねたく恨めしかりしかば、まづその心おきてを違へむとて、急ぎせしわざぞかしなど、あながちに女々しくものぐるほしく、率て歩きたばかりきこえしほど思ひ出づるも、いとけしからざりける心かなと、返す返すぞ悔しき。宮もさりとも、そのほどのありさま思ひ出でたまはば、わが聞かむところをもすこしは憚りたまはじやと思ふに、いでや、今はその折のことなど、かけてものたまひ出でざめりかし、なほあだなる方に進み、移りやすなる人は、女のためのみにもあらず、頼もしげなく軽々しき事もありぬべきなめりかしなど、憎く思ひきこえたまふ。わがまことにあまり一方にしみたる心ならひに、人はいとこよなくもどかしく見ゆるなるべし。かの人をむなしく見なしきこえたまうてし後思ふには、帝の御むすめを賜はむと思ほしおきつるも、うれしくもあらず、この君を見ましかばとおぼゆる心の

月日に添へてまさるも、ただかの御ゆかりと思ふに、思ひ離れがたきぞかし、はらからといふ中にも、限りなく思ひ交はしたまへりしものを、今はとなりたまひにし果てにも、とまらむ人を同じごとと思へとて、よろづは思はずなることもなし、ただかの思ひおきてしさまを違へたまへるのみなむ、口惜しう恨めしきふしにて、この世には残るべきとのたまひしものを、天翔りても、かやうなるにつけては、いとどつらしとや見たまふらむなど、つくづくと人やりならぬ独り寝したまふ夜な夜なは、はかなき風の音にも目のみ覚めつつ、来し方行く先、人の上さへあぢきなき世を思ひめぐらしたまふ。

なげのすさびにもものをも言ひ触れ、気近く使ひならしたまふ人びとの中には、おのづから憎からず思さるるもありぬべけれど、まことには心とまるもなきこそ、さはやかなれ。さるは、かの君たちのほどに劣るまじき際の人びとも、時世にしたがひつつ衰へて、心細げなる住まひするなどを、尋ね取りつつあらせなどいと多かれど、今はと世を逃れ背き離れむ時、この人こそと、取り立てて心とまるほだしになるばかりなることはなくて過ぐしてむと思ふ心深かりしを、いとさもわろく、わが心ながらねぢけてもあるかななど、常よりもやがてまどろまず明かしたまへる朝に、霧の籬より、花の色々おもしろく見えわたれる中に、朝顔のはかなげにて混じりたるを、なほことに目とまる心地したまふ。明くる間咲きてとか、常なき世にもなずらふるが、心苦しきなめりかし。格子も上げながら、いとかりそめにうち臥しつつのみ明かしたまへば、この花の開くるほどをも、ただ一人のみ見たまひける。

人召して、「北の院に参らむに、ことごとしからぬ車さし出でさせよ」とのたまへば、「宮は、昨日より内になむおはしますなる。よべ御車率て帰りはべりにき」と申す。「さはれ、かの対の御方の悩みたまふなる、訪らひきこえむ。今日は内に参るべき日なれば、日たけぬさきに」とのたまひて、御装束したま

ふ。出でたまふままに、降りて花の中に混じりたまへるさま、ことさらに艶だち色めきてももてなしたまはねど、あやしくただうち見るになまめかしく恥づかしげにて、いみじくけしきだつ色好みどもになずらふべくもあらず、おのづからをかしくぞ見えたまひける。朝顔引き寄せたまへる、露いたくこぼる。

「今朝の間の色にや賞でむ置く露の消えぬにかかる花と見る見る

はかな」と独りごちて、折りて持たまへり。女郎花をば見過ぎてぞ出でたまひぬる。

明け離るるままに、霧立ち乱る空をかしきに、女どちはしどけなく朝寝したまへらむかし、格子、妻戸うちたたき声づくらむこそ、うひうひしかるべけれ、朝まだきまだき来にけり、と思ひながら、人召して、中門の開きたるより見せたまへば、「御格子ども参りてはべるべし。女房の御けはひもしはべりつ」と申せば、下りて、霧の紛れにさまよく歩み入りたまへるを、宮の忍びたる所より帰りたまへるにやと見るに、露にうちしめりたまへる香り、例のいとさまこととに匂ひ来れば、「なほめざましくはおはすかし。心をあまりをさめたまへるぞにくき」など、あいなく若き人びとは聞こえあへり。おどろき顔にはあらず、よきほどにうちそよめきて、御茵さし出でなどするさまも、いとめやすし。「これにさぶらへと許させたまふほどは、人びとしき心地すれど、なほかかる御簾の前にさし放たせたまへるうれはしきになむ、しばしばもえさぶらはぬ」とのたまへば、「さらば、いかがはべるべからむ」など聞こゆ。「北面などやうの隠れぞかし、かかる古人などのさぶらはむにことわりなる休み所は。それもまた、ただ御心なれば、愁へきこゆべきにもあらず」とて、長押に寄りかかりておはすれば、例の、人びと「なほあしこもとに」などそそのかしきこゆ。もとよりもけはひはやりかに、ををしくなどはものしたまはぬ人柄なるを、いよいよしめやかにもてなしをさめたまへれば、今はみづから聞こえたまふこ

ともやうやう、うたてつつましかりし方すこしづつ薄らぎて、面馴れたまひにたり。「悩ましく思さるらむさまも、いかなれば」など問ひきこえたまへど、はかばかしくもいらへきこえたまはず。常よりもしめりたまへるけしきの心苦しきもあはれにおぼえたまひて、こまやかに、世の中のあるべきやうなどを、はらからやうの者のあらましやうに、教へ慰めきこえたまふ。

声なども、わざと似たまへりともおぼえざりしかど、あやしきまでただそれとのみおぼゆるに、人目見苦しかるまじくは、簾もひき上げてさし向かひきこえまほしく、うち悩みたまへらむかたちゆかしくおぼえたまふも、なほ世の中にも思はぬ人は、えあるまじきわざにやあらむとぞ思ひ知られたまふ。「人びとしくきらきらしき方にははべらずとも、心に思ふことあり、嘆かしく身をもて悩むさまになどはなくて過ぐしつべきこの世と、みづから思ひたまへし。心から悲しきことも、をこがましく悔しきもの思ひをも、かたがたにやすからず思ひはべるこそいとあいなけれ。官位などいひて、大事にすめる、ことわりの愁へにつけて嘆き思ふ人よりも、これや、今すこし罪の深さはまさるらむ」など言ひつつ、折りたまへる花を、扇にうち置きて見るたまへるに、やうやう赤みもて行くも、なかなか色のあはひをかしく見ゆれば、やをらさし入れて、

よそへてぞ見るべかりける白露の契りかおきし朝顔の花

ことさらびてしもてなさぬに、露落とさで持たまへりけるよと、をかしく見ゆるに、置きながら枯るるけしきなれば、

「消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくるる露はなほぞまされる

何にかかれる」といと忍びて言も続かず、つつまじげに言ひ消ちたまへるほど、なほいとよく似たまへるものかなと思ふにも、まづぞ悲しき。

「秋の空は、今すこし眺めのみまさりはべり。つれづれの紛らはしにもと思ひて、先つころ、宇治にもものしてはべりき。庭も籬もまことにいとど荒れ果て

てはべりしに、堪へがたきこと多くなむ。故院の亡せたまひて後、二三年ばかりの末に、世を背きたまひし嵯峨の院にも、六条院にも、さしのぞく人の心をさめむ方なくなむはべりける。木草の色につけても、涙にくれてのみなむ帰りはべりける。かの御あたりの人は、上下心浅き人なくこそはべりけれ、方々集ひものせられける人びとも、皆所々あかれ散りつつ、おのおの思ひ離るる住まひをしたまふめりしに、はかなきほどの女房など、はたまして心をさめむ方なくおぼえけるままに、ものおぼえぬ心にまかせつつ、山林に入り混じり、すずろなる田舎人になりなど、あはれに惑ひ散るこそ多くはべりけれ。さてなかなか皆荒らし果て、忘れ草生ほして後なむ、この右の大臣も渡り住み、宮たちなども方々ものしたまへば、昔に返りたるやうにはべめる。さる世にたぐひなき悲しさと見たまへしことも、年月経れば、思ひ覚ます折の出で来るにこそはと見はべるに、げに限りあるわざなりけりとなむ見えはべる。かくは聞こえさせながらも、かのいにしへの悲しさは、まだいはけなくもはべりけるほどにて、いとさしもしまぬにやはべりけむ。なほこの近き夢こそ、覚ますべき方なく思ひたまへらるるは、同じこと、世の常なき悲しびなれど、罪深き方はまさりてはべるにやと、それさへなむ心憂くはべる」とて泣きたまへるほど、いと心深げなり。

昔の人をいとしも思ひきこえざらむ人だに、この人の思ひたまへるけしきを見むには、すずろにただにもあるまじきを、まして我もものを心細く思ひ乱れたまふにつけては、いとど常よりも、面影に恋しく悲しく思ひきこえたまふ心なれば、今すこしもよほされて、ものもえ聞こえたまはず、ためらひかねたまへるけはひを、かたみにいとあはれと思ひ交はしたまふ。「世の憂きよりはなど、人は言ひしをも、さやうに思ひ比ぶる心もことになくて、年ごろは過ぐしはべりしを、今なむ、なほいかで静かなるさまにても過ぐさまほしく思うたま

ふるを、さすがに心にもかなはざめれば、弁の尼こそうらやましくはべれ。この二十日あまりのほどは、かの近き寺の鐘の声も聞きわたさまほしくおぼえはべるを、忍びて渡させたまひてむやと、聞こえさせばやとなむ思ひはべりつる」とのたまへば、「荒らさじと思すとも、いかでかは。心やすき男だに、行き来のほど荒ましき山道にはべれば、思ひつくなむ月日も隔たりはべる。故宮の御忌日は、かの阿闍梨にさるべきことども皆言ひおきはべりにき。かしこはなほ尊き方に思し譲りてよ。時々見たまふるにつけては、心惑ひの絶えせぬもあいなきに、罪失ふさまになしてばやとなむ思ひたまふるを、またいかが思しおきつらむ。ともかくも定めさせたまはむに従ひてこそはとてなむ。あるべからむやうにのたまはせよかし。何事も疎からず承らむのみこそ、本意のかなふにてははべらめ」など、まめだちたることどもを聞こえたまふ。経仏など、この上も供養じたまふべきなめり。かやうなるついでにことづけて、やをら籠もりるなばやなどおもむけたまへるけしきなれば、「いとあるまじきことなり。なほ何事も、心のどかに思しなせ」と教へきこえたまふ。

日さし上がりて、人びと参り集まりなどすれば、あまり長居もことあり顔ならむによりて、出でたまひなむとて、「いづこにても御簾の外にはならひはべらねば、はしたなき心地しはべりてなむ。今また、かやうにもさぶらはむ」とて立ちたまひぬ。宮の、などか、なき折には来つらむと思ひたまひぬべき御心なるもわづらはしくて、侍の別当なる右京の大夫召して、「よべまかでさせたまひぬと承りて参りつるを、まだしかりければ口惜しきを。内にや参るべき」とのたまへば、「今日は、まかでさせたまひなむ」と申せば、「さらば、夕つ方も」とて出でたまひぬ。

なほ、この御けはひありさまを聞きたまふたびごとに、などて昔の人の御心おきてをもて違へて思ひ隈なかりけむと、悔ゆる心のみまさりて、心にかかり

たるもむつかしく、なぞや、人やりならぬ心ならむと思ひ返したまふ。そのま
まに、また精進にて、いとどただ行なひをのみしたまひつつ、明かし暮らした
まふ。母宮のなほいと若くおほどきてしどけなき御心にも、かかる御けしき
をいとあやふくゆゆしと思して、「いく世しもあらじを、見たてまつらむほど
は、なほかひあるさまにて見えたまへ。世の中を思ひ捨てたまはむをも、かか
るかたちにては、さまたげきこゆべきにもあらぬを、この世の言ふかひなき心
地すべき心惑ひに、いとど罪や得むとおぼゆる」とのたまふが、かたじけなく
いとほしくて、よろづを思ひ消ちつつ、御前にてはもの思ひなきさまを作りた
まふ。

右の大殿には、六条院の東のおとど磨きしつらひて、限りなくよろづを整へ
て待ちきこえたまふに、十六日月やうやうさし上がるまで心もとなければ、い
としも御心に入らぬことにて、いかならむとやすからず思ほして、案内したま
へば、「この夕つ方、内より出でたまひて、二条院になむおはしますなる」と
人申す。思す人持たまへればと心やましけれど、今宵過ぎむも人笑へなるべ
ければ、御子の頭中将して聞こえたまへり。

大空の月だに宿るわが宿に待つ宵過ぎて見えぬ君かな

宮は、なかなか今なむとも見えじ、心苦しと思して、内におはしけるを、御文
聞こえたまへりけり。御返りやいかがありけむ、なほいとあはれに思されけれ
ば、忍びて渡りたまへりけるなりけり。らうたげなるありさまを見捨てて出づ
べき心地もせず、いとほしければ、よろづに契り慰めて、もろともに月を眺め
ておはするほどなりけり。女君は、日ごろもよろづに思ふこと多かれど、いか
でけしきに出ださじと念じ返しつつ、つれなくさ　ましたまふことなれば、こ
とに聞きもとどめぬさまに、おほどかにもてなしておはするけしきいとあはれ
なり。

中将の参りたまへるを聞きたまひて、さすがにかれもいとほしければ、出でたまはむとて、「今いと疾く参り来む。一人月な見たまひそ。心そらなればいと苦しき」と聞こえおきたまひて、なほかたはらいたければ、隠れの方より寝殿へ渡りたまふ、御うしろでを見送るに、ともかくも思はねど、ただ枕の浮きぬべき心地すれば、心憂きものは人の心なりけりと、我ながら思ひ知らる。

幼きほどより心細くあはれなる身どもにて、世の中を思ひとどめたるさまにもおはせざりし人一所を頼みきこえさせて、さる山里に年経しかど、いつとなくつれづれにすぐくありながら、いとかく心にしみて世を憂きものとも思はざりしに、うち続きあさましき御ことどもを思ひしほどは、世にまたとまりて片時経べくもおぼえず、恋しく悲しきことのたぐひあらじと思ひしを、命長くて今までもながらふれば、人の思ひたりしほどよりは、人にもなるやうなるありさまを、長かるべきこととは思はねど、見る限りは憎げなき御心ばへもてなしなるに、やうやう思ふこと薄らぎてありつるを、この折ふしの身の憂さ、はた言はむ方なく、限りとおぼゆるわざなりけり、ひたすら世になくなりたまひにし人びとよりは、さりととも、これは時々もなかはとも思ふべきを、今宵かく見捨てて出でたまふつらさ、来し方行く先皆かき乱り、心細くいみじきが、わが心ながら思ひやる方なく心憂くもあるかな、おのづからならへば、など慰めむことを思ふに、さらに姨捨山の月澄み昇りて、夜更くるままによろづ思ひ乱れたまふ。松風の吹き来る音も、荒ましかりし山おろしに思ひ比ぶれば、いとどこかになつかしくめやすき御住まひなれど、今宵はさもおぼえず、椎の葉の音には劣りて思ほゆ。

山里の松の蔭にもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき
来し方忘れにけるにやあらむ。

老い人どもなど、「今は入らせたまひね。月見るは忌みはべるものを。あさ

ましく、はかなき御くだものをだに御覧じ入れねば、いかにならせたまはむ」と、「あな見苦しや。ゆゆしう思ひ出でらるることもはべるを、いとこそわりなく」とうち嘆きて、「いで、この御ことよ。さりとも、かうておろかにはよもなり果てさせたまはじ。さいへど、もとの心ざし深く思ひそめつる仲は、名残なからぬものぞ」など言ひあへるも、さまざまに聞きにくく、今はいかにもいかにもかけて言はざらなむ、ただにこそ見めと思さるるは、人には言はせじ、我一人怨みきこえむとにやあらむ。「いでや、中納言殿のさばかりあはれなる御心深さを」など、そのかみの人びとは言ひあはせて、「人の御宿世のあやしかりけることよ」と言ひあへり。

宮はいと心苦しく思しながら、今めかしき御心は、いかでめでたきさまに待ち思はれむと心懸想して、えならずたきしめたまへる御けはひ、言はむ方なし。待ちつけきこえたまへる所のありさまも、いとをかしかりけり。人のほど、ささやかにあえかになどはあらで、よきほどになりあひたる心地したまへるを、いかならむ、ものものしくあざやぎて、心ばへもたをやかなる方はなく、ものほりかになどやあらむ、さらばこそ、うたてあるべけれなどは思せど、さやなる御けはひにはあらぬにや、御心ざしおろかなるべくも思されざりけり。秋の夜なれど、更けにしかばにや、ほどなく明けぬ。

帰りたまひても、対へはふともえ渡りたまはず。しばし大殿籠もりて、起きてぞ御文書きたまふ。「御けしきけしうはあらぬなめり」と、御前なる人びとつきじろふ。「対の御方こそ心苦しけれ。天下にあまねき御心なりとも、おのづからけおさるることもありなむかし」など、ただにしもあらず、皆馴れ仕うまつりたる人びとなれば、やすからずうち言ふどももありて、すべてなほ、ねたげなるわざにぞありける。御返りも、こなたにてこそはと思せど、夜のほどおぼつかなきも、常の隔てよりはいかがと心苦しければ、急ぎ渡りたまふ。

寝くたれの御かたち、いとめでたく見所ありて入りたまへるに、臥したるも
うたてあれば、すこし起き上がりておはするに、うち赤みたまへる顔の匂ひな
ど、今朝しもことをかしげさまさりて見えたまふに、あいなく涙ぐまれて、
しばしうちまもりきこえたまふを、恥づかしく思してうつ臥したまへる髪のか
かり髪ざしなど、なほいとありがたげなり。宮もなまはしたなきに、こまやか
なることなどは、ふともえ言ひ出でたまはぬ面隠しにや、「などかくのみ悩ま
しげなる御けしきならむ。暑きほどのこととかのたまひしかば、いつしかと涼
しきほど待ち出でたるも、なほはればしからぬは、見苦しきわざかな。さま
ざまにせさすることも、あやしく駭なき心地こそすれ。さはありとも、修法は
また延べてこそはよからめ。験あらむ僧もがな。なにがし僧都をぞ、夜居にさ
ぶらはすべかりける」などやうなるまめごとをのたまへば、かかる方にも言よ
きは心づきなくおぼえたまへど、むげにいらへきこえざらむも例ならねば、
「昔も、人に似ぬありさまにて、かやうなる折はありしかど、おのづからいと
よくおこたるものを」とのたまへば、「いとよくこそさはやかなれ」とうち笑
ひて、なつかしく愛敬づきたる方は、これに並ぶ人はあらじかしとは思ひなが
ら、なほまたとくゆかしき方の心焦られも立ち添ひたまへるは、御心ざしおろ
かにもあらぬなめりかし。

されど、見たまふほどは変はるけぢめもなきにや、後の世まで誓ひ頼めたま
ふことどもの尽きせぬを聞くにつけても、げにこの世は、短かめる命待つ間も
つらき御心に見えぬべければ、後の契りや違はぬこともあらむと思ふにこそ、
なほこりずまにまたも頼まれぬべけれとて、いみじく念ずべかめれど、え忍び
あへぬにや、今日は泣きたまひぬ。日ごろも、いかでかう思ひけりと見えたて
まつらじと、よろづに紛らはしつるを、さまざまに思ひ集むることし多かれば、
さのみもえもて隠されぬにや、こぼれそめてはえとみにもためらはぬを、いと

恥づかしくわびしと思ひて、いたく背きたまへば、しひてひき向けたまひつつ、「聞こゆるままに、あはれなる御ありさまと見つるを、なほ隔てたる御心こそありけれな。さらずは、夜のほどに思し変はりにたるか」とて、わが御袖して涙を拭ひたまへば、「夜の間の心変はりこそ、のたまふにつけて、推し量られはべりぬれ」とて、すこしほほ笑みぬ。「げに、あが君や、幼なの御もの言ひやな。されどまことには心に隈のなければ、いと心やすし。いみじくことわりして聞こゆとも、いとしるかるべきわざぞ。むげに世のことわりを知りたまはぬこそ、らうたきものからわりなけれ。よし、わが身になしても思ひめぐらしたまへ。身を心ともせぬありさまなり。もし思ふやうなる世もあらば、人にまさりける心ざしのほど、知らせたてまつるべきひとふしなむある。たはやすく言出づべきことにもあらねば、命のみこそ」などのたまふほどに、かしこにたてまつれたまへる御使、いたく酔ひ過ぎにければ、すこし憚るべきことども忘れて、けぎやかにこの南面に参れり。

海人の刈るめづらしき玉藻にかづき埋もれたるを、さなめりと人びと見る。いつのほどに急ぎ書きたまへらむと見るも、やすからずはありけむかし。宮も、あながちに隠すべきにはあらねど、さしぐみはなほいとほしきを、すこしの用意はあれかしとかたはらいたけれど、今はかひなければ、女房して御文とり入れさせたまふ。同じくは、隔てなきさまにもてなし果ててむと思ほして、ひき開けたまへるに、継母の宮の御手なめりと見ゆれば、今すこし心やすくて、うち置きたまへり。宣旨書きにても、うしろめたのわざや。

さかしらはかたはらいたさに、そそのかしはべれど、いと悩ましげにてなむ。

女郎花しをれぞまさる朝露のいかに置きける名残なるらむ

あてやかにをかしく書きたまへり。

「かことがましげなるもわづらはしや。まことは心やすくて、しばしはあらむと思ふ世を、思ひの外にもあるかな」などはのたまへど、また二つとなく、さるべきものに思ひならひたるただ人の仲こそ、かやうなることの恨めしきなども、見る人苦しくはあれ、思へばこれはいと難し。つひにかかるべき御ことなり。宮たちと聞こゆるなかにも、筋ことに世人思ひきこえたれば、いくたりもいくたりも得たまはむことも、もどきあるまじければ、人もこの御方いとほしなども思ひたらぬなるべし。かばかりものものしくかしづき据ゑたまひて、心苦しき方おろかならず思したるをぞ、幸ひおはしけると聞こゆめる。みづからの心にも、あまりにならしたまうて、にはかにはしたなかるべきが嘆かしきなめり。かかる道を、いかなれば浅からず人の思ふらむと、昔物語などを見るにも、人の上にてても、あやしく聞き思ひしは、げにおろかなるまじきわざなりけりと、わが身になりてぞ、何ごとも思ひ知られたまひける。

宮は、常よりもあはれに、うちとけたるさまにもてなしたまひて、むげにもの参らざるこそいとあしけれとて、よしある御くだもの召し寄せ、またさるべき人召して、ことさらに調ぜさせなどしつつ、そそのかしきこえたまへど、いとほるかにのみ思したれば、「見苦しきわざかな」と嘆ききこえたまふに、暮れぬれば、夕つ方寝殿へ渡りたまひぬ。風涼しく、おほかたの空をかしきころなるに、今めかしきにすすみたまへる御心なれば、いとどしく艶なるに、もの思はしき人の御心のうちは、よろづに忍びがたきことのみぞ多かりける。ひぐらしの鳴く声に、山の蔭のみ恋しくて、

おほかたに聞かましもをひぐらしの声恨めしき秋の暮かな

今宵はまだ更けぬに出でたまふなり。御前駆の声の遠くなるままに、海人も釣すばかりになるも、我ながら憎き心かなと、思ふ思ふ聞き臥したまへり。はじめよりも思はせたまひしありさまなどを思ひ出づるも、疎ましきまでおぼゆ。

この悩ましきことも、いかならむとすらむ、いみじく命短き族なれば、かやうならむついでにもや、はかなくなりなむとすらむと思ふには、惜しからねど、悲しくもあり、またいと罪深くもあなるものをなど、まどろまれぬままに思ひ明かしたまふ。

その日は、後の宮悩ましげにおはしますとて、誰も誰も参りたまへれど、御風邪におはしましければ、ことなることもおはしまさずとて、大臣は昼まかたまひにけり。中納言の君誘ひきこえたまひて、一つ御車にてぞ出でたまひにける。今宵の儀式いかならむ、きよらを尽くさむと思すべかめれど、限りあらむかし。この君も、心恥づかしけれど、親しき方のおぼえは、わが方ざまにまたさるべき人もおはせず、ものの榮にせむに、心ことにおはする人なればなめりかし。例ならずいそがしく参でたまひて、人の上に見なしたるを口惜しとも思ひたらず、何やかやともろ心に扱ひたまへるを、大臣は人知れずなまねたしと思しけり。

宵すこし過ぐるほどにおはしましたり。寝殿の南の廂、東に寄りて御座参れり。御台八つ、例の御皿などうるはしげにきよらにて、また小さき台二つに、花足の御皿なども今めかしくせさせたまひて、餅参らせたまへり。めづらしからぬこと書きおくこそ憎けれ。大臣渡りたまひて、「夜いたう更けぬ」と女房してそそのかし申したまへど、いとあざれて、とみにも出でたまはず。北の方の御はらからの左衛門督、藤宰相などばかりものしたまふ。

からうして出でたまへる御さま、いと見るかひある心地す。あるじの頭中将、盃ささげて御台参る。次々の御土器、二たび三たび参りたまふ。中納言のいたく勧めたまへるに、宮すこしほほ笑みたまへり。「わづらはしきわたりを」と、ふさはしからず思ひて言ひしを、思し出づるなめり。されど、見知らぬやうにていとまめなり。東の対に出でたまひて、御供の人びともてはやしたまふ。お

ばえある殿上人どもいと多かり。四位六人は、女の装束に細長添へて、五位十人は三重襲の唐衣、裳の腰も皆けぢめあるべし。六位四人は、綾の細長、袴など。かつは限りあることを飽かず思しければ、ものの色、しぎまなどをぞきよらを尽くしたまへりける。召次、舍人などの中には、乱りがはしきまで、いかめしくなむありける。げにかくにぎははしくはなやかなることは見るかひあれば、物語などにまづ言ひたてたるにやあらむ、されど、詳しくはえぞ数へ立てざりけるとや。

中納言殿の御前の中に、なまおぼえあざやかならぬや、暗き紛れに立ちまじりたりけむ、帰りてうち嘆きて、「わが殿の、などかおいらかに、この殿の御婿にうちならせたまふまじき。あぢきなき御独り住みなりや」と、中門のもとにてつぶやきけるを聞きつけたまひて、をかしとなむ思しける。夜の更けてねぶたきに、かのもてかしづかれつる人びとは、心地よげに酔ひ乱れて寄り臥しぬらむかしと、うらやましきなめりかし。

君は入りて臥したまひて、はしたなげなるわぎかな、ことことしげなるさましたる親の出でゐて、離れぬなからひなれど、これかれ、火明くかかけて、勧めきこゆる盃などを、いとめやすくもてなしたまふめりつるかなと、宮の御ありさまをめやすく思ひ出でたてまつりたまふ。げに我にても、よしと思ふ女子持たらましかば、この宮をおきたてまつりて、内にだにえ参らせざらましと思ふに、誰れも誰れも宮にたてまつらむと心ざしたまへるむすめは、なほ源中納言にこそと、とりどりに言ひならふなるこそ、わがおぼえの口惜しくはあらぬなめりな、さるは、いとあまり世づかず古めきたるものを、など、心おごりせらる。内の御けしきあること、まことに思したたむに、かくのみもの憂くおぼえは、いかがすべからむ、おもだたしきことにはありとも、いかがはあらむ、いかにぞ、故君にいとよく似たまへらむ時に、うれしからむかし、と思ひ寄ら

るるは、さすがにもて離るまじき心なめりかし。

例の、寢覚がちなるつれづれなれば、按察使の君とて、人よりはすこし思ひましたまへるが局におはして、その夜は明かしたまひつ。明け過ぎたらむを、人の咎むべきにもあらぬに、苦しげに急ぎ起きたまふを、ただならず思ふべかめり。

うち渡し世に許しなき関川をみなれそめけむ名こそ惜しけれ
いとほしければ、

深からず上は見ゆれど関川の下の通ひは絶ゆるものかは

深しとのたまはむにてだに頼もしげなきを、この上の浅さは、いとど心やましくおぼゆらむかし。妻戸押し開けて、「まことは、この空見たまへ。いかでかこれを知らず顔にては明かさむとよ。艶なる人まねにてはあらで、いとど明かしがたくなり行く、夜な夜なの寢覚には、この世かの世までなむ思ひやられてあはれなる」など、言ひ紛らはしてぞ出でたまふ。ことにをかしきことの数を尽くさねど、さまのなまめかしき見なしにやあらむ、情けなくなどは人に思はれたまはず。かりそめの戯れ言をも言ひそめたまへる人の、気近くて見たてまつらばやとのみ思ひきこゆるにや、あながちに、世を背きたまへる宮の御方に、縁を尋ねつつ参り集まりてさぶらふも、あはれなることほどほどにつけつつ多かるべし。

宮は、女君の御ありさま昼見きこえたまふに、いとど御心ざしまさりけり。おほきさよきほどなる人の、様体いときよげにて、髪のがりば、頭つきなどぞ、ものよりことにあなめでたと見えたまひける。色あひあまりなるまで匂ひて、ものものしく気高き顔の、まみいと恥づかしげにらうらうじく、すべて何ごとも足らひて、かたちよき人と言はむに飽かぬところなし。二十に一つ二つぞ余りたまへりける。いはけなきほどならねば、片なりに飽かぬところなく、

あぎやかに盛りの花と見えたまへり。限りなくもてかしづきたまへるに、かたほならず。げに親にては、心も惑はしたまひつべかりけり。ただやはらかに愛敬づきらうたきことぞ、かの対の御方はまづ思ほし出でられける。もののためふいらへなども、恥ぢらひたれど、またあまりおぼつかなくはあらず、すべていと見所多く、かどかどしげなり。よき若人ども三十人ばかり、童六人かたほなるなく、装束なども、例のうるはしきことは目馴れて思さるべかめれば、引き違へ心得ぬまでぞ好みそしたまへる。三条殿腹の大君を、春宮に参らせたまへるよりも、この御ことをば、ことに思ひおきてきこえたまへるも、宮の御おぼえありさまからなめり。

かくて後、二条院に、え心やすく渡りたまはず。軽らかなる御身ならねば、思すままに昼のほどなどもえ出でたまはねば、やがて同じ南の町に、年ごろありしやうにおはしまして、暮るれば、またえ引き避きても渡りたまはずなどして、待ち遠なる折々あるを、かからむとすることとは思ひしかど、さしあたりては、いとかくやは名残なかるべき、げに心あらむ人は、数ならぬ身を知らで交じらふべき世にもあらざりけりと、返す返すも山路分け出でけむほど、うつつともおぼえず悔しく悲しければ、なほいかで忍びて渡りなむ、むげに背くさまにはあらずとも、しばし心をも慰めばや、憎げにもてなしなどせばこそ、うたてもあらめなど、心一つに思ひあまりて、恥づかしけれど、中納言殿に文たてまつれたまふ。

一日の御ことをば、阿闍梨の伝へたりしに、詳しく聞きはべりにき。かかる御心の名残なからましかば、いかにいとほしくと思ひたまへらるるにも、おろかならずのみなむ。さりぬべくは、みづからも。

と聞こえたまへり。

陸奥紙に、ひきつくろはずまめだち書きたまへるしも、いとをかしげなり。

宮の御忌日に、例のことどもいと尊くせさせたまへりけるを、喜びたまへるさまの、おどろおどろしくはあらねど、げに思ひ知りたまへるなめりかし。例は、これよりたてまつる御返りをだに、つつましげに思ほして、はかばかしくも続けたまはぬを、「みづから」とさへのたまへるがめづらしくうれしきに、心ときめきもしぬべし。宮の、今めかしく好みたちたまへるほどにて、思しおこたりけるも、げに心苦しく推し量らるれば、いとあはれにて、をかしやかなることもなき御文を、うちも置かずひき返しひき返し見ぬたまへり。御返りは、

承りぬ。一日は、聖だちたるさまにて、ことさらに忍びはべしも、さ思ひたまふるやうはべるころほひにてなむ。名残とのたまはせたるこそ、すこし浅くなりたるやうにと、恨めしく思うたまへらるれ。よろづはさぶらひてなむ。あなかしこ。

と、すくよかに、白き色紙のこはごはしきにてあり。

さてまたの日の夕つ方ぞ渡りたまへる。人知れず思ふ心し添ひたれば、あいなく心づかひいたくせられて、なよよかなる御衣どもを、いとど匂はし添へたまへるは、あまりおどろおどろしきまであるに、丁子染の扇のもてならしたまへる移り香などさへ喩へむ方なくめでたし。

女君も、あやしかりし夜のことなど、思ひ出でたまふ折々なきにしもあらねば、まめやかにあはれなる御心ばへの、人に似ずものしたまふを見るにつけても、さてあらましをとばかりは思ひやしたまふらむ。いはけなきほどにしおはせねば、恨めしき人の御ありさまを思ひ比ぶるには、何事もいとどこよなく思ひ知られたまふにや、常に隔て多かるもいとほしく、もの思ひ知らぬさまに思ひたまふらむなど思ひたまひて、今日は御簾の内に入れたてまつりたまひて、母屋の簾に几帳添へて、我はすこしひき入りて対面したまへり。「わぎと召しとはべらざりしかど、例ならず許させたまへりし喜びに、すなはちも参らまほ

しくはべりしを、宮渡らせたまふと承りしかば、折悪しくやはとて、今日になしはべりにける。さるは、年ごろの心のしるしもやうやうあらはれはべるにや、隔てすこし薄らぎはべりにける御簾の内よ。めづらしくはべるわざかな」とのたまふに、なほいと恥づかしく、言ひ出でむ言葉もなき心地すれど、「一日、うれしく聞きはべりし心の内を、例のただ結ばほれながら過ぐしはべりなば、思ひ知る片端をだにかでかはと、口惜しさに」と、いとつつましげにのたまふが、いたくしぞきて、絶え絶えほのかに聞こゆれば、心もとなくて、「いと遠くもはべるかな。まめやかに聞こえさせ、承らまほしき世の御物語もはべるものを」とのたまへば、げにと思して、すこしみじろき寄りたまふけはひを聞きたまふにも、ふと胸うちつぶるれど、さりげなくいとど静めたるさまして、宮の御心ばへ思はずに浅うおはしけりとおぼしく、かつは言ひも疎め、また慰めも、かたがたにしづしづと聞こえたまひつつおはす。

女君は人の御恨めしきなどは、うち出で語らひきこえたまふべきことにもあらねば、ただ世やは憂きなどやうに思はせて、言少なに紛らはしつつ、山里にあからさまに渡したまへとおぼしく、いとねむごろに思ひてのたまふ。「それはしも、心一つにまかせては、え仕うまつるまじきことにはべり。なほ、宮にただ心うつくしく聞こえさせたまひて、かの御けしきに従ひてなむよくはべるべき。さらずは、すこしも違ひ目ありて、心軽くもなど思しものせむに、いとあしくはべりなむ。さだにあるまじくは、道のほども御送り迎へも、おりたちて仕うまつらむに、何の憚りかははべらむ。うしろやすく人に似ぬ心のほどは、宮も皆知らせたまへり」などは言ひながら、折々は過ぎにし方の悔しさを忘るる折なく、ものにもがなやと、取り返さまほしきとほのめかしつつ、やうやう暗くなりゆくまでおはするに、いとうるさくおぼえて、「さらば、心地も悩ましくのみはべるを、またよろしく思ひたまへられむほどに、何事も」とて、入

りたまひぬるけしきなるが、いと口惜しければ、「きても、いつばかり思し立つべきにか。いとしげくはべし道の草も、すこしうち払はせはべらむかし」と心とりに聞こえたまへば、しばし入りさして、「この月は過ぎぬれば、ついでたちのほどにもとこそは思ひはべれ。ただいと忍びてこそよからめ。何か、世の許しなどことごとしく」とのたまふ声の、いみじくうたげなるかなと、常よりも昔思ひ出でらるるに、えつつみあへで、寄りゐたまへる柱もとの簾の下より、やをらおよびて御袖をとらへつ。

女、さりや、あな心憂と思ふに、何事かは言はれむ、ものも言はでいとど引き入りたまへば、それにつきていと馴れ顔に、なからは内に入りて添ひ臥したまへり。「あらずや。忍びてはよかるべく思すこともありけるがうれしきは、ひが耳か、聞こえさせむとぞ。疎々しく思すべきにもあらぬを、心憂のけしきや」と怨みたまへば、いらへすべき心地もせず、思はずに憎く思ひなりぬるを、せめて思ひしづめて、「思ひの外なりける御心のほどかな。人の思ふらむことよ。あさまし」とあはめて、泣きぬべきけしきなる、すこしはことわりなれば、いとほしけれど、「これは咎あるばかりのことかは。かばかりの対面は、いにしへをも思し出でよかし。過ぎにし人の御許しもありしものを。いとこよなく思しけるこそ、なかなかうたてあれ。好き好きしくめざましき心はあらじと、心やすく思ほせ」とて、いとのだやかにはもてなしたまへれど、月ごろ悔しと思ひわたる心のうちの苦しきまでなりゆくさまを、つくづくと言ひ続けたまひて、許すべきけしきにもあらぬに、せむかたなく、いみじとも世の常なり。なかなかむげに心知らざらむ人よりも、恥づかしく心づきなくて、泣きたまひぬるを、「こはなぞ。あな若々し」とは言ひながら、言ひ知らずうたげに心苦しきものから、用意深く恥づかしげなるけはひなどの、見しほどよりもこよなくねびまさりたまひにけるなどを見るに、心からよそ人にしなして、かくやす

からずものを思ふことと、悔しきにも、またげに音は泣かれけり。

近くさぶらふ女房二人ばかりあれど、すずろなる男のうち入り来たるならばこそは、こはいかなることぞとも参り寄らめ、疎からず聞こえ交はしたまふ御仲らひなめれば、さるやうこそはあらめと思ふに、かたはらいたければ、知らず顔にてやをらしぞきぬるに、いとほしきや。男君は、いにしへを悔ゆる心の忍びがたきなども、いと静めがたかりぬべかめれど、昔だにありがたかりし心の用意なれば、なほいと思ひのままにももてなしきこえたまはざりけり。かやうの筋は、こまかにもえなむまねび続けざりける。かひなきものから、人目のあいなきを思へば、よろづに思ひ返して出でたまひぬ。

まだ宵と思ひつれど、暁近うなりにけるを、見とがむる人もやあらむとわづらはしきも、女の御ためのいとほしきぞかし。悩ましげに聞きわたる御心地はことわりなりけり、いと恥づかしと思したりつる腰のしるしに、多くは心苦しくおぼえてやみぬるかな、例のをこがましの心やと思へど、情けなからむことはなほいと本意なかるべし、またたちまちのわが心の乱れにまかせて、あながちなる心をつかひて後、心やすくしもはあらざらむものから、わりなく忍びありかむほども心尽くしに、女のかたがた思し乱れむことよなど、さかしく思ふにせかれず、今の間も恋しきぞわりなかりける。さらに見ではえあるまじくおぼえたまふも、返す返すあやにくなる心なりや。昔よりはすこし細やぎて、あてにらうたかりつるけはひなどは、立ち離れたりともおぼえず、身に添ひたる心地して、さらに異事もおぼえずなりになり。宇治にいと渡らまほしげに思いためるを、さもや渡しきこえてましまさしに宮は許したまひてむや、さりとして、忍びてはた、いと便なからむ、いかさまにしてかは、人目見苦しからで、思ふ心のゆくべきと、心もあくがれて眺め臥したまへり。

まだいと深き朝に御文あり。例の、うはべはけざやかなる立文にて、

いたづらに分けつる道の露しげみ昔おぼゆる秋の空かな

御けしきの心憂きは、ことわり知らぬつらさのみなむ。聞えさせむ方なく。とあり。御返しなからむも、人の、例ならずと見とがむべきを、いと苦しければ、

承りぬ。いと悩ましくて、え聞こえさせず。

とばかり書きつけたまへるを、あまり言少ななるかなとさうぎうしくて、をかしかりつる御けはひのみ恋しく思ひ出でらる。

すこし世の中をも知りたまへるけにや、さばかりあさましくわりなしとは思ひたまへりつるものから、ひたぶるにいぶせくなどはあらで、いとらうらうじく恥づかしげなるけしきも添ひて、さすがになつかしく言ひこしらへなどして、出だしたまへるほどの心ばへなどを思ひ出づるも、ねたく悲しく、さまさまに心にかかりて、わびしくおぼゆ。何事も、いにしへにはいと多くまさりて思ひ出でらる。何かは、この宮離れ果てたまひなば、我を頼もし人にしたまふべきにこそはあめれ、さても、あらはれて心やすきさまにえあらじを、忍びつつまた思ひます人なき心のとまりにてこそはあらめなど、ただこの事のみつとおぼゆるぞ、けしからぬ心なるや。さばかり心深げにさかしがりたまへど、男といふものの心憂かりけることよ。亡き人の御悲しさは言ふかひなきことにて、いとかく苦しきまではなかりけり。これは、よろづにぞ思ひめぐらされたまひける。「今日は、宮渡らせたまひぬ」など、人の言ふを聞くにも、後見の心は失せて、胸うちつぶれていとうらやましくおぼゆ。

宮は、日ごろになりにはけるは、わが心さへ恨めしく思されて、にはかに渡りたまへるなりけり。何かは、心隔てたるさまにも見えたてまつらじ、山里にと思ひ立つにも、頼もし人に思ふ人も疎ましき心添ひたまへりけり、と見たまふに、世の中いと所狭く思ひなられて、なほいと憂き身なりけりと、ただ消えせ

ぬほどはあるにまかせておいらかならむと思ひ果てて、いとらうたげに、うつくしきさまにもてなしてゐたまへれば、いとどあはれにうれしく思されて、日ごろのおこたりなど、限りなくのたまふ。御腹もすこしふくらかになりたるに、かの恥ぢたまふしるしの帯の引き結はれたるほどなどいとあはれに、まだかかる人を近くても見たまはざりければ、めづらしくさへ思したり。うちとけぬ所にならひたまひて、よろづのこと心やすくなつかしく思さるるままに、おろかならぬ事どもを、尽きせず契りのたまふを聞くにつけても、かくのみ言よきわざにやあらむと、あながちなりつる人の御けしきも思ひ出でられて、年ごろあはれなる心ばへなどは思ひわたりつれど、かかる方ざまにては、あれをもあるまじきことと思ふにぞ、この御行く先の頼めは、いでやと思ひながらも、すこし耳とまりける。

さても、あさましく、たゆめたゆめて入り来たりしほどよ、昔の人に疎くて過ぎにしことなど語りたまひし心ばへは、げにありがたかりけりと、なほうちとくべくはたあらざりけりかし、などいよいよ心づかひせらるるにも、久しくとだえたまはむことはいともの恐ろしかるべくおぼえたまへば、言に出でては言はねど、過ぎぬる方よりはすこしまつはしぎまにもてなしたまへるを、宮はいとど限りなくあはれと思ほしたるに、かの人の御移り香のいと深くしみたまへるが、世の常の香の香に入れたきしめたるにも似ず、しるき匂ひなるを、その道の人にしておはすれば、あやしととがめ出でたまひて、いかなりしことぞとけしきとりたまふに、ことのほかにもて離れぬことにしあれば、言はむ方なくわりなくて、いと苦しと思したるを、さればよ、かならずさることはありなむ、よもただには思はじと思ひわたることぞかし、と御心騒ぎけり。さるは、単衣の御衣なども脱ぎ替へたまひてけれど、あやしく心より外にぞ身にしみにける。「かばかりにては、残りありてしもあらじ」と、よろづに聞きにくくのたまひ

続くるに、心憂くて身ぞ置き所なき。「思ひきこゆるさまことなるものを、我こそ先になど、かやうにうち背く際はことにこそあれ。また御心おきたまふばかりのほどやは経ぬる。思ひの外に憂かりける御心かな」と、すべてまねぶべくもあらずいとほしげに聞こえたまへど、ともかくもいらへたまはぬさへいとねたくて、

また人に馴れける袖の移り香をわが身にしめて恨みつるかな

女は、あさましくのたまひ続くるに、言ふべき方もなきを、いかがはとて、

みなれぬる中の衣と頼めしをかばかりにてやかかけ離れなむ

とてうち泣きたまへるけしきの、限りなくあはれなるを見るにも、かかればぞかしといと心やましくて、我もほろほろとこぼしたまふぞ、色めかしき御心なるや。まことに、いみじき過ちありとも、ひたぶるにはえぞ疎み果つまじく、らうたげに心苦しきさまのしたまへれば、えも怨み果てたまはず、のたまひさしつ、かつはこしらへきこえたまふ。

またの日も、心のどかに大殿籠もり起きて、御手水、御粥などもこなたに参らす。御しつらひなども、さばかりかかやくばかり高麗唐土の錦綾を裁ち重ねたる目移しには、世の常にうち馴れたる心地して、人びとの姿も、萎えばみたるうち混じりなどして、いと静かに見まはさる。君はなよやかなる薄色どもに、撫子の細長重ねて、うち乱れたまへる御さまの、何事もいとうるはしくことことしきまで盛りなる人の御装ひ何くれに思ひ比ぶれど、気劣りてもおぼえず、なつかしくをかききも、心ぎしのおろかならぬに恥なきなめりかし。まろにうつくしく肥えたりし人の、すこし細やぎたるに、色はいよいよ白くなりて、あてにをかしげなり。かかる御移り香などのいちじるからぬ折だに、愛敬づきらうたきところなどの、なほ人には多くまさりて思さるるままには、これをはらからなどにはあらぬ人の気近く言ひかよひて、事に触れつつ、おのづから声け

はひをも聞き見馴れむは、いかでかただにも思はむ、かならずしか思しぬべきことなるをと、わがいと隈なき御心ならひに思し知らるれば、常に心をかけて、しるきさまなる文などやあると、近き御厨子、小唐櫃などやうのものをも、さりげなくて探したまへど、さるものもなし。ただいとすぐよかに言少なにてなほなほしきなどぞ、わぎともなけれど、ものにとりませなどしてもあるを、あやし、なほいとかうのみはあらじかし、と疑はるるに、いとど今日はやすからず思さるる、ことわりなりかし。かの人のけしきも、心あらむ女のははれと思ひぬべきを、などでかは、ことの他にはさし放たむ、いとよきあはひなれば、かたみにぞ思ひ交はすらむかし、と思ひやるぞ、わびしく腹立たしくねたかりける。なほいとやすからざりければ、その日もえ出でたまはず。六条院には、御文をぞ二たび三たびたてまつりたまふを、「いつのほどに積もる御言の葉ならむ」とつぶやく老い人どもあり。

中納言の君は、かく宮の籠もりおはするを聞くにしも、心やましくおぼゆれど、わりなしや、これはわが心のをこがましくあしきぞかし、うしろやすくと思ひそめてしあたりのことを、かくは思ふべしや、としひてぞ思ひ返して、さはいへどえ思し捨てぎめりかしとうれしくもあり、人びとのけはひなどの、なつかしきほどに萎えばみためりしをと思ひやりたまひて、母宮の御方に参りたまひて、「よろしきまうけのものどもやさぶらふ。使ふべきこと」など申したまへば、「例の、立たむ月の法事の料に、白きものどもやあらむ。染めたるなどは、今はわぎともしおかぬを、急ぎてこそせさせめ」とのたまへば、「何か。こととしき用にもはべらず。さぶらはむにしたがひて」とて、御匣殿などに問はせたまひて、女の装束どもあまたくだりに、細長どもも、ただあるにしたがひて、ただなる絹、綾などとり具したまふ。みづからの御料と思しきには、わが御料にありける紅の擣目なべてならぬに、白き綾どもなど、あまた重ねた

まへるに、袴の具はなかりけるに、いかにしたりけるにか、腰の一つあるを、引き結び加へて、

結びける契りことなる下紐をただ一筋に恨みやはする

大輔の君とて、大人しき人の、睦ましげなるにつかはす。「とりあへぬさまの見苦しきを、つきづきしくもて隠して」などのたまひて、御料のは、しのびやかなれど、箱にて包みも異なり。御覽ぜさせねど、さきざきもかやうなる御心しらは常のことにて目馴れにたれば、けしきばみ返しなどひこしろふべきにもあらねば、いかがとも思ひわづらはで、人びとにとり散らしなどしたれば、おのおのさし縫ひなどす。若き人びとの、御前近く仕うまつるなどをぞ、取り分きては繕ひたつべき。下仕へどもの、いたく萎えばみたりつる姿どもなどに、白き裕などにて、掲焉ならぬぞなかなかめやすかりける。

誰かは、何事をも後見かしづききこゆる人のあらむ。宮は、おろかならぬ御心ざしのほどにて、よろづをいかでと思しおきてたれど、こまかなるうちうちのことまでは、いかがは思し寄らむ。限りもなく人にのみかしづかれてならはせたまへれば、世の中うちあはずさびしきこと、いかなるものとも知りたまはぬ、ことわりなり。艶にそぞろ寒く、花の露をもてあそびて世は過ぐすべきものと思したるほどよりは、思す人のためなれば、おのづから折節につけつつ、まめやかなることまでも扱ひ知らせたまふこそ、ありがたくめづらかなることなめれば、「いでや」など、そしらはしげに聞こゆる御乳母などもありけり。童べなどの、なりあぎやかならぬ、折々うち混じりなどしたるをも、女君はいと恥づかしく、なかなかなる住まひにもあるかななど、人知れずは思すことなきにしもあらぬに、ましてこのころは、世に響きたる御ありさまのはなやかさに、かつは宮のうちの人の見思はむことも、人げなきことと、思し乱るることも添ひて嘆かしきを、中納言の君はいとよく推し量りきこえたまへば、疎から

むあたりには、見苦しくくだしかりぬべき心しらひのさまも、あなづるとはなけれど、何かは、ことごとしくしたて顔ならむも、なかなかおぼえなく見とがむる人やあらむと思すなりけり。今ぞまた、例のめやすきさまなるものどもなどせさせたまひて、御小桂織らせ、綾の料賜はせなどしたまひける。この君しもぞ、宮に劣りきこえたまはず、さま異にかしづきたてられて、かたはなるまで心おごりもし、世を思ひ澄まして、あてなる心ばへはこよなけれど、故親王の御山住みを見そめたまひしよりぞ、さびしき所のあはれさはさま異なりけりと、心苦しく思されて、なべての世をも思ひめぐらし、深き情けをもならひたまひにける。いとほしの人ならはしや、とぞ。

かくて、なほ、いかでうしろやすく大人しき人にてやみなむと思ふにもしたがはず、心にかかりて苦しければ、御文などをありしよりはこまやかにて、ともすれば、忍びあまりたるけしき見せつつ聞こえたまふを、女君いとわびしきこと添ひたる身と思し嘆かる。ひとへに知らぬ人なれば、あなものぐるほしとはしたなめさし放たむにもやすかるべきを、昔よりさま異なる頼もし人にならひ来て、今さらに仲あしくならむも、なかなか人目あしかるべし、さすがにあさはかにもあらぬ御心ばへありさまの、あはれを知らぬにはあらず、さりとして、心交はし顔にあひしらはむもいとつつましく、いかがはすべからむと、よろづに思ひ乱れたまふ。さぶらふ人びとも、すこしもの言ふかひありぬべく若やかなるは皆あたらし、見馴れたるとは、かの山里の古女ばらなり。思ふ心をも同じ心になつかしく言ひあはすべき人のなきままには、故姫君を思ひ出できこえたまはぬ折なし。おはせましかば、この人もかかる心を添へたまはましやと、いと悲しく、宮のつらくなりたまはむ嘆きよりも、このこといと苦しくおぼゆ。

男君も、しひて思ひわびて、例のしめやかなる夕つ方おはしたり。やがて端

に御茵さし出でさせたまひて、「いと悩ましきほどにてなむ、え聞こえさせぬ」と、人して聞こえ出だしたまへるを聞くに、いみじくつらくて涙落ちぬべきを、人目につつめば、しひて紛らはして、「悩ませたまふ折は、知らぬ僧なども近く参り寄るを、医師などのつらにても、御簾の内にはさぶらふまじくやは。かく人伝てなる御消息なむ、かひなき心地する」とのたまひて、いとものしげなる御けしきなるを、一夜もののけしき見し人びと、「げにいと見苦しくはべるめり」とて、母屋の御簾うち下ろして、夜居の僧の座に入れたてまつるを、女君、まことに心地もいと苦しけれど、人のかく言ふに掲焉にならむも、またいかがとつつましければ、もの憂ながらすこしゐざり出でて、対面したまへり。

いとほのかに、時々ものたまふ御けはひの、昔人の悩みそめたまへりしころまづ思ひ出でらるるも、ゆゆしく悲しくて、かきくらす心地したまへば、とみにもの言はれず、ためらひてぞ聞こえたまふ。こよなく奥まりたまへるもいとつらくて、簾の下より几帳をすこしおし入れて、例のなれなれしげに近づき寄りたまふがいと苦しければ、わりなしと思して、少将といひし人を近く呼び寄せて、「胸なむ痛き。しばしおさへて」とのたまふを聞きて、「胸はおさへたるはいと苦しくはべるものを」とうち嘆きて、ゐ直りたまふほども、げにぞしたやすからぬ。「いかなれば、かくしも常に悩ましきは思さるらむ。人に問ひはべりしかば、しばしこそ心地はあしかなれ、さてまた、よろしき折ありなどこそ教へはべしか。あまり若々しくもてなさせたまふなめり」とのたまふに、いと恥づかしくて、「胸はいつともなくかくこそははべれ、昔の人も、さこそはものしたまひしか。長かるまじき人のするわざとか、人も言ひはべるめる」とぞのたまふ。げに、誰も千年の松ならぬ世をと思ふには、いと心苦しくあはれなれば、この召し寄せたる人の聞かむもつつまれず、かたはらいたき筋のこゝとをこそ選りとどむれ、昔より思ひきこえしきまなどを、かの御耳一つには心

得させながら、人はかたはにも聞くまじきさまに、さまよくめやすくぞ言ひなしたまふを、げにありがたき御心ばへにもと聞きるたりけり。

何事につけても、故君の御事をぞ尽きせず思ひたまへる。「いはけなかりしほどより世の中を思ひ離れてやみぬべき心づかひをのみならひはべしに、さるべきにやはべりけむ、疎きものからおろかならず思ひそめきこえはべりしひとふしに、かの本意の聖心はさすがに違ひやしにけむ。慰めばかりに、ここにもかしこにも行きかかずらひて、人のありさまを見むにつけて、紛るることもやあらむなど思ひ寄る折々はべれど、さらに他さまにはなびくべくもはべらざりけり。よろづに思ひたまへわびては、心の引く方の強からぬわざなりければ、好きがましきやうに思さるらむと恥づかしけれど、あるまじき心にかけてもあるべくはこそめざましからめ、ただかばかりのほどにて、時々思ふことをも聞こえさせ承りなどして、隔てなくのたまひかよはむを、誰れかはとがめ出づべき。世の人に似ぬ心のほどは、皆人にもどかるまじくはべるを、なほうしろやすく思したれ」など、怨み泣きみ聞こえたまふ。「うしろめたく思ひきこえは、かくあやしと人も見思ひぬべきまでは聞こえはべるべくや。年ごろこなたかなたにつけつつ、見知ることどものはべりしかばこそ、さま異なる頼もし人にて、今はこれよりなどおどろかしきこゆれ」とのたまへば、「さやうなる折もおぼえはべらぬものを、いとかしこきことに思しおきてのたまはするや。この御山里出で立ち急ぎに、からうして召し使はせたまふべき。それも、げに御覧じ知る方ありてこそはと、おろかにやは思ひはべる」などのたまひて、なほいとも

の恨めしげなれど、聞く人あれば、思ふままにもいかでかは続けたまはむ。

外の方を眺め出だしたれば、やうやう暗くなりたるに、虫の声ばかり紛れなくて、山の方小暗く、何のあやめも見えぬに、いとしめやかなるさまして寄りみたまへるも、わづらはしとのみ内には思さる。「限りだにある」など忍び

やかにうち誦じて、「思うたまへわびにてはべり。音無の里求めまほしきを、かの山里のわたりに、わぎと寺などはなくとも、昔おぼゆる人形をも作り、絵にもかきとりて、行なひはべらむとなむ思うたまへなりにたる」とのたまへば、「あはれなる御願ひに、またうたて御手洗川近き心地する人形こそ、思ひやりいとほしくはべれ。黄金求むる絵師もこそなど、うしろめたくぞはべるや」とのたまへば、「そよ。その匠も絵師も、いかでか心には叶ふべきわざならむ。近き世に花降らせたる匠もはべりけるを、さやうならむ変化の人もがな」と、とぎまかうぎまに忘れむ方なきよしを、嘆きたまふけしきの心深げなるもいとほしくて、今すこし近くすべり寄りて、「人形のついでに、いとあやしく思ひ寄るまじきことをこそ思ひ出ではべれ」とのたまふけはひのすこしなつかしきも、いとうれしくあはれにて、「何ごとにか」と言ふままに、几帳の下より手を捉ふれば、いとうるさく思ひなるれど、いかさまにして、かかる心をやめて、なだらかにあらむと思へば、この近き人の思はむことのあいなくて、さりげなくもてなしたまへり。

「年ごろは、世にやあらむとも知らざりつる人の、この夏ごろ、遠き所よりものして尋ね出でたりしを、疎くは思ふまじけれど、またうちつけに、さしも何かは睦び思はむと思ひはべりしを、さいつころ来たりしこそ、あやしきまで昔人の御けはひにかよひたりしかば、あはれにおぼえなりにしか。形見など、かう思ひのたまふめるは、なかなか何事もあさましくもて離れたりとなむ、見る人びとも言ひはべりしを、いとさしもあるまじき人の、いかでかはさはありけむ」とのたまふを、夢語りかとまで聞く。「さるべきゆゑあればこそは、さやうにも睦びきこえらるらめ。などか、今までかくもかすめさせたまはざらむ」とのたまへば、「いさや、そのゆゑも、いかなりけむこととも思ひ分かれはべらず。ものはかなきありさまどもにて世に落ちとまりさすらへむとすらむこと

とのみ、うしろめたげに思したりしことどもを、ただ一人かき集めて思ひ知られはべるに、またあいなきことをさへうち添へて、人も聞き伝へむこそ、いとほしかるべけれ」とのたまふけしき見るに、宮の忍びてものなどのたまひけむ人の、忍草摘みおきたりけるなるべしと見知りぬ。

似たりとのたまふゆかりに耳とまりて、「かばかりにては、同じくは言ひ果てさせたまうてよ」といぶかしがりたまへど、さすがにかたはらいたくて、えこまかにも聞こえたまはず。「尋ねむと思す心あらば、そのわたりとは聞こえつべけれど、詳しくしもえ知らずや。またあまり言はば、心劣りもしぬべきことになむ」とのたまへば、「世を海中にも、魂のありか尋ねには、心の限り進みぬべきを、いとさまで思ふべきにはあらざなれど、いとかく慰めむ方なきよりはと思ひ寄りはべる人形の願ひばかりには、などかは山里の本尊にも思ひはべらざらむ。なほ確かにのたまはせよ」と、うちつけに責めきこえたまふ。

「いさや、いにしへの御ゆるしもなかりしことを、かくまで漏らしきこゆるも、いと口軽けれど、変化の匠求めたまふいとほしきにこそ、かくも」とて、「いと遠き所に年ごろ経にけるを、母なる人のうれはしきことに思ひて、あながちに尋ね寄りしを、はしたなくもえいらへではべりしに、ものしたりしなり。ほのかかりしかばにや、何事も思ひしほどよりは見苦しからずなむ見えし。これをいかさまにもてなさむと嘆くめりしに、仏にならむは、いとこよなきことにこそはあらめ、さまではいかでかは」など聞こえたまふ。

さりげなくて、かくうるさき心を、いかで言ひ放つわざもがなと思ひたまへると見るはつらけれど、さすがにあはれなり。あるまじきこととは深く思ひたまへるものから、蹟証にはしたなきさまにはえもてなしたまはぬも、見知りたまへるにこそはと思ふ心ときめきに、夜もいたく更けゆくを、内には人目いとかたはらいたくおぼえたまひて、うちたゆめて入りたまひぬれば、男君、こと

わりとは返す返す思へど、なほいと恨めしく口惜しきに、思ひ静めむ方もなき心地して、涙のこぼるるも人わろければ、よろづに思ひ乱るれど、ひたぶるにあさはかならむもてなし、はたなほいとうたて、わがためもあいなかるべければ、念じ返して、常よりも嘆きがちにて出でたまひぬ。

かくのみ思ひては、いかがすべからむ、苦しくもあるべきかな、いかにしてかは、おほかたの世にはもどきあるまじきさまにて、さすがに思ふ心の叶ふわざをすべからむなど、おりたちて練じたる心ならねばにや、わがため人のためも心やすかるまじきことを、わりなく思ひ明かすに、似たりとのたまひつる人も、いかでかは真かとは見るべき、さばかりの際なれば、思ひ寄らむに難くはあらずとも、人の本意にもあらずは、うるさくこそあるべけれなど、なほそなたぎまには心も立たず。

宇治の宮を久しく見たまはぬ時は、いとど昔遠くなる心地して、すずろに心細ければ、九月二十余日ばかりにおはしたり。いとどしく風のみ吹き払ひて、心すごく荒ましげなる水の音のみ宿守にて、人影もことに見えず。見るにはまづかきくらし、悲しきことぞ限りなき。弁の尼召し出でたれば、障子口に、青鈍の几帳さし出でて参れり。「いとかしこけれど、ましていと恐ろしげにはべれば、つつましくてなむ」と、まほには出で来ず。「いかに眺めたまふらむと思ひやるに、同じ心なる人もなき物語も聞こえむとてなむ。はかなくも積もる年月かな」とて、涙を一目浮けておはするに、若い人はいとどさらにせきあへず。「人の上にて、あいなくものを思すめりしころの空ぞかしと思ひたまへ出づるに、いつとはべらぬなるにも、秋の風は身にしみてつらくおぼえはべりて、げにかの嘆かせたまふめりしもしるき世の中の御ありさまを、ほのかに承るも、さまざまになむ」と聞こゆれば、「とあることもかかるとも、ながらふれば直るやうもあるを、あぢきなく思ししみけむこそ、わが過ちのやうになほ悲し

けれ。このころの御ありさまは、何か、それこそ世の常なれ。されどうしろめたげには見えきこえざめり。言ひても言ひても、むなしき空に昇りぬる煙のみこそ、誰も逃れぬことながら、後れ先だつほどは、なほいと言ふかひなかりけり」とても、また泣きたまひぬ。

阿闍梨召して、例の、かの忌日の経仏などのごのたまふ。さて「ここに時々ものするにつけても、かひなきことのやすからずおぼゆるがいと益なきを、この寝殿こぼちて、かの山寺のかたはらに堂建てむとなむ思ふを、同じくは疾く始めてむ」とのたまひて、堂いくつ、廊ども、僧房などあるべきことども書き出でのたまひせさせたまふを、「いと尊きこと」と聞こえ知らず。「昔の人の、ゆゑある御住まひに占め造りたまひけむ所をひきこぼたむ、情けなきやうなれど、その御心ざしも功德の方には進みぬべく思しけむを、とまりたまはむ人びと思しやりて、えさはおきてたまはざりけるにや。今は兵部卿宮の北の方こそは知りたまふべければ、かの宮の御料とも言ひつべくなりたり。されば、ここながら寺になさむことは便なかるべし。心にまかせてさもえせじ。所のさまもあまり川づら近く、顕証にもあれば、なほ寝殿を失ひて、異さまにも造り變へむの心にてなむ」とのたまへば、「とぎまかうさまに、いともかしこく尊き御心なり。昔、別れを悲しびて、骨を包みてあまたの年首に掛けてはべりける人も、仏の御方便にてなむ、かの骨の袋を捨てて、つひに聖の道にも入りはべりにける。この寝殿を御覧するにつけて、御心動きおはしますらむ、一つにはたいだいしきことなり。また、後の世の勧めともなるべきことにはべりけり。急ぎ仕うまつるべし。暦の博士はからひ申してはべらむ日を承りて、もののゆゑ知りたらむ匠二三人を賜はりて、こまかなることどもは、仏の御教へそのままに仕うまつらせはべらむ」と申す。とかくのたまひ定めて、御莊の人ども召して、このほどのことども、阿闍梨の言はむままにすべきよしなど仰せたまふ。

はかなく暮れぬれば、その夜はとどまりたまひぬ。

このたびばかりこそ見めと思して、立ちめぐりつつ見たまへば、仏も皆かの寺に移してければ、尼君の行なひの具のみあり。いとはかなげに住まひたるを、あはれに、いかにして過ぐすらむと見たまふ。「この寝殿は、変へて造るべきやうあり。造り出でむほどは、かの廊にもものしたまへ。京の宮にとり渡さるべきものなどあらば、荘の人召して、あるべからむやうにもものしたまへ」など、まめやかなることどもを語らひたまふ。他にては、かばかりにさだ過ぎなむ人を、何かと見入れたまふべきにもあらねど、夜も近く臥せて、昔物語などせさせたまふ。故権大納言の君の御ありさまも、聞く人なきに心やすくて、いとこまやかに聞こゆ。「今はとなりたまひしほどに、めづらしくおはしますらむ御ありさまを、いぶかしきものに思ひきこえさせたまふめりし御けしきなどの、思ひたまへ出でらるるに、かく思ひかけはべらぬ世の末に、かくて見たてまつると、うれしくも悲しくも思ひたまへられはべる。心憂き命のほどにて、さまざまのこを見たまへ過ぐし、思ひたまへ知りはべるなむ、いと恥づかしく心憂くはべる。宮よりも、時々は参りて見たてまつれ、おぼつかなく絶え籠もり果てぬるは、こよなく思ひ隔てけるなめりなどのたまはする折々はべれど、ゆゆしき身にてなむ、阿弥陀仏より他には、見たてまつらまほしき人もなくなりてはべる」など聞こゆ。故姫君の御ことども、はた尽きせず、年ごろの御ありさまなど語りて、何の折何とのたまひし、花紅葉の色を見ても、はかなく詠みたまひける歌語りなどを、つきなからず、うちわななきたれど、こめかしく言少ななるものから、をかしかりける人の御心ばへかなとのみ、いとど聞き添へたまふ。宮の御方は、今すこし今めかしきものから、心許さざらむ人のために、はしたなくもてなしたまひつべくこそものしたまふめるを、我にはいと心

深く情け情けしとは見えて、いかで過ごしてむとこそ思ひたまへれなど、心のうちに思ひ比べたまふ。

さて、もののついでに、かの形代のことを言ひ出でたまへり。「京に、このころはべらむとはえ知りはべらず。人づてに承りしことの筋ななり。故宮の、まだかかる山里住みもしたまはず、故北の方の亡せたまへりけるほど近かりけるころ、中将の君とてさぶらひける上臈の、心ばせなどもけしうはあらざりけるを、いと忍びてはかなきほどにものたまはせける、知る人もはべらざりけるに、女子をなむ産みてはべりけるを、さもやあらむと思すことありけるかに、あいなくわづらはしくものしきやうに思しなりて、またとも御覧じ入ることなかりけり。あいなくそのことに思し懲りて、やがておほかた聖にならせたまひにけるを、はしたなく思ひてえさぶらはずなりにけるが、陸奥の国の守の妻になりたりけるを、一年上りて、その君平らかにものしたまふよし、このわたりにもほのめかし申したりけるを、聞こしめしつけて、さらにかかる消息あるべきことにもあらずとのたまはせ放ちければ、かひなくてなむ嘆きはべりける。さてまた、常陸になりて下りはべりにけるが、この年ごろ音にも聞こえたまはざりつるが、この春上りて、かの宮には尋ね参りたりけるとなむ、ほのかに聞きはべりし。かの君の年は、二十ばかりになりたまひぬらむかし。いとうつくしく生ひ出でたまふがかなしきなどこそ、中ごろは、文にさへ書き続けてはべめりしか」と聞こゆ。

詳しく聞きあきらめたまひて、さらば、まことにてもあらむかし、見ばやと思ふ心出で来ぬ。「昔の御けはひに、かけても触れたらむ人は、知らぬ国までも尋ね知らまほしき心あるを、数まへたまはざりけれど、近き人にこそはあれ。わざとはなくとも、このわたりにおとなふ折あらむついでに、かくなむ言ひしと伝へたまへ」などばかりのたまひおく。「母君は、故北の方の御姪なり。

弁も離れぬ仲らひにはべるべきを、そのかみは他々にはべりて、詳しくも見たまへ馴れざりき。さいつころ、京より大輔がもとより申したりしは、かの君なむ、いかでかの御墓にだに参らむと、のたまふなる、さる心せよなどはべりしかど、まだここにさしはへてはおとなはずはべめり。今さらば、さやのついでに、かかる仰せなど伝へはべらむ」と聞こゆ。

明けぬれば、帰りたまはむとて、よべ後れて持て参れる絹、綿などやうのもの、阿闍梨に贈らせたまふ。尼君にも賜ふ。法師ばら、尼君の下衆どもの料にとて、布などいふものをさへ召して賜ぶ。心細き住まひなれど、かかる御訪らひたゆまざりければ、身のほどにはめやすく、しめやかにてなむ行なひける。木枯しの堪へがたきまで吹きとほしたるに、残る梢もなく散り敷きたる紅葉を踏み分けける跡も見えぬを見渡して、とみにもえ出でたまはず。いとけしきある深山木に宿りたる鳶の色ぞまだ残りたる、「こだに」などすこし引き取らせたまひて、宮へと思しくて、持たせたまふ。

宿り木と思ひ出でずは木のもとの旅寝もいかにさびしからましと独りごちたまふを聞きて、尼君、

荒れ果つる朽木のもとを宿りきと思ひおきけるほどの悲しさ

あくまで古めきたれど、ゆゑなくはあらぬをぞいささかの慰めには思しける。

宮に紅葉たてまつれたまへれば、男宮おはしましけるほどなりけり。「南の宮より」とて、何心もなく持て参りたるを、女君、例のむつかしきこともこそと苦しく思せど、取り隠さむやは。宮、「をかしき鳶かな」と、ただならずのたまひて、召し寄せて見たまふ。御文には、

日ごろ、何事かおはしますらむ。山里にもものしはべりて、いとど峰の朝霧に惑ひはべりつる御物語もみづからなむ。かしこの寢殿、堂になすべきこと、阿闍梨に言ひつけはべりにき。御許しはべりてこそは、他に移すこと

もものしはべらめ。弁の尼にさるべき仰せ言はつかはせ。

などぞある。「よくもつれなく書きたまへる文かな。まろありとぞ聞きつらむ」
 とのたまふも、すこしは、げにさやありつらむ。女君は、ことなきをうれしと
 思ひたまふに、あながちにかくのたまふをわりなしと思して、うち怨じてゐた
 まへる御さま、よろづの罪許しつべくをかし。「返り事書きたまへ。見じや」
 とて、他ざまに向きたまへり。あまえて書かざらむもあやしければ、

山里の御ありきのうらやましくもはべるかな。かしこは、げにさやにてこ
 そよくと思ひたまへしを、ことさらにまた巖の中求めむよりは、荒らし果
 つまじく思ひはべるを、いかにもさるべきさまになさせたまはば、おろか
 ならずなむ。

と聞こえたまふ。かく憎きけしきもなき御睦びなめりと見たまひながら、わが
 御心ならひに、ただならじと思すがやすからぬなるべし。

枯れ枯れなる前裁の中に、尾花の、ものよりことにて手をさし出で招くがを
 かく見ゆるに、まだ穂に出でさしたるも、露を貫きとむる玉の緒、はかなげ
 にうちなびきたるなど、例のことなれど、夕風なほあはれなるころなりかし。

穂に出でぬもの思ふらし篠薄招く袂の露しげくして

なつかしきほどの御衣どもに、直衣ばかり着たまひて、琵琶を弾きゐたまへり。
 黄鐘調の掻き合はせを、いとあはれに弾きなしたまへば、女君も心に入りたま
 へることにて、もの怨じもえし果てたまはず、小さき御几帳のつまより、脇息
 に寄りかかりて、ほのかにさし出でたまへる、いと見まほしくらうたげなり。

「秋果つる野辺のけしきも篠薄ほのめく風につけてこそ知れ

わが身一つの」とて涙ぐまるるが、さすがに恥づかしければ、扇を紛らはして
 おはする御心の内も、らうたく推し量らるれど、かかるにこそ人もえ思ひ放た
 ざらめと、疑はしきがただならで、恨めしきなめり。

菊のまだよく移ろひ果てで、わざとつくろひたてさせたまへるは、なかなか遅きに、いかなる一本にかあらむ、いと見所ありて移ろひたるを、取り分きて折らせたまひて、「花の中に偏に」と誦じたまひて、「なにがしの親王の、花めでたる夕べぞかし、いにしへ天人の翔りて、琵琶の手教へけるは。何事も浅くなりたる世はもの憂しや」とて、御琴さし置きたまふを、口惜しと思して、「心こそ浅くもあらめ、昔を伝へたらむことさへは、などてかさしも」とて、おぼつかなき手などをゆかしげに思したれば、「さらば、独り琴はさうぎうしきに、さしいらへしたまへかし」とて、人召して、箏の御琴とり寄せさせて、弾かせたてまつりたまへど、「昔こそまねぶ人もものしたまひしか、はかばかしく弾きもとめずなりにしものを」と、つつましげにて手も触れたまはねば、「かばかりのことも、隔てたまへるこそ心憂けれ。このころ見るわたり、まだいと心解くべきほどにもあらねど、かたなりなる初事をも隠さずこそあれ。すべて、女はやはらかに心うつくしきなむよきことこそ、その中納言も定むめりしか。かの君にはた、かくもつつみたまはじ。こよなき御仲間めれば」など、まめやかに怨みられてぞ、うち嘆きてすこし調べたまふ。ゆるびたりければ、盤渉調に合はせたまふ。搔き合はせなど、爪音けをかしげに聞こゆ。伊勢の海謡ひたまふ御声のあてにをかしきを、女房も物のうしろに近づき参りて、笑み広がりてゐたり。「一心おはしますはつらけれど、それもことわりなれば、なほわが御前をば幸ひ人とこそは申さめ。かかる御ありさまに交じらひたまふべくもあらざりし所の御住まひを、また帰りなまほしげに思して、のたまはするこそ、いと心憂けれ」など、ただ言ひに言へば、若き人びとは、「あなかまや」など制す。

御琴ども教へたてまつりなどして、三四日籠もりおはして、御物忌などことつけたまふを、かの殿には恨めしく思して、大臣、内より出でたまひけるまま

に、ここに参りたまへれば、宮、「こととしげなるさまして、何しにいましつるぞとよ」とむつかりたまへど、あなたに渡りたまひて対面したまふ。「ことなることなきほどは、この院を見で久しくなりはべるもあはれにこそ」など、昔の御物語どもすこし聞こえたまひて、やがて引き連れきこえたまひて出でたまひぬ。御子どもの殿ばら、さらぬ上達部、殿上人などもいと多くひき続きたまへる、勢ひこちたきを見るに、並ぶべくもあらぬぞ屈しいたかりける。人びと覗きて見たてまつりて、「さも、きよらにおはしける大臣かな。さばかり、いづれとなく若く盛りにて、きよげにおはさうずる御子どもの、似たまふべきもなかりけり。あなめでたや」と言ふもあり。また、「さばかりやむごととなげなる御さまにて、わざと迎へに参りたまへるこそ憎けれ。やすげなの世の中や」などうち嘆くもあるべし。御みづからも、来し方を思ひ出づるよりははじめ、かのはなやかなる御仲らひに、立ちまじるべくもあらず、かすかなる身のおぼえをといよいよ心細ければ、なほ心やすく籠もりなむのみこそ目やすからめなど、いとどおぼえたまふ。はかなくて年も暮れぬ。

正月つごもり方より、例ならぬさまに悩みたまふを、宮まだ御覧じ知らぬことにて、いかならむと思し嘆きて、御修法など、所々にてあまたせさせたまふに、またまた始め添へさせたまふ。いといたくわづらひたまへば、後の宮よりも御訪らひあり。かくて三年になりぬれど、一所の御心ざしこそおろかならね、おほかたの世にはものしくももてなしきこえたまはざりつるを、この折ぞ、いづこにもいづこにも聞こしめしおどろきて、御訪らひども聞こえたまひける。

中納言の君は、宮の思し騒ぐに劣らず、いかにおはせむと嘆きて、心苦しうしろめたく思さるれど、限りある御訪らひばかりこそあれ、あまりもえ参うでたまはで、忍びてぞ御祈りなどもせさせたまひける。さるは、女二の宮の御

裳着、ただこのころになりて、世の中響きいとなみのしる。よろづのこと、帝の御心一つなるやうに思し急げば、御後見なきしもぞ、なかなかめでたげに見えける。女御のしおきたまへることをばさるものにて、作物所、さるべき受領どもなど、とりどりに仕うまつることどもいと限りなしや。やがて、そのほどこに参りそめたまふべきやうにありければ、男方も心づかひしたまふころなれど、例のことなれば、そなたさまには心も入らで、この御事のみいとほしく嘆かる。

如月のついたちごろに、なほしものとかいふことに、権大納言になりたまひて、右大将かけたまひつ。右の大殿、左にておはしけるが、辞したまへる所なりけり。喜びに所々ありきたまひて、この宮にも参りたまへり。いと苦しうしたまへば、こなたにおはしますほどなりければ、やがて参りたまへり。僧などさぶらひて、便なき方にとおどろきたまひて、あぎやかなる御直衣、御下襲などたてまつり、ひきつくろひたまひて、下りてたふの拝したまふ。御さまどもとりどりにいとめでたく、「やがて、つかさの祿賜ふあるじの所に」と請じたてまつりたまふを、悩みたまふ人によりてぞ思したゆたひたまふめる。右大臣殿のしたまひけるままにとて、六条の院にてなむありける。垣下の親王たち、上達部、大饗に劣らず、あまり騒がしきまでなむ集ひたまひける。この宮も渡りたまひて、静心なければ、まだ事果てぬに急ぎ帰りたまひぬるを、大殿の御方には、「いと飽かずめざまし」とのたまふ。劣るべくもあらぬ御ほどなるを、ただ今のおぼえのはなやかさに思しおごりて、おしたちもてなしたまへるなめりかし。

からうしてその暁、男にて生まれたまへるを、宮もいとかわりてうれしく思したり。大将殿も、喜びに添へてうれしく思す。よべおはしましたりしかしこまりに、やがてこの御喜びもうち添へて、立ちながら参りたまへり。かく籠

もりおはしませば、参りたまはぬ人なし。御産養、三日は例のただ宮の御私事にて、五日の夜、大将殿より屯食五十具、碁手の銭、椀飯などは世の常のやうにて、子持ちの御前の衝重三十、稚児の御衣五重襲にて、御襠褌などぞ、ことごとしからず忍びやかにしなしたまへれど、こまかに見れば、わざと目馴れぬ心ばへなど見えける。宮の御前にも浅香の折敷、高坏どもにて、粉熟参らせたまへり。女房の御前には、衝重をばさるものにて、桧破籠三十、さまざまし尽くしたることどもあり。人目にことごとしくは、ことさらにしなしたまはず。

七日の夜は、後の宮の御産養なれば、参りたまふ人びといと多かり。宮の大夫をはじめて、殿上人、上達部数知らず参りたまへり。内にも聞こし召して、「宮のはじめて大人びたまふなるには、いかでか」とのたまはせて、御佩刀奉らせたまへり。九日も、大殿より仕うまつらせたまへり。よろしからず思すあたりなれど、宮の思さむところあれば、御子の公達など参りたまひて、すべてと思ふことなげにめでたければ、御みづからも、月ごろもの思はしく心地の悩ましきにつけても、心細く思したりつるに、かくおもだたく今めかしきことどもの多かれば、すこし慰みもやしたまふらむ。大将殿は、かくさへ大人び果てたまふめれば、いとどわが方ざまは氣遠くやならむ、また、宮の御心ざしもいとおろかならじ、と思ふは口惜しけれど、また初めよりの心おきてを思ふには、いとうれしくもあり。

かくて、その月の二十日あまりにぞ、藤壺の宮の御裳着の事ありて、またの日なむ大将参りたまひける。夜のことは忍びたるさまなり。天の下響きていくしう見えつる御かしづきに、ただ人の具したてまつりたまふぞ、なほ飽かず心苦しく見ゆる。「さる御許しはありながらも、ただ今、かく急がせたまふまじきことぞかし」と、そしらはしげに思ひのたまふ人もありけれど、思し立ちぬること、すがすがしくおはします御心にて、来し方ためしなきまで、同じく

はもてなさむと思しおきつるなめり。帝の御婿になる人は、昔も今も多かれど、かく盛りの御世に、ただ人のやうに婿取り急がせたまへるたぐひはすくなくやありけむ。右の大臣も、「めづらしかりける人の御おぼえ宿世なり。故院だに、朱雀院の御末にならせたまひて、今はとやつしたまひし際にこそ、かの母宮を得たてまつりたまひしか。我はまして、人も許さぬものを、拾ひたりしや」とのたまひ出づれば、宮はげにと思すに、恥づかしくて御いらへもえしたまはず。三日の夜は、大蔵卿よりはじめて、かの御方の心寄せになさせたまへる人びと、家司に仰せ言賜ひて、忍びやかなれど、かの御前、隨身、車副、舎人まで禄賜はず。そのほどの事どもは、私事のやうにぞありける。

かくて後は、忍び忍びに参りたまふ。心の内には、なほ忘れがたきいにしへさまのみおぼえて、昼は里に起き臥し眺め暮らして、暮るれば心より外に急ぎ参りたまふをも、ならばぬ心地にいともの憂く苦しくて、まかでさせたてまつらむとぞ思しおきてける。母宮は、いとうれしきことに思したり。おはします寢殿譲りきこゆべくのたまへど、「いとかたじけなからむ」とて、御念誦堂のあはひに、廊を続けて造らせたまふ。西面に移ろひたまふべきなめり。東の対どもなども、焼けて後うるはしく新しくあらまほしきを、いよいよ磨き添へつつ、こまかにしつらはせたまふ。

かかる御心づかひを、内にも聞かせたまひて、ほどなくうちとけ移ろひたまはむを、いかがと思したり。帝と聞こゆれど、心の闇は同じごととなむおはしましける。母宮の御もとに御使ありける御文にも、ただこのことをなむ聞こえさせたまひける。故朱雀院の、取り分きてこの尼宮の御事をば聞こえ置かせたまひしかば、かく世を背きたまへれど、衰へず、何事も元のままにて、奏せさせたまふことなどは、かならず聞こしめし入れ、御用意深かりけり。かくやむごとなき御心どもに、かたみに限りもなくもてかしづき騒がれたまふおもだたし

さも、いかなるにかあらむ、心の内にはことにうれしくもおぼえず、なほともすればうち眺めつつ、宇治の寺造ることを急がせたまふ。

宮の若君の五十日になりたまふ日数へ取りて、その餅の急ぎを心に入れて籠物、桧破籠などまで見入れたまひつつ、世の常のなべてにはあらずと思し心ざして、沈、紫檀、銀、黄金など、道々の細工どもいと多く召しさぶらはせたまへば、我劣らじとさまさまのことどもをし出づめり。

みづからも、例の、宮のおはしまさぬ隙におはしたり。心のなしにやあらむ、今すこし重々しくやむごとなげなるけしきさへ添ひにけりと見ゆ。今は、さりとともむつかしかりしすろごとなどは、紛れたまひにたらむと思ふに、心やすくて対面したまへり。されど、ありしながらのけしきに、まづ涙ぐみて、「心にもあらぬまじらひ、いと思ひの外なるものにこそと、世を思ひたまへ乱るることなむまさりにたる」と、あいだちなくぞ愁へたまふ。「いとあさましき御ことかな。人もこそおのづからほのかにも漏り聞きはべれ」などはのたまへど、かばかりめでたげなることどもにも慰まず、忘れがたく思ひたまふらむ心深さよと、あはれに思ひきこえたまふに、おろかにもあらず思ひ知られたまふ。おはせましかばと、口惜しく思ひ出できこえたまへど、それもわがありさまのやうに、うらやみなく身を恨むべかりけるかし、何事も、数ならでは、世の人めかしきこともあるまじかりけりとおぼゆるにぞ、いとどかのうちとけ果てでやみなむと思ひたまへりし心おきては、なほいと重々しく思ひ出でられたまふ。

若君を切にゆかしがりきこえたまへば、恥づかしけれど、何かは隔て顔にもあらむ、わりなきこと一つにつけて、恨みらるるよりほかには、いかでこの人の御心に違はじと思へば、みづからはともかくもいらへきこえたまはで、乳母してさし出でさせたまへり。さらなることなれば、憎げならむやは。ゆゆしきまで白くうつくしくて、たかやかに物語し、うち笑ひなどしたまふ顔を見るに、

わがものにて見まほしくうらやましきも、世の思ひ離れがたくなりぬるにやあらむ。されど、言ふかひなくなりたまひにし人の、世の常のありさまにて、かやうならむ人をもとどめ置きたまへらましかばとのみおぼえて、このころおもだたしげなる御あたりに、いつしかなどは思ひ寄られぬこそ、あまりすべなき君の御心なめれ。かく女々しくねぢけて、まねびなすこそいとほしけれ。しかわろびかたほならむ人を、帝の取り分き切に近づけて、睦びたまふべきにもあらじものを、まことしき方さまの御心おきてなどこそは、めやすくものしたまひけめとぞ推し量るべき。げに、いとかく幼きほどを見せたまへるもあはれなれば、例よりは物語などこまやかに聞こえたまふほどに、暮れぬれば、心やすく夜をだに更かすまじきを、苦しうおぼゆれば、嘆く嘆く出でたまひぬ。「をかしの人の御匂ひや。折りつれば、とかや言ふやうに、鶯も尋ね来ぬべかめり」など、わづらはしがる若き人もあり。

夏にならば、三条の宮塞がる方になりぬべしと定めて、四月ついたちごろ、節分とかいふこと、まだしき先に渡したてまつりたまふ。明日とての日、藤壺に上渡らせたまひて、藤の花の宴せさせたまふ。南の廂の御簾上げて、椅子立てたり。公わざにて、あるじの宮の仕うまつりたまふにはあらず。上達部、殿上人の饗など内蔵寮より仕うまつれり。右の大臣、按察使の大納言、藤中納言、左兵衛の督、親王たちは三の宮、常陸の宮などさぶらひたまふ。南の庭の藤の花のもとに、殿上人の座はしたり。後涼殿の東に、楽所の人びと召して、暮れ行くほどに、双調に吹きて、上の御遊びに、宮の御方より御琴ども、笛など出ださせたまへば、大臣をはじめたてまつりて、御前に取りつつ参りたまふ。故六条の院の御手づから書きたまひて、入道の宮にたてまつらせたまひし琴の譜二卷、五葉の枝に付けたるを、大臣取りたまひて奏したまふ。次々に、箏の御琴、琵琶、和琴など、朱雀院の物どもなりけり。笛はかの夢に伝へし、いにし

への形見のを、またなき物の音なりと賞でさせたまひければ、この折のきよらより、またはいつかは映え映えしきついでであらむと思して、取う出でたまへるなめり。大臣和琴、三宮琵琶など、とりどりに賜ふ。大将の御笛は、今日ぞ世になき音の限りは吹き立てたまひける。殿上人の中にも、唱歌につきなからぬどもは召し出でて、おもしろく遊ぶ。

宮の御方より、粉熟参らせたまへり。沈の折敷四つ、紫檀の高坏、藤の村濃の打敷に折枝縫ひたり。銀の様器、瑠璃の御盃、瓶子は紺瑠璃なり。兵衛の督、御まかなひ仕うまつりたまふ。御盃参りたまふに、大臣、しきりては便なかるべし、宮たちの御中にはたさるべきもおはせねば、大将に譲りきこえたまふを、憚り申したまへど、御けしきもいかがありけむ、御盃ささげて、「をし」とのたまへる声づかひもてなしさへ、例の公事なれど、人に似ず見ゆるも、今日はいとど見なしさへ添ふにやあらむ、さし返し賜はりて、下りて舞踏したまへるほどいとたぐひなし。上臈の親王たち大臣などの賜はりたまふだにめでたきことなるを、これはまして、御婿にてもてはやされたてまつりたまへる御おぼえ、おろかならずめづらしきに、限りあれば、下りたる座に帰り着きたまへるほど、心苦しきまでぞ見えける。

按察使の大納言は、我こそかかる目も見むと思ひしか、ねたのわざやと思ひたまへり。この宮の御母女御をぞ、昔心かけきこえたまへりけるを、参りたまひて後も、なほ思ひ離れぬさまに聞こえ通ひたまひて、果ては宮を得たてまつらむの心つきたりければ、御後見望むけしきも漏らし申しけれど、聞こし召しだに伝へずなりにければ、いと心やましと思ひて、「人柄は、げに契りことなめれど、なぞ時の帝のこととしきまで婿かしづきたまふべき。またあらじかし、九重のうちに、おはします殿近きほどにて、ただ人のうちとけ訪らひて、果ては宴や何やともて騒がるることは」など、いみじく譏りつぶやき申したま

ひけれど、さすがゆかしければ、参りて心の内にぞ腹立ちるたまへりける。

紙燭さして歌どもたてまつる。文台のもとに寄りつつ置くほどのけしきは、おのおのしたり顔なりけれど、例のいかにあやしげに古めきたりけむと思ひやれば、あながちに皆もたづね書かず。上の町も、上臈とて、御口つきどもは、異なること見えざめれど、しるしばかりとて、一つ二つぞ問ひ聞きたりし。これは、大将の君の、下りて御かざし折りて参りたまへりけるとか。

すべらきのかざしに折ると藤の花及ばぬ枝に袖かけてけり
うけばりたるぞ憎きや。

よろづ世をかけて匂はむ花なれば今日をも飽かぬ色とこそ見れ

君がため折れるかざしは紫の雲に劣らぬ花のけしきか

世の常の色とも見えず雲居までたち昇りたる藤波の花

これやこの腹立つ大納言のなりけむと見ゆれ。かたへはひがことにもやありけむ。かやうに、ことなるをかしきふしもなくのみぞあなりし。

夜更くるままに、御遊びいとおもしろし。大将の君、安名尊謡ひたまへる声ぞ、限りなくめでたかりける。按察使も、昔すぐれたまへりし御声の名残なれば、今もいともものしくて、うち合はせたまへり。右の大殿の御七郎、童にて笙の笛吹く。いとうつくしかりければ、御衣賜はす。大臣下りて舞踏したまふ。暁近うなりてぞ帰らせたまひける。禄ども、上達部、親王たちには、上より賜はす。殿上人、楽所の人びとには、宮の御方より品々に賜ひけり。

その夜ふさりなむ、宮まかでさせたてまつりたまひける。儀式いと心ことなり。上の女房、さながら御送り仕うまつらせたまひける。庇の御車にて、庇なき糸毛三つ、黄金づくり六つ、ただの檳榔毛二十、網代二つ、童、下仕へ八人づつさぶらふに、また御迎への出車どもに、本所の人びと乗せてなむありける。御送りの上達部、殿上人、六位など、言ふ限りなききよらを尽くさせたまへり。

かくて、心やすくうちとけて見たてまつりたまふに、いとをかしげにおはす。ささやかにしめやかにて、ここはと見ゆるところなくおはすれば、宿世のほど口惜しからざりけりと、心おごりせらるるものから、過ぎにし方の忘れればこそはあらめ、なほ紛るる折なく、もののみ恋しくおぼゆれば、この世にては慰めかねつべきわざなめり、仏になりてこそは、あやしくつらかりける契りのほどを、何の報いと諦めて思ひ離れめと思ひつつ、寺の急ぎにのみ心を入れたまへり。

賀茂の祭など騒がしきほど過ぐして、二十日あまりのほどに、例の宇治へおはしたり。造らせたまふ御堂見たまひて、すべきことどもおきてのたまひ、さて例の朽木のもとを見たまへ過ぎむがなほあはれなれば、そなたさまにおはするに、女車のこととしきさまにはあらぬ一つ、荒らましき東男の腰に物負へるあまた具して、下人も数多く頼もしげなるけしきにて、橋より今渡り来る見ゆ。田舎びたる者かなと見たまひつつ、殿はまづ入りたまひて、御前どもはただ立ち騒ぎたるほどに、この車もこの宮をさして来るなりけり、と見ゆ。御隨身どももかやかやと言ふを制したまひて、「何人ぞ」と問はせたまへば、声うちゆがみたる者、「常陸の前司殿の姫君の初瀬の御寺に詣でて戻りたまへるなり。初めもここになむ宿りたまへし」と申すに、おいや、聞きし人なりと思し出でて、人びとを異方に隠したまひて、「はや御車入れよ。ここにまた人宿りたまへど、北面になむ」と言はせたまふ。

御供の人も皆狩衣姿にて、ことことしからぬ姿どもなれど、なほけはひやしるからむ、わづらはしげに思ひて、馬ども引きさけなどしつつ、かしこまりつつぞをる。車は入れて、廊の西のつまにぞ寄する。この寝殿はまだあらはにて、簾もかけず。下ろし籠めたる中の二間に立て隔てたる障子の穴より覗きたまふ。御衣の鳴れば、脱ぎおきて、直衣、指貫の限りを着てぞおはする。とみにも降

りで、尼君に消息して、かくやむごとなげなる人のおはするを、誰れぞなど案内するなるべし。君は、車をそれと聞きたまひつるより、「ゆめ、その人にまろありとのたまふな」と、まづ口かためさせたまひてければ、皆さ心得て、「早う降りさせたまへ。客人はものしたまへど、異方になむ」と言ひ出だしたり。

若き人のある、まづ降りて簾うち上ぐめり。御前のさまよりは、このおもと馴れてめやすし。また、大人びたる人いま一人降りて、「早う」と言ふに、「あやしくあらはなる心地こそすれ」と言ふ声、ほのかなれどあてやかに聞こゆ。「例の御事。こなたは、さきさきも下ろし籠めてのみこそははべれ。さてはまた、いづこのあらはなるべきぞ」と、心をやりて言ふ。つつましげに降るるを見れば、まづ頭つき様体細やかにあてなるほどは、いとよくもの思ひ出でられぬべし。扇をつとさし隠したれば、顔は見えぬほど心もとなくて、胸うちつぶれつつ見たまふ。車は高く、降るる所は下りたるを、この人びとはやすらかに降りなしつれど、いと苦しげにややみて、ひさしく降りてゐざり入る。濃き桂に、撫子とおぼしき細長、若苗色の小桂着たり。四尺の屏風を、この障子に添へて立てたるが上より見ゆる穴なれば、残るところなし。こなたをばうしろめたげに思ひて、あなたざまに向きてぞ添ひ臥しぬる。「さも苦しげに思したりつるかな。泉川の舟渡りも、まことに今日はいと恐ろしくこそありつれ。この如月には、水のすくなかりしかばよかりしなりけり。いでや、歩くは東路思へば、いづこか恐ろしからむ」など、二人して苦しとも思ひたらず言ひるたるに、主は音もせでひれ臥したり。腕をさし出でたるが、まろらかにをかしげなるほども、常陸殿などいふべくは見えず、まことにあてなり。

やうやう腰痛きまで立ちすくみたまへど、人のけはひせじとて、なほ動かで見たまふに、若き人、「あな香ばしや。いみじき香の香こそすれ。尼君の焚き

たまふにやあらむ」。若い人、「まことにあなめでたの物の香や。京人はなほ、いとこそ雅びかに今めかしけれ。天下にいみじきことと思したりしかど、東にかかる薰物の香は、え合はせ出でたまはざりきかし。この尼君は、住まひかくかすかにおはすれど、装束のあらまほしく、鈍色、青色といへど、いときよらにぞあるや」などほめりたり。あなたの簀子より童来て、「御湯など参らせたまへ」とて、折敷どもも取り続きてさし入る。果物取り寄せなどして、「ものけたまはる。これ」など起こせど起きねば、二人して、栗やなどやうのものにや、ほろほろと食ふも、聞き知らぬ心地には、かたはらいたくてしぞきたまへど、またゆかしくなりつつ、なほ立ち寄り立ち寄り見たまふ。これよりまさる際の人びとを、後の宮をはじめて、ここかしこにかたちよきも心あてなるも、ここら飽くまで見集めたまへど、おぼろけならでは目も心もとまらず、あまり人にもどかるるまでものしたまふ心地に、ただ今は何ばかりすぐれて見ゆることもなき人なれど、かく立ち去りがたく、あながちにゆかしきも、いとあやしき心なり。

尼君は、この殿の御方にも、御消息聞こえ出だしたりけれど、「御心地悩ましとて、今のほどうちやすませたまへるなり」と、御供の人びと心しらひて言ひ触れむと思ほすによりて、日暮らしたまふにやと思ひて、かく覗きたまふらむとは知らず、例の御荘の預りどもの参れる破籠や何やと、こなたにも入れたるを、東人どもにも食はせなど、事ども行なひおきて、うち化粧じて、客人の方に来たり。ほめつる装束、げにいとかはらかにて、みめもなほよししくきよげにぞある。「昨日おはし着きなむと待ちきこえさせしを、なか今日も日たけては」と言ふめれば、この若い人、「いとあやしく苦しげにのみせさせたまへば、昨日はこの泉川のわたりにて、今朝も無期に御心地ためらひてな

む」といらひて、起こせば、今ぞ起きみたる。尼君を恥ぢらひて、そばみたるかたはらめ、これよりはいとよく見ゆ。まことにいとよしあるまみのほど、髪ざしのわたり、かれをも詳しくつくづくとしも見たまはざりし御顔なれど、これを見るにつけて、ただそれと思ひ出でらるるに、例の涙落ちぬ。尼君のいらへうちする声けはひ、宮の御方にもいとよく似たりと聞こゆ。

あはれなりける人かな、かかりけるものを、今まで尋ねも知らで過ぐしけることよ、これより口惜しからむ際の品ならむゆかりなどにてだに、かばかりかよひきこえたらむ人を得ては、おろかに思ふまじき心地するに、ましてこれは知られたてまつらざりけれど、まことに故宮の御子にこそはありけれと見なしたまひては、限りなくあはれにうれしくおぼえたまふ。ただ今もはひ寄りて、世の中におはしけるものを、と言ひ慰めまほし。蓬萊まで尋ねて、髪ざしの限りを伝へて見たまひけむ帝は、なほいぶせかりけむ。これは異人なれど、慰め所ありぬべきさまなりとおぼゆるは、この人に契りのおはしけるにやあらむ。尼君は、物語すこししてとく入りぬ。人のとがめつる薰りを、近く覗きたまふなめりと心得てければ、うちとけごとも語らはずなりぬるなるべし。

日暮れもていけば、君もやをら出でて、御衣など着たまひてぞ、例召し出づる障子の口に尼君呼びて、ありさまなど問ひたまふ。「折しも、うれしく参で逢ひたるを、いかにぞ、かの聞こえしことは」とのたまへば、「しか仰せ言はべりし後は、さるべきついではべらばと待ちはべりしに、去年は過ぎて、この二月になむ初瀬詣でのたよりに対面してはべりし。かの母君に、思し召したるさまはほのめかしはべりしかば、いとかたはらいたく、かたじけなき御よそへにこそははべるなれなどなむはべりしかど、そのころほひは、のどやかにもおはしまさずと承りし、折便なく思ひたまへつつみて、かくなむとも聞こえさせはべらざりしを、またこの月にも詣でて、今日帰りたまふなめり。行き帰りの

中宿りには、かく睦びらるるも、ただ過ぎにし御けはひを尋ねきこゆるゆゑになむはべめる。かの母君も、障ることありて、このたびは独りものしたまふめれば、かくおはしますとも、何かはものしはべらむとて」と聞こゆ。「田舎びたる人どもに、忍びやつれたるありきも見えじとて、口固めつれど、いかがあらむ。下衆どもは隠れあらしかし。さていかがすべき。独りものすらむこそなかなか心やすかなれ。かく契り深くてなむ参り来あひたる、と伝へたまへかし」とのたまへば、「うちつけに、いつのほどなる御契りにかは」とうち笑ひて、「さらば、しか伝へはべらむ」とて入るに、

貌鳥の声も聞きしにかよふやと茂みを分けて今日ぞ尋ぬる

ただ口ずさみのやうにのたまふを、入りて語りけり。

東
屋

筑波山を分け見まほしき御心はありながら、端山の繁りまであながちに思ひ入らむも、いと人聞き軽々しうかたはらいたかるべきほどなれば、思し憚りて、御消息をだにえ伝へさせたまはず。かの尼君のもとよりぞ、母北の方に、のたまひしさまなどたびたびほのめかしおこせけれど、まめやかに御心とまるべきこととも思はねば、たださまでも尋ね知りたまふらむことばかりをかしよう思ひて、人の御ほどのただ今世にありがたげなるをも、数ならましかばなどぞよろづに思ひける。

守の子どもは、母亡くなりけるなどあまた、この腹にも姫君とつけてかしくあり、まだ幼きなど、すぎすぎに五六人ありければ、さまざまにこの扱ひをしつつ、異人と思ひ隔てたる心のありければ、常にいとつらきものに守をも恨みつつ、いかでひきすぐれておもだたしきほどにしなしても見えにしがなと、明け暮れこの母君は思ひ扱ひける。さまかたちのなのめにとりませてもありぬべくは、いとかうしも、何かは、苦しきまでもてなやまじ、同じごと思はせてもありぬべき世を、ものにも混じらず、あはれにかたじけなく生ひ出でたまへば、あたらしく心苦しきものに思へり。娘多かりと聞きて、なま君達めく人びともおとなひ言ふ、いとあまたありけり。初めの腹の二三人は、皆さまざまに配りて、大人びさせたり。今は、わが姫君を思ふやうにて見たてまつらばやと、明け暮れまもりて、なでかしづくこと限りなし。

守も卑しき人にはあらざりけり。上達部の筋にて、仲らひものきたなき人ならず、徳いかめしうなどあれば、ほどほどにつけては思ひ上がりて、家の内もきらきらしくものきよげに住みなし、事好みしたるほどよりは、あやしう荒らかに田舎びたる心ぞつきたりける。若うよりさるあづま方の遙かなる世界に埋もれて年経ければにや、声などほとほとうちゆがみぬべく、ものうち言ふすこしたみたるやうにて、豪家のあたり恐ろしくわづらはしきものに憚り懼ぢ、

すべていとまたく隙間なき心もあり。をかしきさまに、琴笛の道は遠う弓をなむいとよく引ける。なほなほしきあたりともいはず、勢ひに引かされて、よき若人ども、装束ありさまはえならず調へつつ、腰折れたる歌合はせ、物語り、庚申をし、まばゆく見苦しく遊びがちに好めるを、この懸想の君達、「らうらうじくこそあるべけれ、かたちなむいみじかなる」などをかしき方に言ひなして心を尽くし合へる中に、左近の少将とて、年二十三ばかりのほどにて、心ばせしめやかに、才ありといふ方は人に許されたれど、きらきらしう今めいてなどはえあらぬにや、通ひし所なども絶えて、いとねむごろに言ひわたりけり。

この母君、あまたかかると言ふ人びとの中に、この君は人柄もめやすかなり、心定まりてももの思ひ知りぬべかなるを、人もあてなりや、これよりまさりてこととしき際の人、はたかかるとあたりを、さいへど尋ね寄らじと思ひて、この御方に取りつぎて、さるべき折々はをかしきさまに返り事などせさせたてまつる。心一つに思ひまうく。守こそおろかに思ひなすとも、我は命を譲りてかしづきて、さまかたちのめでたきを見つきなば、さりともおろかになどはよも思ふ人あらじと思ひ立ち、八月ばかりと契りて、調度をまうけ、はかなき遊びものをせさせても、さまことにやうをかしう、蒔絵、螺鈿のこまやかなる心ばへまさりて見ゆるものをば、この御方にと取り隠して、劣りのを、「これなむよき」とて見すれば、守はよくしも見知らず、そこはかとな物どもの、人の調度といふ限りはただとり集めて並べ据ゑつつ、目をはつかにさし出づるばかりにて、琴、琵琶の師とて、内教坊のわたりより迎へ取りつつ習はす。手一つ弾き取れば、師を立ち居拜みてよろこび、禄を取らすることうづむばかりにてもて騒ぐ。はやりかなる曲物など教へて、師とをかしき夕暮などに弾き合はせて遊ぶ時は、涙もつつまず、をこがましきまでさすがにものめでしたり。かかることどもを、母君はすこしものゆゑ知りていと見苦しと思へば、ことに

あへしらはぬを、「吾子をば思ひ落としたまへり」と常に恨みけり。

かくてこの少将、契りしほどを待ちつけで、「同じくは疾く」とせめければ、わが心一つにかう思ひ急ぐもいとつつましう、人の心の知りがたさを思ひて、初めより伝へそめける人の来たるに、近う呼び寄せて語らふ。「よろづ多く思ひ憚ることの多かるを、月ごろかうのたまひてほど経ぬるを、並々の人にもものしたまはねば、かたじけなう心苦しうて、かう思ひ立ちにたるを、親などものしたまはぬ人なれば、心一つなるやうにて、かたはらいたう、うちあはぬさまに見えたてまつることもやと、かねてなむ思ふ。若き人びとあまたはべれど、思ふ人具したるは、おのづからと思ひ譲られて、この君の御ことをのみなむ、はかなき世の中を見るにも、うしろめたくいみじきを、もの思ひ知りぬべき御心ぎまと聞きて、かうよろづのつつましさを忘れぬべかめるをしも、もし思はずなる御心ばへも見えば、人笑へに悲しうなむ」と言ひけるを、少将の君に参うでて、「しかしかなむ」と申しけるに、けしきあしくなりぬ。「初めより、さらに守の御娘にあらずといふことをなむ聞かざりつる。同じことなれど、人間きもけ劣りたる心地して、出で入りせむにもよからずなむあるべき。ようも案内せで、浮かびたることを伝へける」とのたまふに、いとほしくなりて、「詳しくも知りたまへず。女どもの知るたよりにて、仰せ言を伝へ始めはべりしに、中にかしづく娘とのみ聞きはべれば、守のにこそはとこそ思ひたまへつれ。異人の子持たまへらむとも、問ひ聞きはべらざりつるなり。かたち、心もすぐれてものしたまふこと、母上のかなしうしたまひて、おもだたしう気高きことをせむと、あがめかしづかると聞きはべりしかば、いかでかの辺のこと伝へつべからむ人もがなとのたまはせしかば、さるたより知りたまへりとり申ししなり。さらに、浮かびたる罪はべるまじきことなり」と、腹あしく言葉多かる者にて申すに、君いとあてやかならぬさまにて、「かやうのあたりに行き通はむ、

人のをさをさ許さぬことなれど、今様のことにて咎あるまじう、もてあがめて後見だつに、罪隠してなむあるたぐひもあめるを、同じこととうちうちには思ふとも、よそのおぼえなむ、へつらひて人言ひなすべき。源少納言、讃岐の守などのうけばりたるけしきにて出で入らむに、守にもをさをさ受けられぬさまにて交じらはむなむ、いと人げなかるべき」とのたまふ。

この人追従ある、うたてある人の心にて、これをいと口惜しうこなたかなたに思ひければ、「まことに守の娘と思さば、まだ若うなどおはすとも、しか伝へはべらむかし。中にあたるなむ、姫君とて、守、いとかなしうしたまふなる」と聞こゆ。「いさや。初めよりしか言ひ寄れることをおきて、また言はむこそうたてあれ。されど、わが本意は、かの守の主の人柄もものものしく大人しき人なれば、後見にもせまほしう、見るところありて思ひ始めしことなり。もはら顔かたちのすぐれたらむ女の願ひもなし。品あてに艶ならむ女を願はば、やすく得つべし。されど、寂しうことうち合はぬみやび好める人の果て果ては、ものきよくもなく、人にも人とおぼえたらぬを見れば、すこし人に譏らるるも、なだらかにて世の中を過ぐさむことを願ふなり。守に、かくなむと語らひて、さもと許すけしきあらば、何かは、さも」とのたまふ。

この人は、妹のこの西の御方にあるたよりに、かかる御文なども取り伝へはじめけれど、守には詳しくも見え知られぬ者なりけり。ただ行きに守の居たりける前に行きて、「とり申すべきことありて」など言はす。守、「このわたりに時々出で入りはすと聞けど、前には呼び出でぬ人の、何ごと言ひにかあらむ」と、なま荒々しきけしきなれど、「左近の少将殿の御消息にてなむさぶらふ」と言はせられたれば、会ひたり。語らひがたげなる顔して、近うゐ寄りて、「月ごろ内の御方に消息聞こえさせたまふを、御許しありて、この月のほどにと契りきこえさせたまふことはべるを、日をはからひて、いつしかと思すほどに、あ

る人の申しけるやう、まことに北の方の御はからひにもしたまへど、守の殿の御娘にはおはせず、君達のおはし通はむに、世の聞こえなむへつらひたるやうならむ、受領の御婿になりたまふかやうの君達は、ただ私の君のごとく思ひかしづきたてまつり、手に捧げたるごとく思ひ扱ひ後見たてまつるにかかりてなむ、さる振る舞ひしたまふ人びとものしたまふめるを、さすがにその御願ひはあながちなるやうにて、をさをさ受けられたまはで、け劣りておはし通はむこと、便なかりぬべきよしをなむ、切にそしり申す人びとあまたはべるなれば、ただ今思しわづらひてなむ、初めよりただきらぎらしう、人の後見と頼みきこえむに、堪へたまへる御おぼえを選び申して聞こえ始め申ししなり。さらに、異人ものしたまふらむといふこと知らざりければ、もとの心ざしのままに、まだ幼きものあまたおはすなるを許いたまはば、いとうれしくなむ、御けしき見て参うで来と仰せられつれば」と言ふに、守、「さらに、かかる御消息はべるよし、詳しく承らず。まことに同じことに思うたまふべき人なれど、よからぬ童べあまたはべりて、はかばかからぬ身に、さまざま思ひたまへ扱ふほどに、母なる者も、これを異人と思ひ分けたることとくねり言ふことはべりて、ともかくも口入れさせぬ人のことにはべれば、ほのかにしかなむ仰せらるることとはべりとは聞きはべりしかど、なにがしを取り所に思しける御心は知りはべらざりけり。さるは、いとうれしく思ひたまへらるる御ことにこそはべるなれ。いとらうたしと思ふ女の童は、あまたの中に、これをなむ命にも代へむと思ひはべる。のたまふ人びとあれど、今の世の人の御心定めなく聞こえはべるに、なかなか胸いたき目をや見むの憚りに、思ひ定むることもなくてなむ。いかでうしろやすくも見たまへおかむと明け暮れかなしく思うたまふるを、少将殿におきたてまつりては、故大将殿にも若くより参り仕うまつりき、家の子にて見たてまつりしに、いと警策に、仕うまつらまはしと心つきて思ひきこえしかど、

遙かなる所にうち続きて過ぐしはべる年ごろのほどに、うひうひしくおぼえはべりてなむ参りも仕まつらぬを、かかる御心ざしのはべりけるを、返す返す仰せの事たてまつらむはやすきことなれど、月ごろの御心違へたるやうに、この人思ひたまへむことをなむ思うたまへ憚りはべる」と、いとこまやかに言ふ。

よろしげなめりとうれしく思ふ。「何かと思し憚るべきことにもはべらず。かの御心ざしは、ただ一所の御許しはべらむを願ひ思して、いはけなく年足らぬほどにおはすとも、真実のやむごとなく思ひおきてたまへらむをこそ本意叶ふにはせめ、もはらさやうのほとりばみたらむ振る舞ひすべきにもあらず、となむのたまひつる。人柄はいとやむごとなく、おぼえ心にくくおはする君なりけり。若き君達とて、好き好きしくあてびてもおはしまさず、世のありさまもいとよく知りたまへり。領じたまふ所々もいと多くはべり。まだころの御徳なきやうなれど、おのづからやむごとなき人の御けはひのありげなるやう、なほ人の限りなき富といふめる勢ひにはまさりたまへり。来年四位になりたまひなむ。こたみの頭は疑ひなく、帝の御口づからこてたまへるなり。よろづのこと足らひてめやすき朝臣の、妻をなむ定めぎなる、はやさるべき人選りて後見をまうけよ、上達部には、我しあれば、今日明日といふばかりになし上げてむ、とこそ仰せらるなれ。何事もただこの君ぞ、帝にも親しく仕うまつりたまふなる。御心はた、いみじう警策に、重々しくなむおはしますめる。あたら人の御婿を。かう聞きたまふほどに思ほし立ちなむこそよからめ。かの殿には、我も我も婿にとりたてまつらむと、所々にはべるなれば、ここにしぶしぶなる御けはひあらば、他ざまにも思しなりなむ。これ、ただうしろやすきことをとり申すなり」と、いと多くよげに言ひ続けるに、いとあさましく鄙びたる守にて、うち笑みつつ聞きるたり。

「このころの御徳などの心もとなからむことはなのたまひそ。なにがし命は

べらむほどは、頂に捧げたてまつりてむ。心もとなく何を飽かぬとか思すべき。たとひあへずして仕うまつりさしつとも、残りの宝物、領じはべる所々、一つにてもまた取り争ふべき人なし。子ども多くはべれど、これはさま異に思ひそめたる者にはべり。ただ真心に思し顧みさせたまはば、大臣の位を求めむと思し願ひて、世になき宝物をも尽くさむとしたまはむに、なきものはべるまじ。当時の帝、しか恵み申したまふなれば、御後見は心もとなかるまじ。これ、かの御ためにも、なにがしが女の童のためにも、幸ひとあるべきことにやとも知らず」と、よろしげに言ふ時に、いとうれしくなりて、妹にもかかることありとも語らず、あなたにも寄りつかで、守の言ひつることを、いともいともよげにめでたしと思ひて聞こゆれば、君すこし鄙びてぞあるとは聞きたまへど、憎からずうち笑みて聞きるたまへり。大臣にならむ贖勞を取らむなどぞ、あまりおどろおどろしきことと耳とどまりける。

さて、かの北の方にはかくともものしつや、心ざしことに思ひ始めたまへらむに、ひき違へたらむ、ひがひがしくねぢけたるやうにとりなす人もあらむ、いさや、と思したゆたひたるを、「何か。北の方も、かの姫君をばいとやむごとなきものに思ひかしづきたてまつりたまふなりけり。ただ中のこのかみにて、年も大人びたまふを、心苦しきことに思ひて、そなたにとおもむけて申されけるなりけり」と聞こゆ。月ごろは、またなく世の常ならずかしづくと言ひつるものの、うちつけにかく言ふもいかならむと思へども、なほ一わたりはつらしと思はれ、人にはすこし譏らるとも、長らへて頼もしき事をこそと、いとまたくかしこき君にて、思ひ取りてければ、日をだにとり替へで、契りし暮れにぞおはし始めける。

北の方は人知れずいそぎ立ちて、人びとの装束せさせ、しつらひなどよしよししうしたまふ。御方をも頭洗はせ、取りつくろひて見るに、少将などいふほ

どの人に見せむも惜しくあたらしきさまを、あはれや、親に知られたてまつりて生ひ立ちたまはましかば、おはせずなりにたれども、大将殿のたまふらむさまに、おほけなくともなどは思ひ立たざらまし、されどうちうちこそかく思へ、他の音聞きは、守の子とも思ひ分かず、また、実を尋ね知らむ人もなかなか落としめ思ひぬべきこそ悲しけれ、など思ひ続く。いかがはせむ、盛り過ぎたまはむもあいなし、卑しからずめやすきほどの人のかくねむごろにのたまふめるを、など心一つに思ひ定むるも、中だちのかく言よくいみじきに、女はましてすかされたるにやあらむ。あすあさてと思へば、心あわたたしくいそがしきに、こなたにも心のどかに居られたらず、そそめきありくに、守、外より入り来て、ながながとどこほるところもなく言ひ続けて、「我を思ひ隔てて、あこの御懸想人を奪はむとしたまひける、おほけなく心幼きこと。めでたからむ御娘をば、要ぜさせたまふ君達あらじ。卑しく異やうならむなにかしらが女子をぞ、いやしうも尋ねのたまふめれ。かしこく思ひ企てられけれど、もはら本意なしとて他ぎまへ思ひなりたまふべかなれば、同じくはと思ひてなむ、さらば御心と許し申しつる」など、あやしく奥なく、人の思はむところも知らぬ人にて、言ひ散らしるたり。北の方あきれて、物も言はれでとばかり思ふに、心憂さをかき連ね、涙も落ちぬばかり思ひ続けられて、やをら立ちぬ。

こなたに渡りて見るに、いとらうたげにをかしげにて居たまへるに、さりとも人には劣りたまはじとは思ひ慰む。乳母と二人、「心憂きものは人の心なりけり。おのれは同じごとと思ひ扱ふとも、この君のゆかりと思はむ人のためには、命をも譲りつべくこそ思へ、親なしと聞きあなづりて、まだ幼くなりあはぬ人を、さし越えてかくは言ひなるべしや。かく心憂く、近きあたりに見じ聞かじと思ひぬれど、守のかくおもだたしきことに思ひて、受け取り騒ぐめれば、あひあひにたる世の人のありさまを、すべてかかることに口入れじと思ふ。いか

でここならぬ所に、しばしありにしがな」とうち嘆きつつ言ふ。乳母もいと腹立たしく、わが君をかく落としむることと思ふに、「何か。これも御幸ひにて違ふことも知らず。かく心口惜しくいましける君なれば、あたら御さまをも見知らざらまし。わが君をば、心ばせありもの思ひ知りたらむ人にこそ見せてまつらまほしけれ。大将殿の御さまかたちの、ほのかに見たてまつりしに、さも命延ぶる心地のしはべりしかな。あはれにはた聞こえたまふなり。御宿世にまかせて、思し寄りねかし」と言へば、「あな恐ろしや。人の言ふを聞けば、年ごろおぼろけならむ人をば見じとのたまひて、右の大殿、按察使の大納言、式部卿の宮などのいとねむごろにはほめかしたまひけれど、聞き過ぐして、帝の御かしづきむすめを得たまへる君は、いかばかりの人かまめやかには思さむ。かの母宮などの御方にあらせて、時々も見むとは思しもしなむ、それはた、げにめでたき御あたりなれども、いと胸痛かるべきことなり。宮の上の、かく幸ひ人と申すなれど、もの思はしげに思したるを見れば、いかにもいかにも二心なからむ人のみこそめやすく頼もしきことにはあらめ、わが身にも知りなき。故宮の御ありさまは、いと情け情けしくめでたくをかしくおはせしかど、人数にも思さざりしかば、いかばかりかは心憂くつらかりし。この、いと言ふかひなく情けなくさまあしき人なれど、ひたおもむきに二心なきを見れば、心やすくて年ごろをも過ぐしつるなり。をりふしの心ばへの、かやうに愛敬なく用意なきことこそ憎けれ、嘆かしく恨めしきこともなく、かたみにうちいさかひても、心にあはぬことをばあきらめつ。上達部、親王たちにて、みやびかに心恥づかしき人の御あたりといふとも、わが数ならではの甲斐あらじ。よろづのこと、わが身からなりけりと思へば、よろづに悲しうこそ見たてまつれ。いかにして、人笑へならずしたてまつらむ」と語らふ。

守は急ぎたちて、「女房など、こなたにめやすきあまたあなるを、このほど

はあらせたまへ。やがて、帳なども新しく仕立てられたための方を、事にはかになりたれば、取り渡し、とかく改むまじ」とて、西の方に来て、立ち居とかくしつらひ騒ぐ。めやすきさまにさはらかに、あたりあたりあるべき限りしたる所を、さかしらに屏風ども持て来て、いぶせきまで立て集めて、厨子、二階などあやしきまでし加へて、心をやりて急げば、北の方見苦しく見れど、口入れじと言ひてしかば、ただに見聞く。御方は、北面に居たり。「人の御心は見知り果てぬ。ただ同じ子なれば、さりとともいとかくは思ひ放ちたまはじとこそ思ひつれ。さはれ、世に母なき子はなくやはある」とて、娘を昼より乳母と二人、撫でつくろひ立てたれば、憎げにもあらず、十五六のほどにて、いと小さやかにふくらかなる人の、髪うつくしげにて小桂のほどなり。裾いとふさやかなり。これをいとめでたしと思ひて撫でつくろふ。「何か。人の異さまに思ひ構へられける人をしもと思へど、人柄のあたらしく、警策にもしたまふ君なれば、我も我もと婿に取らまほしくする人の多かなるに、取られなむも口惜しくてなむ」と、かのなか人にはかられて言ふもいとをこなり。男君も、このほどのいかめしく思ふやうなることと、よろづの罪あるまじう思ひて、その夜も替へず来そめぬ。

母君、御方の乳母、いとあさましく思ふ。ひがひがしきやうなれば、とかく見扱ふも心づきなければ、宮の北の方の御もとに御文たてまつる。

そのこととはべらでは、なれなれしくやとかしこまりて、え思ひたまふるままにも聞こえさせぬを、つつしむべきことはべりて、しばし所変へさせむと思つたまふるに、いと忍びてさぶらひぬべき隠れの方さぶらはば、いともいともうれしくなむ。数ならぬ身一つの蔭に隠れもあへず、あはれなることのみ多くはべる世なれば、頼もしき方にはまづなむ。

と、うち泣きつつ書きたる文を、あはれとは見たまひけれど、故宮のさばかり

許したまはでやみにし人を、我一人残りて知り語らはむもいとつつましく、また、見苦しきさまにて世にあぶれむも知らず顔にて聞かむこそ心苦しかるべし、ことなることなくてかたみに散りぼはむも、亡き人の御ために見苦しかるべきわざを、思しわづらふ。

大輔がもともにも、いと心苦しげに言ひやりたりければ、「さるやうこそははべらめ。人憎くはしたなくも、なのたまはせそ。かかる劣りの者の、人の御中に交じりたまふも、世の常のことなり」など聞こえて、「さらば、かの西の方に隠ろへたる所し出でて、いとむつかしげなめれど、さても過ぐいたまひつべくは、しばしのほど」と言ひつかはしつ。いとうれしと思ほして、人知れず出で立つ。御方もかの御あたりをば睦びきこえまほしと思ふ心なれば、なかなかかかることどもの出で来たるをうれしと思ふ。

守、少将の扱ひを、いかばかりめでたきことをせむと思ふに、そのきらきらしかるべきことも知らぬ心には、ただあらかななる東絹どもを、押しまろがして投げ出でつ。食ひ物も所狭きまでなむ運び出でて、ののしりける。下衆などは、それをいとかしこき情けに思ひければ、君もいとあらまほしく、心かしく取り寄りにけりと思ひけり。北の方このほどを見捨てて知らざらむも、ひがみたらむと思ひ念じて、ただするままにまかせて見るたり。客人の御出居、侍ひとしつらひ騒げば、家は広けれど、源少納言、東の対には住む、男子などの多かるに、所もなし。この御方に客人住みつきぬれば、廊などほとりばみたらむに住ませたてまつらむも、飽かずいとほしくおぼえて、とかく思ひめぐらすほど、宮にとは思ふなりけり。

この御方さまに、数まへたまふ人のなきを、あなづるなめりと思へば、ことに許いたまはざりしあたりを、あながちに参らす。乳母、若き人びと二三人ばかりして、西の廂の、北に寄りて人げ遠き方に局したり。年ごろかくはかなか

りつれど、疎く思すまじき人なれば、参る時は恥ぢたまはず、いとあらまほしくけはひことにて、若君の御扱ひをしておはする御ありさま、うらやましくおぼゆるもあはれなり。我も、故北の方には離れたてまつるべき人かは、仕うまつるといひしばかりに、数まへられたてまつらず、口惜しくてかく人にはあな忌と言ひてければ、人も通はず。二三日ばかり母君もゐたり。こたみは、心のどかにこの御ありさまを見る。

宮渡りたまふ。ゆかしくてももののはさまより見れば、いとよらに桜を折りたるさましたまひて、わが頼もし人に思ひて、恨めしけれど心には違はじと思ふ常陸守より、さまかたちも人のほどもこよなく見ゆる五位四位ども、あひひざまづきさぶらひて、このことかのことと、あたりあたりのことども、家司どもなど申す。また、若やかなる五位ども、顔も知らぬどもも多かり。わが継子の式部の丞にて蔵人なる、内の御使にて参れり。御あたりにもえ近く参らず。こよなき人の御けはひを、あはれ、こは何人ぞ、かかる御あたりにおはするめでたさよ、よそに思ふ時はめでたき人びとと聞こゆとも、つらき目見せたまはばと、もの憂く推し量りきこえさせつらむあさましさよ、この御ありさまかたちを見れば、七夕ばかりにても、かやうに見たてまつり通はむは、いといみじかるべきわざかな、と思ふに、若君抱きてうつくしみおはす。女君、短き几帳を隔てておはするを、押しやりてものなど聞こえたまふ、御かたちどもいときよらに似合ひたり。故宮の寂しくおはせし御ありさまを思ひ比ぶるに、宮たちと聞こゆれど、いとこよなきわざにこそありけれとおぼゆ。

几帳の内に入りたまひぬれば、若君は、若き人、乳母などもてあそびきこゆるびと参り集まれど、悩ましとて大殿籠もり暮らしつ。御台こなたに参る。よろづのこと気高く、心ことに見ゆれば、わがいみじきことを尽くすと見思へど、

なほなほしき人のあたりは口惜しかりけりと思ひなりぬれば、わが娘も、かやうにてさし並べたらむにはかたはならじかし、勢ひを頼みて、父ぬしの、后にもなしてむと思ひたる人びと、同じわが子ながら、けはひこよなきを思ふも、なほ今よりのちも心は高くつかふべかりけりと、夜一夜あらまし語り思ひ続けらる。

宮、日たけて起きたまひて、「後の宮、例の悩ましくしたまへば、参るべし」とて、御装束などしたまひておはす。ゆかしうおぼえて覗けば、うるはしくひきつくろひたまへる、はた似るものなく気高く愛敬づききよらにて、若君をえ見捨てたまはで遊びおはす。御粥、強飯など参りてぞ、こなたより出でたまふ。今朝より参りて、さぶらひの方にやすらひける人びと、今ぞ参りてものなど聞こゆる中に、きよげだちて、なでふことなき人のすさまじき顔したる、直衣着て太刀佩きたるあり。御前にて何とも見えぬを、「かれぞこの常陸守の婿の少将な。初めは御方にと定めけるを、守の娘を得てこそいたはられぬなど言ひて、かしかれたる女の童を持たるななり」「いさ、この御あたりの人はかけても言はず」「かの君の方より、よく聞きたよりのあるぞ」など、おのがどち言ふ。聞くらむとも知らで人のかく言ふにつけても、胸つぶれて、少将をめやすきほどと思ひける心も口惜しく、げにことなることなかるべかりけりと思ひて、いとどしくあなづらはしく思ひなりぬ。若君のはひ出でて、御簾のつまよりのぞきたまへるを、うち見たまひて、立ち返り寄りおはしたり。「御心地よろしく見えたまはば、やがてまかでなむ。なほ苦しうしたまはば、今宵は宿直にぞ。今は一夜を隔つるもおぼつかなきこそ苦しけれ」とて、しばし慰め遊ばして、出でたまひぬるさまの、返す返す見るとも見るとも飽くまじく匂ひやかにをかしければ、出でたまひぬる名残さうぎうしくぞ眺めらるる。

女君の御前に出でて来て、いみじくめでたてまつれば、田舎びたると思して笑

ひたまふ。「故上の亡せたまひしほどは、言ふかひなく幼き御ほどにて、いかにならせたまはむと、見たてまつる人も故宮も思し嘆きしを、こよなき御宿世のほどなりければ、さる山ふところのなかにも、生ひ出でさせたまひしにこそありけれ。口惜しく故姫君のおはしまさずなりにたるこそ飽かぬことなれ」など、うち泣きつつ聞こゆ。君もうち泣きたまひて、「世の中の恨めしく心細き折々も、またかくながらふれば、すこしも思ひ慰めつべき折もあるを、いにしへ頼みきこえける蔭どもに後れたてまつりけるは、なかなか世の常に思ひなされて、見たてまつり知らずなりにければあるを、なほこの御ことは尽きせずいみじくこそ。大将の、よろづのことに心の移らぬよしを愁へつつ、浅からぬ御心のさまを見るにつけても、いとこそ口惜しけれ」とのたまへば、「大将殿は、さばかり世にためしなきまで帝のかしづき思したなるに、心おごりしたまふらむかし。おはしまさましかば、なほこのことせかれしもしたまはざらましや」など聞こゆ。「いさや。やうのものと、人笑はれなる心地せましも、なかなかやあらまし。見果てぬにつけて、心にくくもある世にこそと思へど、かの君はいかなるにかあらむ、あやしきまでもの忘れせず、故宮の御後の世をさへ思ひやり深く後見ありきたまふめる」など、心うつくしう語りたまふ。「かの過ぎにし御代はりに尋ねて見むと、この数ならぬ人をさへなむ、かの弁の尼君にはのたまひける。さもや、と思うたまへ寄るべきことにははべらねど、一本ゆゑにこそはとかたじけなけれど、あはれになむ思うたまへらるる御心深さなる」など言ふついでに、この君をもてわづらふこと、泣く泣く語る。

こまかにはあらねど、人も聞きけりと思ふに、少将の思ひあなづりけるさまなどほのめかして、「命はべらむ限りは、何か、朝夕の慰めぐさにて見過ぐしつべし。うち捨てはべりなむのちは、思はずなるさまに散りばひはべらむが悲しさに、尼になして深き山にやし据ゑて、さる方に世の中を思ひ絶えてはべら

ましなどなむ、思うたまへわびては、思ひ寄りはべる」など言ふ。「げに心苦しき御ありさまにこそはあなれど、何か、人にあなづらるる御ありさまは、かやうになりぬる人のさがにこそ。さりとても堪へぬわざなりければ、むげにその方に思ひおきてたまへりし身だに、かく心より外にながらふれば、まいていとあるまじき御ことなり。やついたまはむも、いとほしげなる御さまにこそ」など、いと大人びてのたまへば、母君、いとうれしと思ひたり。ねびにたるさまなれど、よしなからぬさましてきよげなり。いたく肥え過ぎにたるなむ常陸殿とは見えける。「故宮の、つらう情けなく思し放ちたりしに、いとど人げなく人にもあなづられたまふと見たまふれど、かう聞こえさせ御覽せらるるにつけてなむ、いにしへの憂さも慰みはべる」など、年ごろの物語、浮島のあはれなりしことも聞こえ出づ。「わが身一つの、とのみ言ひ合はする人もなき筑波山のありさまもかくあきらめきこえさせて、いつもいとかくてさぶらはまほしく思ひたまへなりはべりぬれど、かしこにはよからぬあやしの者ども、いかにたち騒ぎ求めはべらむ。さすがに心あわたたく思うたまへらるる。かかるほどのありさまに身をやつすは口惜しきものになむはべりけると、身にも思ひ知らるるを、この君はただ任せきこえさせて、知りはべらじ」など、かこちきこえかくれば、げに見苦しからでもあらなむと見たまふ。

かたちも心ぎまも、え憎むまじうらうたげなり。もの恥ぢもおどろおどろしからず、さまよう兎めいたるものからかどなからず、近くさぶらふ人びとにも、いとよく隠れてゐたまへり。ものなど言ひたるも、昔の人の御さまにあやしきまでおぼえたてまつりてぞあるや。かの人形求めたまふ人に見せたてまつらばやと、うち思ひ出でたまふ折しも、「大将殿参りたまふ」と人聞こゆれば、例の御几帳ひきつくろひて心づかひす。この客人の母君、「いで見たてまつらむほのかに見たてまつりける人のいみじきものに聞こゆめれど、宮の御ありさま

にはえ並びたまはじ」と言へば、御前にさぶらふ人びと、「いさや、えこそ聞こえ定めね」と聞こえあへり。「いかばかりならむ人か、宮をば消ちたてまつらむ」など言ふほどに、今ぞ車より降りたまふなると聞くほど、かしかましまで追ひののしりて、とみにも見えたまはず。待たれたまふほどに、歩み入りたまふさまを見れば、げにあなめでた、をかしげとも見えながらぞ、なまめかしうあてにきよげなるや。すずろに見え苦しう恥づかしくて、額髪などもひきつくろはれて、心恥づかしげに用意多く際もなきさまぞしたまへる。内より参りたまへるなるべし、御前どものけはひあまたして、「よべ、後の宮の悩みたまふよし承りて参りたりしかば、宮たちのさぶらひたまはざりしかば、いとほしく見たてまつりて、宮の御代はりに今までさぶらひはべりつる。今朝もと懈怠して参らせたまへるを、あいなう御あやまちに推し量りきこえさせてなむ」と聞こえたまへば、「げにおろかならず、思ひやり深き御用意になむ」とばかりいらへきこえたまふ。宮は内にとまりたまひぬるを見おきて、ただならずおはしたるなめり。

例の、物語いとなつかしげに聞こえたまふ。事に触れて、ただいにしへの忘れがたく、世の中のもの憂くなりまさるよしを、あらには言ひなきで、かすめ愁へたまふ。さしも、いかでか世を経て心に離れずのみはあらむ、なほ浅からず言ひ初めてしことの筋なれば、名残なからじとにや、など見なしたまへど、人の御けしきはしるきものなれば、見もてゆくままに、あはれなる御心ぎまを、岩木ならねば思ほし知る。怨みきこえたまふことも多ければ、いとわりなくうち嘆きて、かかる御心をやむる禊をせさせたてまつらまほしく思ほすにやあらむ、かの人形のたまひ出でて、「いと忍びてこのわたりになむ」とほのめかしきこえたまふを、かれもなべての心地はせずゆかしくなりにたれど、うちつけにふと移らむ心地、はたせず。「いでや、その本尊、願ひ満てたまふべくはこ

そ尊からめ、時々心やましくは、なかなか山水も濁りぬべく」とのたまへば、果て果ては、「うたての御聖心や」と、ほのかに笑ひたまふもをかしう聞こゆ。「いでさらば、伝へ果てさせたまへかし。この御逃れ言葉こそ、思ひ出づればゆゆしく」とのたまひても、また涙ぐみぬ。

見し人の形代ならば身に添へて恋しき瀬々のなでもものにせむ

と、例の戯れに言ひなして、紛らはしたまふ。

「みそぎ河瀬々に出ださむなでものを身に添ふ影と誰れか頼まむ

引く手あまたに、とかや。いとほしくぞはべるや」とのたまへば、「つひに寄る瀬はさらなりや。いとうれたきやうなる水の泡にも争ひはべるかな。かき流さるるなでものは、いでまことぞかし。いかで慰むべきことぞ」など言ひつつ、暗うなるもうるさければ、かりそめにものしたる人も、あやしくと思ふらむもつつましきを、「今宵はなほとく帰りたまひね」とこしらへやりたまふ。

「さらば、その客人に、かかる心の願ひ年経ぬるを、うちつけになど浅う思ひなすまじうのたまはせ知らせたまひて、はしたなげなるまじうはこそ。いとうひうひしうならひにてはべる身は、何ごともをこがましきまでなむ」と語らひきこえおきて出でたまひぬるに、この母君、「いとめでたく、思ふやうなるさまかな」とめでて、乳母ゆくりかに思ひよりてたびたび言ひしことを、あるまじきことに言ひしかど、この御ありさまを見るには、天の川を渡りても、かかる彦星の光をこそ待ちつけさせめ、わが娘は、なのめならむ人に見せむは惜しげなるさまを、夷めきたる人をのみ見ならひて、少将をかしきものに思ひけるを、悔しきまで思ひなりにけり。寄りゐたまへりつる真木柱も茵も、名残匂へる移り香、言へばいとことさらめきたるまでありがたし。時々見たてまつる人だに、たびごとにめできこゆ。「経などを讀みて、功德のすぐれたることあめるにも、香の香うばしきをやむごとなきことに、仏のたまひおきけるもこ

とわりなりや。薬王品などに取り分きてのたまへる牛頭栴檀とかや、おどろおどろしきものの名なれど、まづかの殿の近く振る舞ひたまへば、仏はまことしたまひけりところおぼゆれ。幼くおはしけるより、行ひもいみじくしたまひければよ」など言ふもあり。また、「前の世こそゆかしき御ありさまなれ」など、口々めづることどもを、すずろに笑みて聞きみたり。

君は、忍びてのたまひつることを、ほのめかしのたまふ。「思ひ初めつること、執念きまで軽々しからずものしたまふめるを、げにただ今のありさまなどを思へば、わづらはしき心地すべけれど、かの世を背きてもなど思ひ寄りたまふらむも、同じことに思ひなして、試みたまへかし」とのたまへば、「つらき目見せず、人にあなづられじの心にてこそ、鳥の音聞こえざらむ住まひまで思うたまへおきつれ、げに人の御ありさまはひを見たてまつり思うたまふるは、下仕へのほどなどにても、かかる人の御あたりに馴れきこえむは、かひありぬべし。まいて若き人は、心つけたてまつりぬべくはべるめれど、数ならぬ身に、もの思ふ種をやいとど蒔かせて見はべらむ。高きも短きも、女といふものはかかる筋にてこそ、この世、後の世まで苦しき身になりはべなれと思うたまへばればなむ、いとほしく思うたまへはべる。それもただ御心になむ。ともかくも、思し捨てずものせさせたまへ」と聞こゆれば、いとわづらはしくなりて、「いさや。来し方の心深さにうちとけて、行く先のありさまは知りがたきを」とうち嘆きて、ことに物ものたまはずなりぬ。

明けぬれば、車など率て来て、守の消息など、いと腹立たしげに脅かしたれば、「かたじけなくよろづに頼みきこえさせてなむ。なほしばし隠させたまひて、巖の中にもいかにとも、思うたまへめぐらしはべるほど、数にはべらずとも、思ほし放たず、何ごとをも教へさせたまへ」など聞こえおきて、この御方もいと心細くならはぬ心地に立ち離れむを思へど、今めかしくをかしく見ゆ

るあたりに、しばしも見馴れたてまつらむと思へば、さすがにうれしくもおぼえけり。

車引き出づるほどの、すこし明うなりぬるに、宮、内よりまかでたまふ。若君おぼつかなくおぼえたまひければ、忍びたるさまにて、車なども例ならでおはしますに、さしあひて、おしとどめて立てたれば、廊に御車寄せて降りたまふ。「なぞの車ぞ。暗きほどに急ぎ出づるは」と目とどめさせたまふ。かやうにてぞ、忍びたる所には出づるかしと、御心ならひに思し寄るもむくつけし。

「常陸殿のまかでさせたまふ」と申す。若やかなる御前ども、「殿こそあざやかなれ」と笑ひあへるを聞くも、げにこよなの身のほどやと悲しく思ふ。ただこの御方のことを思ふゆゑにぞ、おのれも人びとしくならまほしくおぼえける。まして正身をなほなほしくやつして見むことは、いみじくあたらしう思ひなりぬ。宮入りたまひて、「常陸殿といふ人や、ここに通はしたまふ。心ある朝ぼらけに急ぎ出でつる車副などこそ、ことさらめきて見えつれ」など、なほ思ひ疑ひてのたまふ。聞きにくくかたはらいたしと思して、「大輔などが若くてのころ、友達にてありける人は、ことに今めかしうも見えざるを、ゆゑゆるしげにもものたまひなすかな。人の聞きとがめつべきことをのみ、常にとりないたまふこそ。なき名は立てで」とうち背きたまふも、らうたげにをかし。

明くるも知らず大殿籠もりたるに、人びとあまた参りたまへば、寝殿に渡りたまひぬ。後の宮は、こととしき御悩みにもあらでおこたりたまひにければ、心地よげにて、右の大殿の君達など、碁打ち韻塞などしつづ遊びたまふ。

夕つ方、宮こなたに渡らせたまへれば、女君は御ゆするのほどなりけり。人びともおのおのうち休みなどして、御前には人もなし。小さき童のあるして、「折あしき御ゆするのほどこそ見苦しかめれ。さうさうしくてや眺めむ」と聞こえたまへば、「げに、おはしまさぬ隙々にこそ例は済ませ、あやしう、日ご

ろももの憂がらせたまひて、今日過ぎば、この月は日もなし。九十月はいかでかはとて、仕まつらせつるを」と大輔いとほしがる。

若君も寝たまへりければ、そなたにこれかれあるほどに、宮はたたずみ歩きたまひて、西の方に例ならぬ童の見えつるを、今参りたるかなど思ひてさし覗きたまふ。中のほどなる障子の細目に開きたるより見たまへば、障子のあなたに、一尺ばかりひきさけて屏風立てたり。そのつまに、几帳、簾に添へて立てたり。帷一重をうちかけて、紫苑色のはなやかなるに、女郎花の織物と見ゆる重なりて、袖口さし出でたり。屏風の一ひらたたまれたるより、心にもあらで見ゆるなめり。今参りの口惜しからぬなめりと思ひて、この廂に通ふ障子をいとみそかに押しあげたまひて、やをら歩み寄りたまふも人知らず。こなたの廊の中の壺前裁のいとをかしう色々に咲き乱れたるに、遣水のわたり、石高きほどいとをかしければ、端近く添ひ臥して眺むるなりけり。あきたる障子を今すこし押しあけて、屏風をつまより覗きたまふに、宮とは思ひもかけず、例こなたに來馴れたる人にやあらむと思ひて、起き上がりたる様体いとをかしう見ゆるに、例の御心は過ぐしたまはで、衣の裾を捉へたまひて、こなたの障子は引き立てたまひて、屏風のはさまに居たまひぬ。あやしと思ひて、扇をさし隠して、見返りたるさまいとをかし。扇を持たせながら捉へたまひて、「誰れぞ。名のりこそゆかしけれ」とのたまふに、むくつけくなりぬ。さるものつらに、顔を外ざまにもて隠して、いといたう忍びたまへれば、このただならずほめかしたまふらむ大将にや、香うばしきけはひなども思ひわたさるるにいと恥づかしくせむ方なし。

乳母、人げの例ならぬをあやしと思ひて、あなたなる屏風を押しあけて來たり。「これはいかなることにかはべらむ。あやしきわざにもはべる」など聞こゆれど、憚りたまふべきことにもあらず、かくうちつけなる御しわざなれど、

言の葉多かる本性なれば、何やかやとのたまふに、暮れ果てぬれど、「誰れと聞かざらむほどは許さじ」とてなれなれしく臥したまふに、宮なりけりと思ひ果つるに、乳母、言はむ方なくあきれてゐたり。

大殿油は灯籠にて、「今渡らせたまひなむ」と人びと言ふなり。御前ならぬ方の御格子どもぞ下ろすなる。こなたは離れたる方にしなして、高き棚厨子一よろひ立て、屏風の袋に入れこめたる、所々に寄せかけ、何かの荒らかなるさまにし放ちたり。かく人のものしたまへばとて、通ふ道の障子一間ばかりぞあけたるを、右近とて、大輔が娘のさぶらふ来て、格子下ろしてここに寄り来なり。「あな暗や。まだ大殿油も参らざりけり。御格子を、苦しきに、急ぎ参りて闇に惑ふよ」とて引き上ぐるに、宮もなま苦しと聞きたまふ。乳母はた、いと苦しと思ひて、ものづつみせずはやりかにおぞぎ人にて、「もの聞こえはべらむ。ここに、いとあやしきことのはべるに、見たまへ極じてなむえ動きはべらでなむ」「何ごとぞ」とて探り寄るに、桂姿なる男の、いと香うばしくて添ひ臥したまへるを、例のけしからぬ御さまと思ひ寄りにけり。女の心合はせたまふまじきことと推し量らるれば、「げにいと見苦しきことにもはべるかな。右近はいかにか聞こえさせむ。今参りて、御前にこそは忍びて聞こえさせめ」とて立つを、あさましくかたはに誰も誰も思へど、宮は懼ぢたまはず、あさましきまであてにをかしき人かな、なほ何人ならむ、右近が言ひつるけしきも、いとおしなべての今参りにはあらざめり、心得がたく思されて、と言ひかく言ひ怨みたまふ。心づきなげにけしきばみてももてなさねど、ただいみじう死ぬばかり思へるがいとほしければ、情けありてこしらへたまふ。

右近、上に、「しかしかこそおはしませ。いとほしく、いかに思ふらむ」と聞こゆれば、「例の、心憂き御さまかな。かの母も、いかにあはあはしくけしからぬさまに思ひたまはむとすらむ。うしろやすくと返す返す言ひおきつるも

のを」と、いとほしく思せど、いかが聞こえむ。さぶらふ人びともすこし若やかによろしきは見捨てたまふなく、あやしき人の御癖なれば、いかがは思ひ寄りたまひけむと、あさましきにも言はれたまはず。

「上達部あまた参りたまふ日にて、遊び戯れては、例もかかる時は遅くも渡りたまへば、皆うちとけてやすみたまふぞかし。さても、いかにすべきことぞ。かの乳母こそおぞましかりけれ。つと添ひゐてまもりたてまつり、引きもかながらたてまつりつべくこそ思ひたりつれ」と、少将と二人していとほしがるほどに、内より人参りて、大宮この夕暮より御胸悩ませたまふを、ただ今いみじく重く悩ませたまふよし申さす。右近、「心なき折の御悩みかな。聞こえさせむ」とて立つ。少将、「いでや、今はかひなくもあべいことを。をこがましく、あまりなおびやかしきこえたまひそ」と言へば、「いな、まだしかるべし」と忍びてささめき交はすを、上は、いと聞きにくき人の御本性にこそあめれ、すこし心あらむ人はわがあたりをさへ疎みぬべかめりと思す。

参りて、御使の申すよりも、今すこしあわたたしげに申しなせば、動きたまふべきさまにもあらぬ御けしきに、「誰れか参りたる。例の、おどろおどろしくおびやかす」とのたまはすれば、「宮の侍に、平重経となむ名のりはべりつる」と聞こゆ。出でたまはむことのいとわりなく口惜しきに、人目も思されぬに、右近立ち出でて、「この御使を西面にて」と言へば、申し次ぎつる人も寄り来て、「中務の宮、参らせたまひぬ。大夫はただ今なむ参りつる。道に御車引き出づる、見はべりつ」と申せば、げにはかに時々悩みたまふ折々もあるをと思すに、人の思すらむこともはしたなくなりて、いみじう怨み契りおきて出でたまひぬ。

恐ろしき夢の覚めたる心地して、汗におし浸して臥したまへり。乳母うち扇ぎなどして、「かかる御住まひは、よろづにつけてつつましよう便なかりけり。

かくおはしましそめて、さらによきことはべらじ。あな恐ろしや。限りなき人と聞こゆとも、やすからぬ御ありさまはいとあぢきなかるべし。よそのさし離れたらむ人にこそ、よしともあしともおぼえられたまはめ、人聞きもかたはらいたきことと思うたまへて、降魔の相を出だして、つと見たてまつりつれば、いとむくつけく下種下種しき女と思して、手をいといたくつませたまひつるこそ、なほ人の懸想だちて、いとをかしくもおぼえはべりつれ。かの殿には、今日もいみじくいさかひたまひけり。ただ一所の御上を見扱ひたまふとて、わが子どもをば思し捨てたり、客人のおはするほどの御旅居見苦しと、荒々しきまでぞ聞こえたまひける。下人さへ聞きいとほしがりけり。すべて、この少将の君ぞいと愛敬なくおぼえたまふ。この御ことはべらざらましかば、うちうちやすからずむつかしきことは折々はべりとも、なだらかに年ごろのままにておはしますべきものを」など、うち嘆きつつ言ふ。

君は、ただ今はともかくも思ひめぐらされず、ただいみじくはしたなく見知らぬ目を見つるに添へても、いかに思すらむと思ふにわびしければ、うつぶし臥して泣きたまふ。いと苦しと見扱ひて、「何かかく思す。母おはせぬ人こそ、たづきなう悲しかるべけれ。よそのおぼえは、父なき人はいと口惜しけれど、さがなき継母に憎まれむよりは、これはいとやすし。ともかくもしたてまつりたまひてむ。な思し屈ぜそ。さりとも、初瀬の観音おはしませば、あはれと思ひきこえたまふらむ。ならばぬ御身に、たびたびしきりて詣でたまふことは、人のかくあなづりざまにのみ思ひきこえたるを、かくもありけりと思ふばかりの御幸ひおはしませとこそ念じはべれ。あが君は人笑はれにてはやみたまひなむや」と、世をやすげに言ひるたり。

宮は急ぎて出でたまふなり。内近き方にやあらむ、こなたの御門より出でたまへば、もののたまふ御声も聞こゆ。いとあてに限りもなく聞こえて、心ばへ

ある古言などうち誦じたまひて過ぎたまふほど、すずろにわづらはしくおぼゆ。移し馬ども牽き出だして、宿直にさぶらふ人、十人ばかりして参りたまふ。

上、いとほしく、うたて思ふらむとて、知らず顔にて、「大宮悩みたまふとて参りたまひぬれば、今宵は出でたまはじ。ゆするの名残にや、心地も悩まして起きて起きるはべるを、渡りたまへ。つれづれにも思さるらむ」と聞こえたまへり。「乱り心地のいと苦しうはべるを、ためらひて」と乳母して聞こえたまふ。

「いかなる御心地ぞ」と返り訪らひきこえたまへば、「何心地ともおぼえはべらず。ただいと苦しうはべり」と聞こえたまへば、少将、右近、目まじろきをして、「かたはらぞいたくおはすらむ」と言ふも、ただなるよりはいとほし。

いと口惜しう心苦しきわざかな、大将の心とどめたるさまにのたまふめりしを、いかにあはあはしく思ひ落とさむ、かく乱りがはしくおはする人は、聞きにくく実ならぬことをもくねり言ひ、またまことにすこし思はずならむことをも、さすがに見許しつべうこそおはすめれ、この君は言はで憂しと思はむこと、いと恥づかしげに心深きを、あいなく思ふこと添ひぬる人の上なめり、年ごろ見ず知らざりつる人の上なれど、心ばへかたちを見ればえ思ひ離るまじう、らうたく心苦しきに、世の中はありがたくむつかしげなるものかな、わが身のありさまは、飽かぬこと多かる心地すれど、かくものはかなき目も見つべかりける身の、さははふれずなりにけるにこそ、げにめやすきなりけれ、今はただこの憎き心添ひたまへる人の、なだらかにて思ひ離れなば、さらに何ごとも思ひ入れずなりなむ、と思ほす。いと多かる御髪なれば、とみにもえ乾しやらず、起きみたまへるも苦し。白き御衣一襲ばかりにておはする、細やかにてをかしげなり。

この君は、まことに心地もあしくなりにたれど、乳母、「いとかたはらいたし。事もあり顔に思すらむを、ただおほどかにて見えたてまつりたまへ。右

近の君などには、事のありさま初めより語りはべらむ」とせめてそそのかしたてて、こなたの障子のもとにて、「右近の君にももの聞こえさせむ」と言へば、立ちて出でたれば、「いとあやしくはべりつることの名残に、身も熱うなりたまひて、まめやかに苦しげに見えさせたまふを、いとほしく見はべる。御前にて慰めきこえさせたまへとてなむ。過ちもおはせぬ身を、いとつつましげに思ほしわびためるも、いささかにも世を知りたまへる人こそあれ、いかでかはと、ことわりにいとほしく見たてまつる」とて、引き起こして参らせたてまつる。

我にもあらず、人の思ふらむことも恥づかしけれど、いとやはらかにおほどき過ぎたまへる君にて、押し出でられて居たまへり。額髪などのいたう濡れたる、もて隠して、火の方に背きたまへるさま、上をたぐひなく見たてまつるに、け劣るとも見えず、あてにをかし。これに思しつきなば、めざましげなることはありなむかし、いとかからぬをだに、めづらしき人をかしょうしたまふ御心を、と、二人ばかりぞ、御前にてえ恥ぢたまはねば、見るたりける。物語いとなつかしくしたまひて、「例ならずつつましき所など、な思ひなしたまひそ。故姫君のおはせずなりにしのち、忘るる世なくいみじく身も恨めしく、たぐひなき心地して過ぐすに、いとよく思ひよそへられたまふ御さまを見れば、慰む心地してあはれになむ。思ふ人もなき身に、昔の御心ぎしのやうに思ほさば、いとうれしくなむ」など語らひたまへど、いとものつつましくて、また鄙びたる心にいらへきこえむこともなくて、「年ごろ、いと遙かにのみ思ひきこえさせしに、かう見たてまつりはべるは、何ごとも慰む心地しはべりてなむ」とばかり、いと若びたる声にて言ふ。

絵など取り出でさせて、右近に詞読ませて見たまふに、向ひてもの恥ぢもえしあへたまはず、心に入れて見たまへる火影、さらにここと見ゆる所なく、こ

まかにをかしげなり。額つき、まみの薫りたる心地して、いとおほどかなるあてきは、ただそれとのみ思ひ出でらるれば、絵はことに目もとどめたまはで、いとあはれなる人のかたちかな、いかでかうしもありけるにかあらむ、故宮にいとよく似たてまつりたるなめりかし、故姫君は宮の御方さまに、我は母上に似たてまつりたるところは、古人とも言ふなりしか、げに似たる人はいみじきものなりけり、と思し比ぶるに、涙ぐみて見たまふ。かれは限りなくあてに気高きものから、なつかしうなよやかに、かたはなるまでなよなよとたわみたるさまのしたまへりしにこそ、これはまたもてなしのうひうひしげに、よろづのことをつつましうのみ思ひたるけにや、見所多かるなまめかしさぞ劣りたる、ゆゑゆゑしきけはひだにもてつけたらば、大将の見たまはむにも、さらにかたはなるまじ、などこのかみ心に思ひ扱はれたまふ。

物語などしたまひて、暁方になりてぞ寝たまふ。かたはらに臥せたまひて、故宮の御ことども、年ごろおはせし御ありさまなど、まほならねど語りたまふ。いとゆかしう、見たてまつらずなりにけるを、いと口惜しう悲しと思ひたり。よべの心知りの人びとは、「いかなりつらむな、いとらうたげなる御さまを。いみじう思すとも、甲斐あるべきことかは。いとほし」と言へば、右近ぞ、「さもあらじ。かの御乳母の、ひき据ゑてすずろに語り愁へしけしき、もて離れてぞ言ひし。宮も逢ひても逢はぬやうなる心ばへにこそ、うちうそぶき、口ずさびたまひしか」「いさや、ことさらにもやあらむ、そは知らずかし」「よべの火影のいとおほどかなりしも、事あり顔には見えたまはざりしを」など、うちささめきていとほしがる。

乳母車請ひて、常陸殿へ往ぬ。北の方にかうかうと言へば、胸つぶれ騒ぎて、人もけしからぬさまに言ひ思ふらむ、正身もいかが思すべき、かかる筋のもの憎みは、あて人もなきものなりと、おのが心ならひに、あわたたしく思ひなり

て、夕つ方参りぬ。宮おはしまさねば心やすくて、「あやしく心幼げなる人を参らせおきて、うしろやすくは頼みきこえさせながら、鼬のはべらむやうなる心地のしはべれば、よからぬものどもに、憎み恨みられはべり」と聞こゆ。「いとき言ふばかりの幼さにはあらざめるを。うしろめたげにけしきばみたる御まかけこそわづらはしけれ」とて笑ひたまへるが、心恥づかしげなる御まみを見るも、心の鬼に恥づかしくぞおぼゆる。いかに思すらむと思へば、えもうち出で聞こえず。「かくてさぶらひたまはば、年ごろの願ひの満つ心地して、人の漏り聞きはべらむもめやすく、おもだたしきことになむ思うたまふるを、さすがにつつましきことになむはべりける。深き山の本意は、みさをになむはべるべきを」とてうち泣くもいとほしくて、「ここには、何事かうしろめたくおぼえたまふべき。とてもかくても、疎々しく思ひ放ちきこえばこそあらめ、けしからずだちてよからぬ人の時々ものしたまふめれど、その心を皆人見知りたれば、心づかひして、便なうはもてなしきこえじと思ふを、いかに推し量りたまふにか」とのたまふ。「さらに御心をば隔てありても思ひきこえさせはべらず。かたはらいたう許しなかりし筋は、何にかかけても聞こえさせはべらむ。その方ならで、思ほし放つまじき綱もはべるをなむ、とらへ所に頼みきこえさする」など、おろかならず聞こえて、「明日あさて、かたき物忌にはべるを、おほぞうならぬ所にて過ぐして、またも参らせはべらむ」と聞こえていぎなふ。いとほしく本意なきわざかなと思せど、えとどめたまはず。

あさましようかたはなることに驚き騒ぎたれば、をさをさものも聞こえて出でぬ。かやうの方違へ所と思ひて、小さき家まうけたりけり。三条わたりに、さればみたるが、まだ造りさしたる所なれば、はかばかしきしつらひもせでなむありける。「あはれ、この御身一つをよろづにもて悩みきこゆるかな。心になはぬ世には、あり経まじきものにこそありけれ。みづからばかりは、ただひ

たぶるに品々しからず人げなう、たださる方にはひ籠もりて過ぐしつべし。このゆかりは、心憂しと思ひきこえしあたりを睦びきこゆるに、便なきことも出で来なば、いと人笑へなるべし、あぢきなし。ことやうなりとも、ここを人にも知らせず、忍びておはせよ。おのづからともかくも仕うまつりてむ」と言ひおきて、みづからは帰りなむとす。君はうち泣きて、世にあらむこと所狭げなる身と思ひ屈したまへるさま、いとあはれなり。親はた、ましてあたらしく惜しければ、つつがなく思ふごと見なさむと思ひ、さるかたはらいたきことにつけて、人にもあはあはしく思はれむがやすからぬなりけり。心地なくなどはあらぬ人の、なま腹立ちやすく、思ひのままにぞすこしありける。かの家にも隠ろへては据ゑたりぬべけれど、しか隠ろへたらむをいとほしと思ひて、かく扱ふに、年ごろかたはら去らず、明け暮れ見ならひて、かたみに心細くわりなしと思へり。「ここは、またかくあばれて、危ふげなる所なめり。さる心したまへ。曹司曹司にある物ども召し出でて使ひたまへ。宿直人のことなど言ひおきてはべるも、いとうしろめたけれど、かしこに腹立ち恨みらるるがいと苦しければ」と、うち泣きて帰る。

少将の扱ひを、守はまたなきものに思ひ急ぎて、もろ心にさまあしく営まず、と怨ずるなりけり。いと心憂くこの人によりかかると紛れどももあるぞかしと、またなく思ふ方のことのかかれば、つらく心憂くて、をさをさ見入れず。かの宮の御前にていと人げなく見えしに、多く思ひ落としてければ、私ものに思ひかしづかましをなど、思ひしことはやみにたり。ここにてはいかが見ゆらむ、またうちとけたるさま見ぬにと思ひて、のどかにゐたまへる昼つ方、こなたに渡りてものより覗く。白き綾のなつかしげなるに、今様色の擣目などもきよなるを着て、端の方に前栽見るとて居たるは、いづこかは劣る、いときよげなめるはと見ゆ。娘、まだ片なりに何心もなきさまにて添ひ臥したり。宮の上の

並びておはせし御さまどもの思ひ出づれば、口惜しのさまどもやと見ゆ。前なる御達にもものなど言ひ戯れて、うちとけたるは、いと見しやうに匂ひなく人わろげにて見えぬを、かの宮なりしは異少将なりけりと思ふ折しも、言ふことよ。「兵部卿宮の萩のなほことにおもしろくもあるかな。いかでさる種ありけむ。同じ枝さしなどのいと艶なるこそ。一日参りて、出でたまふほどなりしかば、え折らずなりにき。ことだに惜しき、と宮のうち誦じたまへりしを、若き人たちに見せたらましかば」とて、我も歌詠みるたり。「いでや、心ばせのほどを思へば、人ともおぼえず、出で消えはいとこよなかりけるに。何ごと言ひたるぞ」とつぶやかかるれど、いと心地なげなるさまは、さすがにしたらねば、いか言ふとて、試みに、

しめ結ひし小萩が上も迷はぬにいかなる露に映る下葉ぞ
とあるに、惜しくおぼえて、

「宮城野の小萩がもとと知らませば露も心を分かずぞあらまし
いかでみづから聞こえさせあきらめむ」と言ひたり。

故宮の御こと聞きたるなめりと思ふに、いとどいかで人と等しくとのみ思ひ扱はる。あいなう、大将殿の御さまかたちぞ、恋しう面影に見ゆる。同じうめでたしと見たてまつりしかど、宮は思ひ離れたまひて、心もとまらず。あなづりて押し入りたまへりけるを思ふもねたし。この君はさすがに尋ね思す心ばへのありながら、うちつけにも言ひかけたまはず、つれなし顔なるしもこそいたけれ、よろづにつけて思ひはてらるれば、若き人はまして、かくや思ひはてきこえたまふらむ、わがものにせむと、かく憎き人を思ひけむこそ見苦しきことなべかりけれ、など、ただ心にかかりて、眺めのみせられて、とてやかくてやと、よろづによからむあらまし事を思ひ続けるに、いと難し。やむごとなき御身のほど、御もてなし、見たてまつりたまへらむ人は、今すこしなのめならず、

いかばかりにてかは心をとどめたまはむ、世の人のありさまを見聞くに、劣りまさり、いやしうあてなる品に従ひて、かたちも心もあるべきものなりけり、わが子どもを見るに、この君に似るべきやはある、少将をこの家のうちにまたなき者に思へども、宮に見比べたてまつりしは、いとも口惜しかりしに、推し量らる。当代の御かしづきむすめを得たてまつりたまへらむ人の御目移しには、いともいとも恥づかしく、つつましかるべきものかな、と思ふに、すずろに心地もあくがれにけり。

旅の宿りはつれづれにて、庭の草もいぶせき心地するに、いやしき東声したる者どもばかりのみ出で入り、慰めに見るべき前栽の花もなし。うちあばれて、晴れ晴れしからで明かし暮らすに、宮の上の御ありさま思ひ出づるに、若い心地に恋しかりけり。あやにくだちたまへりし人の御けはひも、さすがに思ひ出でられて、何事にかありけむ、いと多くあはれげにのたまひしかな、名残をかかりし御移り香もまだ残りたる心地して、恐ろしかりしも思ひ出でらる。

母君、たつやと、いとあはれなる文を書きておこせたまふ。おろかならず心苦しう思ひ扱ひたまふめるに、かひなうもて扱はれたてまつること、とうち泣かれて、

いかにつれづれに見ならはぬ心地したまふらむ。しばし忍び過ぐしたまへ。
とある返り事に、

つれづれは何か。心やすくてなむ。

ひたぶるにうれしからまし世の中にあらぬ所と思はましかば
と幼げに言ひたるを見るままに、ほろほろとうち泣きて、かう惑はしはふるるやうにもてなすこと、といみじければ、

憂き世にはあらぬ所を求めても君が盛りを見るよしもがな
と、なほなほしきことどもを言ひ交はしてなむ、心のべける。

かの大將殿は、例の秋深くなりゆくころ、ならひにしことなれば、寢覚め寢覚めにも忘れせず、あはれにのみおぼえたまひければ、宇治の御堂造り果てつと聞きたまふに、みづからおはしましたり。久しう見たまはざりつるに、山の紅葉もめづらしうおぼゆ。こぼちし寢殿、こたみはいと晴れ晴れしう造りなしたり。昔、いとことそぎて聖だちたまへりし住まひを思ひ出づるに、この宮も恋しうおぼえたまひて、さま変へてけるも口惜しきまで常よりも眺めたまふ。もとありし御しつらひは、いと尊げにて、今片つ方を女しくこまやかになど、一方ならざりしを、網代屏風、何かのあらあらしきなどは、かの御堂の僧坊の具にことさらになさせたまへり。山里めきたる具どもをことさらにせさせたまひて、いたうもことそがず、いとよげにゆゑゆゑしくしつらはれたり。

遣水のほとりなる岩に居たまひて、

絶え果てぬ清水になどか亡き人の面影をだにとどめざりけむ

涙を拭ひて、弁の尼君の方に立ち寄りたまへれば、いと悲しと見たてまつるに、ただひそみにひそむ。長押にかりそめに居たまひて、簾のつま引き上げて物語したまふ。几帳に隠ろへて居たり。ことのついでに、「かの人はさいつころ宮にと聞きしを、さすがにうひうひしくおぼえてこそ、訪れ寄らね。なほこれより伝へ果てたまへ」とのたまへば、「一日、かの母君の文はべりき。忌違ふとて、ここかしこになむあくがれたまふめる。このころもあやしき小家に隠ろへものしたまふめるも心苦しく、すこし近きほどならましかば、そこにも渡して心やすかるべきを、荒ましき山道にたはやすくもえ思ひ立たでなむ、とはべりし」と聞こゆ。「人びとのかく恐ろしくすめる道に、まろこそ古りがたく分け来れ。何ばかりの契りにかと思ふは、あはれになむ」とて、例の涙ぐみたまへり。「さらば、その心やすからむ所に消息したまへ。みづからやはかしこに出でたまはぬ」とのたまへば、「仰せ言を伝へはべらむことはやすし。今さらに

京を見はべらむことはもの憂くて、宮にだにえ参らぬを」と聞こゆ。「などでか。ともかくも人の聞き伝えばこそあらめ、愛宕の聖だに、時に従ひては出でずやありける。深き契りを破りて、人の願ひを満てたまはむこそ尊からめ」とのたまへば、「人済すこともはべらぬに、聞きにくきこともこそ出でまうで来れ」と苦しげに思ひたれど、「なほよき折なるを」と例ならずしひて、「あさてばかり車たてまつらむ。その旅の所尋ねおきたまへ。ゆめをこがましようひがわがすまじきを」とほほ笑みてのたまへば、わづらはしく、いかに思ふことならむと思へど、あふなくあはあはしからぬ御心ざまなれば、おのづからわがためにも、人聞きなどは包みたまふらむと思ひて、「さらば承りぬ。近きほどにこそ。御文などを見せさせたまへかし。ふりはへさかしらめきて、心しらひのやうに思はれはべらむも、今さらに伊賀専女にやと慎ましくてなむ」と聞こゆ。「文はやすかるべきを、人のもの言ひいとうたてあるものなれば、右大将は、常陸の守の娘をなむよばふなるなどもとりなしてむをや。その守の主、いと荒々しげなめり」とのたまへば、うち笑ひて、いとほしと思ふ。

暗うなれば出でたまふ。下草のをかしき花ども、紅葉など折らせたまひて、宮に御覽ぜさせたまふ。甲斐なからずおはしぬべけれど、かしこまり置きたるさまにて、いたうも馴れきこえたまはずぞあめる。内より、ただの親めきて、入道の宮にも聞こえたまへば、いとやむごとなき方は限りなく思ひきこえたまへり。こなたかなたとかしづききこえたまふ宮仕ひに添へて、むつかしき私の心の添ひたるも苦しかりけり。

のたまひしまだつとめて、睦ましく思す下臈侍一人、顔知らぬ牛飼つくり出でて遣はす。「莊の者どもの田舎びたる召し出でつつ、つけよ」とのたまふ。かならず出づべくのたまへりければ、いとつつましく苦しけれど、うち化粧じつくりひて乗りぬ。野山のけしきを見るにつけても、いにしへよりの古事ども

思ひ出でられて、眺め暮らしてなむ来着きける。いとつれづれに人目も見えぬ所なれば、引き入れて、「かくなむ参り来つる」と、しるべの男して言はせられたれば、初瀬の供にありし若人出で来て降ろす。あやしき所を眺め暮らし明かすに、昔語りもしつべき人の来たれば、うれしくて呼び入れたまひて、親と聞こえける人の御あたりの人と思ふに、睦ましきなるべし。「あはれに、人知れず見たてまつりしのちよりは、思ひ出できこえぬ折なけれど、世の中かばかり思ひたまへ捨てたる身にて、かの宮にだに参りはべらぬを、この大将殿のあやしきまでのたまはせしかば、思うたまへおこしてなむ」と聞こゆ。君も乳母も、めでたしと見おききこえてし人の御さまなれば、忘れぬさまにのたまふらむもあはれなれど、にはかにかく思したばかり思ひも寄らず。

宵うち過ぐるほどに、宇治より人参れりとて、門忍びやかにうちたたたく。さにやあらむ、と思へど、弁の開けさせたれば、車をぞ引き入るなる。あやしと思ふに、「尼君に對面賜はらむ」とて、この近き御庄の預りの名のりをせさせたまへれば、戸口にゐざり出でたり。雨すこしうちそそくに、風はいと冷やかに吹き入りて、言ひ知らず薫り来れば、かうなりけりと、誰れも誰れも心ときめきしぬべき御けはひをかしければ、用意もなくあやしきに、まだ思ひあへぬほどなれば、心騒ぎて、「いかなることにかあらむ」と言ひあへり。「心やすき所にて、月ごろの思ひあまることも聞こえさせむとてなむ」と言はせたまへり。いかに聞こゆべきことにかと、君は苦しげに思ひてゐたまへれば、乳母見苦しがりて、「しかおはしましたらむを、立ちながらや帰したてまつりたまはむ。かの殿にこそ、かくなむと忍びて聞こえぬ。近きほどなれば」と言ふ。「うひうひしく。などてかさはあらむ。若き御どちもの聞こえたまはむは、ふとしもしみつくべくもあらぬを。あやしきまで心のどかに、もの深うおはする君なれば、よも人の許しなくて、うちとけたまはじ」など言ふほど、雨やや降り来れ

ば、空はいと暗し。宿直人のあやしき声したる、夜行うちして、「家の辰巳の隅の崩れいと危ふし。この、人の御車入るべくは引き入れて御門鎖してよ。かかる、人の御供人こそ、心はうたてあれ」など言ひあへるも、むくむくしく聞きならはぬ心地したまふ。「佐野のわたりに家もあらなくに」など口ずさびて、里びたる簀子の端つ方に居たまへり。

さしとむる葎やしげき東屋のあまりほど降る雨そそきかな

と、うち払ひたまへる、追風いとかたはなるまで、東の里人も驚きぬべし。

とぎまかうぎまに聞こえ逃れむ方なければ、南の廂に御座ひきつくるひて、入れたてまつる。心やすくしも対面したまはぬを、これかれ押し出でたり。遣戸といふもの鎖して、いささか開けたれば、「飛驒の工匠も恨めしき隔てか。かかるものの外には、まだ居ならば」と愁へたまひて、いかがしたまひけむ、入りたまひぬ。かの人形の願ひものたまはで、ただ、「おぼえなきものはさまより見しより、すずろに恋しきこと。さるべきにやあらむ、あやしきまでぞ思ひきこゆる」とぞ語らひたまふべき。人のさまいとらうたげにおほどきたれば、見劣りもせず、いとあはれと思しけり。

ほどもなう明けぬ心地するに、鳥などは鳴かで、大路西き所に、おぼとれたる声して、いかにとか聞きも知らぬ名のりをして、うち群れて行くなどぞ聞こゆる。かやうの朝ぼらけに見れば、ものいただきたる者の鬼のやうなるぞかしと聞きたまふも、かかる蓬のまろ寝にならひたまはぬ心地もをかしくもありけり。宿直人も門開けて出づる音する。おのおの入りて臥しなどするを聞きたまひて、人召して、車妻戸に寄せさせたまふ。かき抱きて乗せたまひつ。誰れも誰れも、あやしうあへなきことを思ひ騒ぎて、「九月にもありけるを、心憂のわざや。いかにしつることぞ」と嘆けば、尼君もいとほしく、思ひの外なることどもなれど、「おのづから思すやうあらむ。うしろめたうな思ひたまひ

そ。長月は明日こそ節分と聞きしか」と言ひ慰む。今日は十三日なりけり。尼君、「こたみはえ参らじ。宮の上聞こし召さむこともあるに、忍びて行き帰りはべらむも、いとうたてなむ」と聞こゆれど、まだきこのことを聞かせたてまつらむも心恥づかしくおぼえたまひて、「それはのちにも罪さり申したまひてむ。かしこもしるべなくては、たづきなき所を」と責めてのたまふ。「一人一人やはべるべき」とのたまへば、この君に添ひたる侍従と乗りぬ。乳母、尼君の供なりし童などもおかれて、いとあやしき心地してゐたり。

近きほどにやと思へば、宇治へおはするなりけり。牛などひき替ふべき心まうけしたまへりけり。河原過ぎ、法性寺のわたりおはしますに、夜は明け果てぬ。若き人はいとほのかに見たてまつりて、めできこえて、すずろに恋ひたてまつるに、世の中のつつましさもおぼえず。君ぞいとあさましきにものおぼえで、うつぶし臥したるを、「石高きわたりは苦しきものを」とて、抱きたまへり。羅の細長を車の中に引き隔てたれば、はなやかにさし出でたる朝日影に尼君はいとはしたなくおぼゆるにつけて、故姫君の御供にこそ、かやうにても見たてまつりつべかりしか、あり経れば思ひかけぬことをも見るかなと悲しうおぼえて、包むとすれどうちひそみつつ泣くを、侍従はいと憎く、ものの初めに形異にて乗り添ひたるをだに思ふに、なぞかくいやめなると、憎くをこにも思ふ。老いたる者は、すずろに涙もろにあるものぞと、おろそかにうち思ふなりけり。

君も見る人は憎からねど、空のけしきにつけても、来し方の恋しさまさりて、山深く入るままにも、霧立ちわたる心地したまふ。うち眺めて寄りゐたまへる袖の、重なりながら長やかに出でたりけるが、川霧に濡れて、御衣の紅なるに、御直衣の花のおどろおどろしう移りたるを、落としがけの高き所に見つけて引き入れたまふ。

形見ぞと見るにつけては朝露のところせきまで濡るる袖かな

と、心にもあらず一人ごちたまふを聞きて、いとどしぼるばかり尼君の袖も泣き濡らすを、若き人、あやしう見苦しき世かな、心ゆく道にいとむつかしきこと添ひたる心地す。忍びがたげなる鼻すすりを聞きたまひて、我も忍びやかにうちかみて、いかが思ふらむといとほしければ、「あまたの年ごろ、この道を行き交ふたび重なるを思ふに、そこはかたなくものあはれなるかな。すこし起き上がりて、この山の色も見たまへ。いと埋れたりや」と、しひてかき起こしたまへば、をかしきほどにさし隠して、つつましげに見出だしたるまみなどは、いとよく思ひ出でられるれど、おいらかにあまりおほどき過ぎたるぞ、心もとなかめる。いといたう見めいたるものから、用意の浅からずものしたまひしはや、となほ行く方なき悲しさは、むなしき空にも満ちぬべかめり。

おはし着きて、あはれ亡き魂や宿りて見たまふらむ、誰によりてかくすずろに惑ひありくものにもあらなくに、と思ひ続けたまひて、降りてはすこし心しらひて立ち去りたまへり。女は、母君の思ひたまはむことなどいと嘆かしけれど、艶なるさまに心深くあはれに語らひたまふに、思ひ慰めて降りぬ。尼君はことさらに降りて、廊にぞ寄するを、わざと思ふべき住まひにもあらぬを、用意こそあまりなれと見たまふ。御荘より、例の人びと騒がしきまで参り集まる。女の御台は、尼君の方より参る。道は茂かりつれど、このありさまはいと晴れ晴れし。川のけしきも山の色も、もてはやしたる造りざまを見出だして、日ごろのいぶせさ慰みぬる心地すれど、いかにもてないたまはむとするにかと、浮きてあやしうおぼゆ。

殿は京に御文書きたまふ。

なりあはぬ仏の御飾りなど見たまへおきて、今日よろしき日なりければ、急ぎものしはべりて、乱り心地の悩ましきに、物忌なりけるを思ひたまへ

出でてなむ、今日明日ここにて慎みはべるべき。

など、母宮にも姫宮にも聞こえたまふ。

うちとけたる御ありさま、今すこしをかしくて入りおはしたるも恥づかしけれど、もて隠すべくもあらで居たまへり。女の装束など、色々にきよくと思ひてし重ねたれど、すこし田舎びたることもうち混じりてぞ、昔のいと萎えばかりし御姿の、あてになまめかしかりしのみ思ひ出でられて、髪の毛をかしげさなどは、こまごまとあてなり、宮の御髪のいみじくめでたきにも劣るまじかりけり、と見たまふ。かつは、この人をいかにもてなしてあらせむとすらむ、ただ今、ものものしげにてかの宮に迎へ据ゑむも音聞き便なかるべし、さりてこれかれある列にて、おほぞうに交じらはせむは本意なからむ、しばしここに隠してあらむ、と思ふも、見ずはさうさうしかるべくあはれにおぼえたまへば、おろかならず語らひ暮らしたまふ。故宮の御こともたまひ出でて、昔物語をかしようこまやかに言ひ戯れたまへど、ただいとおつましげにて、ひたみちに恥ぢたるを、さうさうしう思す。あやまりても、かう心もとなきはいとよし、教へつつも見てむ、田舎びたるされ心もてつけて、品々しからずはやりかならましかば、形代不用ならまし、と思ひ直したまふ。

ここにありける琴、箏の琴召し出でて、かかること、はたましてえせじかしと口惜しければ、一人調べて、宮亡せたまひてのち、ここにかかるものにと久しう手触れざりつかしと、めづらしく我ながらおぼえて、いとなつかしくまさぐりつつ眺めたまふに、月さし出でぬ。宮の御琴の音のおどろおどろしくはあらでいとをかしくあはれに弾きたまひしはや、と思し出でて、「昔、誰れも誰れもおはせし世に、ここに生ひ出でたまへらましかば、今すこしあはれはまさりなまし。親王の御ありさまは、よその人だにあはれに恋しくこそ思ひ出でられたまへ。などで、さる所には年ごろ経たまひしぞ」とのたまへば、いと

恥づかしくて、白き扇をまさぐりつつ添ひ臥したるかたはらめ、いと隈なう白うて、なまめいたる額髪の間など、いとよく思ひ出でられてあはれなり。まいて、かやうのこともつきなからず教へなさばやと思して、「これはすこしほめかいたまひたりや。あはれ、我つまといふ琴は、さりとて手ならしたまひけむ」など問ひたまふ。「その大和言葉だに、つきなくならひにければ、ましてこれは」と言ふ。いとかたはに心後れたりとは見えず。ここに置きて、え思ふままにも来ざらむことを思すが、今より苦しきは、なのめには思さぬなるべし。琴は押しやりて、「楚王の台の上の夜の琴の声」と誦じたまへるも、かの弓をのみ引くあたりにならひて、いとめでたく思ふやうなりと、侍従も聞きむたりけり。さるは、扇の色も心おきつべき閨のいにしへをば知らねば、ひとへにめできこゆるぞ、後れたるなめるかし。ことこそあれ、あやしくも言ひつるかなと思す。

尼君の方よりくだもの参れり。箱の蓋に、紅葉、蔦など折り敷きて、ゆゑゆゑしからず取りまぜて、敷きたる紙に、ふつつかに書きたるもの、隈なき月にふと見ゆれば、目とどめたまふほどに、くだもの急ぎにぞ見えける。

宿り木は色変はりぬる秋なれど昔おぼえて澄める月かな
と古めかしく書きたるを、恥づかしくもあはれにも思されて、

里の名も昔ながらに見し人の面変はりせる閨の月影
わざと返り事とはなくてのたまふ、侍従なむ伝へけるとぞ。

浮

舟

宮、なほかのほのかなりし夕べを思し忘るる世なし。こととしきほどにはあるまじげなりしを、人柄のまめやかにをかしうもありしかなど、いとあだなる御心は口惜しくてやみにしこととねたう思さるるままに、女君をも、「かうはかなきことゆゑ、あながちにかかる筋のもの憎みしたまひけり。思はずに心憂し」と恥づかしめ怨みきこえたまふ折々はいと苦しうて、ありのままにや聞こえてましと思せど、やむごとなきさまにはもてなしたまはぎなれど、浅はかならぬ方に心とどめて人の隠し置きたまへる人を、物言ひさがなく聞こえ出でたらむにも、さて聞き過ぐしたまふべき御心さまにもあらざめり、さぶらふ人の中にも、はかなうものをものたまひ触れむと思し立ちぬる限りは、あるまじき里まで尋ねさせたまふ御さまよからぬ御本性なるに、さばかり月日を経て思ししむめるあたりは、ましてかならず見苦しきこと取り出でたまひてむ、他より伝へ聞きたまはむはいかがはせむ、いづ方さまにもいとほしくこそはありとも、防ぐべき人の御心ありさまならねば、よその人よりは聞きにくくなどばかりぞおぼゆべき、とてもかくても、わがおこたりにてはもてそこなはじ、と思ひ返したまひつつ、いとほしながらえ聞こえ出でたまはず、異さまにつきづきしくは、え言ひなしたまはねば、おしこめてもの怨じしたる世の常の人になりてぞおはしける。

かの人は、たとしへなくのどかに思しおきてて、待ち遠なりと思ふらむと心苦しうのみ思ひやりたまひながら、所狭き身のほどを、さるべきついではなくて、かやくしく通ひたまふべき道ならねば、神のいさむるよりもわりなし。されど今いとよくもてなさむとす、山里の慰めと思ひおきてし心あるを、すこし日数も経ぬべきことども作り出でて、のどやかに行きても見む、さてしばしは人の知るまじき住み所して、やうやうさる方にかの心をものどめおき、わがためにも、人のもどきあるまじく、なのめにてこそよからめ、にはかに、何人ぞ、いつよ

りなど聞きとがめられむもの騒がしく、初めの心に違ふべし、また、宮の御方の聞き思さむことも、もとの所を際々しう率て離れ、昔を忘れ顔ならむ、いと本意なしなど思し静むるも、例ののどけさ過ぎたる心からなるべし。渡すべきところ思しまうけて、忍びてぞ造らせたまひける。

すこしいとまなきやうにもなりたまひにたれど、宮の御方にはなほたゆみなく心寄せ仕うまつりたまふこと同じやうなり。見たてまつる人もあやしきまで思へれど、世の中をやうやう思し知り、人のありさまを見聞きたまふままに、これこそはまことに、昔を忘れぬ心長さの名残さへ浅からぬためしなめれと、あはれも少なからず。ねびまさりたまふままに、人柄もおぼえもさま殊にもおしたまへば、宮の御心のあまり頼もしげなき時々は、思はずなりける宿世かな、故姫君の思しおきてしままにもあらで、かくもの思はしかるべき方にしもかかりそめけむよ、と思す折々多くなむ。されど、対面したまふことは難し。年月もあまり昔を隔てゆき、うちうちの御心を深う知らぬ人は、なほなほしきたただ人こそさばかりのゆかり尋ねたる睦びをも忘れぬにつきづきしけれ、なかなかう限りあるほどに、例に違ひたるありさまもつつましければ、宮の絶えず思し疑ひたるもいよいよ苦しう思し憚りたまひつつ、おのづから疎きさまになりゆくを、さりとても絶えず同じ心の変はりたまはぬなりけり。宮もあだなる御本性こそ見まうきふしも混じれ、若君のいとうつくしうおよすけたまふままに、他にはかかる人も出で来まじきにやと、やむごとなきものに思して、うちとけなつかしき方には人にまさりてもてなしたまへば、ありしよりはすこしもの思ひ静まりて過ぐしたまふ。

睦月のついたち過ぎたるころ渡りたまひて、若君の年まさりたまへるを、もて遊びうつくしみたまふ、昼つ方、小さき童、緑の薄様なる包み文の大きやかなるに、小さき鬚籠を小松につけたる、また、すくすくしき立文とり添へて、

あふなく走り参る、女君にたてまつれば、宮、「それはいづくよりぞ」とのたまふ。「宇治より大輔のおとどにとて、もてわづらひはべりつるを、例の御前にてぞ御覽ぜむとて取りはべりぬる」と言ふも、いとあわたたしきけしきにて、「この籠は、金を作りて、色どりたる籠なりけり。松もいとよう似て作りたる枝ぞとよ」と笑みて言ひ続くれば、宮も笑ひたまひて、「いで、我ももてはやしてむ」と召すを、女君、いとかたはらいたく思して、「文は大輔がりやれ」とのたまふ、御顔の赤みたれば、宮、大将のさりげなくしなしたる文にや、宇治の名のりもつきづきしと思し寄りて、この文を取りたまひつ。さすがにそれならむ時にと思すに、いとまばゆければ、「開けて見むよ。怨じやしたまはむとする」とのたまへば、「見苦しう、何かは、その女どちのなかに書き通はしたらむうちとけ文をば御覽ぜむ」とのたまふが、騒がぬけしきなれば、「さは見むよ。女の文書きはいかがある」とて開けたまへれば、いと若やかなる手にて、

おぼつかなくて年も暮れはべりにける。山里のいぶせきこそ、峰の霞も絶え間なくて。

とて、端に、

これも若宮の御前に。あやしうはべるめれど。

と書きたり。ことにらうらうじきふしも見えねど、おぼえなき、御目立ててこの立文を見たまへば、げに女の手にて、

年改まりて何ごとかさぶらふ。御私にも、いかにたのしき御よろこび多くはべらむ。ここには、いとめでたき御住まひの心深さを、なほふさはしからず見たてまつる。かくてのみ、つくづくと眺めさせたまふよりは、時々は渡り参らせたまひて、御心も慰めさせたまへと思ひはべるに、つつましく恐ろしきものに思しとりてなむ、もの憂きことに嘆かせたまふめる。若

宮の御前にとて、卯槌まゐらせたまふ。大き御前の御覽ぜざらむほどに、御覽ぜさせたまへとてなむ。

と、こまごまと言忌もえしあへず、もの嘆かしげなるさまのかたくなしげなるも、うち返しうち返しあやしと御覽じて、「今はのたまへかし。誰がぞ」とのたまへば、「昔、かの山里にありける人の娘の、さるやうありて、このころかしこにあるとなむ聞きはべりし」と聞こえたまへば、おしなべて仕うまつるとは見えぬ文書きを心得たまふに、かのわづらはしきことあるに思し合はせつ。卯槌をかしう、つれづれなりける人のしわざと見えたり。またぶりに、山橋作りて貫き添へたる枝に、

まだ古りぬ物にはあれど君がため深き心に待つと知らなむ

と、ことなることなきを、かの思ひわたる人のにやと思し寄りぬるに、御目とまりて、「返り事したまへ。情けなし。隠いたまふべき文にもあらざめるを」など、御けしきの悪しきに「まかりなむよ」とて立ちたまひぬ。女君、少将などして、「いとほしくもありつるかな。幼き人の取りつらむを、人はいかで見ざりつるぞ」など、忍びてのたまふ。「見たまへましかば、いかでかは参らせまし。すべて、この子は心地なうさし過ぐしてはべり。生ひ先見えて人はおほどかなるこそをかしけれ」など憎めば、「あなかま。幼き人な腹立てそ」とのたまふ。去年の冬、人の参らせたる童の、顔はいとうつくしかりければ、宮もいとらうたくしたまふなりけり。

わが御方におはしまして、あやしうもあるかな、宇治に大将の通ひたまふことは、年ごろ絶えずと聞くなかにも、忍びて夜泊りたまふ時もありと人の言ひしを、いとあまりなる人の形見とて、さるまじき所に旅寝したまふらむことと思ひつるは、かやうの人隠し置きたまへるなるべしと思し得ることもありて、御書のことにつけて使ひたまふ大内記なる人の、かの殿に親しきたよりあるを

思し出でて、御前に召す。参れり。韻塞すべきに、集ども選り出でて、こなたなる厨子に積むべきことなどのたまはせて、「右大将の宇治へいますること、なほ絶え果てずや。寺をこそ、いとかしこく造りたなれ。いかでか見るべき」とのたまへば、「いとかめしく造られて、不断の三昧堂などいと尊くおきてられたりとなむ聞きたまふる。通ひたまふことは、去年の秋ごろよりは、ありしよりもしばしばものしたまふなり。下の人びとの忍びて申しは、女をなむ隠し据ゑさせたまへる、けしうはあらず思す人なるべし、あのわたりに領じたまふ所々の人、皆仰せにて参り仕うまつる、宿直にさし当てなどしつ、京よりもいと忍びて、さるべきことなど問はせたまふ、いかなる幸ひ人の、さすがに心細くてゐたまへるならむ、となむ、ただこの師走のころほひ申すと聞きたまへし」と聞こゆ。いとうれしくも聞きつるかなと思ほして、「たしかにその人とは言はずや。かしこにもとよりある尼ぞ訪らひたまふと聞きし」、「尼は廊になむ住みはべるなる。この人は、今建てられたるになむ、きたなげなき女房などもあまたして、口惜しからぬけはひにてゐてはべる」と聞こゆ。「をかしきことかな。何心ありて、いかなる人をかは、さて据ゑたまひつらむ。なほいとけしきありて、なべての人に似ぬ御心なりや。右の大臣など、この人のあまりに道心に進みて、山寺に夜さへともすれば泊りたまふなる、軽々しともどきたまふと聞きしを、げに、などかさしも仏の道には忍びありくらむ、なほかの古里に心をとどめたと聞きし、かかることこそはありけれ。いづら、人よりはまめなるときかしがる人しも、ことに人の思ひいたるまじき隈ある構へよ」とのたまひて、いとをかしと思いたり。この人はかの殿にいと睦ましく仕うまつる家司の婿になむありければ、隠したまふことも聞くなるべし。御心の内には、いかにしてこの人を見し人かとも見定めむ、かの君の、さばかりにて据ゑたるは、なべてのよろし人にはあらず、このわたりには、いかで疎からぬにか

はあらむ、心を交はして隠したまへりけるも、いとねたうおぼゆ。

ただそのことを、このころは思ししみたり。賭弓、内宴など過ぐして心のどかなるに、司召など言ひて人の心尽くすめる方は何とも思さねば、宇治へ忍びておはしまさむことをのみ思しめぐらす。この内記は、望むことありて、夜昼いかで御心に入らむと思ふころ、例よりはなつかしう召し使ひて、「いと難きことなりとも、わが言はむことはたばかりてむや」などのたまふ。かしこまりてさぶらふ。「いと便なきことなれど、かの宇治に住むらむ人は、はやうほのかに見し人の行方も知らずなりにしが、大将に尋ね取られにけると聞きあはすることこそあれ、たしかには知るべきやうもなきを、ただものより覗きなどして、それかあらぬかと見定めむとなむ思ふ。いささか人に知らるまじき構へは、いかがすべき」とのたまへば、あなわづらはしと思へど、「おはしまさむことは、いと荒き山越えになむはべれど、ことにほど遠くはさぶらはずなむ。夕つ方出でさせおはしまして、亥子の時にはおはしまし着きなむ。さて暁にこそは歸らせたまはめ。人の知りはべらむことは、ただ御供にさぶらひはべらむこそは。それも深き心はいかでか知りはべらむ」と申す。「さかし、昔も一たび二たび通ひし道なり。軽々しきもどき負ひぬべきが、ものの聞こえのつつまじきなり」とて、返す返すあるまじきことにわが御心にも思せど、かうまでうち出でたまへれば、え思ひとどめたまはず。

御供に、昔もかしこの案内知れりし者二三人、この内記、さては御乳母子の蔵人よりかうぶり得たる若き人、睦ましき限りを選びたまひて、大将今日明日はよもおはせじなど、内記によく案内聞きたまひて、出で立ちたまふにつけても、いにしへを思し出づ。あやしきまで心を合はせつつ率てありきし人のために、うしろめたきわざにもあるかなと、思し出づることもさまざまなるに、京のうちだにむげに人知らぬ御ありきは、さはいへどえしたまはぬ御身にしも、

あやしきさまのやつれ姿して、御馬にておはする心地ももの恐ろしくややましけれど、もののゆかしき方は進みたる御心なれば、山深うなるままに、いつしか、いかならむ、見あはすることもなくて帰らむこそ、さうぎうしくあやしかるべけれど思すに、心も騒ぎたまふ。法性寺のほどまでは御車にて、それよりぞ御馬にはたてまつりける。

急ぎて、宵過ぐるほどにおはしましぬ。内記、案内よく知れるかの殿の人に問ひ聞きたりければ、宿直人ある方には寄らで、葦垣し籠めたる西表をやをらすこしこぼちて入りぬ。我もさすがにまだ見ぬ御住まひなれば、たどたどしけれど、人しげうなどしあらねば、寢殿の南表にぞ火ほの暗う見えてそよそよとする音する、参りて、「まだ人は起きてはべるべし。ただこれよりおはしまさむ」としるべして、入れたてまつる。

やをらのぼりて、格子の隙あるを見つけて寄りたまふに、伊予簾はさらさらと鳴るもつつまし。新しうきよげに造りたれど、さすがに粗々しくて隙ありけるを、誰れかは来て見むともうちとけて穴も塞たがず、几帳の帷子うちかけておしやりたり。火明う灯して、もの縫ふ人三四人居たり。童のをかしげなる、糸をぞ繕る。これが顔、まづかの火影に見たまひしそれなり。うちつけ目かとなほ疑はしきに、右近と名のりし若き人もあり。君は腕を枕にて、火を眺めたるまみ、髪のコぼれかかりたる額つき、いとあてやかになまめきて、対の御方にいとようおぼえたり。

この右近、物折るとて、「かくて渡らせたまひなば、とみにしもえ帰り渡らせたまはじを、殿はこの司召のほど過ぎて、ついたちころにはかならずおはしましなむと、昨日の御使も申しけり。御文にはいかが聞こえさせたまへりけむ」と言へど、いらへもせず、いともの思ひたるけしきなり。「折しもはひ隠れさせたまへるやうならむが見苦しき」と言へば、向ひたる人、「それは、かくな

む渡りぬると御消息聞こえさせたまへらむこそよからめ、軽々しういかでかは音なくてははひ隠れさせたまはむ。御物詣での後は、やがて渡りおはしましねかし。かくて心細きやうなれど、心にまかせてやすらかなる御住まひにならひて、なかなか旅心地すべしや」など言ふ。またあるは、「なほしばし、かくて待ちきこえさせたまはむぞ、のどやかにさまよかるべき。京へなど迎へたてまつらせたまへらむ後、おだしくて親にも見えたてまつらせたまへかし。このおとどのいと急にものしたまひて、にはかにかう聞こえなしたまふなめりかし。昔も今も、もの念じしてのどかなる人こそ、幸ひは見果てたまふなれ」など言ふなり。右近、「などで、このままをとどめたてまつらずなりにけむ。老いぬる人はむつかしき心のあるにこそ」と憎むは、乳母やうの人をそしるなめり、げに憎き者ありかしと思し出づるも、夢の心地ぞする。

かたはらいたきまでうちとけたることどもを言ひて、「宮の上こそ、いとめでたき御幸ひなれ。右の大殿の、さばかりめでたき御勢ひにて、いかめしうののしりたまふなれど、若君生れたまひて後は、こよなくぞおはしますなる。かかるさかしら人どものおはせで、御心のどかにかしこうもてなしておはしますにこそはあめれ」と言ふ。「殿だにまめやかに思ひきこえたまふこと変はらずは、劣りきこえたまふべきことかは」と言ふを、君すこし起き上がりて、「いと聞きにくきこと。よその人にこそ劣らじともいかにとも思はめ、かの御ことなかけても言ひそ。漏り聞こゆるやうもあらば、かたはらいたからむ」など言ふ。

何ばかりの親族にかはあらむ、いとよくも似かよひたるけはひかな、と思ひ比ぶるに、心恥づかしげにてあてなるところはかれはいとこよなし、これはただらうたげにこまかなるところぞいとをかしき。よろしうなりあはぬところを見つけたらむにてだに、さばかりゆかしと思ししめたる人を、それと見てきて

やみたまふべき御心ならねば、まして隈もなく見たまふに、いかでかこれをわがものにはなすべきと、心も空になりたまひて、なほまもりたまへば、右近、「いとねぶたし。よべもすすろに起き明かしてき。つとめてのほどにも、これは縫ひてむ。急がせたまふとも、御車は日たけてぞあらむ」と言ひて、しきしたるものどもとり具して、几帳にうち掛けなどしつつ、うたた寝のさまに寄り臥しぬ。君もすこし奥に入りて臥す。右近は北表に行きて、しばしありてぞ来たる。君のあと近く臥しぬ。

ねぶたしと思ひければ、いととう寝入りぬるけしきを見たまひて、またせむやうもなければ、忍びやかにこの格子をたたきたまふ。右近聞きつけて、「誰ぞ」と言ふ。声づくりたまへば、あてなるしはぶきと聞き知りて、殿のおはしたるにやと思ひて起きて出でたり。「まづこれ開けよ」とのたまへば、「あやしう、おぼえなきほどにもはべるかな。夜はいたう更けはべりぬらむものを」と言ふ。「ものへ渡りたまふべかなりと仲信が言ひつれば、驚かれつるままに出で立ちて、いとこそわりなかりつれ。まづ開けよ」とのたまふ声、いとようまねび似せたまひて忍びたれば、思ひも寄らずかい放つ。「道にていとわりなく恐ろしきことのありつれば、あやしき姿になりてなむ。火暗うなせ」とのたまへば、「あないみじ」とあわてまどひて、火は取りやりつ。「我人に見すなよ。来たりとて、人驚かすな」と、いとらうらうじき御心にて、もとよりもほのかに似たる御声を、ただかの御けはひにまねびて入りたまふ。ゆゆしきことのさまとのたまひつる、いかなる御姿ならむといとほしくて、我も隠ろへて見たてまつる。いと細やかになよなよと装束きて、香の香うばしきことも劣らず。近う寄りて、御衣ども脱ぎ、馴れ顔にうち臥したまへれば、「例の御座にこそ」など言へど、ものものたまはず。御衾参りて、寝つる人びと起こして、すこし退きて皆寝ぬ。御供の人など、例のここには知らぬならひにて、「あはれなる

夜のおはしましぎまかな。かかる御ありさまを御覧じ知らぬよ」などさかしらがる人もあれど、「あなかま、たまへ。夜声はささめくしもぞかしかましき」など言ひつつ寝ぬ。

女君は、あらぬ人なりけりと思ふに、あさましういみじけれど、声をだにせさせたまはず、いとつつましかりし所にてだに、わりなかりし御心なれば、ひたぶるにあさまし。初めよりあらぬ人と知りたらば、いかがいふかひもあるべきを、夢の心地するに、やうやうその折のつらかりし、年月ごろ思ひわたるさまのたまふに、この宮と知りぬ。いよいよ恥づかしく、かの上の御ことなど思ふに、またたけきことなければ、限りなう泣く。宮もなかなかにて、たはやすく逢ひ見ざらむことなどを思すに泣きたまふ。

夜はただ明けに明く。御供の人来て声づくる。右近聞きて参れり。出でたまはむ心地もなく、飽かずあはれなるに、またおはしまさむことも難ければ、京には求め騒がるとも、今日ばかりはかくてあらむ、何事も生ける限りのためこそあれ、ただ今出でおはしまさむはまことに死ぬべく思さるれば、この右近を召し寄せて、「いと心地なしと思はれぬけれど、今日はえ出づまじうなむある。男どもは、このわたり近からむ所に、よく隠ろへてさぶらへ。時方は京へものして、山寺に忍びてなむと、つきづきしからむさまにいらへなどせよ」とのたまふに、いとあさましくあきれて、心もなかりける夜の過ちを思ふに、心地も惑ひぬべきを思ひ静めて、今はよろづにおぼほれ騒ぐともかひあらじものから、なめげなり、あやしかりし折にいと深う思し入れたりしも、かう逃れざりける御宿世にこそありけれ、人のしたるわざかは、と思ひ慰めて、「今日御迎へにとはべりしを、いかにせさせたまはむとする御ことにか。かう逃れきこえさせたまふまじかりける御宿世は、いと聞こえさせはべらむ方なし。折こそいとわりなくはべれ。なほ今日は出でおはしまして、御心ざしはべらばのどか

にも」と聞こゆ。およすけても言ふかなと思して、「我は月ごろ思ひつるにほれ果てにければ、人のもどかむも言はむも知られず、ひたぶるに思ひなりにたり。すこしも身のことを思ひ憚らむ人の、かかるありきは思ひ立ちなむや。御返りには、今日は物忌など言へかし。人に知らるまじきことを、誰がためにも思へかし。異事はかひなし」とのたまひて、この人の、世に知らずあはれに思さるるままに、よろづのそしりも忘れたまひぬべし。

右近出でて、このおとなふ人に、「かくなむのたまはするを、なほいとかたはならむとを申させたまへ。あさましうめづらかなる御ありさまは、さ思しめすとも、かかる御供人どもの御心にこそあらめ。いかでかう心幼うは率てたてまつりたまふこそ。なめげなることを聞こえさする山賤などもはべらましかば、いかならまし」と言ふ。内記は、げにいとわづらはしくもあるかなと思ひ立てり。「時方と仰せらるるは、誰れにか。さなむ」と伝ふ。笑ひて、「勘へたまふことどもの恐ろしければ、さらすとも逃げてまかでぬべし。まめやかには、おろかならぬ御けしきを見たてまつれば、誰れも誰れも身を捨ててなむ。よしよし、宿直人も皆起きぬなり」とて急ぎ出でぬ。

右近、人に知らすまじうはいかがはたばかるべきと、わりなうおぼゆ。人びと起きぬるに、「殿はさるやうありて、いみじう忍びさせたまふけしき見たてまつれば、道にていみじきことのありけるなめり。御衣どもなど、夜さり忍びて持て参るべくなむ仰せられつる」など言ふ。御達、「あなむくつけや。木幡山はいと恐ろしかなる山ぞかし。例の御前駆も追はせたまはず、やつれておはしましけむに、あないみじや」と言へば、「あなかま、あなかま。下衆などのちりばかりも聞きたらむに、いといみじからむ」と言ひるたる、心地恐ろし。あやにくに殿の御使のあらむ時いかに言はむと、「初瀬の観音、今日事なくて暮らしたまへ」と大願をぞ立てける。石山に今日詣でさせむとて、母君の迎ふ

るなりけり。この人びともみな精進し、きよまはりてあるに、「さらば、今日
はえ渡らせたまふまじきなめり。いと口惜しきこと」と言ふ。

日高くなれば、格子など上げて、右近ぞ近くて仕うまつりける。母屋の簾は
皆下ろしわたして、「物忌」など書かせて付けたり。母君もやみづからおはす
るとて、「夢見騒がしかりつ」と言ひなすなりけり。御手水など参りたるさま
は、例のやうなれど、まかなひめざましう思されて、「そこに洗はせたまはば」
とのたまふ。女、いとさまよう心にくき人を見ならひたるに、時の間も見ざら
むは死ぬべしと思し焦がるる人を、心ざし深しとはかかるを言ふにやあらむと
思ひ知らるるにも、あやしかりける身かな、誰れもものの聞こえあらば、いか
に思さむと、まづかの上の御心を思ひ出できこゆれど、「知らぬを、返す返す
いと心憂し、なほあらむままにのたまへ。いみじき下衆といふとも、いよいよ
なむあはれなるべき」と、わりなう問ひたまへど、その御いらへは絶えてせず。
異事はいとをかくけぢかきさまにいらへきこえなどしてなびきたるを、いと
限りなうらうたしとのみ見たまふ。

日高くなるほどに、迎への人来たり。車二つ、馬なる人びとの、例の荒らか
なる七八人、男ども多く、例の品々しからぬけはひ、さへづりつつ入り来たれ
ば、人びとかたはらいたがりつつ、「あなたに隠れよ」と言はせなどす。右近、
いかにせむ、殿なむおはすると言ひたらむに、京にさばかりの人のおはしおは
せずおのづから聞きかよひて、隠れなきこともこそあれと思ひて、この人びと
にもことに言ひ合はせず、返り事書く。

よべより穢れさせたまひて、いと口惜しきことを思し嘆くめりしに、今宵
夢見騒がしく見えさせたまひつれば、今日ばかり慎ませたまへとてなむ、
物忌にてはべる。返す返す口惜しく、ものの妨げのやうに見たてまつりは
べる。

と書き、人びとに物など食はせてやりつ。尼君にも、「今日は物忌にて渡りたまはぬ」と言はせたり。

例は暮らしがたくのみ、霞める山際を眺めわびたまふに、暮れ行くはわびしくのみ思し焦らるる人に惹かれたてまつりて、いとかなう暮れぬ。紛るることなくのどけき春の日に、見れども見れども飽かず、そのことぞとおぼゆる隈なく、愛敬づきなつかしくをかしげなり。さるは、かの対の御方には似劣りなり。大殿の君の盛りに匂ひたまへるあたりにては、こよなかるべきほどの人を、たぐひなう思さるるほどなれば、また知らずをかしとのみ見たまふ。女はまた、大将殿をいときよげに、またかかると見しかど、こまやかに匂ひきよらなることはこよなくおはしけりと見る。

硯ひき寄せて、手習などしたまふ。いとをかしげに書きすさび、絵などを見所多くかきたまへれば、若き心地には、思ひも移りぬべし。「心より外に、見えらむほどは、これを見たまへよ」とて、いとをかしげなる男女もろともに添ひ臥したるかたをかきたまひて、「常にかくてあらばや」などのたまふも、涙落ちぬ。

「長き世を頼めてもなほ悲しきはただ明日知らぬ命なりけり

いとかう思ふこそゆゆしけれ。心に身をもさらにえまかせず、よろづにたばからむほど、まことに死ぬべくなむおぼゆる。つらかりし御ありさまをなかなか何に尋ね出でけむ」などのたまふ。女、濡らしたまへる筆を取りて、

心をば嘆かざらまし命のみ定めなき世と思はましかば

とあるを、変はらむをば恨めしう思ふべかりけりと見たまふにも、いとらうたし。「いかなる人の心変はりを見ならひて」などほほ笑みて、大将のここに渡しはじめたまひけむほどを、返す返すゆかしがりたまひて問ひたまふを、苦しがりて、「え言はぬことを、かうのたまふこそ」と、うち怨じたるさまも若び

たり。おのづからそれは聞き出でてむと思すものから、言はせまほしきぞわりなきや。

夜さり、京へ遣はしつる大夫参りて、右近に会ひたり。「後の宮よりも御使参りて、右の大殿もむつかりきこえさせたまひて、人に知られさせたまはぬ御ありきは、いと軽々しくなめげなることもあるを、すべて内などに聞こし召さむことも身のためなむいとからき、といみじく申させたまひけり。東山に聖御覧じにとなむ、人にはものしはべりつる」など語りて、「女こそ罪深うおはするものにはあれ。すずろなる眷属の人をさへ惑はしたまひて、そらごとをさへせさせたまふよ」と言へば、「聖の名をさへつけきこえさせたまひてければ、いとよし。私の罪も、それにて滅ぼしたまふらむ。まことにいとあやしき御心の、げにいかでならはせたまひけむ。かねて、かうおはしますべしと承らましにも、いとかたじけなければ、たばかりきこえさせてましものを、あふなき御ありきにこそは」と扱ひきこゆ。

参りて、さなむとまねびきこゆれば、げにいかならむと思しやるに、「所狭き身こそわびしけれ。軽らかなるほどの殿上人などにてしばしあらばや。いかがすべき。かうつつむべき人目も、え憚りあふまじくなむ。大将もいかに思はむとすらむ。さるべきほどとは言ひながら、あやしきまで昔より睦ましき仲に、かかる心の隔ての知られたらむ時、恥づかしうまたいかにぞや。世のたとひに言ふこともあれば、待ち遠なるわがおこたりをも知らず、怨みられたまはむをさへなむ思ふ。夢にも人に知られたまふまじきさまにて、ここならぬ所に率て離れたてまつらむ」とぞのたまふ。今日さへかくて籠もりゐたまふべきならねば、出でたまひなむとするにも、袖の中にぞ留めたまひつらむかし。

明け果てぬ前にと、人びとしはぶき驚かしきこゆ。妻戸にもろともに率ておはして、え出でやりたまはず。

世に知らず惑ふべきかな先に立つ涙も道をかきくらしつつ

女も、限りなくあはれと思ひけり。

涙をもほどなき袖にせきかねていかに別れをとどむべき身ぞ

風の音もいと荒ましく霜深き暁に、おのがきぬぎぬも冷やかになりたる心地して、御馬に乗りたまふほど、引き返すやうにあさましかれど、御供の人びと、いと戯れにくしと思ひて、ただ急がしに急がし出づれば、我にもあらで出でたまひぬ。この五位二人なむ、御馬の口にはさぶらひける。さかしき山越え出でてぞ、おのおの馬には乗る。みぎはの氷を踏みならず馬の足音さへ、心細くも悲し。昔も、この道にのみこそはかかる山踏みはしたまひしかば、あやしかりける里の契りかなと思す。

二条の院におはしまし着きて、女君のいと心憂かりし御もの隠しもつらければ、心やすき方に大殿籠もりぬるに、寝られたまはず、いと寂しきにも思ひまされば、心弱く対に渡りたまひぬ。何心もなくいときよげにておはす。めづらしくをかしと見たまひし人よりも、またこれはなほありがたきさまはしたまへりかしと見たまふものから、いとよく似たるを思ひ出でたまふも、胸塞がれば、いたくもの思したるさまにて、御帳に入りて大殿籠もる。女君も率て入りきこえたまひて、「心地こそいと悪しけれ、いかならむとするにかと心細くなむある。まろは、いみじくあはれと見置いたてまつるとも、御ありさまはいととく変はりなむかし。人の本意はかならずかなふなれば」とのたまふ。けしからぬことをも、まめやかにさへのたまふかなと思ひて、「かう聞きにくきことの漏りて聞こえたらば、いかやうに聞こえなしたるにかと、人も思ひ寄りたまはむこそあさましかれ。心憂き身には、すずろなることもいと苦しく」とて、背きたまへり。宮もまめだちたまひて、「まことにつらしと思ひきこゆることもあらむは、いかが思さるべき。まろは、御ためにおろかなる人かは。人もあ

りがたしなどがむるまでこそあれ、人にはこよなう思ひ落としたまふべかめり。誰れもさべきにこそはとことわらるるを、隔てたまふ御心の深きなむいと心憂き」とのたまふにも、宿世のおろかならで尋ね寄りたるぞかしと思し出づるに、涙ぐまれぬ。まめやかなるを、いとほしう、いかやうなることを聞きたまへるならむと驚かるるに、いらへきこえたまはむ言もなし。ものはかなきさまにて見そめたまひしに、何ごとをも軽らかに推し量りたまふにこそはあらめ、すずろなる人をしるべにて、その心寄せを思ひ知り始めなどしたる過ちばかりに、おぼえ劣る身にこそと思し続くるも、よろづ悲しくて、いとどらうたげなる御けはひなり。かの人見つけたることは、しばし知らせたてまつらじと思せば、異ざまに思はせて怨みたまふを、ただこの大将の御ことをまめまめしくのたまふと思すに、人やそらごとをたしかなるやうに聞こえたらむなど思す。ありやなしやを聞かぬ間は、見えたてまつらむも恥づかし。

内より大宮の御文あるに驚きたまひて、なほ心解けぬ御けしきにて、あなたに渡りたまひぬ。

昨日のおぼつかなきを。悩ましく思されたなる、よろしくは参りたまへ。久しうもなりにけるを。

などやうに聞こえたまへれば、騒がれたてまつらむも苦しけれど、まことに御心地も違ひたるやうにて、その日は参りたまはず。上達部などあまた参りたまへど、御簾の内にて暮らしたまふ。

夕つ方、右大将参りたまへり。「こなたにを」とて、うちとけながら対面したまへり。「悩ましげにおはしますとはべりつれば、宮にもいとおぼつかなく思し召してなむ。いかやうなる御悩みにか」と聞こえたまふ。見るからに御心騒ぎのいとまされば、言少なにて、聖だつと言ひながら、こよなかりける山伏心かな、さばかりあはれなる人をさて置きて、心のどかに月日を待ちわびさ

すらむよ、と思す。例は、さしもあらぬことのついでにだに、我はまめ人ともてなし名のりたまふをねたがりたまひて、よろづにのたまひ破るを、かかることと見表はいたるをいかにのたまはまし、されど、さやうの戯れ事もかけたまはず、いと苦しげに見えたまへば、「不便なるわざかな。おどろおどろしからぬ御心地のさすがに日数経るは、いと悪しきわざにはべり。御風邪よくつくろはせたまへ」など、まめやかに聞こえおきて出でたまひぬ。恥づかしげなる人なりかし、わがありさまをいかに思ひ比べけむなど、さまざまなることにつけつつも、ただこの人を時の間忘れず思し出づ。

かしこには、石山も停まりて、いとつれづれなり。御文には、いといみじきことを書き集めたまひて遣はす。それだに心やすからず、時方と召しし大夫の従者の心も知らぬしてなむやりける。「右近が古く知れりける人の殿の御供にて尋ね出でたる、さらがへりてねむごろがる」と、友達には言ひ聞かせたり。よろづ右近ぞ、そらごとしならひける。月もたちぬ。かう思し知らるれど、おはしますことはいとわりなし。かうのみものを思はば、さらにえながらふまじき身なめりと、心細さを添へて嘆きたまふ。

大将殿、すこしのどかになりぬるころ、例の忍びておはしたり。寺に仏など拝みたまふ。御誦経せさせたまふ僧に物賜ひなどして、夕つ方、ここには忍びたれど、これはわりなくもやつしたまはず、烏帽子、直衣の姿いとあらまほしくきよげにて、歩み入りたまふより、恥づかしげに用意ことなり。

女、いかで見えたてまつらむとすらむと、空さへ恥づかしく恐ろしきに、あながちなりし人の御ありさまうち思ひ出でらるるに、またこの人に見えたてまつらむを思ひやるなむいみじう心憂き。われは年ごろ見る人をも、皆思ひ変はりぬべき心地なむする、とのたまひしを、げにそののち御心地苦しとて、いづくにもいづくにも例の御ありさまならで、御修法など騒ぐなるを聞くに、また

いかに聞きて思さむと思ふもいと苦し。この人、はたいとけはひことに、心深くなまめかしきさまして、久しかりつるほどのおこたりなどのたまふも言多からず、恋しかなしとおりに立たねど、常にあひ見ぬ恋の苦しさを、さまよきほどにうちのたまへる、いみじく言ふにはまさりて、いとあはれと人の思ひぬべきさまをしめたまへる人柄なり。艶なる方はさるものにて、行く末長く人の頼みぬべき心ばへなどこよなくまさりたまへり。思はずなるさまの心ばへなど漏り聞かせたらむ時も、なのめならずいみじくこそあべけれ、あやしうつし心もなう思し焦らるる人をあはれと思ふも、それはいとあるまじく軽きことぞかし、この人に憂しと思はれて、忘れたまひなむ心細さは、いと深うしみにければ、思ひ乱れたるけしきを、月ごろに、こよなうものの心知りねびまさりにけり、つれづれなる住みかのほどに、思ひ残すことはあらじかしと見たまふも、心苦しければ、常よりも心とどめて語らひたまふ。

「造らする所、やうやうよろしうしなしてけり。一日なむ見しかば、ここよりは気近き水に、花も見たまひつべし。三条の宮も近きほどなり。明け暮れおぼつかなき隔ても、おのづからあるまじきを、この春のほどに、さりぬべくは渡してむ」と思ひてのたまふも、かの人の、のどかなるべき所思ひまうけたりと、昨日ものたまへりしを、かかることも知らで、さ思すらむよと、あはれながらも、そなたになびくべきにはあらずかしと思ふからに、ありし御さまの面影におぼゆれば、我ながらも、うたて心憂の身やと思ひ続けて泣きぬ。御心ばへの、かからでおいらかなりしこそそのどかにうれしかりしか、人のいかに聞こえ知らせたることかある、すこしもおろかならむ心ざしにては、かうまで参り来べき身のほど、道のありさまにもあらぬをなど、ついたりごろの夕月夜に、すこし端近く臥して眺め出だしたまへり。男は、過ぎにし方のあはれをも思し出で、女は、今より添ひたる身の憂さを嘆き加へて、かたみにも思はし。

山の方は霞隔てて、寒き洲崎に立てる鵲の姿も、所からはいとをかしう見ゆるに、宇治橋のはるばると見わたさるるに、柴積み舟の所々に行きちがひたるなど、他にて目馴れぬことどものみとり集めたる所なれば、見たまふたびごとになほそのかみのことのただ今の心地して、いとかからぬ人を見交はしたらむだに、めづらしき中のあはれ多かるべきほどなり。まいて、恋しき人によそへられたるもこよなからず、やうやうものの心知り、都馴れゆくありさまのをかしきも、こよなく見まさりしたる心地したまふに、女はかき集めたる心のうちに催さるる涙、ともすれば出でたつを慰めかねたまひつつ、

「宇治橋の長き契りは朽ちせじを危ぶむ方に心騒ぐな
今見たまひてむ」とのたまふ。

絶え間のみ世には危ふき宇治橋を朽ちせぬものとなほ頼めとやさきざきよりもいと見捨てがたく、しばしも立ちとまらまほしく思さるれど、人のもの言ひのやすからぬに、今さらなり、心やすきさまにてこそなど思しなして、暁に帰りたまひぬ。いとようもおとなびたりつるかな、と心苦しく思し出づること、ありしにまさりけり。

如月の十日のほどに、内に文作させたまふとて、この宮も大将も参りあひたまへり。折に合ひたる物の調べどもに、宮の御声はいとめでたくて、梅が枝など謡ひたまふ。何ごとも人よりはこよなうまさりたまへる御さまにて、すずろなることと思し焦らるるのみなむ罪深かりける。

雪にはかに降り乱れ、風など烈しければ、御遊びとくやみぬ。この宮の御宿直所に人びと参りたまふ。もの参りなどしてうち休みたまへり。大将、人にもこのたまはむとて、すこし端近く出でたまへるに、雪のやうやう積もるが星の光におぼおぼしきを、闇はあやなしとおぼゆる匂ひありさまにて、「衣片敷き今宵もや」とうち誦じたまへるも、はかなきことを口ずさびにのたまへるも、

あやしくあはれなるけしき添へる人ぎまにて、いともの深げなり。言しもこそあれ、宮は寝たるやうにて御心騒ぐ。おろかには思はぬなめりかし、片敷く袖を我のみ思ひやる心地しつるを、同じ心なるもあはれなり、侘しくもあるかな、かばかりなる本つ人をおきて、我が方にまさる思ひはいかでつくべきぞ、とねたう思さる。

つとめて、雪のいと高う積もりたるに、文たてまつりたまはむとて、御前に参りたまへる御かたち、このころいみじく盛りにきよげなり。かの君も同じほごにて、今二つ三つまさるけぢめにや、すこしねびまさるけしき用意などぞ、ことさらにも作り出でたらむあてなる男の本にしつべくものしたまふ。帝の御婿にて、飽かぬことなしとぞ世人もことわりける。才なども、おほやけおほやけしき方も、後れずぞおはすべき。文講じ果てて、皆人まかだたまふ。宮の御文を、すぐれたりと誦じののしれど、何とも聞き入れたまはず、いかなる心地にてかかることをもし出づらむと、そらにのみ思ほしほれたり。

かの人の御けしきにも、いとど驚かれたまひければ、あさましようたばかりておはしましたり。京には、友待つばかり消え残りたる雪、山深く入るままにやや降り埋みたり。常よりもわりなきまれの細道を分けたまふほど、御供の人も泣きぬばかり恐ろしうわづらはしきことをさへ思ふ。しるべの内記は、式部の少輔なむ掛けたりける。いづ方もいづ方もことしかるべき官ながら、いとつきづきしく引き上げなどしたる姿もをかしかりけり。

かしこには、おはせむとありつれど、かかる雪にはとうちとけたるに、夜更けて右近に消息したり。あさましようあはれと君も思へり。右近は、いかになり果てたまふべき御ありさまにかと、かつは苦しけれど、今宵はつつましさも忘れぬべし、言ひ返さむ方もなければ、同じやうに睦ましくおぼいたる若き人の、心ぎまもあふなからぬを語らひて、「いみじくわりなきこと。同じ心にもて隠

したまへ」と言ひてけり。もろともに入れたてまつる。道のほどに濡れたまへる香の所狭う匂ふも、もてわづらひぬべけれど、かの人の御けはひに似せてなむ、もて紛らはしける。

夜のほどにて立ち帰りたまはむもなかなかなべければ、ここの人目もいとつつましさに、時方にたばからせたまひて、川より遠方なる人の家に率ておはせむと構へたりければ、先立てて遣はしたりける、夜更くるほどに参れり。「いとよく用意してさぶらふ」と申さす。こはいかにしたまふことにかと、右近もいと心あわたたしければ、寝おびれて起きたる心地もわななかれて、あやし。童べの雪遊びしたるけはひのやうにぞ、震ひ上がりける。「いかでか」なども言ひあへさせたまはず、かき抱きて出でたまひぬ。右近はこの後見にとまりて、侍従をぞたてまつる。

いとはかなげなるものと、明け暮れ見出だす小さき舟に乗りたまひて、さし渡りたまふほど、遙かならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細くおぼえて、つとつきて抱かれたるもいとらうたしと思す。有明の月澄み昇りて、水の面も曇りなきに、「これなむ橘の小島」と申して、御舟しばしきしとどめたるを見たまへば、大きやかなる岩のさまして、されたる常磐木の蔭茂れり。「かれ見たまへ。いとはかなけれど、千年も経べき緑の深さを」とのたまひて、

年経とも変はらむものか橘の小島の崎に契る心は
女もめづらしからむ道のやうにおぼえて、

橘の小島の色は変はらじをこの浮舟ぞ行方知られぬ

折から人のさまに、をかしくのみ何事も思しなす。

かの岸にさし着きて降りたまふに、人に抱かせたまはむはいと心苦しければ、抱きたまひて助けられつつ入りたまふを、いと見苦しく何人をかくもて騒ぎたまふらむと見たてまつる。時方が叔父の因幡守なるが領ずる荘にはかなう造り

たる家なりけり。まだいと粗々しきに、網代屏風など御覧じも知らぬしつらひにて、風もことに障らず、垣のもとに雪むら消えつつ、今もかき曇りて降る。

日さし出でて軒の垂氷の光りあひたるに、人の御かたちもまさる心地す。宮も所狭き道のほどに、軽らかなるべきほどの御衣どもなり。女も脱ぎすべさせたまひてしかば、細やかなる姿つきいとをかしげなり。ひきつくろふこともなくうちとけたるさまをいと恥づかしく、まばゆきまできよらなる人にさしむかひたるよと思へど、紛れむ方もなし。なつかしきほどなる白き限りを五つばかり、袖口、裾のほどまでなまめかしく、色々にあまた重ねたらむよりもをかしう着なしたり。常に見たまふ人とても、かくまでうちとけたる姿などは見ならひたまはぬを、かかるさへぞ、なほめづらかにをかしう思されける。

侍従も、いとめやすき若人なりけり。これさへかかるを残りなう見るよと、女君はいみじと思ふ。宮も、「これはまた誰ぞ。わが名漏らすなよ」と口かためたまふを、いとめでたしと思ひきこえたり。ここの宿守にて住みける者、時方を主と思ひてかしづきありけば、このおはします遣戸を隔てて、所得顔に居たり。声ひきしじめ、かしこまりて物語しをるを、いらへもえせずをかしと思ひけり。「いと恐ろしく占ひたる物忌により、京の内をさへ避りて慎むなり。他の人寄すな」と言ひたり。

人目も絶えて、心やすく語らひ暮らしたまふ。かの人のものしたまへりけむに、かくて見えてむかしと思しやりて、いみじく怨みたまふ。二の宮をいとやむごとなくて持ちたてまつりたまへるありさまなども、語りたまふ。かの耳とどめたまひし一言はのたまひ出でぬぞ憎きや。時方、御手水、御くだものなど取り次ぎて参るを御覧じて、「いみじくかしづかるめる客人の主、さてな見えそや」と戒めたまふ。侍従、色めかしき若人の心地に、いとをかしと思ひて、この大夫とぞ物語して暮らしける。

雪の降り積もれるに、かのわが住む方を見やりたまへれば、霞の絶え絶えに梢ばかり見ゆ。山は鏡を懸けたるやうにきらきらと夕日に輝きたるに、よべ分け来し道のわりなきなど、あはれ多う添へて語りたまふ。

「峰の雪みぎはの氷踏み分けて君にぞ惑ふ道は惑はず

木幡の里に馬はあれど」など、あやしき硯召し出でて、手習ひたまふ。

降り乱れみぎはに凍る雪よりも中空にてぞ我は消ぬべき

と書き消ちたり。この「中空」をとがめたまふ。げに憎くも書いてけるかなと、恥づかしくて引き破りつ。さらでだに見るかひある御ありさまを、いよいよあはれにいみじと人の心にしめられむと尽くしたまふ言の葉、けしき言はむ方なし。

御物忌、二日とたばかりたまへれば、心のどかなるままに、かたみにあはれとのみ深く思しまさる。右近は、よろづに例の言ひ紛らはして、御衣などたてまつりたり。今日は乱れたる髪すこし梳らせて、濃き衣に紅梅の織物など、あはひをかしく着替へてゐたまへり。侍従もあやしき褶着たりしを、あぎやぎたれば、その裳を取りたまひて、君に着せたまひて、御手水参らせたまふ。姫宮にこれをたてまつりたらば、いみじきものにしたまひてむかし、いとやむごとなき際の人多かれど、かばかりのさましたるは難くやと見たまふ。かたはなるまで遊び戯れつつ暮らしたまふ。忍びて率て隠してむことを返す返すのたまふ。そのほど、かの人に見えたらばと、いみじきこともを誓はせたまへば、いとわりなきことと思ひていらへもやらず、涙さへ落つるけしき、さらに目の前にだに思ひ移らぬなめり、と胸痛う思さる。怨みても泣きても、よろづのたまひ明かして、夜深く率て帰りたまふ。例の、抱きたまふ。「いみじく思すめる人は、かうはよもあらじよ。見知りたまひたりや」とのたまへば、げにと思ひてうなづきて居たる、いとらうたげなり。右近、妻戸放ちて入れたてまつる。や

がて、これより別れて出でたまふも、飽かずいみじと思さる。

かやうの帰きは、なほ二条にぞおはします。いと悩ましうしたまひて、物など絶えてきこしめさず、日を経て青み瘦せたまふ。御けしきも変はるを、内にもいづくにも思ほし嘆くに、いとどもの騒がしくて、御文だにこまかには書きたまはず。かしこにも、かのさかしき乳母、娘の子産む所に出でたりける、帰り来にければ、心やすくもえ見ず。かくあやしき住まひを、ただかの殿のもてなしたまはむさまをゆかしく待つことにて、母君も思ひ慰めたるに、忍びたるさまながらも、近く渡してむことを思しなりにければ、いとめやすくうれしかるべきことに思ひて、やうやう人求め、童のめやすきなど迎へておこせたまふ。わが心にもそれこそはあるべきことに初めより待ちわたれとは思ひながら、あながちなる人の御ことを思ひ出づるに、怨みたまひしさま、のたまひしことども、面影につと添ひて、いささかまどろめば夢に見えたまひつつ、いとうたてあるまでおぼゆ。

雨降り止まで日ごろ多くなるころ、いとど山路思し絶えてわりなく思されければ、親のかふこは所狭きものにこそ、と思すもかたじけなし。尽きせぬことども書きたまひて、

眺めやるそなたの雲も見えぬまで空さへ暮るるころのわびしさ

筆にまかせて書き乱りたまへるしも、見所ありをかしげなり。ことにいと重くなどはあらぬ若き心地に、いとかかる心を思ひもまさりぬべけれど、初めより契りたまひしさまも、さすがにかれはなほいとの深う人柄のめでたきなども、世の中を知りにし初めなればにや、かかる憂きこと聞きつけて思ひ疎みたまひなむ世にはいかでかあらむ、いつしかと思ひ惑ふ親にも、思はずに心づきなしところをもてわづらはれめ、かく心焦られたまふ人はた、いとあだなる御心本性とのみ聞きしかば、かかるほどこそあらめ、またかうながらも京にも隠し

据ゑたまひ、ながらへても思し数まへむにつけては、かの上の思さむこと、よろづ隠れなき世なりければ、あやしかりし夕暮のしるべばかりにだに、かう尋ね出でたまふめり、ましてわがありさまのともかくもあらむを聞きたまはぬやうはありなむやと思ひたどるに、わが心もきずありてかの人に疎まれたてまつらむ、なほいみじかるべし、と思ひ乱るる折しも、かの殿より御使あり。

これかれと見るもいとうたてあれば、なほ言多かりつるを見つつ臥したまへれば、侍従、右近、見合はせて、なほ移りにけりなど、言はぬやうにて言ふ。

「ことわりぞかし。殿の御かたちをたぐひおはしまさじと見しかど、この御ありさまはいみじかりけり。うち乱れたまへる愛敬よ。まろならば、かばかりの御思ひを見る見る、えかくてあらじ。後の宮にも参りて、常に見たてまつりてむ」と言ふ。右近、「うしろめたの御心のほどや。殿の御ありさまにまさりたまふ人は誰れかあらむ。かたちなどは知らず、御心ばへけはひなどよ。なほこの御ことはいと見苦しきわざかな。いかがならせたまはむとすらむ」と、二人して語らふ。心一つに思ひしよりは、そらごともたより出で来にけり。後の御文には、

思ひながら日ごろになること。時々はそれよりも驚かいたまはむこそ思ふ
 さまならめ、おろかなるにやは。

など、端書きに、

水まさる遠方の里人いかならむ晴れぬ長雨にかき暮らすころ
 常よりも、思ひやりきこゆることまさりてなむ。

と、白き色紙にて立文なり。御手もこまかにをかしげならねど、書きざまゆゑゆゑしく見ゆ。宮はいと多かるを、小さく結びなしたまへる、さまざまをかし。「まづかれを、人見ぬほどに」と聞こゆ。「今日はえ聞こゆまじ」と恥ぢらひて手習に、

里の名をわが身に知れば山城の宇治のわたりぞいとど住み憂き

宮のかきたまへりし絵を、時々見て泣かれけり。ながらへてあるまじきことぞと、とざまかうざまに思ひなせど、他に絶え籠もりてやみなむはいとあはれにおぼゆべし。

「かき暮らし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身をもなさばや混じりなば」と聞こえたるを、宮はよよと泣かれたまふ。さりとも、恋しと思ふらむかしと思しやるにも、もの思ひてゐたらむさまのみ面影に見えたまふ。

まめ人はのどかに見たまひつつ、あはれ、いかに眺むらむと思ひやりて、いと恋し。

つれづれと身を知る雨の小止まねば袖さへいとどみかさまさりてとあるを、うちも置かず見たまふ。

女宮に物語など聞こえたまひてのついでに、「なめしともや思さむとつつましながら、さすがに年経ぬる人のはべるを、あやしき所に捨て置きて、いみじくもの思ふなるが心苦しきに、近う呼び寄せてと思ひはべる。昔より異やうなる心ばへはべりし身にて、世の中をすべて例の人ならで過ぐしてむと思ひはべりしを、かく見たてまつるにつけてひたぶるにも捨てがたければ、ありと人も知らせざりし人の上さへ、心苦しう罪得ぬべき心地してなむ」と聞こえたまへば、「いかなること心置くものとも知らぬを」といらへたまふ。「内になど、悪しざまに聞こし召さする人やはべらむ。世の人のもの言ひぞ、いとあぢきなくけしからずはべるや。されど、それはさばかりの数にだにはべるまじ」など聞こえたまふ。

造りたる所に渡してむと思し立つに、「かかる料なりけり」など、はなやかに言ひなす人やあらむなど苦しければ、いと忍びて障子張らすべきことなど、人しもこそあれ、この内記が知る人の親、大蔵大輔なるものに、睦ましく心や

すきままにのたまひつけたりければ、聞きつぎて、宮には隠れなく聞こえけり。「絵師どもなども、御隨身どもの中にある睦ましき殿人などを選びて、さすがにわざとなむせさせたまふ」と申すに、いとど思し騒ぎて、わが御乳母の遠き受領の妻にて下る家、下つ方にあるを、「いと忍びたる人、しばし隠いたらむ」と語らひたまひければ、いかなる人にかはと思へど、大事と思したるにかたじけなければ、「さらば」と聞こえけり。これをまうけたまひて、すこし御心のどめたまふ。この月のつごもり方に下るべければ、やがてその日渡さむと思し構ふ。「かくなむ思ふ。ゆめゆめ」と言ひやりたまひつつ、おはしまさむことはいとわりなくあるうちにも、ここにも乳母のいとさかしければ、難かるべきよしを聞こゆ。

大将殿は、卯月の十日となむ定めたまへりける。誘ふ水あらばとは思はず、いとあやしういかにしなすべき身にかあらむと浮きたる心地のみすれば、母の御もとにしばし渡りて思ひめぐらすほどあらむと思せど、少将の妻、子産むべきほど近くなりぬとて、修法、読経など隙なく騒げば、石山にもえ出で立つまじ、母ぞこち渡りたまへる。乳母出で来て、「殿より、人びとの装束などもこまかに思しやりてなむ。いかできよげに何ごととも思うたまふれど、ままが心一つには、あやしうのみぞし出ではべらむかし」など言ひ騒ぐが、心地よげなるを見たまふにも、君は、けしからぬことどもの出で来て、人笑へならば、誰れも誰れもいかに思はむ、あやにくにのたまふ人はた、八重立つ山に籠もるともかならず尋ねて、我も人もいたづらになりぬべし、なほ心やすく隠れなむことを思へど、今日ものたまへるを、いかにせむ、と心地悪しくて臥したまへり。「などかかく例ならずいたく青み痩せたまへる」と驚きたまふ。「日ごろあやしうのみなむ。はかなきものも聞こしめさず、悩ましげにせさせたまふ」と言へば、あやしきことかな、もののけなどにやあらむと、「いかなる御心地ぞと

思へど、石山停まりたまひにきかし」と言ふも、かたはらいたければ伏目なり。暮れて月いと明かし。有明の空を思ひ出づる涙のいと止めがたきは、いとけしからぬ心かなと思ふ。母君、昔物語などして、あなたの尼君呼び出でて、故姫君の御ありさま、心深くおはして、さるべきことも思し入れたりしほどに、目に見す見す消え入りたまひにしことなど語る。「おはしまさましかば、宮の上などのやうに聞こえ通ひたまひて、心細かりし御ありさまどもの、いとこよなき御幸ひにぞはべらましかし」と言ふにも、わが娘は異人かは、思ふやうなる宿世のおはし果てば劣らじを、など思ひ続けて、「世とともに、この君につけては、ものをのみ思ひ乱れしけしきのすこしうちゆるびて、かくて渡りたまひぬべかめれば、ここに参り来ること、かならずしもことさらにはえ思ひ立ちべらじ。かかる対面の折々に、昔のことも心のどかに聞こえ承らまほしけれ」など語らふ。「ゆゆしき身とのみ思うたまへしみにしかば、こまやかに見えてまつり聞こえさせむも何かはと、つつましくて過ぐしはべりつるを、うち捨てて渡らせたまひなば、いと心細くなむはべるべけれど、かかる御住まひは心もとなくのみ見たてまつるを、うれしくもはべるべかなるかな。世に知らず重々しくおはしますべかめる殿の御ありさまにて、かく尋ねきこえさせたまひしもおぼろけならじと聞こえおきはべりにし、浮きたることにやははべりける」など言ふ。「後は知らねど、ただ今はかく思し離れぬさまにのたまふにつけても、ただ御しるべをなむ思ひ出できこゆる。宮の上のかたじけなくあはれに思したりしも、つつましきことなどのおのづからはべりしかば、中空に、所狭き御身なりと思ひ嘆きはべりて」と言ふ。尼君うち笑ひて、「この宮のいと騒がしきまで色におはしますなれば、心ばせあらむ若き人さぶらひにくげになむ。おほかたはいとめでたき御ありさまなれど、さる筋のことにて、上のなめしと思さむなむわりなきと、大輔が娘の語りはべりし」と言ふにも、さりや、まし

てと君は聞き臥したまへり。

「あなむくつけや。帝の御むすめを持ちたてまつりたまへる人なれど、よそよそにてあしくもよくもあらむはいかがはせむと、おほけなく思ひなしはべる。よからぬことをひき出でたまへらましかば、すべて身には悲しく、いみじと思ひきこゆとも、また見たてまつらざらまし」など言ひ交はすことどもに、いとど心肝もつぶれぬ。なほわが身を失ひてばや、つひに聞きにくきことは出で来なむと思ひ続けるに、この水の音の恐ろしげに響きて行くを、「かからぬ流れもありかし。世に似ず荒ましき所に、年月を過ぐしたまふを、あはれと思しぬべきわざになむ」など母君したり顔に言ひゐたり。昔よりこの川の早く恐ろしきことを言ひて、「さいつころ、渡守が孫の童、棹さし外して落ち入りはべりにける。すべていたづらになる人多かる水にはべり」と、人びとも言ひあへり。君は、さてもわが身行方も知らずなりなば、誰れも誰れもあへなくいみじとしばしこそ思うたまはめ、ながらへて人笑へに憂きこともあらむは、いつかそのもの思ひの絶えむとする、と思ひかくるには、障りどころもあるまじく、さはやかによろづ思ひなざるれど、うち返しいと悲し。親のよろづに思ひ言ふありさまを、寝たるやうにてつくづくと思ひ乱る。

悩ましげにて瘦せたまへるを、乳母にも言ひて、さるべき御祈りなどせさせたまへ、祭、祓などもすべきやうなど言ふ。御手洗川に禊せまほしげなるを、かくも知らでよろづに言ひ騒ぐ。「人少々なめり。よくさるべからむあたりを訪ねて、今参りはとどめたまへ。やむごとなき御仲らひは、正身こそ何事もおいらかに思さめ、好からぬ仲となりぬるあたりは、わづらはしきこともありぬべし。隠し密めて、さる心したまへ」など、思ひいたらぬことなく言ひおきて、「かしこにわづらひはべる人もおぼつかなし」とて帰るを、いともの思はしくよろづ心細ければ、またあひ見でもこそともかくもなれと思へば、「心地のあ

しくはべるにも、見たてまつらぬがいとおぼつかなくおぼえはべるを、しばしも参り来まほしくこそ」と慕ふ。「きなむ思ひはべれど、かしこもいとも騒がしくはべり。この人びともはかなきことなどえしやるまじく、狭くなどはべればなむ。武生の国府に移ろひたまふとも、忍びては参り来なむを、なほなほしき身のほどは、かかる御ためこそいとほしくはべれ」など、うち泣きつつのたまふ。

殿の御文は今日もあり。悩ましと聞こえたりしを、いかがと訪らひたまへり。

みづからと思ひはべるを、わりなき障り多くてなむ。このほどの暮らしがたさこそ、なかなか苦しく。

などあり。宮は、昨日の御返りもなかりしを、

いかに思ただよふぞ。風のなびかむ方もうしろめたくなむ。いとどほれまさりて眺めはべる。

など、これは多く書きたまへり。

雨降りし日、来合ひたりし御使どもぞ、今日も来たりける。殿の御隨身、かの少輔が家にて時々見る男なれば、「まうとは、何しにここにはたびたびは参るぞ」と問ふ。「私に訪らふべき人のもとに参うで来るなり」と言ふ。「私の人にや艶なる文はさし取らす。けしきあるまうとかな。もの隠しはなぞ」と言ふ。「まことは、この守の君の、御文女房にたてまつりたまふ」と言へば、言違ひつつあやしと思へど、ここに定め言はむも異やうなべければ、おのおの参りぬ。

かどかどしき者にて、供にある童を、「この男にさりげなくて目つけよ。左衛門大夫の家にや入る」と見せければ、「宮に参りて、式部の少輔になむ御文は取らせはべりつる」と言ふ。さまで尋ねむものとも劣りの下種は思はず、ことの心をも深う知らざりければ、舎人の人に見現されにけむぞ口惜しきや。

殿に参りて、今出でたまはむとするほどに、御文たてまつらす。直衣にて、六条の院、後の宮の出でさせたまへるころなれば、参りたまふなりければ、ことごとしく御前などあまたもなし。御文参らする人に、「あやしきことのはべりつる、見たまへ定めむとて、今までさぶらひつる」と言ふをほの聞きたまひて、歩み出でたまふままに、「何ごとぞ」と問ひたまふ。この人の聞かむもつつましと思ひて、かしまりてをり。殿もしか見知りたまひて出でたまひぬ。

宮、例ならず悩ましげにおはすとて、宮たちも皆参りたまへり。上達部など多く参り集ひて、騒がしけれど、ことなることもおはしませず。かの内記は政官なれば、遅れてぞ参れる。この御文もたてまつるを、宮、台盤所におはしにして、戸口に召し寄せて取りたまふを、大将、御前の方より立ち出でたまふ、側目に見通したまひて、せちにも思すべかめる文のけしきかなと、をかしさに立ちとまりたまへり。引き開けて見たまふ。紅の薄様にこまやかに書きたるべしと見ゆ。文に心入れてとみにも向きたまはぬに、大臣も立ちて外ぎまにおはすれば、この君は障子より出でたまふとて、大臣出でたまふとうちしはぶきて、驚かいたてまつりたまふ。ひき隠したまへるにぞ、大臣さし覗きたまへる。驚きて御紐さしたまふ。殿つい居たまひて、「まかではべりぬべし。御邪氣の久しくおこらせたまはざりつるを、恐ろしきわざなりや。山の座主、ただ今請じに遣はさむ」と、急がしげにて立ちたまひぬ。

夜更けて、皆出でたまひぬ。大臣は、宮を先に立てたてまつりたまひて、あまたの御子どもの上達部、君たちをひき続けてあなたに渡りたまひぬ。この殿は遅れて出でたまふ。隨身けしきばみつる、あやしと思しければ、御前など下りて火灯すほどに、隨身召し寄す。「申しつるは何ごとぞ」と問ひたまふ。「今朝、かの宇治に、出雲の権の守時方の朝臣のもとにはべる男の、紫の薄様にて桜につけたる文を、西の妻戸に寄りて女房に取らせはべりつる、見たまへつけ

て、しかしか問ひはべりつれば、言違へつつ、そらごとのやうに申しはべりつるを、いかに申すぞとて、童べして見せはべりつれば、兵部卿の宮に参りはべりて、式部の少輔道定の朝臣になむ、その返り事は取らせはべりける」と申す。君、あやしと思して、「その返り事は、いかやうにしてか出だしつる」、「それは見たまへず。異方より出だしはべりにける。下人の申しはべりつるは、赤き色紙のいときよらなるとなむ申しはべりつる」と聞こゆ。思し合はするに、違ふことなし。さまで見せつらむを、かどかどしと思せど、人びと近ければ、詳しくものたまはず。

道すがら、なほいと恐ろしく隈なくおはする宮なりや、いかなりけむついでに、さる人ありと聞きたまひけむ、いかで言ひ寄りたまひけむ、田舎びたるあたりにて、かうやうの筋の紛れはえしもあらじと思ひけるこそ幼けれ、さても知らぬあたりにこそさる好きごとをもものたまはめ、昔より隔てなくて、あやしきまでしるべして率てありきたてまつりし身にしも、うしろめたく思し寄るべしや、と思ふに、いと心づきなし。対の御方の御ことを、いみじく思ひつつ年ごろ過ぐすは、わが心の重きこよなかりけり、さるは、それは今初めてさまあしかるべきほどにもあらず、もとよりのたよりにもよれるを、ただ心のうちの隈あらむがわがためも苦しかるべきによりこそ思ひ憚るも、をこなるわざなりけれ、このころかく悩ましくしたまひて、例よりも人しげき紛れに、いかではるばると書きやりたまふらむ、おはしやそめにけむ、いと遙かなる懸想の道なりや、あやしくておはし所尋ねられたまふ日もありと聞こえきかし、さやうのことに思し乱れてそこはかとなく悩みたまふなるべし、昔を思し出づるにも、えおはせざりしほどの嘆きいとほしげなりきかし、とつくづくと思ふに、女のいたくもの思ひたるさまなりしも、片端心得そめたまひては、よろづ思し合はするに、いと憂し。ありがたきものは人の心にもあるかな、らうたげにお

ほどかなりとは見えながら、色めきたる方は添ひたる人ぞかし、この宮の御具にてはいとよきあはひなり、と思ひも譲りつべく退く心地したまへど、やむごとなく思ひそめ始めし人ならばこそあらめ、なほさるものにて置きたらむ、今はとて見ざらむ、はた恋しかるべし、と人わろく、いろいろ心の内に思す。我すさまじく思ひなりて捨て置きたらば、かならずかの宮の呼び取りたまひてむ、人のため後のいとほしきをも、ことにたどりたまふまじ、さやうに思す人こそ、一品宮の御方に人二三人参らせたたまひたなれ、さて出で立ちたらむを見聞かむいとほしく、などなほ捨てがたく、けしき見まほしくて、御文遣はす。

例の隨身召して、御手づから人まに召し寄せたり。「道定朝臣は、なほ仲信が家にや通ふ」、「さなむはべる」と申す。「宇治へは、常にやこのありけむ男は遣るらむ。かすかにて居たる人なれば、道定も思ひかくらむかし」とうちうめきたまひて、「人に見えでをまかれ。をこなり」とのたまふ。かしこまりて、少輔が常にこの殿の御こと案内し、かしこのこと問ひしも思ひあはすれど、もの馴れてもえ申し出でず。君も、下種に詳しくは知らせじと思せば、問はせたまはず。

かしこには、御使の例よりしげきにつけても、もの思ふことさまざまなり。ただかくぞのたまへる。

波越ゆるころとも知らず末の松待つらむとのみ思ひけるかな

人に笑はせたまふな。

とあるを、いとあやしと思ふに、胸ふたがりぬ。御返り事を心得顔に聞こえむもいとつつまし、ひがことにてあらむもあやしければ、御文はもとのやうにして、

所違へのやうに見えはべればなむ。あやしく悩ましくて何事も。

と書き添へてたてまつれつ。見たまひて、さすがにいたくもしたるかな、かけ

て見およばぬ心ばへよ、とほほ笑まれたまふも、憎しとはえ思し果てぬなめり。まほならねどほのめかしたまへるけしきを、かしこにはいとど思ひ添ふ。つひにわが身はけしからずあやしくなりぬべきなめりと、いとど思ふところに、右近来て、「殿の御文は、などて返したてまつらせたまひつるぞ。ゆゆしく忌みはべるなるものを」、「ひがことのあるやうに見えつれば、所違へか」とのたまふ。あやしと見ければ、道にてあけて見けるなりけり。よからずの右近がさまやな。見つとは言はで、「あないとほし。苦しき御ことどもにこそはべれ、殿はもののけしき御覧じたるべし」と言ふに、面さと赤みて、ものものたまはず。文見つらむと思はねば、異ざまにて、かの御けしき見る人の語りたるにこそはと思ふに、誰れかさ言ふぞなどもえ問ひたまはず、この人びとの見思ふらむこともいみじく恥づかし。

わが心もてありそめしことならねども、心憂き宿世かなと思ひ入りて寝たるに、侍従と二人して、「右近が姉の、常陸にて人二人見はべりしを、ほどほどにつけてはただかくぞかし、これもかれも劣らぬ心ざしにて、思ひ惑ひてはべりしほどに、女は今の方にいますこし心寄せまさりてぞはべりける。それに妬みてつひに今のをば殺してしぞかし。さて我も住みはべらずなりにき。国にもいみじきあたらずはもの一人失ひつ。またこの過ちたるもよき郎等なれど、かかる過ちしたる者をいかでかは使はむとて、国の内をも追ひ払はれ、すべて女のたいだいしきぞとて、館の内にも置いたまへらざりしかば、東の人になりて、ままも今に恋ひ泣きはべるは、罪深くこそ見たまふれ。ゆゆしきついでをやうにはべれど、上も下もかかる筋のことは思し乱るるはいと悪しきわざなり。御命までにはあらずとも、人の御ほどほどにつけてはべることなり。死ぬるにまさる恥なることも、よき人の御身にはなかなかはべるなり。一方に思し定めてよ。宮も御心ざしまさりてまめやかにだに聞こえさせたまはば、そなたざまに

もなびかせたまひて、ものないたく嘆かせたまひそ。瘦せ衰へさせたまふもいと益なし。さばかり上の思ひいたづききこえさせたまふものを、ままがこの御いそぎに心を入れて惑ひみてはべるにつけても、それよりこなたにと聞こえさせたまふ御ことこそ、いと苦しくいとほしけれ」と言ふに、いま一人、「うたて、恐ろしきまでな聞こえさせたまひそ。何ごとも御宿世にこそあらめ。ただ御心のうちにすこし思しなびかむ方を、さるべきに思しならせたまへ。いでや、いとかたじけなくいみじき御けしきなりしかば、人のかく思しいそぐめりし方にも御心も寄らず。しばしは隠ろへても、御思ひのまさらせたまはむに寄せたまひねとぞ思ひえはべる」と、宮をいみじくめできこゆる心なれば、ひたみちに言ふ。

「いさや。右近は、とてもかくても事なく過ぐさせたまへと、初瀬、石山などに願をなむ立てはべる。この大将殿の御荘の人びとといふ者は、いみじき不道の者どもにて、一類この里に満ちてはべるなり。おほかたこの山城、大和に殿の領じたまふ所々の人なむ、皆この内舎人といふ者のゆかりかけつつはべるなる。それが婿の右近の大夫といふ者を元として、よろづのことをおきて仰せられたるなり。よき人の御仲どちは、情けなきことし出でよと思さずとも、ものの心得ぬ田舎人どもの、宿直人にて替り替りさぶらへば、おのが番に当りていささかなることあらせじなど、過ちもしはべりなむ。ありし夜の御ありきは、いとこそむくつけく思うたまへられしか。宮はわりなくつつませたまふとて、御供の人も率ておはしませず、やつれてのみおはしますを、さる者の見つけたてまつりたらむは、いといみじくなむ」と、言ひ続けるを、君、なほ我を宮に心寄せたてまつりたると思ひてこの人びとの言ふ、いと恥づかしく、心地にはいづれとも思はず、ただ夢のやうにあきれて、いみじく焦られたまふをば、などかくしもとばかり思へど、頼みきこえて年ごろになりぬる人を、今は

ともて離れむと思はぬによりこそ、かくいみじとももの思ひ乱るれ、げによからぬことも出で来たらむ時、とつくづくと思ひるたり。「まろは、いかで死なばや。世づかず心憂かりける身かな。かく憂きことあるためしは、下種などの中にだに多くやはあなる」とて、うつぶし臥したまへば、「かくな思し召しそ。やすらかに思しなせとてこそ、聞こえさせはべれ。思しぬべきことをも、さらぬ顔にのみのどかに見えさせたまへるを、この御事ののち、いみじく心焦られをせさせたまへば、いとあやしくなむ見たてまつる」と、心知りたる限りは、皆かく思ひ乱れ騒ぐに、乳母、おのが心をやりて物染めいとなみるたり。今参り童などのめやすきを呼び取りつつ、「かかる人御覧ぜよ。あやしくてのみ臥させたまへるは、もののけなどの妨げきこえさせむとするにこそ」と嘆く。

殿よりは、かのありし返り事をだにのたまはで、日ごろ経ぬ。このおどしし内舎人といふ者ぞ来たる。げにいと荒々しくふつつかなるさましたる翁の、声かれさすがにけしきある、「女房にもものとり申さむ」と言はせられたれば、右近しも会ひたり。「殿に召しはべりしかば、今朝参りはべりて、ただ今なむまかり帰りはんべりつる。雑事ども仰せられつるついでに、かくておはしますほどに、夜中暁のことも、なにがしらかくてさぶらふと思ほして、宿直人わざとさしたてまつらせたまふこともなきを、このころ聞こしめせば、女房の御もとに知らぬ所の人通ふやうになむ聞こし召すことある、たいだいしきことなり、宿直にさぶらふ者どもは、その案内聞きたらむ、知らではいかがさぶらふべきと問はせたまひつるに、承らぬことなれば、なにがしは身の病重くはべりて、宿直仕うまつることは月ごろおこたりてはべれば、案内もえ知りはんべらず、さるべき男どもは、解怠なく催しさぶらはせはべるを、さのごとき非常のことのさぶらはむをば、いかでか承らぬやうははべらむとなむ申させはべりつる。用意してさぶらへ、便なきこともあらば、重く勘当せしめたまふべきよしなむ仰せ言

はべりつれば、いかなる仰せ言にかと恐れ申しはんべる」と言ふを聞くに、梟の鳴かむよりもいとももの恐ろし。いらへもやらで、「さりや。聞こえさせしに違はぬことどもを聞こしめせ。もののけしき御覧じたるなめり。御消息もはべらぬよ」と嘆く。乳母は、ほのうち聞きて、「いとうれしく仰せられたり。盗人多かんなるわたりに、宿直人も初めのやうにもあらず。皆身の代はりと言ひつつ、あやしき下種をのみ参らすれば、夜行をだにえせぬに」と喜ぶ。

君は、げにただ今、いとあしくなりぬべき身なめりと思すに、宮よりはいかにいかにと苔の乱るるわりなさをのたまふ、いとわづらはしくてなむ。とてもかくても、一方一方につけて、いとうたてであることは出で来なむ、わが身一つの亡くなりなむのみこそめやすからめ、昔は懸想する人のありさまのいづれとなきに思ひわづらひてだにこそ、身を投ぐるためしもありけれ、ながらへばかならず憂きこと見えぬべき身の、亡くならむはなにか惜しかるべき、親もしばしこそ嘆き惑ひたまはめ、あまたの子ども扱ひに、おのづから忘草摘みてむ、ありながらもてそこなひ、人笑へなるさまにてさすらへむは、まさるもの思ひなるべし、など思ひなる。児めきおほどかにたをたと見ゆれど、気高う世のありさまをも知る方すくなくて思し立てたる人にしあれば、すこしおずかるべきことを思ひ寄るなりけむかし。

むつかしき反故など破りて、おどろおどろしく一たびにもしたためず、灯台の火に焼き、水に投げ入れさせなど、やうやう失ふ。心知らぬ御達は、ものへ渡りたまふべければ、つれづれなる月日を経てはかなくし集めたまへる手習などを破りたまふなめりと思ふ。侍従などぞ見つくる時に、「などかくはせさせたまふ。あはれなる御仲に心とどめて書き交はしたまへる文は、人にこそ見せさせたまはざらめ、ものの底に置かせたまひて御覧するなむ、ほどほどにつけてはいとあはれにはべる。さばかりめでたき御紙使ひ、かたじけなき御言の葉

を尽くさせたまへるを、かくのみ破らせたまふ、情けなきこと」と言ふ。「何か、むつかしく。長かるまじき身にこそあめれ。落ちとどまりて、人の御ためもいとほしからむ。さかしらにこれを取りおきけるよなど、漏り聞きたまはむこそ恥づかしけれ」などのたまふ。心細きことを思ひもてゆくには、またえ思ひ立つまじきわざなりけり。親をおきて亡くなる人は、いと罪深かなるものなど、さすがにほの聞きたることをも思ふ。

二十日あまりにもなりぬ。かの家あるじ、二十八日に下るべし。宮は、「その夜かならず迎へむ。下人などによくけしき見ゆまじき心づかひしたまへ。こなたざまよりは、ゆめにも聞こえあるまじ。疑ひたまふな」などのたまふ。さてあるまじきさまにておはしたらむに、今一たびものをもえ聞こえず、おぼつかなくて返したてまつらむことよ、また時の間にても、いかでかここには寄せたてまつらむとする、かひなく怨みて帰りたまはむさまなどを思ひやるに、例の面影離れず、堪へず悲しくて、この御文を顔におし当てて、しばしはつつめども、いとみじく泣きたまふ。右近、「あが君、かかる御けしきつひに人見たてまつりつべし。やうやうあやしなど思ふ人はべるべかめり。かうかかづらひ思ほさで、さるべきさまに聞こえさせたまひてよ。右近はべらば、おほけなきこともたばかり出だしはべらば、かばかり小さき御身一つは、空より率てたてまつらせたまひなむ」と言ふ。とばかりためらひて、「かくのみ言ふこそいと心憂けれ。さもありぬべきことと思ひかけばこそあらめ、あるまじきことと皆思ひとるに、わりなくかくのみ頼みたるやうにのたまへば、いかなることをし出でたまはむとするにかなと思ふにつけて身のいと心憂きなり」とて、返り事も聞こえたまはずなりぬ。

宮、かくのみなほ受け引くけしきもなくて、返り事さへ絶え絶えになるは、かの人のあるべきさまに言ひしたためて、すこし心やすかるべき方に思ひ定ま

りぬるなめり、ことわりと思すものからいと口惜しくねたく、さりとも我をばあはれと思ひたりしものを、あひ見ぬとだえに人びとの言ひ知らする方に寄るならむかしなど眺めたまふに、行く方しらず、むなしき空に満ちぬる心地したまへば、例のいみじく思し立ちておはしましぬ。

葦垣の方を見るに、例ならず、「あれは誰ぞ」と言ふ声々、いざとげなり。立ち退きて、心知りの男を入れたれば、それをさへ問ふ。前々のけはひにも似ず。わづらはしくて、「京よりとみの御文あるなり」と言ふ。右近は徒者の名を呼びて会ひたり。いとわづらはしくいとどおぼゆ。「さらに今宵は不用なり。いみじくかたじけなきこと」と言はせたり。宮、などかくもて離るらむと思すに、わりなくて、「まづ時方入りて、侍従に会ひて、さるべきさまにたばかれ」とて遣はす。かどかどしき人にて、とかく言ひ構へて、訪ねて会ひたり。「いかなるにかあらむ、かの殿のたまはすることありとて、宿直にある者どものさかしがりだちたるころにて、いとわりなきなり。御前にも、ものをのみいみじく思しためるは、かかる御ことのかたじけなきを思し乱るるにこそと、心苦しくなむ見たてまつる。さらに今宵は、人けしき見はべりなば、なかなかいとあしかりなむ。やがて、さも御心づかひせさせたまひつべからむ夜、ここにも人知れず思ひ構へてなむ聞こえさすべかめる」。乳母のいざときことなども語る。大夫、「おはします道のおぼろけならず、あながちなる御けしきに、あへなく聞こえさせむなむたいだしき。さらば、いざたまへ。ともに詳しく聞こえさせたまへ」といざなふ。「いとわりなからむ」と言ひしろふほどに、夜もいたく更けゆく。

宮は、御馬にてすこし遠く立ちたまへるに、里びたる声したる犬どもの出で来てののしるもいと恐ろしく、人少なに、いとあやしき御ありきなれば、すずろならむものの走り出で来たらむもいかさまにと、さぶらふ限り心をぞ惑はし

ける。「なほとくとく参りなむ」と言ひ騒がして、この侍従を率て参る。髪、脇より搔い越して、様体いとをかしき人なり。馬に乗せむとすれど、さらに聞かねば、衣の裾をとりて、立ち添ひて行く。わが沓を履かせて、みづからは、供なる人のあやしき物を履きたり。参りて、かくなむと聞こゆれば、語らひたまふべきやうだになれば、山賤の垣根のおどろ葎の蔭に、障泥といふものを敷きて降ろしたてまつる。わが御心地にも、あやしきありさまかな、かかる道にそこなはれて、はかばかしくはえあるまじき身なめりと思し続けるに、泣きたまふこと限りなし。心弱き人は、ましていといみじく悲しと見たてまつる。いみじき仇を鬼につくりたりとも、おろかに見捨つまじき人の御ありさまなり。ためらひたまひて、「ただ一言もえ聞こえさすまじきか。いかなれば、今さらにかかるぞ。なほ人びとの言ひなしたるやうあるべし」とのたまふ。ありさま詳しく聞こえて、「やがて、さ思し召さむ日を、かねては散るまじきさまにたばからせたまへ。かくかたじけなきことどもを見たてまつりはべれば、身を捨てても思うたまへたばかりはべらむ」と聞こゆ。我も人目をいみじく思せば、一方に怨みたまはむやうもなし。

夜はいたく更けゆくに、このもの咎めする犬の声絶えず、人びと追ひ避けなごするに、弓引き鳴らし、あやしき男どもの声どもして、「火危ふし」など言ふも、いと心あわたたしければ、帰りたまふほど、言へばさらなり。

「いづくにか身をば捨てむと白雲のかからぬ山も泣く泣くぞ行くさらばはや」とて、この人を帰したまふ。御けしきなまめかしくあはれに、夜深き露にしめりたる御香の香うばしさなど、たとへむ方なし。泣く泣くぞ帰り来たる。

右近は、言ひ切りつるよし言ひみたるに、君はいよいよ思ひ乱ること多くて臥したまへるに、入り来てありつるさま語るに、いらへもせねど、枕のやう

やう浮きぬるを、かつはいかに見るらむとつつまし。つとめても、あやしからむまみを思へば、無期に臥したり。ものはかなげに帯などして経読む。親に先だちなむ罪失ひたまへとのみ思ふ。ありし絵を取り出でて見て、かきたまひし手つき、顔の匂ひなどの、向かひきこえたらむやうにおぼゆれば、よべ一言をだに聞こえずなりにしは、なほ今ひとへまさりて、いみじと思ふ。かの、心のどかなるさまにて見むと、行く末遠かるべきことをのたまひわたる人も、いかが思さむといとほし。憂きさまに言ひなす人もあらむこそ、思ひやり恥づかしけれど、心浅くけしからず人笑へならむを聞かれたてまつらむよりは、など思ひ続けて、

嘆きわび身をば捨つとも亡き影に憂き名流さむことをこそ思へ

親もいと恋しく、例はことに思ひ出でぬはらからの、醜やかなるも恋し。宮の上を思ひ出できこゆるにも、すべて今一たびゆかしき人多かり。人は皆、おのおの物染めいそぎ、何やかやと言へど、耳にも入らず、夜となれば、人に見つけられず出でて行くべき方を思ひまうけつつ、寝られぬままに、心地もあしく、皆違ひにたり。明けたてば、川の方を見やりつつ、羊の歩みよりもほどなき心地す。

宮は、いみじきことどもをのたまへり。今さらに人や見むと思へば、この御返り事をだに、思ふままにも書かず。

からをだに憂き世の中にとどめずはいづこをはかと君も恨みむとのみ書いて出だしつ。かの殿にも、今はのけしき見せたてまつらまほしけれど、所々に書きおきて、離れぬ御仲なれば、つひに聞きあはせたまはむこと、いと憂かるべし、すべていかになりけむと、誰れにもおぼつかなくてやみなむと思ひ返す。

京より、母の御文持て来たり。

寝ぬる夜の夢にいと騒がしくて見えたまひつれば、誦経所々せさせなどしはべるを、やがてその夢の後、寝られざりつるけにや、ただ今昼寝してはべる夢に、人の忌むといふことなむ見えたまひつれば、驚きながらたてまつる。よく慎ませたまへ。人離れたる御住まひにて、時々立ち寄せたまふ人の御ゆかりもいと恐ろしく、悩ましげにもせさせたまふ折しも、夢のかかるを、よろづになむ思うたまふる。参り来まほしきを、少将の方の、なほいと心もとなげにもものけだちて悩みはべれば、片時も立ち去ること、といみじく言はればべりてなむ。その近き寺にも御誦経せさせたまへ。

とて、その料の物、文など書き添へて持て来たり。限りと思ふ命のほどを知らで、かく言ひ続けたまへるも、いと悲しと思ふ。

寺へ人遣りたるほど、返り事書く。言はまほしきこと多かれど、つつましくて、ただ、

後にまたあひ見むことを思はなむこの世の夢に心惑はで

誦経の鐘の風につけて聞こえ来るを、つくづくと聞き臥したまふ。

鐘の音の絶ゆる響きに音を添へてわが世尽きぬと君に伝へよ

巻数持て来たるに書きつけて、「今宵はえ帰るまじ」と言へば、物の枝に結びつけて置きつ。乳母、「あやしく心ばしりのするかな。夢も騒がしとのたまはせたりつ。宿直人よくさぶらへ」と言はするを、苦しと聞き臥したまへり。

「物聞こし召さぬ、いとあやし。御湯漬け」などよろづに言ふを、さかしがるめれど、いと醜く老いなりて、我なくはいづくにかあらむ、と思ひやりたまふもいとあはれなり。世の中にえあり果つまじきさまを、ほのめかして言はむなと思すに、まづ驚かされて先だつ涙をつつみたまひて、ものも言はれず。右近、ほど近く臥すとて、「かくのみものを思ほせば、もの思ふ人の魂はあくがるなるものなれば、夢も騒がしきならむかし。いづ方と思し定まりて、いかにもい

かにもおはしまさなむ」とうち嘆く。萎えたる衣を顔におしあてて臥したまへりとなむ。

蜻

蛉

かしこには、人びと、おはせぬを求め騒げどかひなし。物語の姫君の人に盗まれたらむあしたのやうなれば、詳しくも言ひ続けず。京より、ありし使の帰らずなりにしかば、おぼつかなしとて、また人おこせたり。「まだ鶏の鳴くになむ、出だし立てさせたまへる」と使の言ふに、いかに聞こえむと、乳母よりはじめて、あわて惑ふこと限りなし。思ひやる方なくてただ騒ぎ合へるを、かの心知れるどちなむ、いみじくものを思ひたまへりしさまを思ひ出づるに、身を投げたまへるかとは思ひ寄りける。

泣く泣くこの文を開けたれば、

いとおぼつかなきにまどろまれはべらぬけにや、今宵は夢にだにうちけても見えず。物に襲はれつつ心地も例ならずうたてはべるを、なほいと恐ろしく、ものへ渡らせたまはむことは近くなれど、そのほどここに迎へてまつりてむ。今日は雨降りはべりぬべければ。

などあり。よべの御返りをも開けて見て、右近いみじう泣く。さればよ、心細きことは聞こえたまひけり、我に、などかいささかのたまふことのなかりけむ、幼かりしほどより、つゆ心置かれたてまつることなく、塵ばかり隔てなくてならひたるに、今は限りの道にしも我を後らかし、けしきをだに見せたまはざりけるがづらきこと、と思ふに、足摺りといふことをして泣くさま、若き子どもやうなり。いみじく思したる御けしきは見たてまつりわたれど、かけても、かくなべてならずおどろおどろしきこと、思し寄らむものとは見えざりつる人の御心ざまを、なほいかにしつることにかとおぼつかなくいみじ。乳母は、なかなかものもおぼえで、ただ、「いかさまにせむ。いかさまにせむ」とぞ言はれける。

宮にも、いと例ならぬけしきありし御返り、いかに思ふならむ、我をさすがにあひ思ひたるさまながら、あだなる心なりとのみ深く疑ひたれば、他へ行き

隠れむとにやあらむ、と思し騒ぎ、御使あり。ある限り泣き惑ふほどに来て、御文もえたてまつらず。「いかなるぞ」と下種女に問へば、「上の、今宵にはかに亡せたまひにければ、ものもおぼえたまはず。頼もしき人もおはしまさぬ折なれば、さぶらひたまふ人びとは、ただものに当たりてなむ惑ひたまふ」と言ふ。心も深く知らぬ男にて、詳しう問はで参りぬ。かくなむと申させたるに、夢とおぼえて、いとあやし、いたくわづらふとも聞かず、日ごろ悩ましとのみありしかど、昨日の返り事はさりげもなく、常よりもをかしげなりしものを、と思しやる方なければ、「時方、行きてけしき見、たしかなること問ひ聞け」とのたまへば、「かの大将殿、いかなることか聞きたまふことはべりけむ、宿直する者おろかなりなど戒め仰せらるるとて、下人のまかり出づるをも見とがめ問ひはべるなれば、ことづくることなくて時方まかりたらむを、ものの聞こえはべらば、思し合はすることなどやはべらむ。さてにはかに人の亡せたまへらむ所は、論なう騒がしう人しげくはべらむを」と聞こゆ。「さりとは、いとおぼつかなくてやあらむ。なほとかくさるべきさまに構へて、例の心知れる侍従などに会ひて、いかなることをかく言ふぞと案内せよ。下種はひがことも言ふなり」とのたまへば、いとほしき御けしきもかたじけなくて、夕つ方行く。かやすき人は、疾く行き着きぬ。雨少し降り止みたれど、わりなき道に、やつれて下種のさまにて来たれば、人多く立ち騒ぎて、「今宵やがてをさめたてまつるなり」など言ふを聞く心地も、あさましくおぼゆ。右近に消息したれども、え会はず、「ただ今ものおぼえず。起き上がらむ心地もせでなむ。さるは、今宵ばかりこそかくも立ち寄りたまはめ、え聞こえぬこと」と言はせたり。「さりとは、かくおぼつかなくてはいかか帰り参りはべらむ。今一所だに」と切に言ひたれば、侍従ぞ会ひたりける。「いとあさまし。思しもあへぬさまにて亡せたまひにたれば、いみじと言ふにも飽かず、夢のやうにて、誰も誰も惑

ひはべるよしを申させたまへ。すこしも心地のどめはべりてなむ、日ごろももの思したりつるさま、一夜いと心苦しと思ひきこえさせたまへりしありさまなども、聞こえさせはべるべき。この穢らひなど、人の忌みはべるほど過ぐして、今一たび立ち寄りたまへ」と言ひて泣くこといといみじ。

内にも泣く声々のみして、乳母なるべし、「あが君や、いづ方にかおはしましぬる。帰りたまへ。むなしき骸をだに見たてまつらぬが、かひなく悲しくもあるかな。明け暮れ見たてまつりても飽かずおぼえたまひ、いつしかかひある御さまを見たてまつらむと、朝夕に頼みきこえつるにこそ命も延びはべりつれ、うち捨てたまひて、かく行方も知らせたまはぬこと。鬼神もあが君をばえ領じたてまつらじ。人のいみじく惜しむ人をば、帝釈も返したまふなり。あが君を取りたてまつりたらむ、人にまれ鬼にまれ、返したてまつれ。亡き御骸をも見たてまつらむ」と言ひ続くるが、心得ぬことども混じるを、あやしと思ひて、「なほのたまへ。もし人の隠しきこえたまへるか。たしかに聞こし召さむと、御身の代はりに出だし立てさせたまへる御使なり。今はとてもかくてもかひなきことなれど、後にも聞こし召し合はすることのはべらむに、違ふこと混じらば、参りたらむ御使の罪なるべし。またさりととも頼ませたまひて、君たちに対面せよと仰せられつる御心ばへもかたじけなしとは思されずや。女の道に惑ひたまふことは、人のみかどにも古き例どもありけれど、またかかること、この世にはあらじとなむ見たてまつる」と言ふに、げにいとあはれなる御使にこそあれ、隠すとすとも、かくて例ならぬことのさま、おのづから聞こえなむと思ひて、「などか、いささかにても、人や隠いたてまつりたまふらむと思ひ寄るべきことあらむには、かくしもある限り惑ひはべらむ。日ごろいといみじくものを思し入るめりしかば、かの殿のわづらはしげにほのめかし聞こえたまふことなどもありき。御母にもものしたまふ人も、かくののしる乳母なども、初め

より知りそめたりし方に渡りたまはむとなむいそぎ立ちて、この御ことをば人知れぬさまにのみ、かたじけなくあはれと思ひきこえさせたまへりしに、御心乱れけるなるべし。あさましう、心と身を亡くしたまへるやうなれば、かく心の惑ひにひがひがしく言ひ続けらるるなめり」と、さすがにまほならずほめかす。心得がたくおぼえて、「さらば、のどかに参らむ。立ちながらはべるも、いとことそぎたるやうなり。今御みづからもおはしましなむ」と言へば、「あなかたじけな、今さら人の知りきこえさせむも、亡き御ためは、なかなかめでたき御宿世見ゆべきことなれど、忍びたまひしことなれば、また漏らさせたまはで止ませたまはむなむ、御心ざしにはべるべき」、ここにはかく世づかず亡せたまへるよしを人に聞かせじとよろづに紛らはすを、自然にことどものけしきもこそ見ゆれと思へば、かくそそのかしやりつ。

雨のいみじかりつる紛れに、母君も渡りたまへり。さらに言はむ方もなく、「目の前に亡くならしたらむ悲しさは、いみじうとも、世の常にてたぐひあることなり。これはいかにしつることぞ」と惑ふ。かかることどもの紛れありて、いみじうもの思ひたまふらむとも知らねば、身を投げたまへらむとも思ひも寄らず、鬼や食ひつらむ、狐めくものや取りもて去ぬらむ、いと昔物語のあやしきものこのたとひにか、さやうなることも言ふなりしと思ひ出づ。さては、かの恐ろしと思ひきこゆるあたりに、心などあしき御乳母やうの者や、かう迎へたまふべしと聞きて、めざましがりてたばかりたる人もやあらむと、下種などを疑ひ、「今参りの心知らぬやある」と問へば、「いと世離れたりとて、ありならはぬ人は、ここにてはかなきこともえせず、今とく参らむと言ひてなむ、皆そのいそぐべきものどもなど取り具しつつ、帰り出ではべりにし」とて、もとよりある人だに片へはなくて、いと人少ななる折になむありける。

侍従などこそ、日ごろの御けしき思ひ出で、「身を失ひてばや」など泣き入

りたまひし折々のありさま、書き置きたまへる文をも見るに、「亡き影に」と書きすさびたまへるものの、硯の下にありけるを見つけて、川の方を見やりつつ、響きののしる水の音を聞くにも、疎ましく悲しと思ひつつ、「さて亡せたまひけむ人を、とかく言ひ騒ぎて、いづくにもいづくにもいかなる方になりたまひにけむと思し疑はむもいとほしきこと」と言ひ合はせて、「忍びたる事とても、御心より起こりてありしことならず。親にて、亡き後に聞きたまへりとも、いとやさしきほどならぬを、ありのままに聞こえて、かくいみじくおぼつかなきことどもをさへ、かたがた思ひ惑ひたまふさまは、すこし明らめさせたてまつらむ。亡くなりたまへる人とても、骸を置きても扱ふこそ世の常なれ、世づかぬけしきにて日ごろも経ば、さらに隠れあらじ。なほ、聞こえて今は世の聞こえをだにつくろはむ」と語らひて、忍びてありしさまを聞こゆるに、言ふ人も消え入り、え言ひやらす、聞く心地も惑ひつつ、さはこのいと荒ましと思ふ川に流れ亡せたまひにけりと思ふに、いとど我も落ち入りぬべき心地して、「おはしましにけむ方を尋ねて、骸をだにはかばかしくをさめむ」とのたまへど、「さらに何のかひはべらじ。行方も知らぬ大海の原にこそおはしましにけめ。さるものから、人の言ひ伝へむことはいと聞きにくし」と聞こゆれば、とざまかくざまに思ふに、胸のせきのぼる心地して、いかにもいかにもすべき方もおぼえたまはぬを、この人びと二人して、車寄せさせて、御座ども、気近う使ひたまひし御調度ども、皆ながら脱ぎ置きたまへる御衾などやうのものを取り入れて、乳母子の大徳、それが叔父の阿闍梨、その弟子の睦ましきなど、もとより知りたる老法師など、御忌に籠もるべき限りして、人の亡くなりたるけはひにまねびて、出だし立つるを、乳母、母君は、いといみじくゆゆしと臥しまろぶ。

大夫、内舎人など、脅しきこえし者どもも参りて、「御葬送の事は、殿に事

のよしも申させたまひて、日定められ、いかめしうこそ仕うまつらめ」など言ひけれど、「ことさら、今宵過ぐすまじ、いと忍びて、と思ふやうあればなむ」とて、この車を向かひの山の前なる原にやりて、人も近うも寄せず、この案内知りたる法師の限りして焼かす。いとほかなくて、煙は果てぬ。田舎人どもは、なかなかかかることをことごとしくしなし、言忌みなど深くするものなりければ、「いとあやしう、例の作法などあることども知らず、下種下種しくあへなくせてせられぬることかな」と誹りければ、「片へおはする人は、ことさらにかくなむ、京の人はしたまふ」などぞさまさまになむやすからず言ひける。

かかる人どもの言ひ思ふことだにつつましきを、ましてものの聞こえ隠れなき世の中に、大将殿わたりに、骸もなく亡せたまひにけりと聞かせたまはば、かならず思ほし疑ふこともあらむを、宮はた同じ御仲らひにて、さる人のおはしおはせず、しばしこそ忍ぶとも思さめ、つひには隠れあらじ、また、定めて宮をしも疑ひきこえたまはじ、いかなる人か率て隠しけむなどぞ、思し寄せむかし、生きたまひての御宿世はいと気高くおはせし人の、げに亡き影にいみじきことをや疑はれたまはむ、と思へば、ここの内なる下人どもにも、今朝のあわたたしかりつる惑ひにけしきも見聞きつるには口かため、案内知らぬには聞かせじなどぞたばかりける。ながらへては、誰にも静やかにありしさまをも聞こえてむ、ただ今は悲しき覚めぬべきこと、ふと人伝てに聞こし召さむは、なほいといとほしかるべきことなるべしと、この人二人ぞ深く心の鬼添ひたれば、もて隠しける。

大将殿は、入道の宮の悩みたまひければ、石山に籠もりたまひて、騒ぎたまふころなりけり。さて、いとどかしこをおぼつかなう思しけれど、はかばかしう、さなむと言ふ人はなかりければ、かかるいみじきことにも、まづ御使のなきを、人目も心憂しと思ふに、御荘の人なむ参りて、しかしかと申させければ、

あさましき心地したまひて、御使、そのまたの日まだつとめて参りたり。「いみじきことは、聞くままにみづからものすべきに、かく悩みたまふ御ことによりつつしみて、かかる所に日を限りて籠もりたればなむ。よべのことはなどうか、ここに消息して日を延べてもさることはするものを、いと軽らかなるさまにて急ぎせられにける。とてもかくても、同じ言ふかひなきなれど、とぢめのことをしも、山賤の誹りをさへ負ふなむ、このためもからき」など、かの睦まじき大蔵の大輔してのたまへり。御使の来たるにつけても、いとどいみじきに、聞こえむ方なきことどもなれば、ただ涙におぼほれたるばかりをかことにて、はかばかしうもいらへやらずなりぬ。

殿は、なほいとあへなくいみじと聞きたまふにも、心憂かりける所かな、鬼などや住むらむ、などで今までさる所に据ゑたりつらむ、思はずなる筋の紛れあるやうなりしも、かく放ち置きたるに心やすくて、人も言ひをかしたまふなりけむかし、と思ふにも、わがたゆく世づかぬ心のみ悔しく、御胸痛くおぼえたまふ。悩ませたまふあたりに、かかること思し乱るるもうたてあれば、京におはしぬ。宮の御方にも渡りたまはず、「こととしきほどにもはべらねど、ゆゆしきことを近う聞きつれば、心の乱れはべるほどもいまいまして」など聞こえたまひて、尽きせずはかなくいみじき世を嘆きたまふ。ありしさまかたち、いと愛敬づき、をかしかりしけはひなどのいみじく恋しく悲しければ、うつつの世には、などかくしも思はれずのどかにて過ぐしけむ、ただ今はさらに思ひ静めむ方なきままに、悔しきことの数知らず、かかることの筋につけて、いみじうものすべき宿世なりけり、さま異に心ざしたりし身の、思ひの外にかく例の人にてながらふるを、仏などの憎しと見たまふにや、人の心を起こさせむとて、仏のしたまふ方便は、慈悲をも隠して、かやうにこそはあなれ、と思ひ続けたまひつつ、行ひをのみしたまふ。

かの宮、はたまして、二三日はものもおぼえたまはず、うつし心もなきさまにて、いかなる御もののけならむなど騒ぐに、やうやう涙尽くしたまひて、思し静まるにしもぞ、ありしさまは恋しういみじく思ひ出でられたまひける。人には、ただ御病の重きさまをのみ見せて、かくすぞろなるいやめのけしき知らせじと、かしこくもて隠すと思しけれど、おのづからいとしるかりければ、「いかなることにかく思し惑ひ、御命も危ふきまで沈みたまふらむ」と言ふ人もありければ、かの殿にも、いとよくこの御けしきを聞きたまふに、さればよなほよその文通はしのみにはあらぬなりけり、見たまひてはかならずさ思しぬべかりし人ぞかし、ながらへましかば、ただなるよりぞ、わがためにをこなることも出で来なましと思すになむ、焦がるる胸もすこし冷むる心地したまひける。

宮の御訪らひに、日々に参りたまはぬ人なく、世の騒ぎとなれるころ、こととしき際ならぬ思ひに籠もりゐて、参らざらむもひがみたるべしと思して参りたまふ。そのころ、式部卿宮と聞こゆるも亡せたまひにければ、御叔父の服にて薄鈍なるも、心のうちにあはれに思ひよそへられて、つきづきしく見ゆ。すこし面痩せて、いとどなまめかしきことまさりたまへり。人びとまかり出でて、しめやかなる夕暮なり。宮、臥し沈みてはなき御心地なれば、疎き人にこそ会ひたまはね、御簾の内にも例入りたまふ人には、対面したまはずもあらず。見えたまはむもあいなくつつまし、見たまふにつけても、いとど涙のまづせきがたさを思せど、思ひ静めて、「おどろおどろしき心地にもはべらぬを、皆人つつしむべき病のさまなりとのみものすれば、内にも宮にも思し騒ぐがいと苦しく、げに世の中の常なきをも、心細く思ひはべる」とのたまひて、おし拭ひ紛らはしたまふと思す涙の、やがてとどこほらずふり落つれば、いとはしたなけれど、かならずしもいかでか心得む、ただためしく心弱きとや見ゆらむと思

すも、さりや、ただこのことをのみ思すなりけり、いつよりなりけむ、我をいかにをかしともの笑ひしたまふ心地に、月ごろ思しわたりつらむと思ふに、この君は、悲しきは忘れたまへるを、こよなくもおろかなるかな、ものの切におぼゆる時は、いとかからぬことにつけてだに、空飛ぶ鳥の鳴き渡るにも、もよほされてこそ悲しけれ、わがかくすぞろに心弱きにつけても、もし心得たらむに、さ言ふばかりものあはれも知らぬ人にもあらず、世の中の常なきこと惜しみて思へる人しもつれなきと、うらやましくも心にくくも思さるものから、真木柱はあはれなり。これに向かひたらむさまも思しやるに、形見ぞかしともうちまもりたまふ。

やうやう世の物語聞こえたまふに、いと籠めてしもはあらじと思して、「昔より、心に籠めてしばしも聞こえさせぬこと残しはべる限りは、いといぶせくのみ思ひたまへられしを、今はなかなか上臈になりてはべり、まして御暇なき御ありさまにて、心のどかにおはします折もはべらねば、宿直などにそのこととなくてはえさぶらはず、そこはかとなくて過ぐしはべるをなむ。昔御覽ぜし山里に、はかなくて亡せはべりにし人の同じゆかりなる人、おぼえぬ所にはべりと聞きつけはべりて、時々きて見つべくやと思ひたまへしに、あいなく人の誹りもはべりぬべかりし折なりしかば、このあやしき所に置きてはべりしを、をさをさまかりて見ることもなく、またかれもながし一人をあひ頼む心もことになくてやありけむとは見たまへつれど、やむごとなくものしき筋に思ひたまへばこそあらめ、見るにはたことなる咎もはべらずなどして、心やすくらうたしと思ひたまへつる人の、いとはかなくて亡くなりはべりにける。なべて世のありさまを思ひたまへ続けはべるに、悲しくなむ。聞こし召すやうもはべらむかし」とて、今ぞ泣きたまふ。これも、いとかうは見えたてまつらじ、をこなりと思ひつれど、こぼれそめてはいと止めがたし。けしきのいささか乱

り顔なるを、あやしきいとほしと思せど、つれなくて、「いとあはれなることにこそ。昨日ほのかに聞きはべりき。いかにとも聞こゆべく思ひはべりながら、わざと人に聞かせたまはぬことと聞きはべりしかばなむ」と、つれなくのたまへど、いと堪へがたければ、言少なにておはします。「さる方にも御覽ぜさせばやと思ひたまへりし人になむ。おのづからさもやはべりけむ、宮にも参り通ふべきゆゑはべりしかば」など、すこしづつけしきばみて、「御心地例ならぬほどは、すぞろなる世のこと聞こし召し入れ、御耳おどろくもあいなきことになむ。よくつつしませおはしませ」など聞こえ置きて出でたまひぬ。

いみじくも思したりつるかな、いとほかなかりけれど、さすがに高き人の宿世なりけり、当時の帝、後のさばかりかしづきたてまつりたまふ親王、顔かたちよりはじめて、ただ今の世にはたぐひおはせざめり、見たまふ人とてもなめならず、さまざまにつけて限りなき人をおきて、これに御心を尽くし、世の人立ち騒ぎて、修法、読経、祭、祓と道々に騒ぐは、この人を思すゆかりの御心地のあやまりにこそはありけれ、我もかばかりの身にて、時の帝の御むすめを持ちたてまつりながら、この人のらうたくおぼゆる方は劣りやはしつる、まして今はおぼゆるには、心をのどめむ方なくもあるかな、さるはをこなり、かからじ、と思ひ忍ぶれど、さまざまに思ひ乱れて、「人木石に非ざれば皆情けあり」と、うち誦じて臥したまへり。後のしたためなどもいとほかなくしてけるを、宮にもいかが聞きたまふらむと、いとほしくあへなく、母のなほなほしくて、はらからあるはなど、さやうの人は言ふことあんなるを思ひて、こと削ぐなりけむかしなど心づきなく思す。おぼつかなさも限りなきを、ありけむさまもみづから聞かまほしと思せど、長籠もりしたまはむも便なし、行きと行きて立ち帰らむも心苦し、など思しわづらふ。

月たちて、今日ぞ渡らましと思し出でたまふ日の夕暮、いとものあはれなり。

御前近き橘の香のなつかしきに、ほととぎすの二声ばかり鳴きて渡る。「宿に通はば」と独りごちたまふも飽かねば、北の宮に、ここに渡りたまふ日なりければ、橘を折らせて聞こえたまふ。

忍び音や君も泣くらむかひもなき死出のたをさに心通はば

宮は、女君の御さまのいとよく似たるを、あはれと思して、二所眺めたまふ折なりけり。けしきある文かなと見たまひて、

橘の薫るあたりはほととぎす心してこそ鳴くべかりけれ

わづらはし。

と書きたまふ。

女君、このことのけしきは、皆見知りたまひてけり。あはれにあさましきはかなさの、さまさまにつけて心深きなかに、我一人もの思ひ知らねば、今までながらふるにや、それもいつまで、と心細く思す。宮も、隠れなきものから、隔てたまふもいと心苦しければ、ありしさまなど、すこしはとり直しつつ語りきこえたまふ。「隠したまひしがつらかりし」など、泣きみ笑ひみ聞こえたまふにも、異人よりは睦ましくあはれなり。ことごとしくうるはしくて、例ならぬ御ことのさまもおどろき惑ひたまふ所にては、御訪らひの人しげく、父大臣、せうとの君たち隙なきもいとうるさきに、ここはいと心やすく、なつかしくぞ思されける。

いと夢のやうにのみ、なほいかで、いとにはかなりけることにかはとのみいぶせければ、例の人びと召して、右近を迎へに遣はす。母君も、さらにこの水の音、けはひを聞くに、我もまろび入りぬべく、悲しく心憂きことのどまるべくもあらねば、いとわびしうて帰りたまひにけり。念仏の僧どもを頼もしき者にて、いとかすかなるに入り来たれば、ことごとしくにはかに立ちめぐりし宿直人どもも見とがめず。あやにくに限りのたびしも入れたてまつらずなりにし

よ、と思ひ出づるもいとほし。さるまじきことを思ほし焦がるることと見苦し
く見たてまつれど、ここに来ては、おはしましし夜な夜なのありさま、抱かれ
たてまつりたまひて舟に乗りたまひしけはひの、あてにうつくしかりしことな
どを思ひ出づるに、心強き人なくあはれなり。右近会ひて、いみじう泣くもこ
とわりなり。「かくのたまはせて、御使になむ参りつる」と言へば、「今さらに、
人もあやしと言ひ思はむもつつましく、参りてもはかばかしく聞こし召し明ら
むばかりもの聞こえさすべき心地もしはべらず。この御忌果てて、あからさま
にもなむと人に言ひなきむも、すこし似つかはしかりぬべきほどになしてこそ、
心より外の命はべらば、いささか思ひ静まらむ折になむ、仰せ言なくとも参り
て、げにいと夢のやうなりしことどもも、語りきこえまほしき」と言ひて、今
日は動くべくもあらず。

大夫も泣きて、「さらにこの御仲のこと、こまかに知りきこえさせはべらず。
物の心知りはべらずながら、たぐひなき御心ざしを見たてまつりはべりしかば、
君たちをも、何かは急ぎてしも聞こえ承らむ、つひには仕うまつるべきあたり
にこそと思ひたまへしを、言ふかひなく悲しき御ことの後は、私の御心ざしも
なかなか深さまさりてなむ」と語らふ。「わざと御車など思しめぐらして、奉
れたまへるを、空しくてはいといとほしうなむ。今一所にても参りたまへ」と
言へば、侍従の君呼び出でて、「さは、参りたまへ」と言へば、「まして何事を
かは聞こえさせむ。さてもなほこの御忌のほどには、いかでか。忌ませたまは
ぬか」と言へば、「悩ませたまふ御響きに、さまさまの御慎みどもはべめれど、
忌みあへさせたまふまじき御けしきになむ。また、かく深き御契りにては、籠
もらせたまひてもこそおはしまさめ、残りの日いくばくならず。なほ一所参り
たまへ」と責むれば、侍従ぞ、ありし御さまもいと恋しう思ひきこゆるに、い
かならむ世にかは見たてまつらむ、かかる折に、と思ひなして参りける。黒き

衣ども着て、引きつくろひたるかたちもいとよげなり。裳は、ただ今我より上なる人なきにうちたゆみて、色も変へざりければ、薄色なるを持たせて参る。おはせましかば、この道にぞ忍びて出でたまはまし、人知れず心寄せきこえしものを、など思ふにもあはれなり。道すがら泣く泣くなむ来ける。

宮は、この人参れりと聞こし召すもあはれなり。女君には、あまりうたてあれば、聞こえたまはず。寝殿におはしまして、渡殿に降ろしたまへり。ありけむさまなど詳しう問はせたまふに、日ごろ思し嘆きしさま、その夜泣きたまひしさま、「あやしきまで言少なに、おぼおぼとのみものしたまひて、いみじと思すことを人にうち出でたまふことは難く、ものづつみをのみしたまひしけにや、のたまひ置くこともはべらず。夢にもかく心強きさまに思しかくらむとは思ひたまへずなむはべりし」など、詳しう聞こゆれば、ましていといみじう、さるべきにても、ともかくもあらましよりも、いかばかりものを思ひ立ちて、さる水に溺れけむと思しやるに、これを見つけてせきとめたらましかばと、わきかへる心地したまへどかひなし。「御文を焼き失ひたまひしなどに、などで目を立てはべらざりけむ」など、一夜語らひたまふに、聞こえ明かす。かの巻数に書きつけたまへりし、母君の返り事などを聞こゆ。

何ばかりのものとも御覽ぜざりし人も、睦ましくあはれに思さるれば、「わがもとにあれかし。あなたももて離るべくやは」とのたまへば、「さてさぶらはむにつけても、もののみ悲しからむを思ひたまへれば、今この御果てなど過ぐして」と聞こゆ。「またも参れ」など、この人をさへ飽かず思す。暁帰るに、かの御料にとてまうけさせたまひける櫛の箱一よろい、衣箱一よろい、贈物にせさせたまふ。さまざまにせさせたまふことは多かりけれど、おどろおどろしかりぬべければ、ただこの人におほせたるほどなりけり。なに心もなく参りて、かかることどものあるを、人はいかが見む、すずろにむつかしきわざかなと思

ひわぶれど、いかがは聞こえ返さむ。右近と二人、忍びて見つつ、つれづれなるままに、こまかに今めかしうし集めたることどもを見ても、いみじう泣く。装束もいとうるはしうし集めたるものどもなれば、かかる御服に、これをばいかでか隠さむなど、もてわづらひける。

大将殿も、なほいとおぼつかなきに、思し余りておはしたり。道のほどより、昔の事どもかき集めつつ、いかなる契りにて、この父親王の御もとに來そめけむ、かかる思ひかけぬ果てまで思ひあつかひ、このゆかりにつけてはものをのみ思ふよ、いと尊くおはせしあたりに、仏をしるべにて、後の世をのみ契りしに、心きたなき末の違ひめに、思ひ知らするなめり、とぞおぼゆる。右近召し出でて、「ありけむさまもはかばかしう聞かず、なほ尽きせずあさましうはかなければ、忌の残りもすくなくなりぬ、過ぐしてと思ひつれど、静めあへずものしつるなり。いかなる心地にてか、はかなくなりたまひにし」と問ひたまふに、尼君などもけしきは見てければ、つひに聞きあはせたまはむを、なかなか隠してもこと違ひて聞こえむに、そこなはれぬべし、あやしきことの筋にこそ、そらごとと思ひめぐらしつつならひしか、かくまめやかなる御けしきにさし向かひきこえては、かねてと言はむかく言はむとまうけし言葉をも忘れ、わづらはしうおぼえければ、ありしさまのことどもを聞こえつ。

あさましう思しかけぬ筋なるに、物もとばかりのたまはず。さらにあらじとおぼゆるかな、なべての人の思ひ言ふことをも、こよなく言少なにおほどかなりし人は、いかでかさるおどろおどろしきことは思ひ立つべきぞ、いかなるさまに、この人びともてなして言ふにかと、御心も乱れまさりたまへど、宮も思し嘆きたるけしきとしるし、事のありさまも、しかつれなしづくりたらむけはひはおのづから見えぬべきを、かくおはしましたるにつけても悲しくいみじきことを、上下の人集ひて泣き騒ぐをと聞きたまへば、「御供に具して失せた

る人やある。なほありけむさまをたしかに言へ。我をおろかに思ひて背きたまふことはよもあらじとなむ思ふ。いかやうなる、たちまちに言ひ知らぬことありてか、さるわざはしたまはむ。我なむえ信ずまじき」とのたまへば、いとどしく、さればよとわづらはしくて、「おのづから聞こし召しけむ。もとより思すさまならで生ひ出でたまへりし人の、世離れたる御住まひの後は、いつとなくものをのみ思すめりしかど、たまさかにもかく渡りおはしますを、待ちきこえさせたまふに、もとよりの御身の嘆きをさへ慰めたまひつつ、心のどかなるさまにて時々も見たてまつらせたまふべきやうには、いつしかとのみ、言に出ではのたまはねど、思しわたるめりしを、その御本意かなふべきさまに承ることどもはべりしに、かくてさぶらふ人どもも、うれしきことに思ひたまへいそぎ、かの筑波山もからうして心ゆきたるけしきにて、渡らせたまはむことをいとなみ思ひたまへしに、心得ぬ御消息はべりけるに、この宿直仕うまつる者どもも、女房たちらうがはしかなりなど、戒め仰せらるることなど申して、ものの心得ず荒々しきは、田舎人どものあやしきさまにとりなしきこゆることどもはべりしを、その後久しう御消息などもはべらざりしに、心憂き身なりとのみ、いはけなかりしほどより思ひ知るを、人数にいかで見なさむとのみよろづに思ひ扱ひたまふ母君の、なかなかなることの人笑はれになりては、いかに思ひ嘆かむなどおもむけてなむ、常に嘆きたまひし。その筋よりほかに、何事をかと思ひたまへ寄るに、堪へはべらずなむ。鬼などの隠しきこゆとも、いささか残る所もはべるなるものを」とて、泣くさまもいみじければ、いかなることにかと紛れつる御心も失せて、せきあへたまはず。

「我は心に身をもまかせず、顕証なるさまにもてなされたるありさまなれば、おぼつかなしと思ふ折も、今近くて人の心置くまじく目やすきさまにもてなし、行く末長くをと思ひのどめつつ過ぐしつるを、おろかに見なしたまひつら

むこそ、なかなか分くる方ありけるとおぼゆれ。今はかくだに言はじと思へど、また人の聞かばこそあらめ、宮の御ことよ、いつよりありそめけむ。さやうなるにつけてや、いとかたはに人の心を惑はしたまふ宮なれば、常にあひ見たてまつらぬ嘆きに、身をも失ひたまへるとなむ思ふ。なほ言へ。我にはさらにな隠しそ」とのたまへば、たしかにこそは聞きたまひてけれといとほしくて、「いと心憂きことを聞こし召しけるにこそははべるなれ。右近もさぶらはぬ折ははべらぬものを」と眺めやすらひて、「おのづから聞こし召しけむ。この宮の上の御方に忍びて渡らせたまへりしを、あさましく思ひかけぬほどに入りおはしたりしかど、いみじきことを聞こえさせはべりて、出でさせたまひにき。それに懼ぢたまひて、かのあやしくはべりし所には渡らせたまへりしなり。その後、音にも聞こえじと思してやみにしを、いかでか聞かせたまひけむ、ただこの如月ばかりより、訪れきこえたまふべし。御文はいとたびたびはべりしかど、御覧じ入るることもはべらざりき。いとかたじけなくうたてあるやうになどぞ、右近など聞こえさせしかば、一たび二たびや聞こえさせたまひけむ。それより他のことは見たまへず」と聞こえさす。

かうぞ言はむかし、しひて問はむもいとほしくて、つくづくとうち眺めつつ、宮をめづらしくあはれと思ひきこえても、わが方をさすがにおろかに思はざりけるほどに、いと明らむるところなく、はかなげなりし心にて、この水の近きをたよりにて、思ひ寄るなりけむかし、わがここにさし放ち据ゑざらましかば、いみじく憂き世に経とも、いかでかかならず深き谷をも求め出でましと、いみじう憂き水の契りかなと、この川の疎ましう思さるることいと深し。年ごろ、あはれと思ひそめたりし方にて、荒き山路を歩き帰りしも、今はまた心憂くて、この里の名をだにえ聞くまじき心地したまふ。宮の上ののたまひ始めし、人形とつけそめたりしさへゆゆしう、ただわが過ちに失ひつる人なりと思ひもてゆ

くには、母のなほ軽びたるほどにて、後の後見もいとあやしくことそぎてしな
しけるなめりと心ゆかず思ひつるを、詳しう聞きたまふになむ、いかに思ふら
む、さばかりの人の子にてはいとめでたかりし人を、忍びたることはかならず
しもえ知らで、わがゆかりにいかなることのありけるならむとぞ思ふなるらむ
かしなど、よろづにいとほしく思す。穢らひといふことはあるまじけれど、御
供の人目もあれば、昇りたまはで、御車の榻を召して、妻戸の前にぞゐたまひ
けるも見苦しければ、いと茂き木の下に、苔を御座にてとばかり居たまへり。
今はここを来て見むことも心憂かるべし、とのみ見めぐらしたまひて、

我もまた憂き古里を荒れはてば誰れ宿り木の蔭をしのばむ

阿闍梨、今は律師なりけり。召して、この法事のことおきてさせたまふ。念
仏僧の数添へなどせさせたまふ。罪いと深かなるわざと思せば、軽むべきこと
をぞすべき、七七日に経仏供養すべきよしなどこまかにのたまひて、いと暗
うなりぬるに帰りたまふも、あらましかば今宵帰らましやはとのみなむ。尼君
に消息せさせたまへれど、「いともいともゆゆしき身をのみ思ひたまへ沈みて、
いとどものも思ひたまへられずほればべりてなむ、うつぶし臥してはべる」と
聞こえて出で来ねば、しひても立ち寄りたまはず。道すがら、とく迎へ取りた
まはずなりにけること悔しう、水の音の聞こゆる限りは心のみ騒ぎたまひて、
骸をだに尋ねず、あさましくてもやみぬるかな、いかなるさまにて、いづれの
底のうつせに混じりけむなど、やる方なく思す。

かの母君は、京に子産むべき娘のことによりつつしみ騒げば、例の家にもえ
行かず、すずろなる旅居のみして、思ひ慰む折もなきに、またこれもいかなら
むと思へど、平らかに産みてけり。ゆゆしければえ寄らず、残りの人びとの上
もおぼえずほれ惑ひて過ぐすに、大将殿より御使忍びてあり。ものおぼえぬ心
地にも、いとうれしくあはれなり。

あさましきことは、まづ聞こえむと思ひたまへしを、心ものどまらず、目もくらき心地して、まいていかなる闇にか惑はれたまふらむと、そのほどを過ぐしつるに、はかなくて日ごろも経にけることをなむ。世の常なさも、いとど思ひのどめむ方なくのみはべるを、思ひの外にもながらへば、過ぎにし名残とは、かならずさるべきことにも尋ねたまへ。

など、こまかに書きたまひて、御使には、かの大蔵の大夫をぞ賜へりける。「心のどかによろづを思ひつつ、年ごろにさへなりにけるほど、かならずしも心ざしあるやうには見たまはざりけむ。されど、今より後、何ごとにつけても、かならず忘れきこえじ。また、さやうにを人知れず思ひ置きたまへ。幼き人どももあなるを、おほやけに仕うまつらむにも、かならず後見思ふべくなむ」など、言葉にもたまへり。

いたくしも忌むまじき穢らひなれば、「深うしも触ればべらず」など言ひなして、せめて呼び据ゑたり。御返り泣く泣く書く。

いみじきことに死なればべらぬ命を心憂く思うたまへ嘆きはべるに、かかる仰せ言見はべるべかりけるにやとなむ。年ごろは心細きありさまを見たまへながら、それは数ならぬ身のおこたりに思ひたまへなしつつ、かたじけなき御一言を、行く末長く頼みきこえはべりしに、いふかひなく見たまへ果てては、里の契りもいと心憂く悲しくなむ。さまさまにうれしき仰せ言に命延びはべりて、今しばしながらへはべらば、なほ頼みきこえはべるべきにこそと思たまふるにつけても、目の前の涙にくれて、え聞こえさせやらずなむ。

など書きたり。御使に、なべての祿などは見苦しきほどなり、飽かぬ心地もすべければ、かの君にたてまつらむと心ざして持たりけるよき斑犀の帯、太刀のをかしきなど袋に入れて、車に乗るほど、「これは昔の人の御心ざしなり」と

て、贈らせてけり。殿に御覽ぜさすれば、「いとすぞろなるわぎかな」とのたまふ。言葉には、「みづから会ひはべりたうびて、いみじく泣く泣くよろづのことのたまひて、幼き者どものことまで仰せられたるがいともかしこきに、また数ならぬほどは、なかなかいと恥づかしう、人に何ゆゑなどは知らせはべらで、あやしきさまどもをも皆参らせはべりて、さぶらはせむとなむものしはべりつる」と聞こゆ。げにことなることなきゆかり睦びにぞあるべけれど、帝にもさばかりの人の娘たてまつらずやはある、それにさるべきにて、時めかし思さむは、人の譏るべきことかは、ただ人はた、あやしき女、世に古りにたるなごを持ちあるたぐひ多かり、かの守の娘なりけりと人の言ひなさむにも、わがもてなしの、それにけがるべくありそめたらばこそあらめ、一人の子をいたづらになして思ふらむ親の心に、なほこのゆかりこそおもだたしかりけれと思ひ知るばかり、用意はかならず見すべきことと思す。

かしこには、常陸守、立ちながら来て、「折しもかくてゐたまへることなむ」と腹立つ。年ごろ、いづくになむおはするなど、ありのままにも知らせざりければ、はかなきさまにておはすらむと思ひ言ひけるを、京になど迎へたまひて後、面目ありてなど知らせむと思ひけるほどに、かかれば、今は隠さむもあひなくて、ありしさま泣く泣く語る。大将殿の御文もとり出でて見すれば、よき人かしくくして、鄙びものめでする人にて、おどろき臆して、うち返しうち返し、「いとめでたき御幸ひを捨てて亡せたまひにける人かな。おのれも殿人にて参り仕うまつれども、近く召し使ふこともなく、いと気高く思はする殿なり。若き者どものこと仰せられたるは、頼もしきことになむ」など喜ぶを見るにも、ましておはせましかばと思ふに、臥しまろびて泣かる。守も、今なむうち泣きける。さるは、おはせし世には、なかなかかかるとたぐひの人しも、尋ねたまふべきにしもあらずかし。わが過ちにて失ひつるもいとほし、慰めむと思すより

なむ、人の譏りねむごろに尋ねじと思しける。

四十九日のわざなどせさせたまふにも、いかなりけむことにかはと思せば、とてもかくても罪得まじきことなれば、いと忍びて、かの律師の寺にてせさせたまひける。六十僧の布施など、大きにおきてられたり。母君も来ゐて、事ども添へたり。宮よりは、右近がもとに、白銀の壺に黄金入れて賜へり。人見とがむばかり大きなるわざはえしたまはず、右近が心ざしにてしたりければ、心知らぬ人は、「いかでかくなむ」など言ひける。殿の人ども、睦ましき限りあまた賜へり。「あやしく、音もせざりつる人の果てを、かく扱はせたまふ、誰れならむ」と、今おどろく人のみ多かるに、常陸守来て、あるじがり居るなむ、あやしと人びと見ける。少将の子産ませて、いかめしきことせさせむとまどひ、家の内になきものはすくなく、唐土、新羅の飾りをもしつべきに、限りあればいとあやしかりけり。この御法事の、忍びたるやうに思したれど、けはひこよなきを見るに、生きてらましかば、わが身を並ぶべくもあらぬ人の御宿世なりけりと思ふ。宮の上も誦経したまひ、七僧の前のことせさせたまひけり。今なむかかる人持たまへりけりと、帝までも聞こし召して、おろかにもあらざりける人を、宮にかしこまりきこえて隠し置きたまひたりける、いとほしと思しける。

二人の人の御心のうち、古りず悲しく、あやにくなりし御思ひの盛りにかき絶えては、いといみじければ、あだなる御心は、慰むやなどこころみたまふこともやうやうありけり。かの殿は、かくとりもちて何やかやと思して、残りの人を育ませたまひても、なほいふかひなきことを忘れがたく思す。

後の宮の、御軽服のほどはなほかくておはしますに、二の宮なむ式部卿になりたまひにける。重々しうて、常にしも参りたまはず。この宮は、さうざうしくものあはれなるままに、一品の宮の御方を慰め所にしたまふ。よき人のかた

ちをもえまほに見たまはぬ、残り多かり。大将殿の、からうしていと忍びて語らばせたまふ小宰相の君といふ人の、かたちなどもきよげなり、心ばせある方の人と思されたり。同じ琴を掻きならず爪音、撥音も人にはまさり、文を書き、ものうち言ひたるも、よしあるふしをなむ添へたりける。この宮も、年ごろいといたきものにしたまひて、例の言ひ破りたまへど、などかさしもめづらしげなくはあらむと、心強くねたきさまなるを、まめ人はすこし人よりことなりと思すになむありける。かくもの思したるも見知りければ、忍びあまりて聞こえたり。

あはれ知る心は人におくれねど数ならぬ身に消えつつぞ経る

代へたらば。

と、ゆるある紙に書きたり。ものあはれなる夕暮、しめやかなるほどを、いとよく推し量りて言ひたるも、憎からず。

「常なしとこら世を見る憂き身だに人の知るまで嘆きやはする

このよろこび、あはれなりし折からも、いとどなむ」など言ひに立ち寄りたまへり。いと恥づかしげにもものしげにて、なべてかやうになどもならしたまはぬ人からもやむごとなきに、いとものはかなき住まひなりかし、局などいひて狭くほどなき遣戸口に寄りゐたまへる、かたはらいたくおぼゆれど、さすがにあまり卑下してもあらで、いとよきほどにもものなども聞こゆ。見し人よりも、これは心にくきけ添ひてもあるかな、などでかく出で立ちけむ、さるものにて我も置いたらましもものを、と思す。人知れぬ筋は、かけても見せたまはず。

蓮の花の盛りに、御八講せらる。六条の院の御ため、紫の上など皆思し分けつつ、御経、仏など供養せさせたまひて、いかめしく尊くなむありける。五巻の日などはいみじき見物なりければ、こなたかなた、女房につきて参りて、物見る人多かりけり。

五日といふ朝座に果てて、御堂の飾り取りさけ、御しつらひ改むるに、北の廂も障子ども放ちたりしかば、皆入り立ちてつくろふほど、西の渡殿に姫宮おはしましけり。もの聞き極じて、女房もおのおの局にありつつ、御前はいと人少ななる夕暮に、大将殿直衣着替へて、今日まかづる僧の中に、かならずのたまふべきことあるにより、釣殿の方におはしたるに、皆まかでぬれば、池の方に涼みたまひて、人少ななるに、かくいふ宰相の君など、かりそめに几帳などばかり立てて、うちやすむ上局にしたり。ここにやあらむ、人の衣の音すと思して、馬道の方の障子の細く開きたるより、やをら見たまへば、例さやうの人のゐたるけはひには似ず、晴れ晴れしくしつらひたれば、なかなか几帳どもの立て違へたるあはひより見通されて、あらはなり。氷をもの蓋に置いて割るとて、もて騒ぐ人びと、大人三人ばかり、童と居たり。唐衣も汗衫も着ず、皆うちとけたれば、御前とは見たまはぬに、白き薄物の御衣着替へたまへる人の、手に氷を持ちながら、かく争ふをすこし笑みたまへる御顔、言はむ方なくうつくしげなり。いと暑さの堪へがたき日なれば、こちたき御髪の苦しう思さるるにやあらむ、すこしこなたに靡かして引かれたるほど、たとへむものなし。こらよき人を見集むれど、似るべくもあらざりけりとおぼゆ。御前なる人は、まことに土などの心地ぞするを、思ひ静めて見れば、黄なる生絹の単衣、薄色なる裳着たる人の、扇うち使ひたるなど、用意あらむはやと、ふと見えて、「なかなかもの扱ひに、いと苦しげなり。たださながら見たまへかし」とて、笑ひたるまみ愛敬づきたり。声聞くにぞ、この心ざしの人とは知りぬる。

心強く割りて、手ごとに持たり。頭にうち置き、胸にさし当てなど、さまあしうする人もあるべし。異人は紙につつみて、御前にもかくて参らせたれど、いとうつくしき御手をさしやりたまひて、拭はせたまふ。「いな、持たらじ。雫むつかし」とのたまふ御声いとほのかに聞くも、限りもなくうれし。まだい

と小さくおはしまししほどに、我もものの心も知らで見たてまつりし時、めでたの稚児の御さまやと見たてまつりし、その後、たえてこの御けはひをだに聞かざりつるものを、いかなる神仏のかかる折見せたまへるならむ、例のやすからずもの思はせむとするにやあらむと、かつは静心なくてまもり立ちたるほどに、こなたの対の北面に住みける下臈女房の、この障子はとみのことにてあけながら下りにけるを思ひ出でて、人もこそ見つけて騒がるれと思ひければ、惑ひ入る。この直衣姿を見つくるに、誰ならむと心騒ぎて、おのがさま見えむことも知らず、簀子よりただ来に来れば、ふと立ち去りて、誰れとも見えじ、好き好きしきやうなりと思ひて隠れたまひぬ。

この御許は、いみじきわざかな、御几帳をさへあらはに引きなしてけるよ、右の大殿の君たちならむ、疎き人、はたここまで来べきにもあらず、ものの聞こえあらば、誰れか障子は開けたりしとかならず出で来なむ、単衣も袴も生絹なめりと見えつる人の御姿なれば、え人も聞きつけたまはぬならむかし、と思ひ極じてをり。かの人、やうやう聖になりし心を、ひとふし違へそめて、さまざまなるもの思ふ人ともなるかな、そのかみ世を背きなましかば、今は深き山に住み果てて、かく心乱れましやは、など思し続けるもやすからず。などて年ごろ見たてまつらばやと思ひつらむ、なかなか苦しうかひなかるべきわざにこそ、と思ふ。

つとめて、起きたまへる女宮の御かたち、いとをかしげなめるは、これよりかならずまさるべきことかは、と見えながら、さらに似たまはずこそありければ、あさましきまであてにえも言はざりし御さまかな、かたへは思ひなしか、折からかと思して、「いと暑しや。これより薄き御衣奉れ。女は、例ならぬ物着たるこそ、時々につけてをかしけれ」とて、「あなたに参りて、大式に薄物の単衣の御衣縫ひて参れと言へ」とのたまふ。御前なる人は、この御かたちのいみ

じき盛りにおはしますを、もてはやしきこえたまふ、とをかしう思へり。

例の、念誦したまふわが御方におはしましなどして、昼つ方渡りたまへれば、のたまひつる御衣、御几帳にうち掛けたり。「なぞ、こは奉らぬ。人多く見る時なむ、透きたる物着るはばうぞくにおぼゆる。ただ今はあへはべりなむ」とて、手づから着せ奉りたまふ。御袴も昨日の同じ紅なり。御髪の多さ、裾などは劣りたまはねど、なほさまざまなるにや、似るべくもあらず。氷召して、人びとに割らせたまふ。取りて一つ奉りなどしたまふ心のうちもをかし。絵にかきて、恋しき人見る人はなくやありける、ましてこれは、慰めむに似げなからぬ御ほどぞかしと思へど、昨日かやうにて、我混じりる、心にまかせて見たてまつらましかばとおぼゆるに、心にもあらずうち嘆かれぬ。「一品の宮に御文は奉りたまふや」と聞こえたまへば、「内にありし時、上のさのたまひしかば聞こえしかど、久しうさもあらず」とのたまふ。「ただ人にならせたまひにたりとて、かれよりも聞こえさせたまはぬにこそは、心憂かなれ。今大宮の御前にて、恨みきこえさせたまふと啓せむ」とのたまふ。「いかが恨みきこえむ。うたて」とのたまへば、「下種になりたりとて、思し落とすなめりと見れば、おどろかしきこえぬとこそは聞こえぬ」とのたまふ。

その日は暮らして、またのあしたに大宮に参りたまふ。例の、宮もおはしけり。丁子に深く染めたる薄物の単衣をこまやかなる直衣に着たまへる、いとこのましげなる女の御身なりのめでたかりしにも劣らず、白くきよらにて、なほありしよりは面瘦せたまへる、いと見るかひあり。おぼえたまへりと見るにも、まづ恋しきを、いとあるまじきことと静むるぞ、ただなりしよりは苦しき。絵をいと多く持たせて参りたまへりける、女房してあなたに参らせたまひて、渡らせたまひぬ。

大将も近く参り寄りたまひて、御八講の尊くはべりしこと、いにしへの御こ

と、すこし聞こえつつ、残りたる絵見たまふついでに、「この里にもしたまふ御子の、雲の上離れて思ひ屈したまへるこそ、いとほしう見たまふれ。姫宮の御方より御消息もはべらぬを、かく品定まりたまへるに思し捨てさせたまへるやうに思ひて、心ゆかぬけしきのみはべるを、かやうのもの、時々ものせさせたまはなむ。なにがしがおろして持てまからむ、はた見るかひもはべらじかし」とのたまへば、「あやしう。なごてか捨てきこえたまはむ。内にては、近かりしにつきて、時々も聞こえたまふめりしを、所々になりたまひし折に、とだえたまへるにこそあらめ。今そそのかしきこえむ。それよりもなかは」と聞こえたまふ。「かれよりはいかでかは。もとより数まへさせたまはざらむをも、かく親しくてさぶらふべきゆかりに寄せて、思し召し数まへさせたまはむをこそ、うれしくははべるべけれ。ましてさも聞こえ馴れたまひにけむを、今捨てさせたまはむは、からきことにはべり」と啓せさせたまふを、好きばみたるけしきあるかとは、思しかげざりけり。

立ち出でて、一夜の心ざしの人に会はむ、ありし渡殿も慰めに見むかしと思して、御前を歩み渡りて、西ぎまにおはするを、御簾の内の人には心ことに用意す。げにいと様よく限りなきもてなしにて、渡殿の方は、左の大殿の君たちなど居て、物言ふけはひすれば、妻戸の前に居たまひて、「おほかたには参りながら、この御方の見参に入ることの難くはべれば、いとおぼえなく翁び果てにたる心地しはべるを、今よりはと思ひ起こしはべりてなむ。ありつかず、若き人どもぞ思ふらむかし」と、甥の君たちの方を見やりたまふ。「今よりならはせたまふこそ、げに若くならせたまふならめ」など、はかなきことを言ふ人びとのけはひも、あやしうみやびかにをかしき御方のありさまにぞある。そのこととなけれど、世の中の物語などしつつ、しめやかに、例よりは居たまへり。

姫宮は、あなたに渡らせたまひにけり。大宮、「大将のそなたに参りつるは」

と問ひたまふ。御供に参りたる大納言の君、「小宰相の君に、ものたまはむとにこそははべめりつれ」と聞こゆるに、「まめ人のさすがに人に心とどめて物語するこそ、心地おくれたらむ人は苦しけれ。心のほども見ゆらむかし。小宰相などはいとうしろやすし」とのたまひて、御はらからなれど、この君をばなほ恥づかしく、人も用意なくて見えざらむかしと思いたり。「人よりは心寄せたまひて、局などに立ち寄りたまふべし。物語こまやかにしたまひて、夜更けて出でたまふ折々もはべれど、例の目馴れたる筋にははべらぬにや。宮をこそ、いと情けなくおはしますと思ひて、御いらへをだに聞こえずはべるめれ。かたじけなきこと」と言ひて笑へば、宮も笑はせたまひて、「いと見苦しき御さまを、思ひ知るこそをかしけれ。いかでかかる御癖やめたてまつらむ。恥づかしや、この人びとも」とのたまふ。

「いとあやしきことをこそ聞きはべりしか。この大将の亡くなしたまひてし人は、宮の御二条の北の方の御おとうとなりけり。異腹なるべし。常陸の前の守なにかしが妻は、叔母とも母とも言ひはべるなるは、いかなるにか。その女君に、宮こそいと忍びておはしましたけれ。大将殿や聞きつけたまひたりけむ、にはかに迎へたまはむとて、守り目添へなど、ことごとしくしたまひけるほどに、宮もいと忍びておはしましたながら、え入らせたまはず、あやしきさまに御馬ながら立たせたまひつつぞ帰らせたまひける。女も宮を思ひきこえさせけるにや、にはかに消え失せにけるを、身投げたるなめりとてこそ、乳母などやうの人どもは、泣き惑ひはべりけれ」と聞こゆ。宮もいとあさましと思ひて、「誰れか、さることは言ふとよ。いとほしく心憂きことかな。さばかりめづらかならむことは、おのづから聞こえありぬべきを。大将もさやうには言はで、世の中のはかなくいみじきこと、かく宇治の宮の族の命短かりけることをこそ、いみじう悲しと思ひてのたまひしか」とのたまふ。「いさや、下種はたしかな

らぬことを言ひはべるものと思ひはべれど、かしこにはべりける下童の、ただこのころ、宰相が里に出でまうできて、たしかなるやうにこそ言ひはべりけれ。かくあやしうて亡せたまへること、人に聞かせじ、おどろおどろしくおぞきやうなりとて、いみじく隠しけることどもとて、さて詳しくは聞かせたてまつらぬにやありけむ」と聞こゆれば、「さらにかかること、またまねぶなど言はせよ。かかる筋に、御身をもてそなひ、人に軽く心づきなきものに思はれぬべきなめり」といみじう思いたり。

その後、姫宮の御方より、二の宮に御消息ありけり。御手などのいみじうつくしげなるを見るにもいとうれしく、かくてこそとく見るべかりけれと思す。あまたをかしき絵ども多く、大宮もたてまつらせたまへり。大将殿、うちまさりてをかしきども集めて、参らせたまふ。芹川の大將の遠君の、女一の宮思ひかけたる秋の夕暮に、思ひわびて出でて行きたるかたをかしうかきたるを、いとよく思ひ寄せらるかし。かばかり思し靡く人のあらましかば、と思ふ身ぞ口惜しき。

萩の葉に露吹き結ぶ秋風も夕べぞわきて身にはしみける

と書いても添へまほしく思せど、さやうなるつゆばかりのけしきにても漏りたらば、いとわづらはしげなる世なれば、はかなきことも、えほのめかし出づまじ、かくよろづに何やかやものを思ひの果ては、昔の人のものしたまはましかば、いかにもいかにも他ざまに心分けましや、時の帝の御むすめを賜ふとも、得たてまつらざらまし、また、さ思ふ人ありと聞こし召しながらは、かかることもなからましを、なほ心憂く、わが心乱りたまひける橋姫かなと思ひあまりては、また宮の上にとりかかりて、恋しうもつらくも、わりなきことぞをこがましきまで悔しき。これに思ひわびてさしつぎには、あさましくて亡せにし人の、いと心幼く、とどこほるところなかりける軽々しさをば思ひながら、さす

がにいみじとものを思ひ入りけむほど、わがけしき例ならずと、心の鬼に嘆き沈みてゐたりけむありさまを聞きたまひしも、思ひ出でられつつ、重りかなる方ならで、ただ心やすくらうたき語らひ人にてあらせむと思ひしには、いとらうたかりし人を、思ひもていけば、宮をも思ひきこえじ、女をも憂しと思はじ、ただわがありさまの世づかぬおこたりぞ、など眺め入りたまふ時々多かり。

心のどかにさまよくおはする人だに、かかる筋には身も苦しきことおのづから混じるを、宮はまして慰めかねつつ、かの形見に、飽かぬ悲しさをものたまひ出づべき人さへなきを、対の御方ばかりこそは、あはれなどのたまへど、深くも見馴れたまはざりけるうちつけの睦びなれば、いと深くしもいかでかはあらむ、また思すままに、恋しやいみじやなどのたまはむには、かたはらいたければ、かしこにありし侍従をぞ、例の、迎へさせたまひける。皆人どもは行き散りて、乳母とこの人二人なむ、取り分きて思したりしも忘れがたくて、侍従はよそ人なれど、なほ語らひてあり経るに、世づかぬ川の音も、うれしき瀬もやあると頼みしほどこそ慰めけれ、心憂くいみじくもの恐ろしくのみおぼえて、京になむ、あやしき所に、このころ来てゐたりける、尋ねたまひて、「かくてさぶらへ」とのたまへば、御心はさるものにて、人びとの言はむことも、さる筋のこと混じりぬるあたりは聞きにくきこともあらむと思へば、うけひききこえず、後の宮に参らむとなむおもむけたれば、「いとよかなり。さて人知れず思し使はむ」とのたまはせけり。心細くよるべなきも慰むやとて、知るたより求め参りぬ。きたなげなくてよろしき下臈なりと許して、人もそしらず。大将殿も常に参りたまふを、見るたびごとに、もののみあはれなり。いとやむごとなきものの姫君のみ参り集ひたる宮と人も言ふを、やうやう目とどめて見れど、見たてまつりし人に似たるはなかりけりと思ひありく。

この春亡せたまひぬる式部卿宮の御むすめを、継母の北の方ことにあひ思は

で、せうとの馬の頭にて人柄もことなることなき心懸けたるを、いとほしうなども思ひたらで、さるべきさまになむ契ると聞こし召すたよりありて、「いとほしう、父宮のいみじくかしづきたまひける女君を、いたづらなるやうにもてなさむこと」などのたまはせければ、いと心細くのみ思ひ嘆きたまふありさまにて、「なつかしう、かく尋ねのたまはするを」など御せうとの侍従も言ひて、このころ迎へ取らせたまひてけり。姫宮の御具にて、いとこよなからぬ御ほどの人なれば、やむごとなく心ことにてさぶらひたまふ。限りあれば、宮の君などうち言ひて、裳ばかりひきかけたまふぞ、いとあはれなりける。

兵部卿宮、この君ばかりや、恋しき人に思ひよそへつべきさましたらむ、父親王ははらからぞかしなど、例の御心は、人を恋ひたまふにつけても、人ゆかしき御癖やまで、いつしかと御心かけたまひてけり。大将、もどかしきまでもあるわざかな、昨日今日といふばかり、春宮にやなど思し、我にもけしきばませたまひきかし、かくはかなき世の衰へを見るには、水の底に身を沈めても、もどかしからぬわざにこそ、など思ひつつ、人よりは心寄せきこえたまへり。

この院におはしますをば、内よりも広くおもしろく住みよきものにして、常にしもさぶらはぬどもも、皆うちとけ住みつつ、はるばると多かる対ども、廊、渡殿に満ちたり。左大臣殿、昔の御けはひにも劣らず、すべて限りもなく営み仕うまつりたまふ。いかめしうなりたる御族なれば、なかなかいにしへよりも今めかしきことはまさりてさへなむありける。この宮、例の御心ならば、月ごろのほどにいかなる好きごとどもをし出でたまはまし、こよなく静まりたまひて、人目にすこし生ひ直りたまふかなと見ゆるを、このころぞまた、宮の君に本性現はれてかかづらひありきたまひける。

涼しくなりぬとて、宮、内に参らせたまひなむとすれば、秋の盛り、紅葉のころを見ざらむこそなど、若き人びとは口惜しがりて、皆参り集ひたるころな

り。水に馴れ月をめでて御遊び絶えず、常よりも今めかしければ、この宮ぞ、かかる筋はいとこよなくもてはやしたまふ。朝夕目馴れても、なほ今見む初花のさましたまへるに、大将の君は、いとさしも入り立ちなどしたまはぬほどにて、恥づかしう心ゆるびなきものに皆思ひたり。例の、二所参りたまひて、御前におはするほどに、かの侍従はものより覗きたてまつるに、いづ方にもいづ方にもよりて、めでたき御宿世見えたるさまにて、世にぞおはせましかし、あさましくはかなく心憂かりける御心かな、など、人にはそのわたりのことかけて知り顔にも言はぬことなれば、心一つに飽かず胸いたく思ふ。宮は、内の御物語などこまやかに聞こえさせたまへば、いま一所は立ち出でたまふ。見つけられたてまつらじ、しばし、御果てをも過ぐさず心浅しと見えたてまつらじ、と思へば隠れぬ。

東の渡殿にあきあひたる戸口に人びとあまたみて、物語などする所におはして、「なにがしをぞ、女房は睦ましと思すべき。女だにかく心やすくはよもあらじかし。さすがにさるべからむこと、教へきこえぬべくもあり。やうやう見知りたまふべかめれば、いとなむうれしき」とのたまへば、いといらへにくくのみ思ふ中に、弁の御許とて馴れたる大人、「そも睦ましく思ひきこゆべきゆゑなき人の、恥ぢきこえはべらぬにや。ものはさこそはなかなかはべるめれ。かならずそのゆゑ尋ねて、うちとけ御覧ぜらるるにしもはべらねど、かばかり面無くつくりそめてける身に負はさざらむも、かたはらいたくてなむ」と聞こゆれば、「恥づべきゆゑあらじと思ひ定めたまひてけるこそ口惜しけれ」などのたまひつつ見れば、唐衣は脱ぎすべし押しやり、うちとけて手習しけるなるべし、硯の蓋に据ゑて、心もとなき花の末手折りて、弄びけりと見ゆ。かたへは几帳のあるにすべり隠れ、あるはうち背き、押しあけたる戸の方に、紛らはしつつある、頭つきどもをかすと見わたしたまひて、硯ひき寄せて、

女郎花乱るる野辺に混じるとも露のあだ名を我にかけめや

心やすくは思さで。

と、ただこの障子にうしろしたる人に見せたまへば、うちみじろきなどもせずのどやかにいとく、

花といへば名こそあだなれ女郎花なべての露に乱れやはする

と書きたる手、ただかたそばなれどよしづきて、おほかためやすければ、誰ならむと見たまふ。今参う上りける道に、塞げられてとどこほりゐたるなるべしと見ゆ。弁の御許は、「いとけぎやかなる翁言、憎くはべり」とて、

「旅寝してなほこころみよ女郎花盛りの色に移り移らず

さて後定めきこえさせむ」と言へば、

宿貸さば一夜は寝なむおほかたの花に移らぬ心なりとも

とあれば、「何か、恥づかしめさせたまふ。おほかたの野辺のさかしらをこそ聞こえさすれ」と言ふ。はかなきことをただすこしのたまふも、人は残り聞かまほしくのみ思ひきこえたり。「心なし。道あけはべりなむよ。分けても、かの御もの恥ぢのゆゑ、かならずありぬべき折にぞあめる」とて、立ち出でたまへば、おしなべてかく残りなからむと思ひやりたまふこそ心憂けれ、と思へる人もあり。

東の高欄に押しかかりて、夕影になるままに、花の紐解く御前の草むらを見わたしたまふ。もののみあはれなるに、「中に就いて腸断ゆるは秋の天」といふことを、いと忍びやかに誦じつつゐたまへり。ありつる衣の音なひしるきはひして、母屋の御障子より通りて、あなたに入るなり。宮の歩みおはして、「これよりあなたに参りつるは、誰そ」と問ひたまへば、「かの御方の中將の君」と聞こゆなり。なほあやしのわざや、誰れにかと、かりそめにもうち思ふ人に、やがてかくゆかしげなく聞こゆる名ざしよといとほしく、この宮には、

皆目馴れてのみおぼえたてまつるべかめるも口惜し、おりたちてあながちなる御もてなしに、女はさもこそ負けたてまつらめ、わがさも口惜しう、この御ゆかりには、ねたく心憂くのみあるかな、いかでこのわたりにもめづらしからむ人の、例の心入れて騒ぎたまはむを語らひ取りて、わが思ひしやうに、やすからずとだにも思はせたてまつらむ、まことに心ばせあらむ人は、わが方にぞ寄るべきや、されど難いものかな、人の心は、と思ふにつけて、対の御方の、かの御ありさまをば、ふさはしからぬものに思ひきこえて、いと便なき睦びになりゆくが、おほかたのおぼえをば苦しと思ひながら、なほさし放ちがたきものに思し知りたるぞ、ありがたくあはれなりける。さやうなる心ばせある人、ここの中であらむや、入りたちて深く見ねば知らぬぞかし、寢覚がちにつれづれなるを、すこしは好きもならばばや、など思ふに、今はなほつきなし。

例の、西の渡殿を、ありしにならひてわざとおはしたるもあやし。姫宮、夜はあなたに渡らせたまひければ、人びと月見るとて、この渡殿にうちとけて物語するほどなりけり。箏の琴いとなつかしう弾きすさむ爪音をかしう聞こゆ。思ひかけぬに寄りおはして、「などかくねたまし顔にかき鳴らしたまふ」とのたまふに、皆おどろかるべけれど、すこし上げたる簾うち下ろしなどもせず、起き上がりて、「似るべきこのかみやかはべるべき」といらふる声、中将の御許とか言ひつるなりけり。「まろこそ御母方の叔父なれ」とはかなきことをのたまひて、「例の、あなたにおはしますべかめりな。何わざをかこの御里住みのほどにせさせたまふ」など、あぢきなく問ひたまふ。「いづくにても、何事をかは。ただかやうにてこそは過ぐさせたまふめれ」と言ふに、をかしの御身のほどやと思ふに、すずろなる嘆きのうち忘れてしつるも、あやしと思ひ寄る人もこそと紛らはしに、さし出でたる和琴を、たださながら掻き鳴らしたまふ。律の調べは、あやしく折にあふと聞く声なれば、聞きにくくもあらねど、弾き

果てたまはぬを、なかなかなりと心入れたる人は消えかへり思ふ。わが母宮も劣りたまふべき人かは、后腹と聞こゆばかりの隔てこそあれ、帝々の思しかしづきたるさま、異事ならざりけるを、なほこの御あたりはいとことなりけるこそあやしけれ、明石の浦は心にくかりける所かな、など思ひ続くることどもに、わが宿世はいとやむごとなしかし、まして並べて持ちたてまつらばと思ふぞいと難きや。

宮の君は、この西の対にぞ御方したりける。若き人びとのけはひあまたして、月めであへり。いであはれ、これもまた同じ人ぞかし、と思ひ出できこえて、親王の、昔心寄せたまひしものをと言ひなして、そなたへおはしぬ。童のをかしき宿直姿にて、二三人出でて歩きなどしけり。見つけて入るさまもかかやかし。これぞ世の常と思ふ。南面の隅の間に寄りてうち声づくりたまへば、すこしおとなびたる人出で来たり。「人知れぬ心寄せなど聞こえさせはべれば、なかなか皆人聞こえさせふるしつらむことを、うひうひしきさまにて、まねぶやうになりはべり。まめやかになむ、言より外を求められはべる」とのたまへば、君にも言ひ伝へず、さかしだちて、「いと思ほしかけざりし御ありさまにつけても、故宮の思ひきこえさせたまへりしことなど、思ひたまへ出でられてなむ。かくのみ、折々聞こえさせたまふなる、御後言をも、よろこびきこえたまふめる」と言ふ。なみなみの人めきて心地なのさまやともの憂ければ、「もとより思し捨つまじき筋よりも、今はまして、さるべきことにつけても、思ほし尋ねむなむうれしかるべき。疎々しう、人伝てなどにもてなさせたまはば、えこそ」とのたまふに、げにと思ひ騒ぎて、君をひきゆるがすめれば、「松も昔の、とのみ眺めらるるにも、もとよりなどのたまふ筋は、まめやかに頼もうこそは」と人伝てともなく言ひなしたまへる声、いと若やかに愛敬づき、やさしきところ添ひたり。ただ、なべてのかかる住みかの人と思はば、いとをか

しかるべきを、ただ今は、いかでかばかりも人に声聞かすべきものとならひたまひけむ、となまうしろめたし。かたちもいとなまめかしからむかしと、見まほしきけはひのしたるを、この人ぞ、また例の、かの御心乱るべきつまなめると、をかしようもありがたの世や、と思ひるたまへり。

これこそは、限りなき人のかしづき生ほしたたまへる姫君、またかばかりぞ多くはあるべき、あやしかりけることは、さる聖の御あたりに、山のふところより出で来たる人びとの、かたほなるはなかりけるこそ、このはかなしや軽々しや、など思ひなす人も、かやうのうち見るけしきは、いみじうこそをかしかりしか、と何事につけても、ただかの一つゆかりをぞ思ひ出でたまひける。あやしうつらかりける契りどもを、つくづくと思ひ続け眺めたまふ夕暮、蜻蛉のものはかなげに飛びちがふを、

「ありと見て手にはとられず見ればまた行方も知らず消えし蜻蛉あるかなきかの」と、例の、独りごちたまふとかや。

手
習

そのころ横川に、なにがし僧都とか言ひて、いと尊き人住みけり。八十余りの母、五十ばかりの妹ありけり。古き願ありて、初瀬に詣でたりけり。睦まじうやむごとなく思ふ弟子の阿闍梨を添へて、仏経供養すること行ひけり。事ども多くして帰る道に、奈良坂と言ふ山越えけるほどより、この母の尼君、心地悪しうしければ、かくては、いかでか残りの道をもおはし着かむともて騒ぎて、宇治のわたりに知りたりける人の家ありけるにとどめて、今日ばかり休めたてまつるに、なほいたうわづらへば、横川に消息したり。山籠もりの本意深く、今年はお出でじと思ひけれど、限りのさまなる親の、道の空にて亡くやならむと驚きて、急ぎものしたまへり。惜しむべくもあらぬ人ざまを、みづからも、弟子の中にも験あるして加持し騒ぐを、家あるじ聞きて、「御獄精進しけるを、いたう老いたまへる人の重く悩みたまふは、いかが」とうしろめたげに思ひて言ひければ、さも言ふべきことぞ、いとほしう思ひて、いと狭くむつかしうもあれば、やうやう率てたてまつるべきに、中神塞がりて、例住みたまふ方は忌むべかりければ、故朱雀院の御領にて宇治の院と言ひし所、このわたりならむと思ひ出でて、院守、僧都知りたまへりければ、一二日宿らむと言ひにやりたまへりければ、「初瀬になむ、昨日皆詣りにける」とて、いとあやしき宿守の翁を呼びて率て来たり。「おはしまさば、はや。いたづらなる院の寢殿にこそはべるめれ。物語での人は常にぞ宿りたまふ」と言へば、「いとよかなり。公所なれど、人もなく心やすきを」とて、見せにやりたまふ。この翁、例もかく宿る人を見ならひたりければ、おろそかなるしつらひなどして来たり。

まづ僧都渡りたまふ。いといたく荒れて、恐ろしげなる所かなと見たまふ。「大徳たち、経読め」などのたまふ。この初瀬に添ひたりし阿闍梨と、同じやうなる、何事のあるにか、つきづきしきほどの下臈法師に火ともさせて、人も寄らぬうしろの方に行きたり。森かと思ゆる木の下を、疎ましげのわたりやと

見入れたるに、白き物の広がりたるぞ見ゆる。「かれは何ぞ」と立ち止まりて、火を明くなくて見れば、物の居たる姿なり。「狐の変化したる。憎し。見現はさむ」とて、一人は今すこし歩み寄る、今一人は、「あな用な。よからぬ物ならむ」と言ひて、さやうの物退くべき印を作りつつ、さすがになほまもる。頭の髪あらば太りぬべき心地するに、この火ともしたる大徳、憚りもなく奥なきさまにて近く寄りてそのさまを見れば、髪は長くつやつやとして、大きな木のいと荒々しきに寄りゐて、いみじう泣く。「珍しきことにはべるかな。僧都の御坊に御覽ぜさせたまつらばや」と言へば、げに妖しき事なりとて、一人はまうでて、かかることなむと申す。「狐の人に変化するとは昔より聞けど、まだ見ぬものなり」とて、わざと下りておはす。

かの渡りたまはむとすることによりて、下衆ども皆はかばかしきは、御厨子所などあるべかしきことどもを、かかるわたりには急ぐものなりければ、る静まりなどしたるに、ただ四五人してここなる物を見るに、変はることもなし。あやしうて、時の移るまで見る。疾く夜も明け果てなむ、人か何ぞと見現はさむ、と心にさるべき真言を読み、印を作りて試みるに、しるくや思ふらむ、「これは人なり。さらに非常のけしからぬ物にあらず。寄りて問へ。亡くなりたる人にはあらぬにこそあめれ。もし死にたりける人を捨てたりけるが、蘇りたるか」と言ふ。「何のさる人をか、この院の内に捨てはべらむ。たとひ真人なりとも、狐、木霊やうの物の、欺きて取りもて来たるにこそはべらめ、と不便にもはべりけるかな。穢らひあるべき所にこそはべめれ」と言ひて、ありつる宿守の男を呼ぶ。山彦の答ふるもいと恐ろし。

あやしのさまに額おし上げて出で来たり。「ここには若き女などや住みたまふ。かかることなむある」とて見すれば、「狐の仕うまつるなり。この木のもとになむ、時々妖しきわざなむしはべる。おとしの秋も、ここにはべる人の

子の、二つばかりにはべしを取りてまうで来たりしかど、見驚かずはべりき、「さてその稚児は死にやしにし」と言へば、「生きてはべり。狐は、さこそは人を脅かせど、ことにもあらぬ奴」と言ふさま、いと馴れたり。かの夜深き参りものの所に、心を寄せたるなるべし。僧都、「さらば、さやうの物のしたるわざか、なほよく見よ」とて、このもの懼ぢせぬ法師を寄せたれば、「鬼か神か狐か木霊か。かばかりの天の下の験者のおはしますには、え隠れたてまつらじ。名のりたまへ名のりたまへ」と、衣を取りて引けば、顔をひき入れていよいよ泣く。「いで、あなさがなの木霊の鬼や。まさに隠れなむや」と言ひつつ、顔を見むとするに、昔ありけむ目も鼻もなかりける女鬼にやあらむとむくつきを、頼もしいかきさまを人に見せむと思ひて、衣を引き脱がせむとすれば、うつ臥して声立つばかり泣く。何にまれ、かく妖しきこと、なべて世にあらじとて、見果てむと思ふに、雨いたく降りぬべし。「かくて置いたらば、死に果てはべりぬべし。垣の下にこそ出ださめ」と言ふ。僧都、「まことの人の形なり。その命絶えぬを見る見る捨てむこと、いといみじきことなり。池に泳ぐ魚、山に鳴く鹿をだに、人に捕へられて死なむとするを見て助けざらむは、いと悲しかるべし。人の命久しかるまじきものなれど、残りの命一二日をも惜しまずはあるべからず。鬼にも神にも領ぜられ、人に逐はれ、人に謀りごたれても、これ横様の死にをすべきものにこそあんめれ、仏のかならず救ひたまふべき際なり。なほ試みに、しばし湯を飲ませなどして助け試みむ。つひに死なば、言ふ限りにあらず」とのたまひて、この大徳して抱き入れさせたまふを、弟子ども、「たいだいしきわざかな。いたうわづらひたまふ人の御あたりに、よからぬ物を取り入れて、穢らひかならず出で来なむとす」と、もどくもあり。また、「物の変化にもあれ、目に見す見す生ける人を、かかる雨にうち失はせむは、いみじきことなれば」など、心々に言ふ。下衆などは、いと騒がしく、物をう

たて言ひなすものなれば、人騒がしからぬ隠れの方になむ臥せたりける。

御車寄せて降りたまふほどいたう苦しがりたまふとてののしる。すこし静まりて、僧都、「ありつる人、いかがなりぬる」と問ひたまふ。「なよなよとしてもの言はず、息もしはべらず。何か、物にけどられにける人にこそ」と言ふを、妹の尼君聞きたまひて、「何事ぞ」と問ふ。「しかしかのことなむ、六十に余る年、珍かなるものを見たまへつる」とのたまふ。うち聞くままに、「おのが寺にて見し夢ありき。いかやうなる人ぞ。まづそのさま見む」と泣きてのたまふ。「ただこの東の遣戸になむはべる。はや御覧ぜよ」と言へば、急ぎ行きて見るに、人も寄りつかでぞ捨て置きたりける。いと若うつくしげなる女の、白き綾の衣一襲、紅の袴ぞ着たる、香はいみじう香うばしくて、あてなるけはひ限りなし。「ただわが恋ひ悲しむ娘の帰りおはしたるなめり」とて、泣く泣く御達を出だして、抱き入れさす。いかなりつらむともありさま見ぬ人は、恐ろしからで抱き入れつ。生けるやうにもあらで、さすがに目をほのかに見開けたるに、「ものたまへや。いかなる人か、かくてはものしたまへる」と言へど、ものおぼえぬさまなり。湯取りて手づからすくひ入れなどするに、ただ弱りに絶え入るやうなりければ、「なかなかいみじきわざかな」とて、「この人亡くなりぬべし。加持したまへ」と験者の阿闍梨に言ふ。「さればこそ。あやしき御もの扱ひ」とは言へど、神などのために経読みつつ祈る。

僧都もさしのぞきて、「いかにぞ。何のしわざぞと、よく調べて問へ」とのたまへど、いと弱げに消えもていくやうなれば、「え生きはべらじ。すぞろなる穢らひに籠もりて、わづらふべきこと。さすがにいとやむごとなき人にこそはべるめれ。死に果つとも、ただにやは捨てさせたまはむ。見苦しきわざかな」と言ひあへり。「あなかま。人に聞かすな。わづらはしきこともぞある」など口固めつつ、尼君は、親のわづらひたまふよりも、この人を生け果てて見まほ

しう惜しみて、うちつけに添ひみたり。知らぬ人なれど、みめのこよなうをかしげなれば、いたづらになさじと見る限り扱ひ騒ぎけり。さすがに、時々目見開けなどしつつ、涙の尽きせず流るるを、「あな心憂や。いみじく悲しと思ふ人の代はりに、仏の導きたまへると思ひきこゆるを、かひなくなりたまはば、なかなかなることをや思はむ。さるべき契りにてこそ、かく見たてまつらめ。なほいささかもものたまへ」と言ひ続くれど、からうして、「生き出でたりとも、あやしき不用の人なり。人に見せて、夜この川に落とし入れたまひてよ」と、息の下に言ふ。「まれまれ物のたまふをうれしと思ふに、あないみじや。いかなればかくはのたまふぞ。いかにしてさる所にはおはしつるぞ」と問へども、物も言はずなりぬ。身にもし傷などやあらむとて見れど、ここはと見ゆるところなくうつくしければ、あさましく悲しく、まことに人の心惑はさむとて出で来たる仮のものにやと疑ふ。

二日ばかり籠もりみて、二人の人を祈り加持する声絶えず、あやしきことを思ひ騒ぐ。そのわたりの下衆などの僧都に仕まつりける、かくておはしますなりとてとぶらひ出で来るも、物語などして言ふを聞けば、「故八の宮の御むすめ、右大将殿の通ひたまひし、ことに悩みたまふこともなくてにはかに隠れたまへりとして騒ぎはべる、その御葬送の雑事も仕うまつりはべりとして、昨日はえ参りはべらざりし」と言ふ。さやうの人の魂を、鬼の取りもて来たるにやと思ふにも、かつ見る見る、あるものともおぼえず危ふく恐ろしと思す。人びと、「よべ見やられし火は、しかこととしきけしきも見えざりしを」と言ふ。「ことさら事削ぎて、いかめしうもはべらざりし」と言ふ。穢らひたる人として、立ちながら追ひ返しつ。「大将殿は、宮の御むすめ持ちたまへりしは、亡せたまひて年ごろになりぬるものを、誰れを言ふにかあらむ。姫宮をおきたてまつりたまひて、よに異心おはせじ」など言ふ。

尼君よろしくなりたまひぬ。方も開きぬれば、かくうたてある所に久しうおはせむも便なし、とて帰る。「この人はなほいと弱げなり。道のほどもいかがものしたまはむ」と、「心苦しきこと」と言ひ合へり。車二つして、老人乗りたまへるには、仕うまつる尼二人、次にはこの人を臥せて、かたはらにいま一人乗り添ひて、道すがら行きもやらず、車止めて湯参りなどしたまふ。比叡坂本に、小野といふ所にぞ住みたまひける。そこにおはし着くほど、いと遠し。「中宿りを設くべかりける」など言ひて、夜更けておはし着きぬ。僧都は親を扱ひ、娘の尼君はこの知らぬ人をはぐくみて、皆抱き降ろしつつ休む。老いの病のいつともなきが、苦しと思ひたまふべし、遠道の名残こそしばしわづらひたまひけれ、やうやうよろしうなりたまひにければ、僧都は登りたまひぬ。かかる人なむ率て来たるなど、法師のあたりにはよからぬことなれば、見ざりし人にはまねばず、尼君も皆口固めさせつつ、もし尋ね来る人もやあると思ふも、静心なし。いかで、さる田舎人の住むあたりに、かかる人落ちあふれけむ、物語でなどしたりける人の、心地などわづらひけむを、継母などやうの人のたばかりて置かせたるにや、などぞ思ひ寄りける。「川に流してよ」と言ひし一言より他に、ものもさらにのたまはねば、いとおぼつかなく思ひて、いつしか人にもなしてみむと思ふに、つくづくとして起き上がる世もなく、いとあやしうのみものしたまへば、つひに生くまじき人にやと思ひながら、うち捨てむもいとほしういみじ。夢語りもし出でて、初めより祈らせし阿闍梨にも、忍びやかに芥子焼くことせさせたまふ。

うちはへかく扱ふほどに、四五月も過ぎぬ。いとわびしうかひなきことを思ひわびて、僧都の御もとに、

なほ下りたまへ。この人助けたまへ。さすがに今日までもあるは、死ぬまじかりける人を、憑きしみ領じたるものの去らぬにこそあめれ。あが仏、

京に出でたまはばこそはあらめ、ここまではあへなむ。

など、いみじきことを書き続けて奉りたまへれば、「いとあやしきことかな。かくまでもありける人の命を、やがてとり捨ててましかば。さるべき契りありてこそは、我しも見つけけめ、試みに助け果てむかし。それに止まらずは、業尽きにけりと思はむ」とて下りたまひけり。

よろこび拝みて、月ごろのありさまを語る。「かく久しうわづらふ人は、むつかしきことおのづからあるべきを、いささか衰へず、いとよげに、ねぢけたるところなくのみものしたまひて、限りと見えながらも、かくて生きたるわざなりけり」など、おほなおほな泣く泣くのたまへば、「見つけしより、珍かなる人のみありさまかな。いで」とて、さしのぞきて見たまひて、「げにいと警策なりける人の御容面かな。功德の報いにこそ、かかるかたちにも生ひ出でたまひけめ。いかなる違ひめにて損はれたまひけむ。もしきにや、と聞き合はせらるることもしや」と問ひたまふ。「さらに聞こゆることもなし。何か、初瀬の観音の賜へる人なり」とのたまへば、「何か。それ縁に従ひてこそ導きたまはめ、種なきことはいかでか」などのたまふが、あやしがりたまひて、修法始めたり。

おほやけの召しにだに従はず、深く籠もりたる山を出でたまひて、すぞろにかかる人のためになむ行ひ騒ぎたまふと、ものの聞こえあらむ、いと聞きにくかるべしと思し、弟子どもも言ひて、人に聞かせじと隠す。僧都、「いであなかま、大徳たち、われ無慚の法師にて、忌むことの中に破る戒は多からめど、女の筋につけて、まだ誹りとらず、過つことなし。六十に余りて、今さらに人のもどき負はむは、さるべきにこそはあらめ」とのたまへば、「よからぬ人の、ものを使なく言ひなしはべる時には、仏法の瑕となりはべることなり」と、心よからず思ひて言ふ。「この修法のほどにしるし見えずは」と、いみじきこと

どもを誓ひたまひて、夜一夜加持したまへる曉に、人に駆り移して、何やうのもの、かく人を惑はしたるぞと、ありさまばかり言はせまほしうて、弟子の阿闍梨とりどりに加持したまふ。月ごろいささかも現はれざりつるものけ、調ぜられて、「おのれは、ここまで参うで来て、かく調ぜられたてまつるべき身にもあらず。昔は行ひせし法師の、いささかなる世に恨みをとどめて漂ひありきしほどに、よき女のあまた住みたまひし所に住みつきて、かたへは失ひてしに、この人は、心と世を恨みたまひて、我いかで死なむと言ふことを、夜昼のたまひしにたよりを得て、いと暗き夜、独りものしたまひしを取りてしなり。されど観音とぎまかうぎまにはぐくみたまひければ、この僧都に負けたてまつりぬ。今はまかりなむ」とのしる。「かく言ふは何ぞ」と問へば、憑きたる人、ものはかなきけにや、はかばかしうも言はず。

正身の心地はさはやかに、いささかものおぼえて見回したれば、一人見し人の顔はなくて、皆老法師、ゆがみ衰へたる者のみ多ければ、知らぬ国に來にける心地していと悲し。ありし世のこと思ひ出づれど、住みけむ所、誰れと言ひし人とだにたしかにはかばかしうもおぼえず。ただ我は限りとて身を投げし人ぞかし、いづくに來にたるにかとせめて思ひ出づれば、いとみじとものを思ひ嘆きて、皆人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風は烈しう、川波も荒う聞こえしを、独りもの恐ろしかりしかば、來し方行く先もおぼえで、簀子の端に足をさし下ろしながら、行くべき方も惑はれて、帰り入らむも中空にて、心強くこの世に亡せなむと思ひ立ちしを、をこがましうて人に見つけられむよりは鬼も何も食ひ失へと言ひつつ、つくづくと居たりしを、いときよげなる男の寄り来て、いざたまへ。おのがもとへと言ひて、抱く心地のせしを、宮と聞こえし人のしたまふとおぼえしほどより、心地惑ひにけるなめり、知らぬ所に据ゑ置きて、この男は消え失せぬと見しを、つひにかく本意のこともせず

なりぬると思ひつつ、いみじう泣くと思ひしほどに、その後のことは、絶えていかにもいかにもおぼえず、人の言ふを聞けば、多くの日ごろも経にけり、いかに憂きさまを知らぬ人に扱はれ見えつらむと恥づかしう、つひにかくて生き返りぬるかと思ふも口惜しければ、いみじうおぼえて、なかなか沈みたまひつる日ごろは、うつし心もなきさまにて、ものいささか参る事もありつるを、つゆばかりの湯をだに参らず。

「いかなれば、かく頼もしげなくのみはおはするぞ。うちはへぬるみなどしたまへることは冷めたまひて、さはやかに見えたまへば、うれしう思ひきこゆるを」と、泣く泣くたゆむ折なく、添ひゐて扱ひきこえたまふ。ある人びとも、あたらしき御さまかたちを見れば、心を尽くしてぞ惜しみまもりける。心にはなほいかで死なむとぞ思ひわたりたまへど、さばかりにて生き止まりたる人の命なれば、いと執念くて、やうやう頭もたげたまへば、もの参りなどしたまふにぞ、なかなか面瘦せもていく。いつしかとうれしう思ひきこゆるに、「尼になしたまひてよ。さてのみなむ生くやうもあるべき」とのたまへば、「いとほしげなる御さまを、いかでかさはなしたてまつらむ」とて、ただ頂ばかりを削ぎ、五戒ばかりを受けさせたてまつる。心もとなければ、もとよりおれおれしき人の心にて、えさかしく強ひてものたまはず。僧都は、「今はかばかりにて、いたはり止めたてまつりたまへ」と言ひ置きて、登りたまひぬ。

夢のやうなる人を見たてまつるかなと尼君は喜びて、せめて起こし据ゑつつ、御髪手づから削りたまふ。さばかりあさましようひき結ひてうちやりたりつれど、いたうも乱れず、解き果てたれば、つやつやとけうらなり。一年足らぬつくも髪多かる所にて、目もあやに、いみじき天人の天降れるを見たらむやうに思ふも、危ふき心地すれど、「などかいと心憂く、かばかりいみじく思ひきこゆるに、御心を立てては見えたまふ。いづくに誰れと聞こえし人の、さる所にはい

かでおはせしぞ」と、せめて問ふを、いと恥づかしと思ひて、「あやしかりしほどに、皆忘れたるにやあらむ、ありけむさまなどもさらにおぼえはべらず。ただほのかに思ひ出づることとは、ただいかでこの世にあらじと思ひつつ、夕暮ごとに端近くて眺めしほどに、前近く大きな木のありし下より人の出で来て率て行く心地なむせし。それより他のことは、我ながら誰れともえ思ひ出でられはべらず」と、いとらうたげに言ひなして、「世の中になほありけりと、いかで人に知られじ。聞きつくる人もあらば、いといみじくこそ」とて泣いたまふ。あまり問ふをば、苦しと思したれば、え問はず。かぐや姫を見つけたりけむ竹取の翁よりも珍しき心地するに、いかなるものの際に消え失せむとすらむと、静心なくぞ思しける。

このあるじもあてなる人なりけり。娘の尼君は、上達部の北の方にてありけるが、その人亡くなりたまひてのち、娘ただ一人をいみじくかしづきて、よき君達を婿にして思ひ扱ひけるを、その娘の君の亡くなりなければ、心憂し、いみじと思ひ入りて、形をも変へ、かかる山里には住み始めたりけるなり。世とともに恋ひわたる人の形見にも、思ひよそへつべからむ人をだに見出でてしかな、つれづれも心細きままに思ひ嘆きけるを、かくおぼえぬ人のかたちけはひもまさりざまなるを得たれば、うつつのこととおぼえず、あやしき心地しながらうれしと思ふ。ねびにたれど、いときよげによしありて、ありさまもあてはかなり。

昔の山里よりは、水の音もなごやかなり。造りざまゆゑある所、木立おもしろく、前栽もをかしく、ゆゑを尽くしたり。秋になりゆけば、空のけしきもあはれなり。門田の稲刈るとて、所につけたるものまねびしつつ、若き女どもは歌うたひ興じあへり。引板ひき鳴らす音もをかしく、見し東路のことなども思ひ出でられて。かの夕霧の御息所のおはせし山里よりは、今すこし入りて、山

に片かけたる家なれば、松蔭茂く、風の音もいと心細きに、つれづれに行ひをのみしつつ、いつとなくしめやかなり。

尼君ぞ、月など明き夜は、琴など弾きたまふ。少将の尼君などいふ人は、琵琶弾きなどしつつ遊ぶ。「かかるわざはしたまふや。つれづれなるに」など言ふ。昔もあやしかりける身に、心のどかにさやうのことすべきほどもなかりしかば、いささかをかしきさまならずも生ひ出でにけるかなと、かくさだ過ぎにける人の、心をやるめる折々につけては思ひ出づるを、あさましくものはかなかりけると、我ながら口惜しければ、手習に、

身を投げし涙の川の早き瀬をしがらみかけて誰れか止めし

思ひの外に心憂ければ、行く末もうしろめたく、疎ましきまで思ひやらる。

月の明かき夜な夜な、若い人どもは艶に歌詠み、いにしへ思ひ出でつつ、さまさま物語などするに、いらふべきかたもなければ、つくづくとうち眺めて、

我かくて憂き世の中にめぐるとも誰れかは知らむ月の都に

今は限りと思ひしほどは、恋しき人多かりしかど、こと人びとはさしも思ひ出でられず、ただ、親いかに惑ひたまひけむ、乳母、よろづにいかで人なみなみになさむと思ひ焦られしを、いかにあへなき心地しけむ、いづくにあらむ、我世にあるものとはいかで知らむ、同じ心なる人もなかりしままに、よろづ隔つることなく語らひ見馴れたりし右近なども、折々は思ひ出でらる。

若き人の、かかる山里に今はと思ひ絶え籠もるは、難きわざなりければ、ただいたく年経にける尼七八人ぞ、常の人にてはありける。それらが娘、孫やうの者ども、京に宮仕へするも、異さまにてあるも、時々ぞ来通ひける。かやうの人につけて、見しわたりに行き通ひ、おのづから世にありけりと誰れにも誰れにも聞かれたてまつらむこと、いみじく恥づかしかるべし、いかなるさまにてさすらへけむなど、思ひやり世づかずあやしかるべきを思へば、かかる人び

とにかけても見えず。ただ侍従、こもきとて、尼君のわが人にしたりける二人をのみぞ、この御方に言ひ分けたりける。みめも心ぎまも、昔見し都鳥に似たるはなし。何事につけても、世の中にあらぬ所はこれにやとぞ、かつは思ひなされける。かくのみ人に知られじと忍びたまへば、まことにわづらはしかるべきゆゑある人にもものしたまふらむとて、詳しくきこと、ある人びとも知らせず。

尼君の昔の婿の君、今は中将にてものしたまひける、弟の禪師の君、僧都の御もとにもものしたまひける、山籠もりしたるを訪らひに、はらからの君たち常に登りけり。横川に通ふ道のたよりに寄せて、中将ここにおはしたり。前駆うち追ひて、あてやかなる男の入り来るを見出だして、忍びやかにおはせし人の御さまはひぞ、さやかに思ひ出でらるる。これもいと心細き住まひのつれづれなれど、住みつきたる人びとは、ものきよげにをかしうしなして、垣ほに植ゑたる撫子もおもしろく、女郎花、桔梗など咲き始めたるに、色々の狩衣姿の男どもの若きあまたして、君も同じ装束にて、南面に呼び据ゑたれば、うち眺めてゐたり。年二十七八のほどにて、ねびととのひ、心地なからぬさまもてつけたり。

尼君、障子口に几帳立てて対面したまふ。まづうち泣きて、「年ごろの積もるには、過ぎにし方いとど気遠くのみなむはべるを、山里の光になほ待ちきこえさすることの、うち忘れず止みはべらぬを、かつはあやしく思ひたまふる」とのたまへば、「心のうちあはれに、過ぎにし方のことども、思ひたまへられぬ折なきを、あながちに住み離れ顔なる御ありさまに、おこたりつつなむ。山籠もりもうらやましう、常に出で立ちはべるを、同じくはなど、慕ひまとはさるる人びとに、妨げらるるやうにはべりてなむ。今日は皆はぶき捨ててものしたまへる」とのたまふ。「山籠もりの御うらやみは、なかなか今様だちたる御

ものまねびになむ。昔を思し忘れぬ御心ばへも、世に靡かせたまはざりけると、おろかならず思ひたまへらるる折多く」など言ふ。

人びとに水飯などやうの物食はせ、君にも蓮の実などやうのもの出だしたれば、馴れにしあたりにて、さやうのこともつつみなき心地して、村雨の降り出づるに止められて、物語しめやかにしたまふ。言ふかひなくなりにし人よりも、この君の御心ばへなどのいと思ふやうなりしを、よそのものに思ひなしたるなむいと悲しき。など忘れ形見をだに留めたまはずなりにけむ」と、恋ひ偲ぶ心なりければ、たまさかにかくものしたまへるにつけても、珍しくあはれにおぼゆべかめる問はず語りもし出でつべし。

姫君は、我は我と思ひ出づる方多くて、眺め出だしたまへるさまいとうつくし。白き単衣の、いと情けなくあざやぎたるに、袴も楡皮色にならひたるにや、光も見えず黒きを着せたてまつりたれば、かかることどもも、見しには変はりてあやしうもあるかなと思ひつつ、こはごはしういららぎたるものども着たまへるしも、いとをかしき姿なり。御前なる人びと、「故姫君のおはしたる心地のみしはべりつるに、中将殿をさへ見たてまつれば、いとあはれにこそ。同じくは、昔のさまにておはしまさせばや。いとよき御あはひならむかし」と言ひ合へるを、あないみじや、世にありて、いかにもいかにも人に見えむこそ、それにつけてぞ昔のこと思ひ出でらるべき、さやうの筋は思ひ絶えて忘れなむ、と思ふ。

尼君入りたまへる間に、客人、雨のけしきを見わづらひて、少将と言ひし人の声を聞き知りて、呼び寄せたまへり。「昔見し人びとは、皆ここにもものせらるらむやと思ひながらも、かう参り来ることも難くなりたるを、心浅きにや誰れも誰れも見なしたまふらむ」などのたまふ。仕うまつり馴れにし人にて、あはれなりし昔のことども思ひ出でたるついでに、「かの廊のつま入りつる

ほど、風の騒がしかりつる紛れに、簾の隙より、なべてのさまにはあるまじかりつる人の、うち垂れ髪の見えつるは、世を背きたまへるあたりに、誰れぞとなむ見おどろかれつる」とのたまふ。姫君の立ち出でたまへるうしろでを見たまへりけるなめりと思ひ出でて、ましてこまかに見せたらば、心止まりたまひなむかし、昔人はいとこよなう劣りたまへりしをだに、まだ忘れがたくしたまふめるをと、心一つに思ひて、「過ぎにし御ことを忘れがたく慰めかねたまふめりしほどに、おぼえぬ人を得たてまつりたまひて、明け暮れの見物に思ひきこえたまふめるを、うちとけたまへる御ありさまを、いかで御覧じつらむ」と言ふ。かかることこそはありけれとをかしくて、何人ならむ、げにいとをかしかりつと、ほのかなりつるを、なかなか思ひ出づ。こまかに問へど、そのままにも言はず、「おのづから聞こし召してむ」とのみ言へば、うちつけに問ひ尋ねむもさま悪しき心地して、「雨も止みぬ。日も暮れぬべし」と言ふにそそのかされて、出でたまふ。

前近き女郎花を折りて、「何匂ふらむ」と口ずさびて、独りごち立てり。「人のもの言ひを、さすがに思しとがむるこそ」など、古代の人どもはものめでをしあへり。いとよげに、あらまほしくもねびまさりたまひにけるかな、同じくは、昔のやうにても見たてまつらばやとて、「藤中納言の御あたりには、絶えず通ひたまふやうなれど、心も止めたまはず、親の殿がちになむものしたまふ、とこそ言ふなれ」と尼君ものたまひて、「心憂く、ものをのみ思し隔てたるなむいとつらき。今は、なほさるべきなめりと思しなして、晴れ晴れしくもてなしたまへ。この五年六年、時の間も忘れず、恋しく悲しと思ひつる人の上も、かく見たてまつりて後よりは、こよなく思ひ忘れにてはべる。思ひきこえたまふべき人びと世におはすとも、今は世に亡きものにこそ、やうやう思しなりぬらめ。よろづのこと、さし当たりたるやうには、えしもあらぬわざにな

む」と言ふにつけても、いとど涙ぐみて、「隔てきこゆる心ははべらねど、あやしくて生き返りけるほどに、よろづのこと夢の世にたどられて、あらぬ世に生れたらむ人は、かかる心地やすらむとおぼえはべれば、今は知るべき人世にあらむとも思ひ出でず、ひたみちにこそ睦ましく思ひきこゆれ」とのたまふさまも、げに何心なくうつくしく、うち笑みてぞまもりゐたまへる。

中将は山におはし着きて、僧都も珍しがりて、世の中の物語したまふ。その夜は泊りて、声尊き人に経など読ませて、夜一夜遊びたまふ。禪師の君、こまかなる物語などするついでに、「小野に立ち寄りて、ものあはれにもありしかな。世を捨てたれど、なほさばかりの心ばせある人は、難うこそ」などあるついでに、「風の吹き開けたりつる隙より、髪いと長くをかしげなる人こそ見えつれ。あらはなりとや思ひつらむ、立ちてあなたに入りつるうしろで、なべての人とは見えざりつ。さやうの所に、よき女は置きたるまじきものにこそあめれ。明け暮れ見るものは法師なり。おのづから目馴れておぼゆる。不便なることぞかし」とのたまふ。禪師の君、「この春初瀬に詣でて、あやしくて見出でたる人となむ聞きはべりし」とて、見ぬことなれば、こまかには言はず。「あはれなりけることかな。いかなる人にかあらむ。世の中を憂しとてぞ、さる所には隠れるけむかし。昔物語の心地もするかな」とのたまふ。

またの日、帰りたまふにも、「過ぎがたくなむ」とておはしたり。さるべき心づかひしたりければ、昔思ひ出でたる御まかなひの少将の尼なども、袖口さま異なれどもをかし。いとどいや目に、尼君はものしたまふ。物語のついでに、「忍びたるさまにものしたまふらむは、誰れにか」と問ひたまふ。わづらはしけれど、ほのかにも見つけてけるを、隠し顔ならむもあやしとて、「忘れわびはべりて、いとど罪深うのみおぼえはべりつる慰めに、この月ごろ見たまふる人になむ。いかなるにか、いともの思ひしげきさまにて、世にありと人に知ら

れむことを苦しげに思ひてものせらるれば、かかる谷の底には誰れかは尋ね聞かむと思ひつつはべるを、いかでかは聞きあらはさせたまへらむ」といらふ。「うちつけ心ありて参り来むにだに、山深き道のかことは聞こえつべし。まして思しよそふらむ方につけては、ことごとに隔てたまふまじきことにこそは。いかなる筋に世を恨みたまふ人にか。慰めきこえばや」など、ゆかしげにのたまふ。出でたまふとて、畳紙に、

あだし野の風になびく女
郎花我しめ結はむ道遠くとも

と書いて、少将の尼して入れたり。尼君も見たまひて、「この御返り書かせたまへ。いと心にくきけつきたまへる人なれば、うしろめたくもあらじ」とそそのかせば、「いとあやしき手をば、いかでか」とて、さらに聞きたまはねば、「はしたなきことなり」とて、尼君、「聞こえさせつるやうに、世づかず、人に似ぬ人にてなむ。

移し植ゑて思ひ乱れぬ
女郎花憂き世を背く草の庵に」

とあり。こたみはさもありぬべし、と思ひ許して帰りぬ。

文などわざとやらむはさすがにうひうひしう、ほのかに見しさまは忘れず、もの思ふらむ筋何ごとと知らねど、あはれなれば、八月十余日のほどに、小鷹狩のついでにおはしたり。例の尼呼び出でて、「一目見しより、静心なくてなむ」とのたまへり。いらへたまふべくもあらねば、尼君、「待乳の山となむ見たまふる」と言ひ出だしたまふ。対面したまへるにも、「心苦しきさまにてものしたまふと聞きはべりし人の御上なむ、残りゆかしくはべりつる。何事も心にかなはぬ心地のみしはべれば、山住みもしはべらまほしき心ありながら、許いたまふまじき人びとに、思ひ障りてなむ過ぐしはべる。世に心地よげなる人の上は、かく屈じたる人の心からにや、ふさはしからずなむ。もの思ひたまふらむ人に、思ふことを聞こえばや」など、いと心とどめたるさまに語らひたま

ふ。「心地よげならぬ御願ひは、聞こえ交はしたまはむに、つきなからぬさまになむ見えはべれど、例の人にてはあらじと、いとうたたあるまで世を恨みたまふめれば、残りすくなき齡どもだに、今はと背きはべる時は、いとも心細くおぼえはべりしものを。世をこめたる盛りには、つひにいかがとなむ見たまへはべる」と、親がりて言ふ。

入りても、「情けなし。なほいささかにも聞こえたまへ。かかる御住まひは、すずろなることも、あはれ知るこそ世の常のことなれ」など、こしらへても言へど、「人にも聞こゆらむ方も知らず、何事もいふかひなくのみこそ」と、いとつれなくて臥したまへり。客人は、「いづら。あな心憂。秋を契れるは、すかしたまふにこそありけれ」など、恨みつつ、

松虫の声を訪ねて来つれどもまた萩原の露に惑ひぬ

「あないとほし。これをだに」など責むれば、さやうに世づいたらむこと言ひ出でむもいと心憂く、また言ひそめては、かやうの折々に責められむもむつかしうおぼゆれば、いらへをだにしたまはねば、あまりいふかひなく思ひあへり。尼君、早うは今めきたる人にぞありける名残なるべし、

「秋の野の露分け来たる狩衣葎茂れる宿にかこつな

となむ、わづらはしがりきこえたまふめる」と言ふを、内にも、なほかく心より外に世にありと知られ始むるを、いと苦しと思す心のうちをば知らで、男君をも飽かず思ひ出でつつ恋ひわたる人びとなれば、「かくはかなきついでにも、うち語らひきこえたまはむに、心より外に、よにうしろめたくは見えたまはぬものを。世の常なる筋には思しかけずとも、情けなからぬほどに、御いらへばかりは聞こえたまへかし」など、ひき動かしつべく言ふ。

さすがに、かかる古体の心どもにはありつかず今めきつつ、腰折れ歌好ましげに若やぐけしきどもは、いとうしろめたうおぼゆ。限りなく憂き身なりけり

と見果ててし命さへ、あさましう長くて、いかなるさまにさすらふべきならむ、ひたぶるに亡き者と人に見聞き捨てられてもやみなばや、と思ひ臥したまへるに、中将は、おほかたもの思はしきことのあるにや、いといたううち嘆き、忍びやかに笛を吹き鳴らして、「鹿の鳴く音に」など独りごつけはひ、まことに心地なくはあるまじ。「過ぎにし方の思ひ出でらるるにも、なかなか心尽くしに、今はじめてあはれと思すべき人、はた難げなれば、見えぬ山路にもえ思ひなすまじうなむ」と、恨めしげにて出でなむとするに、尼君、「などあたら夜を御覧じさしつる」とて、ゐざり出でたまへり。「何か。遠方なる里も、試みはべれば」など言ひすさみて、いたう好きがましからむも、さすがに便なし、いとほのかに見えしさまの、目止まりしばかり、つれづれなる心慰めに思ひ出づるを、あまりもて離れ、奥深なるけはひも所のさまにあはずさまじ、と思へば、帰りなむとするを、笛の音さへ飽かずいとどおぼえて、

深き夜の月をあはれと見ぬ人や山の端近き宿に泊らぬ

と、なまかたはなることを、「かくなむ聞こえたまふ」と言ふに、心ときめきして、

山の端に入るまで月を眺め見む閨の板間もしるしありやと

など言ふに、この大尼君、笛の音をほのかに聞きつけたりければ、さすがにめでて出で来たり。

ここかしこうちしはぶき、あさましきわななき声にて、なかなか昔のことなどもかけて言はず。誰れとも思ひ分かぬなるべし。「いで、その琴の琴弾きたまへ。横笛は、月にはいとをかしきものぞかし。いづら、御達。琴とりて参れ」と言ふに、それなめりと推し量りに聞けど、いかなる所にかかる人、いかで籠もりゐたらむ、定めなき世ぞ、これにつけてあはれなる。盤渉調をいとをかしう吹きて、「いづら、さらば」とのたまふ。娘尼君、これもよきほどの好き者

にて、「昔聞きはべりしよりも、こよなくおぼえはべるは、山風をのみ聞き馴れはべりにける耳からにや」とて、「いでや、これもひがことになりてはべらむ」と言ひながら弾く。今様は、をさをさなべての人の今は好まずなりゆくものなれば、なかなか珍しくあはれに聞こゆ。松風もいとよくもてはやす。吹きて合はせたる笛の音に、月もかよひて澄める心地すれば、いよいよめでられて、宵惑ひもせず、起き居たり。

「姫は、昔は東琴をこそは、こともなく弾きはべりしかど、今の世には変はりたるにやあらむ、この僧都の、聞きにくし、念仏より他のあだわぎなせそとはしたなめられしかば、何かはとて弾きはべらぬなり。さるは、いとよく鳴る琴もはべり」と言ひ続けて、いと弾かまほしと思ひたれば、いと忍びやかにうち笑ひて、「いとあやしきことをも制しきこえたまひける僧都かな。極楽といふなる所には、菩薩なども皆かかることをして、天人なども舞ひ遊ぶこそ尊かなれ。行ひ紛れ、罪得べきことかは。今宵聞きはべらばや」とすかせば、いとよしと思ひて、「いで、殿守のくそ。東取りて」と言ふにも、しはぶきは絶えず、人びとは見苦しと思へど、僧都をさへ恨めしげにうれへて言ひ聞かすれば、いとほしくてまかせたり。取り寄せて、ただ今の笛の音をも訪ねず、ただおのが心をやりて、東の調べを爪さはやかに調ぶ。皆異ものは声を止めつるを、これをのみめでたると思ひて、「たけふ、ちちりちちり、たりたむな」など掻き返しはやりかに弾きたる、言葉ども、わりなく古めきたり。「いとをかしう、今の世に聞こえぬ言葉こそは弾きたまひけれ」と褒むれば、耳ほのぼのしく、かたはらなる人に問ひ聞きて、「今様の若き人は、かやうなることをぞ好まれざりける。ここに月ごろものしたまふめる姫君、かたちいとけうらにもものしたまふめれど、もはら、かやうなるあだわぎなどしたまはず、埋れてなむものしたまふめる」と我かしこにうちあざ笑ひて語るを、尼君などはかたはらいたし

と思す。これに事皆醒めて帰りたまふほども、山おろし吹きて、聞こえ来る笛の音いとをかしう聞こえて、起き明かしたるつとめて、

よべは、かたがた心乱れはべりしかば、急ぎまかではべりし。

忘れぬ昔のことも笛竹のつらきふしにも音ぞ泣かれける

なほすこし思し知るばかり教へなさせたまへ。忍ばれぬべくは、好き好きしきまでも、何かは。

とあるを、いとどわびたるは、涙とどめがたげなるけしきにて、書きたまふ。

笛の音に昔のことも偲ばれて帰りしほども袖ぞ濡れにし

あやしう、もの思ひ知らぬにやとまで見はべるありさまは、老人の間はず語りに聞こし召しけむかし。

とあり。珍しからぬも見所なき心地して、うち置かれけむ。

荻の葉に劣らぬほどに訪れわたる、いとむつかしうもあるかな、人の心はあながちなるものなりけり、と見知りにし折々も、やうやう思ひ出づるままに、「なほかかる筋のこと、人にも思ひ放たすべきさまに疾くなしたまひてよ」とて、経習ひて読みたまふ。心の内にも念じたまへり。かくよろづにつけて世の中を思ひ捨つれば、若き人としてをかしやかなることもことになく、結ばほれたる本性なめりと思ふ。かたちの見るかひありうつくしきに、よろづの咎見許して、明け暮れの見物にしたり。すこしうち笑ひたまふ折は、珍しくめでたきものに思へり。

九月になりて、この尼君、初瀬に詣づ。年ごろいと心細き身に、恋しき人の上も思ひやまれざりしを、かくあらぬ人ともおぼえたまはぬ慰めを得たれば、観音の御験うれしとて、返り申しだちて詣でたまふなりけり。「いざたまへ。

人やは知らむとする。同じ仏なれど、さやうの所に行ひたるなむ験ありてよき例多かる」と言ひて、そそのかしたつれど、昔母君乳母などの、かやうに言ひ

知らせつつ、たびたび詣でさせしを、かひなきにこそあめれ、命さへ心になはず、たぐひなきいみじきめを見るはといと心憂きうちにも、知らぬ人に具して、さる道のありきをしたらむよと、そら恐ろしくおぼゆ。心ごはきさまには言ひもなきで、「心地のいと悪しうのみはべれば、さやうならむ道のほどにもいかなど、つつましようなむ」とのたまふ。物懼ぢはさもしたまふべき人ぞかし、と思ひて、しひても誘はず。

はかなくて世に古川の憂き瀬には尋ねも行かじ二本の杉

と手習に混じりたるを、尼君見つけて、「二本は、またも逢ひきこえむと思ひたまふ人あるべし」と戯れごとを言ひ当てたるに、胸つぶれて面赤めたまへる、いと愛敬づきうつくしげなり。

古川の杉のもとだち知らねども過ぎにし人によそへてぞ見る

ことなることなきいらへを口疾く言ふ。忍びてと言へど、皆人慕ひつつ、ここには人少なにておはせむを心苦しがりて、心ばせある少将の尼、左衛門とてある大人しき人、童ばかりぞ留めたりける。

皆出で立ちけるを眺め出でて、あさましきことを思ひながらも、今はいかがせむと、頼もし人に思ふ人一人ものしたまはぬは心細くもあるかなと、いとつれづれなるに、中將の御文あり。「御覽せよ」と言へど、聞きも入れたまはず。いとど人も見えず、つれづれと来し方行く先を思ひ屈じたまふ。「苦しきまでも眺めさせたまふかな。御碁を打たせたまへ」と言ふ。「いとあやしうこそはありしか」とはのたまへど、打たむと思したれば、盤取りにやりて、我はと思ひて先ぜさせたてまつりたるに、いとこよなければ、また手直して打つ。「尼上疾う帰らせたまはなむ。この御碁見せたてまつらむ。かの御碁ぞいと強かりし。僧都の君、早うよりいみじう好ませたまひて、けしうはあらずと思したりしを、いと棋聖大徳になりて、さし出でてこそ打たざらめ、御碁には負けじか

しと聞こえたまひしに、つひに僧都なむ二つ負けたまひし。棋聖が碁には勝らせたまふべきなめり。あないみじ」と興ずれば、さだ過ぎたる尼額の見つかぬに、もの好みするにむつかしきこともしそめてけるかなと思ひて、心地悪しとて臥したまひぬ。「時々晴れ晴れしうもてなしておはしませ。あたら御身を、いみじう沈みてもてなさせたまふこそ口惜しう、玉に瑕あらむ心地しはべれ」と言ふ。夕暮の風の音もあはれなるに、思ひ出づることも多くて、

心には秋の夕べを分かねども眺むる袖に露ぞ乱るる

月さし出でてをかしきほどに、昼文ありつる中将おはしたり。あなうたて、こはなにぞ、とおぼえたまへば、奥深く入りたまふを、「さもあまりにもおはしますものかな。御心ざしのほどもあはれまさる折にこそはべるめれ。ほのかにも、聞こえたまはむことも聞かせたまへ。しみつかむことのやうに思し召したるこそ」など言ふに、いとはしたなくおぼゆ。おはせぬよしを言へど、昼の使の、一所など問ひ聞きたるなるべし。いと言多く怨みて、「御声も聞きはべらじ。ただ気近くて聞こえむことを、聞きにくしともいかにとも思しことわれ」とよろづに言ひわびて、「いと心憂く。所につけてこそ、もののあはれもまされ。あまりかかるは」などあはめつつ、

「山里の秋の夜深きあはれをももの思ふ人は思ひこそ知れ

おのづから御心も通ひぬべきを」などあれば、「尼君おはせで、紛らはしきこゆべき人もはべらず。いと世づかぬやうならむ」と責むれば、

憂きものと思ひも知らで過ぐす身をもの思ふ人と人は知りけり

わざといらへともなきを、聞きて伝へきこゆれば、いとあはれと思ひて、「なほただいささか出でたまへと聞こえ動かせ」と、この人びとをわりなきまで恨みたまふ。「あやしきまでつれなくぞ見えたまふや」とて、入りて見れば、例はかりそめにもさしのぞきたまはぬ老い人の御方に入りたまひにけり。あさま

しう思ひて、かくなむと聞こゆれば、「かかる所に眺めたまふらむ心の内のはれに、おほかたのありさまなども情けなかるまじき人の、いとあまり思ひ知らぬ人よりも、けにもてなしたまふめるこそ。それ物懲りしたまへるか。なほいかなるさまに世を恨みて、いつまでおはすべき人ぞ」などありさま問ひて、いとゆかしげにのみ思いたれど、こまかなることは、いかでかは言ひ聞かせむ。ただ、「知りきこえたまふべき人の、年ごろは疎々しきやうにて過ぐしたまひしを、初瀬に詣であひたまひて、尋ねきこえたまひつる」とぞ言ふ。

姫君は、いとむつかしとのみ聞く老い人のあたりにうつぶし臥して、寝も寝られず。宵惑ひは、えもいはずおどろおどろしきいびきしつつ、前にもうちすがひたる尼ども二人臥して、劣らじといびき合はせたり。いと恐ろしう、今宵この人びとにや食はれなむと思ふも、惜しからぬ身なれど、例の心弱きは、一つ橋危ふがりて帰り来たりけむ者のやうに、わびしくおぼゆ。こもき、供に率ておはしつれど、色めきて、このめづらしき男の艶だちる方に帰り去にけり。今や来る、今や来ると待ちゐたまへれど、いとほかなき頼もし人なりや。中将、言ひわづらひて帰りにければ、「いと情けなく、埋れてもおはしますかな。あたら御かたちを」などそしりて、皆一所に寝ぬ。

夜中ばかりにやなりぬらむと思ふほどに、尼君しはぶきおぼほれて起きにたり。火影に、頭つきはいと白きに、黒きものをかづきて、この君の臥したまへる、あやしがりて、鼬とかいふなるものがさるわざする、額に手を当てて、「あやし。これは誰れぞ」と執念げなる声にて見おこせたる、さらにただ今食ひてむとするとぞおぼゆる。鬼の取りもて来けむほどは、物のおぼえざりければ、なかなか心やすし。いかさまにせむとおぼゆるむつかしきにも、いみじきさまにて生き返り、人になりて、またありいろいろの憂きことを思ひ乱れ、むつかしとも恐ろしとも、ものを思ふよ、死なましかばこれよりも恐ろしげな

る者の中にこそはあらましか、と思ひやらる。

昔よりのことを、まどろまれぬままに、常よりも思ひ続けるに、いと心憂く、親と聞こえけむ人の御かたちも見たてまつらず、遙かなる東を返る返る年月をゆきて、たまさかに尋ね寄りて、うれし頼もしと思ひきこえしはらからの御あたりをも思はずにて絶え過ぎ、さる方に思ひ定めたまひし人につけて、やうやう身の憂さをも慰めつべききはめに、あさましうもてそなひたる身を思ひもてゆけば、宮をすこしもあはれと思ひきこえけむ心ぞいとけしからぬ、ただこの人の御ゆかりにさすらへぬるぞと思へば、小島の色をためしに契りたまひしを、などでをかしと思ひきこえけむと、こよなく飽きにたる心地す。初めより、薄きながらものどやかにものしたまひし人は、この折かの折など思ひ出づるぞこよなかりける。かくてこそありけれと聞きつけられたてまつらむ恥づかしさは、人よりまさりぬべし。さすがにこの世には、ありし御さまを、よそながらだにいつか見むずるとうち思ふ、なほ悪ろの心や、かくだに思はじなど、心一つをかへさふ。

からうして鳥の鳴くを聞きて、いとうれし。母の御声を聞きたらむは、ましていかならむと思ひ明かして、心地もいと悪し。供にて渡るべき人もとみに来ねば、なほ臥したまへるに、いびきの人はいと疾く起きて、粥などむつかしきことどもをもてはやして、「御前に疾く聞こし召せ」など寄り来て言へど、まかなひもいとど心づきなく、うたて見知らぬ心地して、「悩ましくなむ」とことなしびたまふを、しひて言ふもいとこちなし。

下衆下衆しき法師ばらなどあまた来て、「僧都、今日下りさせたまふべし」。「などにはかには」と問ふなれば、「一品の宮の御もののけに悩ませたまひける、山の座主御修法仕まつらせたまへど、なほ僧都参らせたまはでは験なしとて、昨日二たびなむ召しはべりし。右大臣殿の四位の少将、よべ夜更けてなむ

登りおはしまして、後の宮の御文などはべりければ、下りさせたまふなり」など、いとほなやかに言ひなす。恥づかしうとも、会ひて尼になしたまひてよと言はむ、さかしら人少なくてよき折にこそと思へば、起きて、「心地のいと悪しうのみはべるを、僧都の下りさせたまへらむに、忌むこと受けはべらむとなむ思ひはべるを、さやうに聞こえたまへ」と語らひたまへば、ほけほけしううちうなづく。

例の方におはして、髪は尼君のみ削りたまふを、異人に手触れさせむうたておぼゆるに、手づからはたえせぬことなれば、ただすこし解き下して、親に今一度かうながらのさまを見えずなりなむこそ、人やりならずいと悲しけれ。いたうわづらひしけにや、髪もすこし落ち細りたる心地すれど、何ばかりも衰へず、いと多くて、六尺ばかりなる末などぞいとうつくしかりける。筋などもいとこまかに、うつくしげなり。「かかれとてしも」と独りごちるたまへり。

暮れ方に、僧都ものしたまへり。南面払ひしつらひて、まろなる頭つき行きちがひ騒ぎたるも、例に変はりていと恐ろしき心地す。母の御方に参りたまひて、「いかにぞ、月ごろは」など言ふ。「東の御方は物語でしたまひにきとか。このおはせし人は、なほものしたまふや」など問ひたまふ。「しか。ここにとまりてなむ。心地悪しとこそものしたまひて、忌むこと受けたてまつらむとのたまひつる」と語る。

立ちてこなたにしまして、「ここにやおはします」とて、几帳のもとについゐるたまへば、つつましかれど、るざり寄りていらへしたまふ。「不意にて見たてまつりそめてしも、さるべき昔の契りありけるにこそと思ひたまへて。御祈りなどもねむごろに仕うまつりしを、法師はそのこととなくて御文聞こえ受けたまはむも便なければ、自然になむおろかなるやうになりはべりぬる。いとあやしきさまに、世を背きたまへる人の御あたり、いかでおはしますらむ」との

たまふ。「世の中にはべらじと思ひ立ちはべりし身の、いとあやしくて今まで
はべりつるを、心憂しと思ひはべるものから、よろづにせさせたまひける御心
ばへをなむ、いふかひなき心地にも思ひたまへ知らるるを、なほ世づかずのみ、
つひにえ止まるまじく思ひたまへらるるを、尼になさせたまひてよ。世の中に
はべるとも、例の人にてながらふべくもはべらぬ身になむ」と聞こえたまふ。

「まだいに行く先遠げなる御ほどに、いかでか、ひたみちにしかは思ひ立たむ。
かへりて罪あることなり。思ひ立ちて、心を起こしたまふほどは強く思せど、
年月経れば、女の御身といふものいとたいだいしきものになむ」とのたまへば、
「幼くはべりしほどより、ものをのみ思ふべきありさまにて、親なども尼にな
してや見ましなどなむ思ひのたまひし。まして、すこしもの思ひ知りて後は、
例の人ざまならで、後の世をだにと思ふ心深かりしを、亡くなるべきほどのや
うやう近くなりはべるにや、心地のいと弱くのみなりはべるを、なほいかで」
とて、うち泣きつつのたまふ。あやしく、かかるかたちありさまを、などで身
をいとはしく思ひはじめたまひけむ、もののけもさこそ言ふなりしか、と思ひ
合はするに、さるやうこそはあらめ、今までも生きてるべき人かは、悪しきも
のの見つけそめたるに、いと恐ろしく危ふきことなりと思して、「とまれかく
まれ、思し立ちてのたまふを、三宝のいとかしこく誉めたまふことなり、法師
にて聞こえ返すべきことにあらず。御忌むことは、いとやすく授けたてまつる
べきを、急なることにまかんでたれば、今宵かの宮に参るべくはべり。明日よ
りや御修法始まるべくはべらむ。七日果ててまかでむに仕まつらむ」とのたま
へば、かの尼君おはしなば、かならず言ひ妨げてむといと口惜しくて、「乱り
心地の悪しかりしほどに、乱るやうにていと苦しうはべれば、重くならば、忌
むことかひなくやはべらむ。なほ今日はうれしき折とこそ思ひはべれ」とて、
いみじう泣きたまへば、聖心にいといとほしく思ひて、「夜や更けはべりぬら

む。山より下りはべること、昔はこととおぼえたまはざりしを、年の生ふるままには、堪へがたくはべりければ、うち休みて内には参らむと思ひはべるを、しか思し急ぐことなれば、今日仕うまつりてむ」とのたまふに、いとうれしくなりぬ。鉢取りて、櫛の箱の蓋さし出でたれば、「いづら、大徳たち。ここに」と呼ぶ。初め見つけたてまつりし二人ながら、供にありければ、呼び入れて、「御髪下ろしたてまつれ」と言ふ。げにいみじかりし人の御ありさまなれば、うつし人にては、世におはせむもうたてこそあらめと、この阿闍梨もことわりに思ふに、几帳の帷子のほころびより、御髪をかき出だしたまひつるが、いとあたらしくをかしげなるになむ、しばし鉢をもてやすらひける。

かかるほど、少将の尼は、せうとの阿闍梨の来たるに会ひて、下にゐたり。左衛門は、この私の知りたる人にあひしらふとて、かかる所にとりては、皆とりどりに、心寄せの人びとめづらしうて出で来たるにはかなきことしける、見入れなどしけるほどに、こもき一人して、かかることなむと少将の尼に告げたりければ、惑ひて来て見るに、わが御上の衣、袈裟などをことさらばかりとて着せたてまつりて、「親の御方拝みたてまつりたまへ」と言ふに、いづ方とも知らぬほどなむ、え忍びあへたまはで泣きたまひにける。「あなあさましや。などかく奥なきわざはせさせたまふ。上、帰りおはしては、いかなることをのたまはせむ」と言へど、かばかりにしそめつるを、言ひ乱るものしと思ひて、僧都諫めたまへば、寄りてもえ妨げず。「流転三界中」など言ふにも、断ち果ててしものをと思ひ出づるもさすがなりけり。御髪も削ぎわづらひて、「のどやかに、尼君たちして直させたまへ」と言ふ。額は僧都ぞ削ぎたまふ。「かかる御かたちやつしたまひて、悔いたまふな」など尊きことども説き聞かせたまふ。とみにせさすべくもあらず、皆言ひ知らせたまへることを、うれしくもしつるかなと、これのみぞ仏は生けるしありてとおぼえたまひける。

皆人びと出で静まりぬ。夜の風の音に、この人びとは、「心細き御住まひもしばしのことぞ、今いとめでたくなりたまひなむと頼みきこえつる御身を、かくしなさせたまひて、残り多かる御世の末を、いかにせさせたまはむとするぞ。老い衰へたる人だに、今は限りと思ひ果てられて、いと悲しきわざにはべる」と言ひ知らすれど、なほただ今は、心やすくうれし、世に経べきものとは思ひかけずなりぬるこそはいとめでたきことなれと、胸のあきたる心地ぞしたまひける。

つとめては、さすがに人の許さぬことなれば、変はりたらむさま見えむもいと恥づかしく、髪の裾のにはかにおぼとれたるやうに、しどけなくさへ削がれたるを、むつかしきことども言はでつくるはむ人もがなと、何事につけてもつつましくて、暗うしなしておはす。思ふことを人に言ひ続けむ言の葉は、もとよりだにはかばかしからぬ身を、まいてなつかしうことわるべき人さへなければ、ただ硯に向かひて、思ひあまる折には、手習をのみたけきこととは書きつけたまふ。

なきものに身をも人をも思ひつつ捨ててし世をぞさらに捨てつる
今は、かくて限りつるぞかし。

と書いても、なほみづからいとあはれと見たまふ。

限りぞと思ひなりにし世の中を返す返すも背きぬるかな

同じ筋のことを、とかく書きすさびるたまへるに、中將の御文あり。もの騒がしう呆れたる心地しあへるほどにて、かかることなど言ひてけり。いとあへなしと思ひて、かかる心の深くありける人なりければ、はかなきいらへをもしそめじと思ひ離るるなりけり、さてもあへなきわざかな、いとをかしく見えし髪のを、たしかに見せよ、と一夜も語らひしかば、さるべからむ折にと言ひしものと、いと口惜しうて、立ち返り、

聞こえむ方なきは、

岸遠く漕ぎ離るらむ海人舟に乗り遅れじと急がるるかな

例ならず取りて見たまふ。もののははれなる折に、今はと思ふもあはれなるものから、いかが思さるらむ、いとはかなきものの端に、

心こそ憂き世の岸を離るれど行方も知らぬ海人の浮木を

と、例の手習にしたまへるを包みてたてまつる。「書き写してだにこそ」とのたまへど、「なかなか書きそこなひはべりなむ」とてやりつ。めづらしきにも、言ふ方なく悲しうなむおぼえける。

物詣での人帰りたまひて、思ひ騒ぎたまふこと限りなし。「かかる身にては、勧めきこえむこそはと思ひなしはべれど、残り多かる御身を、いかで経たまはむとすらむ。おのれは世にはべらむこと、今日明日とも知りがたきに、いかでうしろやすく見たてまつらむと、よろづに思ひたまへてこそ、仏にも祈りきこえつれ」と、伏しまろびつつ、いとみじげに思ひたまへるに、まことの親の、やがて骸もなきものと思ひ惑ひたまひけむほど推し量るるぞ、まづいと悲しかりける。例のいらへもせで背きたまへるさま、いと若くうつくしげなれば、いとものはかなくぞおはしける御心なれど、泣く泣く御衣のことなど急ぎたまふ。鈍色は手馴れにしことなれば、小桂、袈裟などしたり。ある人びとも、かかる色を縫ひ着せたてまつるにつけても、「いとおぼえず、うれしき山里の光と明け暮れ見たてまつりつるものを、口惜しきわざかな」と、あたらしがりつつ、僧都を恨み誹りけり。

一品の宮の御悩み、げにかの弟子の言ひしもしるく、いちじるきことどもありて、おこたらせたまひにければ、いよいよいと尊きものに言ひののしる。名残も恐ろしとて、御修法延べさせたまへば、とみにもえ帰り入らでさぶらひたまふに、雨など降りてしめやかなる夜、召して夜居にさぶらはせたまふ。日ご

ろいたうさぶらひ極じたる人は皆休みなどして、御前に人少なにて、近く起きたる人少なき折に、同じ御帳におはしまして、「昔より頼ませたまふなかにも、このたびなむ、いよいよ後の世もかくこそはと頼もしきことまさりぬる」などのたまはず。「世の中に久しうはべるまじきさまに、仏なども教へたまへることどもはべるうちに、今年来年過ぐしがたきやうになむはべれば、仏を紛れなく念じつとめはべらむとて、深く籠もりはべるを、かかる仰せ言にてまかり出ではべりにし」など啓したまふ。

御もののけの執念きことを、さまざまに名のるが恐ろしきことなどのたまふついでに、「いとあやしう、希有のことをなむ見たまへし。この三月に、年若いてはべる母の、願ありて初瀬に詣でてはべりし帰さの中宿りに、宇治の院と言ひはべる所にまかり宿りしを、かくのごと、人住まで年経ぬる大きな所は、よからぬものかならず通ひ住みて、重き病者のため悪しきことどもと思ひたまへしもしるく」とて、かの見つけたりしことどもを語りきこえたまふ。「げにいとめづらかなることかな」とて、近くさぶらふ人びと皆寝入りたるを、恐ろしく思されて、おどろかさせたまふ。大将の語らひたまふ宰相の君しも、このことを聞きけり。おどろかさせたまふ人びとは、何とも聞かず。僧都、懼ぢさせたまへる御けしきを、心もなきこと啓してけりと思ひて、詳しくもそのほどのことをば言ひさしつ。「その女人、このたびまかり出ではべりつるたよりに、小野にはべりつる尼どもあひ訪ひはべらむとてまかり寄りたりしに、泣く泣く出家の志し深きよし、ねむごろに語らひはべりしかば、頭下ろしはべりにき。なにがしが妹、故衛門督の妻にはべりし尼なむ、亡せにし女子の代りにと、思ひ喜びはべりて、随分に労りかしづきはべりけるを、かくなりたれば、恨みはべるなり。げにぞ、かたちはいとうるはしくけうらにて、行ひやつれむいとほしげになむはべりし。何人にかはべりけむ」と、ものよく言ふ僧都にて、語

り続け申したまへば、「いかでさる所に、よき人をしも取りもて行きけむ。さりとも、今は知られぬらむ」など、この宰相の君ぞ問ふ。「知らず。さもや語らひたまふらむ。まことにやむごとなき人ならば、何か、隠れもはべらじをや。田舎人の娘も、さるさましたるこそははべらめ。龍の中より仏生まれたまはずはこそはべらめ、ただ人にてはいと罪軽きさまの人になむはべりける」など聞こえたまふ。

そのころかのわたりに消え失せにけむ人を思し出づ。この御前なる人も、姉の君の伝へに、あやしくて亡せたる人とは聞きおきたれば、それにやあらむとは思ひけれど、定めなきことなり。僧都も、「かかる人、世にあるものとも知られじと、よくもあらぬ敵だちたる人もあるやうにおもむけて、隠し忍びはべるを、事のさまのあやしければ啓しはべるなり」と、なま隠すけしきなれば、人にも語らず。宮は、「それにもこそあれ。大将に聞かせばや」と、この人にぞのたまはすれど、いづ方にも隠すべきことを、定めてさならむとも知らずながら、恥づかしげなる人に、うち出でのたまはせむもつつましく思して、やみにけり。

姫宮おこたり果てさせたまひて、僧都も登りぬ。かしこに寄りたまへれば、いみじう恨みて、「なかなか、かかる御ありさまにて罪も得ぬべきことを、のたまひもあはせずなりにけることをなむ。いとあやしき」などのたまへど、かひもなし。「今は、ただ御行ひをしたまへ。老いたる若き、定めなき世なり。はかなきものに思しとりたるも、ことわりなる御身をや」とのたまふにも、いと恥づかしうなむおぼえける。「御法服新しくしたまへ」とて、綾、薄物、絹などいふものたてまつりおきたまふ。「なにがしがはべらむ限りは、仕うまつりなむ。なにか思しわづらふべき。常の世に生ひ出でて、世間の榮華に願ひまつはるる限りなむ、所狭く捨てがたく、我も人も思すべかめることなめる。か

かる林の中に行ひ勤めたまはむ身は、何事かは恨めしくも恥づかしくも思すべき。このあらむ命は、葉の薄きがごとし」と言ひ知らせて、「松門に暁到りて月徘徊す」と、法師なれど、いとよしよししく恥づかしげなるさまにてのたまふことどもを、思ふやうにも言ひ聞かせたまふかな、と聞きむたり。

今日は、ひねもずに吹く風の音もいと心細きに、おはしたる人も、「あはれ、山伏はかかる日にぞ、音は泣かるなるかし」と言ふを聞きて、我も今は山伏ぞかし、ことわりに止まらぬ涙なりけり、と思ひつつ、端の方に立ち出でて見れば、遙かなる軒端より、狩衣姿色々に立ち混じりて見ゆ。山へ登る人なりとも、こなたの道には、通ふ人もいとたまさかなり。黒谷とかいふ方よりありく法師の跡のみ、まれまれは見ゆるを、例の姿見つけたるは、あいなくめづらしきに、この恨みわびし中将なりけり。かひなきことも言はむとてもものしたりけるを、紅葉のいとおもしろく、他の紅に染めましたる色々なれば、入り来るよりぞものあはれなりける。ここに、いと心地よげなる人を見つけたらば、あやしくぞおぼゆべき、など思ひて、「暇ありて、つれづれなる心地しはべるに、紅葉もいかにと思ひたまへてなむ。なほ立ち返りて旅寝もしつべき木の下にこそ」とて、見出だしたまへり。尼君、例の涙もろにて、

木枯らしの吹きにし山の麓には立ち隠すべき蔭だにぞなき

とのたまへば、

待つ人もあらじと思ふ山里の梢を見つつなほぞ過ぎ憂き

言ふかひなき人の御ことを、なほ尽きせずのたまひて、「さま変はりたまへらむさまを、いささか見せよ」と、少将の尼にのたまふ。「それをだに、契りししるしにせよ」と責めたまへば、入りて見るに、ことさら人にも見せまほしきさましてぞおはする。薄き鈍色の綾、中に萱草など澄みたる色を着て、いとささやかに、様体をかしく、今めきたるかたちに、髪は五重の扇を広げたるや

うにこちたき末つきなり。こまかにうつくしき面様の、化粧をいみじくしたらむやうに、赤く匂ひたり。行ひなどをしたまふも、なほ数珠は近き几帳にうち懸けて、経に心を入れて読みたまへるさま、絵にも描かまほし。うち見るごとに涙の止めがたき心地するを、まいて心かけたまはむ男は、いかに見たてまつりたまはむと思ひて、さるべき折にやありけむ、障子の掛金のもとに開きたる穴を教へて、紛るべき几帳など押しやりたり。いとかくは思はずこそありしか、いみじく思ふさまなりける人をと、我がしたらむ過ちのやうに、惜しく悔しう悲しければ、つつみもあへず、もの狂はしきまでけはひも聞こえぬべければ、退きぬ。

かばかりのさましたる人を失ひて、尋ねぬ人ありけむや、またその人かの人娘なむ行方も知らず隠れにたる、もしはもの怨じて世を背きにけるなど、おのづから隠れなかるべきをなど、あやしう返す返す思ふ。尼なりとも、かかるさましたらむ人はうたてもおぼえじなど、なかなか見所まさりて心苦しかるべきを、忍びたるさまになほ語らひとりてむと思へば、まめやかに語らふ。

「世の常のさまには思し憚ることもありけむを、かかるさまになりたまひにたるなむ、心やすう聞こえつべくはべる。さやうに教へきこえたまへ。来し方の忘れがたくて、かやうに参り来るに、また今一つ心ざしを添へてこそ」などのたまふ。「いと行く末心細く、うしろめたきありさまにはべるに、まめやかなるさまに思し忘れず訪はせたまはむ、いとうれしうこそ思ひたまへおかめ。はべらざらむ後なむ、あはれに思ひたまへらるべき」とて、泣きたまふに、この尼君も離れぬ人なるべし、誰れならむと心得がたし。「行く末の御後見は、命も知りがたく頼もしげなき身なれど、さ聞こえそめはべるなれば、さらに変はりはべらじ。尋ねきこえたまふべき人は、まことにものしたまはぬか。さやうのことのおぼつかなきになむ、憚るべきことにははべらねど、なほ隔てある心

地しはべるべき」とのたまへば、「人に知らるべきさまにて世に経たまはば、さもや尋ね出づる人もはべらむ。今は、かかる方に思ひきりつるありさまになむ。心のおもむけもさのみ見えはべりつるを」など語らひたまふ。

こなたにも消息したまへり。

おほかたの世を背きける君なれど厭ふによせて身こそつらけれ

ねむごろに深く聞こえたまふことなど言ひ伝ふ。「はらからと思しなせ。はかなき世の物語なども聞こえて慰めむ」など言ひ続く。「心深からむ御物語など、聞き分くべくもあらぬこそ口惜しけれ」といらへて、この厭ふにつけたるいらへはしたまはず。

思ひよらずあさましきこともありし身なれば、いとうとまし、すべて朽木などのやうにて、人に見捨てられて止みなむともてなしたまふ。されば、月ごろたゆみなく結ばほれ、ものをのみ思したりしも、この本意のことしたまひてより後、すこし晴れ晴れしうなりて、尼君とはかなく戯れもし交はし、碁打ちなどしてぞ明かし暮らしたまふ。行ひもいとよくして、法華経はさらなり。異法文なども、いと多く読みたまふ。雪深く降り積み、人目絶えたるころぞ、げに思ひやる方なかりける。

年も返りぬ。春のしるしも見えず、凍りわたれる水の音せぬさへ心細くて、「君にぞ惑ふ」とのたまひし人は、心憂しと思ひ果てにたれど、なほその折などのことは忘れず。

かきくらす野山の雪を眺めても降りにしことぞ今日も悲しき

など、例の慰めの手習を、行ひの際にはしたまふ。我世になくて年隔たりぬるを、思ひ出づる人もあらむかしなど、思ひ出づる時も多かり。若菜をおろそかなる籠に入れて、人の持て来たりけるを、尼君見て、

山里の雪間の若菜摘みはやしなほ生ひ先の頼まるるかな

とて、こなたにたてまつれたまへりければ、

雪深き野辺の若菜も今よりは君がためにぞ年も摘むべき

とあるを、さぞ思すらむとあはれなるにも、見るかひあるべき御さまと思はましかばと、まめやかにうち泣いたまふ。

閨のつま近き紅梅の色も香も変はらぬを、春や昔のと、異花よりもこれに心寄せのあるは、飽かざりし匂ひのしみにけるにや。後夜に闕伽奉らせたまふ。下臈の尼のすこし若きがある召し出でて、花折らすれば、かことがましく散るに、いとど匂ひ来れば、

袖触れし人こそ見えね花の香のそれかと匂ふ春のあけぼの

大尼君の孫の紀伊守なりける、このころ上りて来たり。三十ばかりにて、かたちきよげに誇りかなるさましたり。「何ごとか、こぞおとし」など問ふに、ほけほけしきさまなれば、こなたに来て、「いとこよなくこそひがみたまひにけれ。あはれにもはべるかな。残りなき御さまを見たてまつること難くて、遠きほどに年月を過ぐしはべるよ。親たちものしたまはで後は、一所をこそ御代はりに思ひきこえはべりつれ。常陸の北の方は訪れきこえたまふや」と言ふは、いもうとなるべし。「年月に添へては、つれづれにあはれなることのみまさりてなむ。常陸は久しう訪れきこえたまはざめり。え待ちつけたまふまじきさまになむ見えたまふ」とのたまふに、わが親の名とあいなく耳止まれるに、また言ふやう、「まかり上りて日ごろになりはべりぬるを、公事のいとしげく、むつかしうのみはべるに、かかづらひてなむ。昨日もさぶらはむと思ひたまへしを、右大将殿の宇治におはせし御供に仕うまつりて、故八の宮の住みたまひし所におはして、日暮らしたまひし。故宮の御むすめに通ひたまひしを、まづ一所は一年亡せたまひにき。その御おとうと、また忍びて据ゑたてまつりたまへりけるを、去年の春また亡せたまひにければ、その御果てのわざさせたまは

むこと、かの寺の律師になむ、さるべきことのたまはせて、なにがしも、かの女の装束一くだり調じはべるべきを、せさせたまひてむや。織らすべきものは急ぎせさせはべりなむ」と言ふを聞くに、いかでかあはれならざらむ。人やあやしと見むとつつましうて、奥に向ひてゐたまへり。尼君、「かの聖の親王の御むすめは、二人と聞きしを、兵部卿宮の北の方は、いづれぞ」とのたまへば、「この大将殿の御後のは劣り腹なるべし。ことことしうもてなしたまはざりけるを、いみじう悲しびたまふなり。初めのはた、いみじかりき。ほとほと出家もしたまひつべかりきかし」など語る。

かのわたりの親しき人なりけり、と見るにも、さすが恐ろし。「あやしく、やうのものと、かしこにてしも亡せたまひけること。昨日もいと不便にはべりしかな。川近き所にて、水をのぞきたまひて、いみじう泣きたまひき。上にのぼりたまひて、柱に書きつけたまひし、

見し人は影も止まらぬ水の上に落ち添ふ涙いとどせきあへず

となむはべりし。言に表はしてのたまふことは少なけれど、ただけしきにはいとあはれなる御さまになむ見えたまひし。女は、いみじくめでたてまつりぬべくなむ。若くはべりし時より、優におはしますと見たてまつりしみにしかば、世の中の一の所も何とも思ひはべらず、ただこの殿を頼みきこえてなむ過ぐしはべりぬる」と語るに、ことに深き心もなげなるかやうの人だに、御ありさまは見知りにけりと思ふ。尼君、「光君と聞こえけむ故院の御ありさまには並びたまはじとおぼゆるを、ただ今の世に、この御族ぞめでられたまふなる。右の大殿と」とのたまへば、「それは、かたちもいとうるはしうけうらに、宿徳にて、際ことなるさまぞしたまへる。兵部卿宮ぞいといみじうおはするや。女にて馴れ仕うまつらばやとなむおぼえはべる」など、教へたらむやうに言ひ続く。あはれにもをかしくも聞くに、身の上もこの世のこととおぼえず。とどこほ

ることなく語りおきて出でぬ。

忘れたまはぬにこそはとあはれに思ふにも、いとど母君の御心のうち推し量らるれど、なかなか言ふかひなきさまを見え聞こえたてまつらむは、なほつつましくぞありける。かの人の言ひつけしことどもを、染め急ぐを見るにつけても、あやしうめづらかなる心地すれど、かけても言ひ出でられず。裁ち縫ひなどするを、「これ御覧じ入れよ。ものをいとうつくしうひねらせたまへば」とて、小桂の単衣たてまつるを、うたておぼゆれば、心地あしとて手も触れず臥したまへり。尼君、急ぐことをうち捨てて、いかが思さるるなど思ひ乱れたまふ。紅に桜の織物の袷重ねて、「御前にはかかるをこそ奉らすべけれ。あさましき墨染なりや」と言ふ人あり。

尼衣変はれる身にやありし世の形見に袖をかけて偲ばむ

と書いて、いとほしく、亡くもなりなむ後に、物の隠れなき世なりければ、聞きあはせなどして、疎ましきまでに隠しけるなどや思はむなど、さまざま思ひつつ、「過ぎにし方のことは、絶えて忘れはべりにしを、かやうなることを思し急ぐにつけてこそ、ほのかにあはれなれ」とおほどかにのたまふ。「さりとも、思し出づることは多からむを、尽きせず隔てたまふこそ心憂けれ。身にはかかる世の常の色あひなど、久しく忘れにければ、なほなほしくはべるにつけても、昔の人あらましかばなど思ひ出ではべる。しか扱ひきこえたまひけむ人、世におはすらむ。やがて亡くなして見はべりしだに、なほいづこにあらむ、そのことだに尋ね聞かまほしくおぼえはべるを、行方知らで、思ひきこえたまふ人びとはべるらむかし」とのたまへば、「見しほどまでは、一人はものしたまひき。この月ごろ亡せやしたまひぬらむ」とて、涙の落つるを紛らはして、「なかなか思ひ出づるにつけて、うたてはべればこそ、え聞こえ出でね。隔ては何ごとにか残しはべらむ」と、言少なにのたまひなしつ。

大将は、この果てのわざなどせさせたまひて、はかなくて止みぬるかなとあはれに思す。かの常陸の子どもは、かうぶりしたりしは蔵人になして、わが御司の将監になしなど、いたはりりたまひけり。童なるが、中にきよげなるをば、近く使ひ馴らさむとぞ思したりける。

雨など降りてしめやかなる夜、後の宮に参りたまへり。御前のどやかなる日にて、御物語など聞こえたまふついでに、「あやしき山里に年ごろまかり通ひ見たまへしを、人の譏りはべりしも、さるべきにこそはあらめ、誰れも心の寄る方のことはさなむあると思ひたまへなしつつ、なほ時々見たまへしを、所のがにやと心憂く思ひたまへなりにし後は、道も遙けき心地しはべりて、久しうものしはべらぬを、先つころ、ものたよりにまかりて、はかなき世のありさまとり重ねて思ひたまへしに、ことさら道心起すべく造りおきたりける聖の栖となむおぼえはべりし」と啓したまふに、かのこと思し出でていといとほしければ、「そこには恐ろしき物や住むらむ。いかやうにてか、かの人は亡くなりにし」と問はせたまふを、なほ続きを思し寄る方と思ひて、「さもはべらむ。さやうの人離れたる所は、よからぬものなむかならず住みつきはべるを、亡せはべりにしさまもなむいとあやしくはべる」とて、詳しくは聞こえたまはず。なほかく忍ぶる筋を聞きあらはしけりと思ひたまはむがいとほしく思され、宮のものをのみ思して、そのころは病になりたまひしを思し合はするにも、さすがに心苦しうて、かたがたに口入れにくき人の上と思しとどめつ。

小宰相に、忍びて、「大将、かの人のことを、いとあはれと思ひてのたまひしに、いとほしうてうち出でつべかりしかど、それにもあらざらむものゆゑとつつましうてなむ。君ぞ、ことごと聞き合はせける。かたはならむことはとり隠して、さることなむありけると、おほかたの物語のついでに、僧都の言ひしことを語れ」とのたまはず。「御前にだにつつませたまはむことを、まして異

人はいかでか」と聞こえさすれど、「さまざまなることにこそ。またまろはいとほしきことぞあるや」とのたまはするも、心得て、をかしと見たてまつる。

立ち寄りて物語などしたまふついでに、言ひ出でたり。珍かにあやしと、いかでか驚かれたまはざらむ。宮の間はせたまひしも、かかることをほの思し寄りてなりけり、などかのたまはせ果つまじき、とつらけれど、我もまた初めよりありしさまのこと聞こえそめざりしかば、聞きて後もなほをこがましき心地して、人にすべて漏らさぬを、なかなか他には聞こゆることもあらむかし、うつつの人びとのなかに忍ぶることだに隠れある世の中かは、など思ひ入りて、この人にもさなむありしなど明かしたまはむことは、なほ口重き心地して、「なほあやしと思ひし人のことに、似てもありける人のありさまかな。さてその人はなほあらむや」とのたまへば、「かの僧都の山より出でし日なむ、尼になしつる。いみじうわづらひしほどにも、見る人惜しみてせさせざりしを、正身の本意深きよしを言ひてなりぬるところはべるなりしか」と言ふ。所も変はらず、そのころのありさまと思ひあはするに違ふふしなければ、まことにそれと尋ね出でたらむ、いとあさましき心地もすべきかな、いかでかはたしかに聞くべき、下り立ちて尋ねありかむもかたくなしなどや人言ひなさむ、また、かの宮も聞きつけたまへらむには、かならず思し出でて、思ひ入りにけむ道も妨げたまひてむかし、さて、さなのたまひそなど聞こえおきたまひければや、我にはさることなむ聞きしと、さる珍しきことを聞こし召しながら、のたまはせぬにやありけむ、宮もかかづらひたまふにては、いみじうあはれと思ひながらも、さらにやがて亡せにしものと思ひなしてをやみなむ、うつし人になりて、末の世には、黄なる泉のほとりばかりを、おのづから語らひ寄る風の紛れもありなむ、我がものに取り返し見むの心地また使はじなど、思ひ乱れて、なほのたまはずやあらむとおぼゆれど、御けしきのゆかしければ、大宮にさるべきつ

いで作り出だしてぞ啓したまふ。

「あさましうて失ひはべりぬと思ひたまへし人、世に落ちあぶれてあるやうに、人のまねびはべりしかな。いかでかさることははべらむと思ひたまふれど、心とおどろおどろしうもて離るることははべらずやと、思ひわたりはべる人のありさまにはべれば、人の語りはべしやうにては、さるやうもやはべらむと、似つかはしく思ひたまへらるる」とて、今すこし聞こえ出でたまふ。宮の御ことを、いと恥づかしげに、さすがに恨みたるさまには言ひなしたまはで、「かのこと、またさなむと聞きつけたまへらば、かたくなに好き好きしうも思されぬべし。さらに、さてありけりとも、知らず顔にて過ぐしはべりなむ」と啓したまへば、「僧都の語りしに、いともの恐ろしかりし夜のことにて、耳もとどめざりしことにこそ。宮はいかでか聞きたまはむ。聞こえむ方なかりける御心のほどかなと聞けば、まして聞きつけたまはむこそいと苦しかるべけれ。かかる筋につけて、いと軽く憂きものにのみ世に知られたまひぬめれば心憂く」などのたまはず。いと重き御心なれば、かならずしも、うちとけ世語りにて、人の忍びて啓しけむことを漏らさせたまはじなど思す。

住むらむ山里はいづこにかはあらむ、いかにしてさまあしからず尋ね寄らむ、僧都に会ひてこそは、たしかなるありさまも聞き合はせなどして、ともかくも問ふべかめれなど、ただこのことを起き臥し思す。月ごとの八日は、かならず尊きわざせさせたまへば、薬師仏に寄せたてまつるにもてなしたまへるたよりに、中堂に時々参りたまひけり。それよりやがて横川におはせむと思して、かのせうとの童なる率ておはす。その人びとには、とみに知らせじ、ありさまにぞ従はむと思せど、うち見む夢の心地にも、あはれをも加へむとにやありけむ。さすがに、その人とは見つけながら、あやしきさまに、形異なる人の中にて、憂きことを聞きつけたらむこそいみじかるべけれと、よろづに道すがら思し乱

れけるにや。

夢
浮
橋

山におはして、例せさせたまふやうに、経仏など供養せさせたまふ。またの日は、横川におはしたれば、僧都驚きかしこまりきこえたまふ。年ごろ、御祈りなどつけ語らひたまひけれど、ことにいと親しきことはなかりけるを、このたび一品の宮の御心地のほどにさぶらひたまへるに、すぐれたまへる験ものしたまひけりと見たまひてよりこよなう尊びたまひて、今すこし深き契り加へたまひてければ、重々しうおはする殿の、かくわざとおはしましたること、ともに騒ぎきこえたまふ。御物語などこまやかにしておはすれば、御湯漬など参りたまふ。すこし人びと静まりぬるに、「小野のわたりに知りたまへる宿りやはべる」と問ひたまへば、「しかはべる。いと異様な所になむ。なにがしが母なる朽尼のはべるを、京にはかばかしからぬ住みかもはべらぬうちに、かくて籠もりはべるあひだは、夜中、暁にもあひ訪らはむと思ひたまへおきてはべる」など申したまふ。「そのわたりには、ただ近きころほひまで、人多う住みはべりけるを、今はいとかすかにこそなりゆくめれ」などのたまひて、今すこし近くる寄りて、忍びやかに、「いと浮きたる心地もしはべる、また尋ねきこえむにつけては、いかなりけることにかと心得ず思されぬべきに、かたがた憚られはべれど、かの山里に、知るべき人の隠ろへてはべるやうに聞きはべりしを、確かにてこそは、いかなるさまにてなども、漏らしきこえめ、など思ひたまふるほどに、御弟子になりて、忌むことなど授けたまひてけりと聞きはべるは、まことか。まだ年も若く、親などもありし人なれば、ここに失ひたるやうにかことかくる人なむはべるを」などのたまふ。

僧都、さればよ、ただ人と見えざりし人のさまぞかし、かくまでのたまふは、軽々しくは思されざりける人にこそあめれ、と思ふに、法師といひながら、心もなくたちまちにかたちをやつしてけること、と胸つぶれて、いらへきこえむやう思ひまはさる。確かに聞きたまへるにこそあめれ、かばかり心得たまひて、

うかがひ尋ねたまはむに、隠れあるべきことにもあらず、なかなかあらがひ隠さむにあいなかるべし、などとばかり思ひ得て、「いかなることにかはべりけむ。この月ごろ、うちうちにあやしみ思うたまふる人の御ことにや」とて、「かしこにはべる尼どもの初瀬に願はべりて、詣でて帰りける道に、宇治の院といふ所にとどまりてはべりけるに、母の尼の労気にはかに起りて、いたくなむわづらふと告げに、人の参うで来たりしかば、まかり向かひたりしに、まづ妖しきことなむ」とささめきて、「親の死に返るをばさし置きて、もて扱ひ嘆きてなむはべりし。この人も、亡くなりたまへるさまながら、さすがに息は通ひておはしければ、昔物語に魂殿に置きたりけむ人のたとひを思ひ出でて、さやうなることにやと珍しがりはべりて、弟子ばらの中に験ある者どもを呼び寄せつつ、代はり代はりに加持せさせなむしはべりける。なにがしは、惜しむべき齡ならねど、母の旅の空にて病重きを助けて、念仏をも心乱れずせさせむと、仏を念じたてまつり思うたまへしほどに、その人のありさま詳しうも見たまへずなむはべりし。ことの心推し量り思うたまふるに、天狗、木霊などやうのもの、欺き率てたてまつりたりけるにやとなむ承りし。助けて京に率てたてまつりて後も、三月ばかりは亡き人にてなむものしたまひけるを、なにがしが妹、故衛門督の北の方にてはべりしが、尼になりてはべるなむ、一人持ちてはべりし女子を失ひて後、月日は多く隔てはべりしかど、悲しび堪へず嘆き思ひたまへはべるに、同じ年のほどと見ゆる人の、かくかたちいとうるはしくきよらなるを見出でたてまつりて、観音の賜へると喜び思ひて、この人いたづらになしたてまつらじと惑ひ焦られて、泣く泣くいみじきことどもを申されしかば、後になむ、かの坂本にみづから下りはべりて、護身など仕まつりしに、やうやう生き出でて人となりたまへりけれど、なほこの領じたりけるもの身に離れぬ心地なむする、このあしきものの妨げを逃れて、後の世を思はむなど、

悲しげにのたまふことどものはべりしかば、法師にては、勧めも申しつべきことにこそはとて、まことに出家せしめたてまつりてしになむはべる。さらにしろしめすべきこととは、いかでかそらにさとりはべらむ。珍しきことのさまにもあるを、世語りにもしはべりぬべかりしかど、聞こえありてわづらはしかるべきことにもこそと、この老人どもとかく申して、この月ごろ音なくはべりつるになむ」と申したまへば、さてこそあなれとほの聞きて、かくまでも問ひ出でたまへることなれど、むげに亡き人と思ひ果てにし人を、さはまことにあるにこそはと思すほど、夢の心地をあさましければ、つつみもあへず涙ぐまれたまひぬるを、僧都の恥づかしげなるに、かくまで見ゆべきことかはと思ひ返して、つれなくもてなしたまへど、かく思しけることを、この世には亡き人と同じやうになしたることと、過ちしたる心地して、罪深ければ、「あしきものに領ぜられたまひけむも、さるべき前の世の契りなり。思ふに高き家の子にこそものしたまひけめ、いかなる誤りにて、かくまではふれたまひけむにか」と問ひ申したまへば、「なまわかむどほりなどいふべき筋にやありけむ。ここにも、もとよりわざと思ひしことにもはべらず。ものはかなくて見つけそめてははべりしかど、またいとかくまで落ちあふるべき際と思ひたまへざりしを、珍かに跡もなく消え失せにしかば、身を投げたるにやなど、さまさまに疑ひ多くて、確かなることはえ聞きはべらざりつるになむ。罪軽めてものすなれば、いとよしと心やすくなむみづからは思ひたまへなりぬるを、母なる人なむいみじく恋ひ悲しぶなるを、かくなむ聞き出でたと告げ知らせまほしくはべれど、月ごろ隠させたまひける本意違ふやうに、もの騒がしくやはべらむ。親子の仲の思ひ絶えず、悲しびに堪へで、訪らひものしなどはべりなむかし」などのたまひて、さて、「いと使なきしるべとは思すとも、かの坂本に下りたまへ。かばかり聞きて、なのめに思ひ過ぐすべくは思ひはべらざりし人なるを、

夢のやうなることどもも、今だに語り合はせむとなむ思ひたまふる」とのたまふけしき、いとあはれと思ひたまへれば、かたちを変へ、世を背きにきとおぼえたれど、髪、鬚を剃りたる法師だに、あやしき心は失せぬもあなり、まして女の御身はいかがあらむ、いとほしう、罪得ぬべきわざにもあるべきかなと、あぢきなく心乱れぬ。「まかり下りむこと、今日明日は障りはべり。月たちてのほどに御消息を申させはべらむ」と申したまふ。いと心もとなけれど、なほなほとうちつけに焦られむもさまあしければ、さらばとて帰りたまふ。

かの御せうとの童、御供に率ておはしたりけり。異はらからどもよりは、かたちもきよげなるを呼び出でたまひて、「これなむその人の近きゆかりなるを、これがかつものせむ。御文一くだり賜へ。その人とはなくて、ただ尋ねきこゆる人なむあるとばかりの心を知らせたまへ」とのたまへば、「なにがし、このしるべにて、かならず罪得はべりなむ。ことのありさまは詳しくとり申す。今は御みづから立ち寄せたまひて、あるべからむことはものせさせたまはむに、何の咎かはべらむ」と申したまへば、うち笑ひて、「罪得ぬべきしるべと思ひなしたまふらむこそ恥づかしけれ。ここには、俗の形にて今まで過ぐすなむいとあやしき。いはけなかりしより、思ふ心ざし深くはべるを、三条の宮の心細げにて、頼もしげなき身一つをよすがに思したるが、避りがたきほだしにおぼえはべりて、かかづらひはべりつるほどに、おのづから位などいふことも高くなり、身のおきても心になかなひがたくなどして、思ひながら過ぎはべるには、またえ避らぬことも数のみ添ひつつは過ぐせど、公私に逃れがたきことにつけてこそさまはべらめ、さらでは仏の制したまふ方のことを、わづかにも聞き及ばむは、いかで過たじと慎しみて、心の内は聖に劣りはべらぬものを、ましていとはかなきことにつけてしも、重き罪得べきことは、などてか思ひたまへむ、さらにあるまじきことにはべり。疑ひ思すまじ。ただいとほしき親の

思ひなどを、聞きあきらめはべらむばかりなむ、うれしう心やすかるべき」など、昔より深かりし方の心を語りたまふ。

僧都も、げにとうなづきて、「いとど尊きこと」など聞こえたまふほどに、日も暮れぬれば、中宿りもいとよかりぬべけれど、うはの空にてもものしたらむこそ、なほ便なかるべけれ、と思ひわづらひて帰りたまふに、この弟の童を、僧都、目とめてほめたまふ。「これにつけて、まづほのめかしたまへ」と聞こえたまへば、文書きて取らせたまふ。「時々は山におはして遊びたまへよ」と、「すずろなるやうには思すまじきゆゑもありけり」とうち語らひたまふ。この子は心も得ねど、文取りて御供に出づ。坂本になれば、御前の人びとすこし立ちあかれて、「忍びやかにを」とのたまふ。

小野には、いと深く茂りたる青葉の山に向かひて、紛るることなく、遣水の螢ばかりを、昔おぼゆる慰めにて、眺めるたまへるに、例の遙かに見やらるる谷の軒端より、前駆心ことに追ひて、いと多う灯したる火の、のどかならぬ光を見ると、尼君たちも端に出でるたり。「誰がおはするにかあらむ。御前などいと多くこそ見ゆれ」、「昼あなたに引干し奉れたりつる返り事に、大将殿おはしまして、御あるじのことにはかにするを、いとよき折なりとこそありつれ」、「大将殿とは、この女二の宮の御をとこにやおはしつらむ」など言ふも、いとこの世遠く田舎びにたりや、まことにさにやあらむ、時々かかる山路分けおはせし時、いとしかりし随身の声も、うちつけにまじりて聞こゆ、月日の過ぎゆくままに、昔のことのかく思ひ忘れぬも、今は何にすべきことぞ、と心憂ければ、阿弥陀仏に思ひ紛らはして、いとどものも言はでるたり。横川に通ふ人のみなむ、このわたりには近きたよりなりける。

かの殿は、この子をやがてやらむと思しけれど、人目多くて便なければ、殿に帰りたまひて、またの日、ことさらにぞ出だし立てたまふ。睦ましく思す人

の、ことごとしからぬ二三人送りにて、昔も常に遣はしし隨身添へたまへり。人聞かぬ間に呼び寄せたまひて、「あこが亡せにしいもうとの顔はおぼゆや。今は世に亡き人と思ひ果てにしを、いと確かにこそものしたまふなれ。疎き人には聞かせじと思ふを、行きて尋ねよ。母に、いまだしきに言ふな。なかなか驚き騒がむほどに、知るまじき人も知りなむ。その親の御思ひのいとほしきこそ、かくも尋ぬれ」と、まだきにいと口固めたまふを、幼き心地にも、はらからは多かれど、この君のかたちをば似るものなしと思ひしみたりしに、亡せたまひにけりと聞きて、いと悲しと思ひわたるに、かくのたまへば、うれしきにも涙の落つるを、恥づかしと思ひて、「をを」と荒らかに聞こえるたり。

かしこには、まだつとめて、僧都の御もとより、

よべ、大将殿の御使にて、小君や参うでたまへりし。ことの心承りしに、あぢきなく、かへりて臆しはべりてなむ、と姫君に聞こえたまへ。みづから聞こえさすべきことも多かれど、今日明日過ぐしてさぶらふべし。

と書きたまへり。これは何ごとぞと、尼君驚きて、こなたへもて渡りて見せてまつりたまへば、面うち赤みて、ものの聞こえのあるにやと苦しう、もの隠ししけると恨みられむを思ひ続けるに、いらへむ方なくてゐたまへるに、「なほのたまはせよ。心憂く思し隔つること」といみじく恨みて、ことの心を知らねば、あわたたしきまで思ひたるほどに、「山より、僧都の御消息にて、参りたる人なむある」と言ひ入れたり。

あやしけれど、これこそはさは確かなる御消息ならめとて、「こなたに」と言はせられたば、いときよげにしなやかなる童の、えならず装束きたるぞ歩み来たる。わらふださし出でたれば、簾のもとについで、「かやうにてはさぶらふまじくこそは、僧都はのたまひしか」と言へば、尼君ぞいらへなどしたまふ。文取り入れて見れば、

入道の姫君の御方に、山より

とて、名書きたまへり。あらじなど、あらがふべきやうもなし。いとほしたなくおぼえて、いよいよ引き入られて、人に顔も見合はせず。「常に、ほりりかならずものしたまふ人柄なれど、いとうたて心憂し」など言ひて、僧都の御文見れば、

今朝、ここに大将殿のものしたまひて、御ありさま尋ね問ひたまふに、初めよりありしやう詳しく聞こえはべりぬ。御心ざし深かりける御仲を背きたまひて、あやしき山賤の中に出家したまへること、かへりては仏の責め添ふべきことなるをなむ、承り驚きはべる。いかがはせむ、もとの御契り過ちたまはで、愛執の罪をはるかしきこえたまひて、一日の出家の功德はかりなきものなれば、なほ頼ませたまへとなむ。ことごとくにはみづからさぶらひて申しはべらむ。かつがつこの小君聞こえたまひてむ。

と書いたり。

まがふべくもあらず書きあきらめたまへれど、異人は心も得ず。「この君は誰れにかおはすらむ。なほいと心憂し。今さへかくあながちに隔てさせたまふ」と責められて、すこし外さまに向きて見たまへば、この子は、今ほと世を思ひなりし夕暮れに、いと恋しと思ひし人なりけり。同じ所にて見しほどは、いとさがなくあやにくにおごりて憎かりしかど、母のいとかなしくして、宇治にも時々率ておはせしかば、すこしおよすけしままに、かたみに思へり。童心を思ひ出づるにも夢のやうなり。まづ母のありさまいと問はまほしく、異人びとの上は、おのづからやうやうと聞けど、親のおはすらむやうは、ほのかにもえ聞かずかすと、なかなかこれを見るにいと悲しくて、ほろほろと泣かれぬ。

いとをかしげにて、すこしうちおぼえたまへる心地もすれば、「御はらからにこそおはすめれ。聞こえまほしく思すこともあらむ。内に入れたてまつらむ」

と言ふを、何か、今は世にあるものとも思はざらむに、あやしきさまに面変りしてふと見えむも恥づかし、と思へば、とばかりためらひて、「げに隔てありと思しなすらむが苦しきに、ものも言はれでなむ。あさましかりけむありさまは、珍かなることと見たまひてけむを、うつし心も失せ、魂などいふらむものもあらぬさまになりけるにやあらむ、いかにもいかにも、過ぎにし方のことを、我ながらさらにえ思ひ出でぬに、紀伊の守とかありし人の、世の物語すめりし中になむ、見しあたりのことにやと、ほのかに思ひ出でらるることある心地せし。その後、とぎまかうぎまに思ひ続くれど、さらにはかばかしくもおぼえぬに、ただ一人ものしたまひし人の、いかでとおろかならず思ひためりしを、まだや世におはすらむと、そればかりなむ心に離れず悲しき折々はべるに、今日見れば、この童の顔は、小さくて見し心地するにも、いと忍びがたけれど、今さらに、かかる人にもありとは知られでやみなむとなむ思ひはべる。かの人もし世にもものしたまはば、それ一人になむ対面せまほしく思ひはべる。この僧都ののたまへる人などには、さらに知られたてまつらじとこそ思ひはべりつれ。かまへて、ひがことなりけりと聞こえなして、もて隠したまへ」とのたまへば、「いと難いことかな。僧都の御心は、聖といふなかにも、あまり隈なくものしたまへば、まさに残いては聞こえたまひてむや。後に隠れあらじ。なのめに軽々しき御ほどにもおはしませず」など言ひ騒ぎて、「世に知らず心強くおはしますこそ」と、皆言ひ合はせて、母屋の際に几帳立てて入れたり。

この子もさは聞きつれど、幼ければ、ふと言ひ寄らむもつつましかれど、「またはべる御文、いかでたてまつらむ。僧都の御するべは確かなるを、かくおぼつかなくはべるこそ」と、伏目にて言へば、「そそや。あなうつくし」など言ひて、「御文御覽すべき人は、ここにものせさせたまふめり。見証の人なむ、いかなることにかと心得がたくはべるを、なほのたまはせよ。幼き御ほど

なれど、かかる御しるべに頼みきこえたまふやうもあらむ」など言へど、「思し隔てて、おぼおほしくもてなさせたまふには、何事をか聞こえはべらむ。疎く思しなりにければ、聞こゆべきこともはべらず。ただ、この御文を人伝てならで奉れ、とてはべりつる、いかでたてまつらむ」と言へば、「いとことわりなり。なほいとかくうたてなおはせそ。さすがにむくつけき御心にこそ」と聞こえ動かして、几帳のもとに押し寄せたてまつりたれば、あれにもあらでゐたまへる、けはひ異人には似ぬ心地すれば、そこもとに寄りて奉りつ。「御返り疾くたまひて、参りなむ」と、かく疎々しきを心憂しと思ひて、急ぐ。

尼君、御文ひき解きて見せたてまつる。ありしながらの御手にて、紙の香など、例の世づかぬまでしみたり。ほのかに見て、例のものめでのさし過ぎ人、いとありがたくをかしと思ふべし。

さらに聞こえむ方なく、さまざまに罪重き御心をば、僧都に思ひ許しきこえて、今は、いかであさましかりし世の夢語りをだにと、急がるる心の、我ながらもどかしきになむ。まして、人目はいかに。

と、書きもやりたまはず。

法の師と尋ぬる道をしるべにて思はぬ山に踏み惑ふかな

この人は見や忘れたまひぬらむ。ここには行方なき御形見に見る物にてなむ。

などこまやかなり。

かくつぶつぶと書きたまへるさまの、紛らはさむ方なきに、さりとしてその人にもあらぬさまを、思ひの外に見つけられきこえたらむほどの、はしたなきなごを思ひ乱れて、いとど晴れ晴れしからぬ心は、言ひやるべき方もなし。さすがにうち泣きてひれ臥したまへれば、いと世づかぬ御ありさまかなと見わづらひぬ。「いかが聞こえむ」など責められて、「心地のかき乱るやうにしはべるほ

ど、ためらひて、今聞こえむ。昔のこと思ひ出づれど、さらにおぼゆることなく、あやしう、いかなりける夢にかとのみ心も得ずなむ。すこし静まりてや、この御文なども見知らるることもあらむ。今日はなほ持て参りたまひね。所違へにもあらむに、いとかたはらいたかるべし」とて、広げながら尼君にさしやりたまへれば、「いと見苦しき御ことかな。あまりけしからぬは、見たてまつる人も、罪さりどころなかるべし」など言ひ騒ぐも、うたて聞きにくくおぼゆれば、顔も引き入れて臥したまへり。

あるじぞ、この君に物語すこし聞こえて、「もののけにやおはすらむ。例のさまに見えたまふ折なく、悩みわたりたまひて、御かたちも異になりたまへるを、尋ねきこえたまふ人あらば、いとわづらはしかるべきことと、見たてまつり嘆きはべりしもしるく、かくいとあはれに心苦しき御ことどもはべりけるを、今なむいとかたじけなく思ひはべる。日ごろもうちはへ悩ませたまふめるを、いとどかかることどもに思し乱るるにや、常よりもものおぼえさせたまはぬさまにてなむ」と聞こゆ。所につけてをかしきあるじなどしたれど、幼き心地は、そこはかとなくあわてたる心地して、「わざと奉れさせたまへるしるしに、何事をかは聞こえさせむとすらむ。ただ一言をのたまはせよかし」など言へば、「げに」など言ひて、かくなむと移し語れど、ものものたまはねば、かひなくて、「ただ、かくおぼつかなき御ありさまを聞こえさせたまふべきなめり。雲の遙かに隔たらぬほどにもはべるめるを、山風吹くとも、またもかならず立ち寄せたまひなむかし」と言へば、すずろに暮らさむもあやしかるべければ、帰りなむとす。人知れずゆかしき御ありさまをも、え見ずなりぬるを、おぼつかなく口惜しくて、心ゆかずながら参りぬ。

いつしかと待ちおはするに、かくたどたどしくて帰り来たれば、すさまじく、なかなかなりと思すことさまさまにて、人の隠し据ゑたるにやあらむと、わが

御心の、思ひ寄らぬ隈なく、落とし置きたまへりしならひにとぞ、本にはべめる。